

日本語の音素の分布・配列に関する歴史的研究  
入 江 さやか

同志社日本語研究 別刊 第1号  
同志社大学大学院日本語学研究会  
2012年9月

本論文は、入江さやかの 博士(同志社大学)(国文学) 学位論文である。

2011 年 3 月に提出され、9 月に学位が授与された。

# 目次

第1章 論文の目的と背景	1
1.1 論文の目的	1
1.2 先行研究	2
1.2.1 仮名の出現頻度調査	2
1.2.2 音節の出現頻度調査	2
1.2.3 単音の出現頻度調査	3
1.2.4 その他の仮名, 音に関する調査	4
1.3 研究の方法と構成	4
1.3.1 時代区分	4
1.3.2 音韻史と音声史	5
1.3.3 語の認定	5
1.3.4 語種・品詞の認定	6
1.3.5 資料	7
第2章 各時代における音韻体系	9
2.1 拍の概念	9
2.2 上代の音韻体系	10
2.3 中古の音韻体系	10
2.4 中世の音韻体系	11
2.5 現代の音韻体系	13
2.6 音素分布表の作成	14
2.7 音素配列表の作成	15
第3章 上代日本語の音韻構造	18
3.1 『万葉集』における和語名詞の音韻構造	18
3.1.1 調査資料	18
3.1.2 拍数別に見た語数	19
3.1.3 音素分布	19

3.1.4	音素配列	22
3.2	『万葉集』における和歌の音韻構造	23
3.2.1	上代資料『万葉集』	23
3.2.2	上代特殊仮名遣いの例外	24
3.2.3	拍数別に見た語数, 及び語種	26
3.2.4	音素分布	27
3.2.5	音素配列	30
3.2.6	拍の配列	31
3.3	上代日本語の音韻構造	31
第4章	中古日本語の音韻構造	34
4.1	『源氏物語』における和語名詞の音韻構造	34
4.1.1	調査資料	34
4.1.2	「御」の読み方	35
4.1.3	拍数別に見た語数	36
4.1.4	音素分布	36
4.1.5	音素配列	40
4.2	『源氏物語』の音韻構造	41
4.2.1	中古資料『源氏物語』	41
4.2.2	語の読み方	41
4.2.3	拍数別に見た語数, 及び語種	44
4.2.4	音素分布	46
4.2.5	音素配列	48
4.3	中古日本語の音韻構造	49
第5章	中世日本語の音韻構造	52
5.1	調査資料『邦訳日葡辞書』	52
5.2	研究方法	53
5.2.1	見出し語の立て方	53
5.2.2	品詞の認定	54

5.2.3	品詞の違い	55
5.2.4	同語別語判断	55
5.2.5	補遺による重複	56
5.2.6	表記法による重複	56
5.2.7	略号 1. により並べられた見出し語	57
5.2.8	『邦訳日葡辞書』における仮見出し語の問題	58
5.2.9	「連語」について	59
5.3	『日葡辞書』における和語名詞の音韻構造	61
5.3.1	拍数別に見た語数	61
5.3.2	音素分布	62
5.3.3	音素配列	65
5.4	『日葡辞書』における漢語の音韻構造	66
5.4.1	拍数別に見た語数	66
5.4.2	音素分布	67
5.4.3	音素配列	70
5.5	『天草版平家物語』の音韻構造	71
5.5.1	中世資料『天草版平家物語』	71
5.5.2	拍数別に見た語数, 及び語種	72
5.5.3	音素分布	73
5.5.4	音素配列	76
5.6	中世日本語の音韻構造	77
第 6 章 現代日本語の音韻構造		81
6.1	調査資料『新潮現代国語辞典』第 2 版	81
6.2	『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音韻構造	81
6.2.1	拍数別に見た語数	81
6.2.2	音素分布	82
6.2.3	音素配列	85
6.2.4	品詞別・拍数別に見た語数	86
6.2.5	品詞別に見た音素分布	87

6.3	『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造	90
6.3.1	字数・語構成別、及び拍数別に見た語数	90
6.3.2	音素分布	92
6.3.3	音素配列	98
6.4	『中央公論』における外来語の音韻構造	99
6.4.1	現代資料『中央公論』	99
6.4.2	外来語の定義	99
6.4.3	外来語の音韻体系	100
6.4.4	外来語の表記	102
6.4.5	表記と発音の関係	104
6.4.6	外来語の語数	105
6.4.7	拍数別に見た語数	105
6.4.8	音素分布	106
6.5	『中央公論』の音韻構造	107
6.5.1	調査対象	107
6.5.2	拍数別に見た語数	107
6.5.3	音素分布	110
6.5.4	音素配列	113
6.6	現代日本語の音韻構造	113
6.7	現代日本語における和語名詞と語構成との関わり	116
6.7.1	語の構成	116
6.7.2	拍数別の語構成	117
6.7.3	語構成別音素分布	118
6.7.4	合成和語名詞の結合形式	119
6.7.5	語末に多く出現する拍	120
6.7.6	動詞連用形名詞の定義	120
6.7.7	語末母音が／i／／e／である語の最終成分	121
6.7.8	語末における上位9つの拍を持つ語の最終成分	121

第7章 日本語の音韻構造の歴史	124
7.1 和語名詞における音韻構造の歴史	124
7.1.1 拍数別に見た語数	124
7.1.2 和語名詞の音素分布の歴史	125
7.1.3 各時代における多頻度拍	127
7.1.4 各時代における音素配列	128
7.2 『日葡辞書』と『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造の比較	128
7.2.1 拍数別に見た語数	128
7.2.2 音素分布の比較	129
7.3 テキスト類における音韻構造の歴史	131
7.3.1 拍数別に見た語数	131
7.3.2 音素分布の歴史	132
7.3.3 各時代における多頻度拍	138
7.3.4 各時代における音素配列	139
7.4 結論	140
注	142
参考文献	145
資料 〈音素分布表〉	

### 第3章 上代日本語の音韻構造

3.1 『万葉集』における和語名詞の音韻構造	151
〈音素分布表 3.1-1〉～〈音素分布表 3.1-3〉	
3.2 『万葉集』における和歌の音韻構造	154
〈音素分布表 3.2-1〉～〈音素分布表 3.2-3〉	

### 第4章 中古日本語の音韻構造

4.1 『源氏物語』における和語名詞の音韻構造	157
-------------------------	-----

〈音素分布表 4.1-1〉～〈音素分布表 4.1-3〉

4.2 『源氏物語』の音韻構造	160
-----------------	-----

〈音素分布表 4.2-1〉～〈音素分布表 4.2-3〉

## 第5章 中世日本語の音韻構造

5.3 『日葡辞書』における和語名詞の音韻構造	163
-------------------------	-----

〈音素分布表 5.3-1〉～〈音素分布表 5.3-3〉

5.4 『日葡辞書』における漢語の音韻構造	166
-----------------------	-----

〈音素分布表 5.4-1〉～〈音素分布表 5.4-3〉

5.5 『天草版平家物語』の音韻構造	169
--------------------	-----

〈音素分布表 5.5-1〉～〈音素分布表 5.5-3〉

## 第6章 現代日本語の音韻構造

6.2 『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音韻構造	172
-----------------------------	-----

〈音素分布表 6.2-1〉～〈音素分布表 6.2-3〉

6.3 『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造	175
---------------------------	-----

〈音素分布表 6.3-1〉～〈音素分布表 6.3-3〉

6.4 『中央公論』における外来語の音韻構造	178
------------------------	-----

〈音素分布表 6.4-3〉

6.5 『中央公論』の音韻構造	179
-----------------	-----

〈音素分布表 6.5-1〉～〈音素分布表 6.5-4〉

## 資料 〈音素配列表〉

### 第3章 上代日本語の音韻構造

3.1 『万葉集』における和語名詞の音韻構造	183
------------------------	-----

〈音素配列表 3.1〉

3.2 『万葉集』における和歌の音韻構造	184
----------------------	-----

〈音素配列表 3.2〉



## 第4章 中古日本語の音韻構造

- 4.1 『源氏物語』における和語名詞の音韻構造 . . . . . 188  
    〈音素配列 4.1〉
- 4.2 『源氏物語』の音韻構造 . . . . . 189  
    〈音素配列表 4.2〉

## 第5章 中世日本語の音韻構造

- 5.3 『日葡辞書』における和語名詞の音韻構造 . . . . . 192  
    〈音素配列表 5.3〉
- 5.4 『日葡辞書』における漢語の音韻構造 . . . . . 193  
    〈音素配列表 5.4〉
- 5.5 『天草版平家物語』の音韻構造 . . . . . 194  
    〈音素配列表 5.5〉

## 第6章 現代日本語の音韻構造

- 6.2 『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音韻構造 . . . . . 198  
    〈音素配列表 6.2〉
- 6.3 『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造 . . . . . 199  
    〈音素配列表 6.3〉
- 6.5 『中央公論』の音韻構造 . . . . . 200  
    〈音素配列表 6.5〉

## 資料 〈付表〉

### 第5章 中世日本語の音韻構造

- 5.2.2 品詞の認定 〈付表A〉 . . . . . 207
- 5.2.3 品詞の違い 〈付表B〉 . . . . . 207

### 第6章 現代日本語の音韻構造

- 6.4.5 表記と発音の関係 〈付表C〉 . . . . . 208

## 第1章 論文の目的と背景

### 1.1 論文の目的

私たちは、音声言語を耳にしたとき、なんらかの音韻的特徴を捉えて、意味はわからなくとも、ある言語のように感じる。音韻的特徴にも、子音、母音の種類や使用頻度、その分布や配列、拍か音節か、あるいは、アクセントやイントネーションなど、さまざまある。本研究では、主に、音素分布、及び音素配列の定量的特徴に注目して、日本語の音韻の歴史を捉えようとする。

辞書の見出し語やテキスト類を調査対象として、品詞別、語種別の音素分布、及び音素配列、多頻度拍を調べることによって、その音韻的特徴を明らかにしたい。共時的な調査だけではなく、上代、中古、中世、現代と、定量的な調査結果を通時的に見ることによって、音韻の歴史について述べる。

Trubetzkoy(1958)は、その著書『音韻論の原理』で、次のように述べている。

統計は音韻論において2重の意味を持っている。一方では、それは、当該言語の或る特定の音韻的要素（音素、音素結合、単語型あるいは形態素型）が発話に際してどの位ひんぱんに繰り返し現われるかを示さなければならない。他方では、それは、この要素あるいは或る特定の音韻的対立が機能的にどの程度の負担を担っているかを示さなければならない。第1の目的にはまとまりのあるテキストを、第2の目的には辞書を、それぞれ統計学的に調べなければならない。いずれの場合にも、その要素が実際に現われた絶対数だけを考慮することも出来るし、あるいは、この数と、結合論をもとにして理論的に現われると期待される数との比率を考慮することもできる。

辞書に収録された語を介して音を捉える、言い換えるならば、素材レベルとしての音を捉えるということと、実際に運用されたテキスト類の音を語に切って、それを介して音を捉える、すなわち、運用レベルで音を捉える、ということの二つの側面から、共時的・通時的に記述を行う。

Trubetzkoy の言うように、理論的に現われると期待される数との比率を考慮するなど、理論的研究も本研究の調査結果から、行うこともできるが、本研究では、絶対数だけを考慮するまでとする。

## 1.2 先行研究

これまでの研究では、仮名の出現頻度の調査は行われているが、音素分布や音素配列の調査は管見の限り、見当たらない。また、通時的に調査したものもない。日本語において、仮名1字分と拍がほぼ同じであるため、仮名の頻度をもって、拍の頻度調査とすることがある。しかし、仮名表記は必ずしも実際の発音とは一致しない。

本研究の目的と、先行研究の目的は同じではない。したがって、ここで指摘する問題点とは、本研究の目的から見た場合の問題点であることを、まず断っておかなければならない。なお、ここで述べる問題点以外の重要な指摘は石井(1991)に詳しい。

### 1.2.1 仮名の出現頻度調査

仮名の出現頻度調査には、河井・堀田・間々田(1980)、堀田(1984)、石井(1990)、正木(1991)がある。仮名は表音文字とも言われるように、仮名でおおよそその音を表すことができる。しかし、現代仮名遣いにおいて、表記と音が一致しない場合があるのは周知の通りである。例えば、「お父さん」は「おとうさん」と表記するが、音は「オトーサン」である。「じ」「ず」と「ぢ」「づ」は表記は異なるが、音は同じである。また、助詞「へ」「は」は音は「エ」「ワ」である。したがって、全体から見れば、仮名と音のずれは、あまり大きな影響を与えないかもしれないが、仮名の頻度調査をそのまま音素分布にあてはめるわけにはいかない。河合・堀田・間々田(1980)、堀田(1984)は音節の概念を用いて、長音を立てたり、助詞「は」「へ」を別の音節として扱うなど、実際の音に近づけるべく工夫しているが、掲載されている「音節の類型別使用頻度」表の体裁は仮名の使用頻度表である。例えば、先述の助詞「は」「へ」はそのまま短音の最後に「は」「へ」として掲載している。また、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」は同じ音節とすると書いてあるが、表にはそれぞれの相対頻度が書いてある。

### 1.2.2 音節の出現頻度調査

音節の出現頻度調査をしたものに、今栄(1960)、沢木(1980)がある。今栄(1960)は、「音節を単位とする digram」を調査している。助詞「は」「を」は「ワ」「オ」としているが、[o]の長音は「う」で表したため、「特に、『ウ』は、長音としての性格が究めて強いという結果」になっている。しかし、詳細な digram の相対頻度表が掲載されており、大いに参考になる。沢木(1980)は、外国人留学生の日本語能力向上のために、日本語の話し言葉のモ

ーラ連続の量的な特徴について明らかにすることを試みたものであるが、資料編の出現数を示した表はともかく、解説ではむしろ異音の方を問題にしているようである。また「引き音節と単独母音を書き分ける基準が、資料作成の段階ではっきりしていなかったように思える」と書いてあるのは、調査結果にも関連してくるので、いささか不安である。

### 1.2.3 単音の出現頻度調査

大西(1932)は、「国語を構成している素音の頻度上の諸相を見るために、小学校読本巻一から巻六まで」を調査している。その際、「神保格教授著の「国語読本の発音とアクセント」と言う発音仮名に直したものを台本とし、その傍らへ音標文字を書き入れ」、頻度を計算し、母音 43144 個、子音 39958 個、合計 83102 個を得た。また母音を単純母音 5 種、二重母音 13 種、子音 21 種（／j／／w／など半母音も含まれる）の 3 つに分けて、出現頻度を示している。ただし、促音、撥音は、長子音としてまとめて数えられている。さらに、「いっそう」のように促音、長音がともにある場合は[is:o]というように／s／の長子音として 1 回数えられているようなので、詳細を知ることはいくつかできない。なお、大西はこの調査結果を英語と比べている。Bloch(1950)の 4 章音素論でも昔話の桃太郎の冒頭部分を調査し、出現頻度を述べているが、延べ 2000 余りの音素が含まれているに過ぎず、資料としては少ないと思われる。染田(1966)も新聞、文学作品などを資料として音素総数 10000 について、調査して、日本語の音素頻度表を作成しているが、その調査方法や、音素の立て方について述べられていない。また撥音については調査結果が出ているが、促音については記載されていない。中野(1973)(1975)は、電子計算機を用い、新聞の語彙調査データ、延べ約 100 万語を対象に音素連続調査を行った。モーラ数、子音・母音出現率（語頭子音の調査を含める）、子音連続、母音連続について調査しているが、膨大なデータの調査であるが故に、人の手を加えることを想定しておらず、すべてコンピュータ処理しているため、現代仮名遣いをそのまま音素に変換していることから、どうしてもゆがみが生じてしまうことは避けられない。「おとうさん」「せんせい」に見られるオ段長音、エ段長音は考慮されず、すべて「う」「い」で処理している。助詞「は」「へ」も同様である。またナ行も撥音も／N／で表されているので、詳しい数値は知り得ない。また拗音の処理にも問題がある。「きゃ」は「き」と「ゃ」に分けて変換されているため、不都合が生じる。例えば、「かんきょう」という語を例にとって子音連続の調査方法を下図のごとく示している。これは「かん」「んき」「きょ」「よ #（子音なし）」と処理していて、「かん」という 2 拍の調査と拗音である「きょ」の 1 拍の調査結果を混同して表示している。

K A      N N      K I      J O    # U

#### 1.2.4 その他の仮名、音に関する調査

時代別に、あるいは品詞別に、個々の現象の音韻の特徴を述べた論文は数多くある。本研究と関連があるところでは、母音の配列を述べた樺島(1957)がある。金田一京助監修『明解国語辞典』から現代語二音節名詞を抜き出し、その母音配列を調べたものであるが、主たる目的は頻度、音韻論的な現象を述べるのではなく、音節結合の法則を統計的に計算し、数値によって立証するためのサンプルとして使うために挙げたものである。その他、日本語らしい音の感覚を百人一首を資料として母音の音素配列を調べることによって述べた上野(1991)、動詞・音象徴語における連音忌避の現象を述べるために子音の組み合わせの頻度を示した屋名池(1993)などがある。また和語3拍名詞や和語形容詞の語幹の音韻構造について述べた入江(1996)(2002)(2004)もある。音象徴語の語形に関する調査はいくつかあるが、省略する。

### 1.3 研究の方法と構成

本研究では、各時代の音韻体系を整理したうえで、素材としての語と、運用された語の音韻構造を調査する。辞書類、テキスト類を資料として、音素分布、及び音素配列を見ることによって、音韻的特徴を述べ、最後に通史としてまとめる。

第2章で、各時代の音韻体系について、整理し、第3章以下、上代から順に、中古、中世、現代の音韻構造について述べ、第7章で、日本語の音韻構造の歴史としてまとめ、結論と今後の課題について述べる。

時代を通して、比較することから、資料や基準について整理しておく必要がある。以下、本研究での音韻の考え方、語や品詞、語種の認定、資料について説明する。

#### 1.3.1 時代区分

時代は、上代、中古、中世、現代を音韻史上、特徴的な時代として設定する。上代は万葉仮名、中世は、ローマ字綴りを用いた資料があるので、どのような音であったのか、ほぼ確定できる。中古においては、仮名を用いているので、それがどのような音であったの

かは決め難いところがあるが、上代と中世の間で起こったであろう変化を仮定することによって、音韻体系を設定し、その上で計量し、後世と比較する。

### 1.3.2 音韻史と音声史

本研究は、音素分布・音素配列を調査するが、音声史ではなく、音韻史の研究である。音素ではなく、音韻という抽象的なレベルでの研究であるので、音素の音価がどうであったのか、異音をどう考えるかといった問題には触れない。ハ行が、上代は／h／ではなかった、あるいは、中世では、ア行の／e／の音価はヤ行の／je／であったなどは、音声史では、重要なことであるが、本研究では扱わない。音素をすべて抽象化して、設定することで、初めて、通時的に比較することができると思うからである。しかし、音声と音韻が密接に関わっているのは言うまでもないことで、決して音声を無視しているわけではない。音韻では、抽象化しているけれども、音声として読みかえることも可能であるということも付け加えておきたい。

### 1.3.3 語の認定

ここでは、テキスト類を、語に切るときの、単位について説明する。素材レベルとして、辞書に収録されている語の調査を行うが、実際には、素材のままで運用されているわけではない。用言が活用したり、助詞や助動詞がついたりして、文になって運用されるのである。しかし、テキストのまま、調査すると、1語当たりの長さや、出現位置別の音素分布が計量できないので、語に切る必要がある。

そこで、本研究では、語の単位として、ほぼ文節に相当する「長い単位」を使用することとする。運用レベルでの調査には、意味を持つ最少単位である形態素で切るよりも、意味のまとまりを持った文節で切るのが適当であると考えたためである。

「長い単位」とは、国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』で用いられている語の単位である。ほぼ文節に相当するが、文節の認定上、問題になる形式については細則が決められている。本研究でもその細則に従う。細則1には、付属語について述べてある。付属語(助詞・助動詞)の範囲は国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞』にあがっているものとする。付属語は、時代によって、異なってくるので、詳細は、各章で述べる。

また、細則2には次のようにある。

自立しうる体言的な形式(単独で、あるいは付属語をつけて文節として用いられ

うる体言的なもの) が直接的な関係をもちながら2つ以上ならんでいるばあいには、原則としてつづける。

例) 新聞・雑誌 用語・用字

したがって、例えば、『万葉集』に、「海未通女(巻第 17-3899)」「梅柳(巻第 17-3905)」のような語があるが、これらは切らずに1語とする。

各時代のテキスト類については、次の項で説明する。テキスト類の資料から1万拍を採って、「長い単位」を用いて、語に切る。1万拍を採る理由は、比率の計算をしなくてもわかるようにするためである。しかし、語の途中で1万拍に達した場合は、語を途中で切らないようにするため、1万拍を数拍超えることもある。

#### 1.3.4 語種・品詞の認定

本研究では、辞書類に収録されている和語名詞と漢語を素材レベルとして調査し、テキスト類を語に切ったものを、運用レベルとして調査する。そして、それぞれの語の音素分布表を出現位置別に作成する。

和語、漢語、外来語と語種別に調査するので、まず、語種の認定について説明する。和語は、「白露(シラツユ)」「山(ヤマ)」のような日本固有の語であり、漢語は、「結合(ケツゴウ)」「片雲(ヘンウン)」など、中国起源の語、及び、そこから派生したり、造語したりしたもの、例えば、「大根(ダイコン)」のように「おおね」に当てた漢字を音読したものも含む。外来語は、他国の言語で日本語に借用された語とする。「搾菜(ザーサイ)」「辣油(ラーユ)」などの、近代中国語も外来語の範疇である。「阿羅漢(アラカン)」や「陀羅尼(ダラニ)」など、中国語を経由して入ってきた、サンスクリット語の音訳である語も、漢語とはせず、外来語とする。『新潮国語辞典現代語・古語』『新潮現代国語辞典』には語種の定義については明記していないが、上記の定義とほぼ一致するため、語種の認定には、両辞書を用いる。

本研究では、和語名詞とその他の品詞についても調査するので、品詞の認定にも両辞書を用いる。辞書類を資料とした場合、複数の品詞を有する語は、第一の意味の品詞で代表させる。例えば、辞書の見出し語の調査において、『『ごろごろ』1(副詞・する自動)①大きな物がころがる音(中略)2(名)かみなり』のような場合、「ごろごろ」は副詞とし、名詞には数えない。また、「真っ黒(マックロ)」のように名詞と形容動詞の二つの品詞がある場合は、名詞とする。テキスト類を資料とした場合は、文を語に切るが、その文中で

の役割である品詞で、分類する。

### 1.3.5 資料

Trubetzkoy(1958)は、次のようにも述べている。

音韻論的統計は、どのような種類のものであれ、独特の難しい点がある。まとまりのあるテキストにおける特定の音韻的要素の頻度を調べる場合、とりわけそのテキストの選択が重要となる。

そして、その解決を試みるが、「音韻論的統計を様々な種類の文体の影響から完全に解放することは不可能なことに思える」とし、「文体の種類を中立化」された最も良いと思われる資料として、「さまざまな会話の記録、あるいは多種多様な文体（政治に関する社説、電文、やや専門的な論説、官庁報告、スポーツニュース、経済記事、連載小説等）が現われている新聞」を挙げている。

本研究でも、テキスト類を資料として、音韻的特徴を述べる以上、口語資料を扱うのが適当であると考え。しかしながら、上代には適当な資料がなく、また、時代を経るに従って、口語と文語の隔たりも大きくなっていくため、各時代の口語、文語を規定し、資料を選定するのは困難を極める。そこで、上代では、歌ではあるが、『万葉集』、中古では、時代を代表する古典作品である『源氏物語』、中世では、『天草版平家物語』、現代では、新聞よりもコンパクトで調査しやすく、記事や小説、対談、広告などさまざまなジャンルから効率よく、資料を集められる雑誌、『中央公論』を調査の対象とする。

辞書類は、上代、中古には適当な資料がないので、『万葉集』『源氏物語』に出てくる語で代用させる。テキスト類から、辞書の見出し語を作成するということである。中世では、『日葡辞書』、現代では、『新潮現代国語辞典』を用いる。

各時代に用いたそれぞれの資料についての具体的な説明は、各章で述べる。

以上、先行研究を概観し、本研究の目的と研究方法について述べた。ここで、本研究の視点として、次の3点にまとめる。

(1) 問題を抽象的な音韻の歴史として設定する。音声の歴史とはしない。例えば、ハ行音・サ行音の子音は、歴史的に一貫して存在するものとし、その音価の変遷は問題としない。

(2) 日本語音韻史を代表する時代を四つ設定してそれぞれ共時的に記述し、かつ、その



四時代を対比させながら連続させることによって通時的に記述する。

(3) 記述に当たっては、語のうちにおいて、また文章のうちにおいて、音の分布・配列を見る。語は言語活動で言わば素材となり、音はさらにその素材である。文章は言語活動で素材を運用する。音の様相は、素材と運用とで異なることが予想される。

(3・1) 語における音は、(2)の時代の辞書あるいは語彙一覧の見出しによって検討する。その際、語頭・語末といった位置、あるいは語の特性である語種・品詞を考慮する。ラ行音・濁音が和語の語頭に立たないといった特徴は、周知であるが、その量的様相が明らかになっているわけではない。

(3・2) 文章における音は、各時代を代表するテキストからそれぞれ1万拍連続を取り上げて検討する。そこから単に音の分布の様相も見ることが出来るが、語に区切ったうえで(3・1)と同様の検討も加える。

## 第2章 各時代における音韻体系

通時的に調査するにあたり、音韻体系について整理しておく必要がある。本章では、拍の概念と上代から現代までの音韻体系、及び、音素分布表、音素配列の作成方法について述べる。

### 2.1 拍の概念

本研究では、音声的単位としての「音節」ではなく、音韻的単位である「モーラ」すなわち「拍」を用いている。日本語の拍は、Cを子音音素、Vを母音音素、Sを半母音音素とすると、以下のようになる。

1C+1S+1V・・・・・・・・・・一般拍

N, M, G (撥音), Q (促音), T (入声音), R (引き音節)・・・特殊拍

一般拍を構成する子音音素Cと半母音音素Sの前の1は、ある場合とない場合がある。組み合わせとしては、ア行を示す1V、ヤ行、ワ行を示す1S+1V、カ行、ガ行などの直音を示す1C+1V、「キャ」などの拗音、及び「クァ」などの合拗音を示す1C+1S+1Vの4通りある。本研究では、ア行を示す1Vを「単独母音拍」、ヤ行、ワ行を示す1S+1Vを「単独半母音拍」と呼び、ともに子音を0とする。

特殊拍については、撥音、促音、入声音、引き音節とする。撥音、促音、入声音<sup>1</sup>はそれぞれ1拍で、子音扱いとし、母音を0とする。長音は一般拍+引き音節の2拍と数えている。引き音節は、母音を引きのばすところに、母音が何であっても共通の弁別的特徴があると認めて、一つの韻論的単位とみなし、直前の母音の重複ではなく、／R／とし、子音扱いを一応はするものの、分析には注意を要する。また、母音は0とする。

本研究では、音素分布表を作成するが、それは、音素の分布表であると、同時に拍の分布表でもある。橋本(1950)は、次のように述べている。なお、旧字体は新字体に改める。

例へば、カはkとaとに、サはsとaとに、ツはtとsとuとに分解せられるのであつて、これ等の小さな単位が一定の順に並んで、それが一つに結合して出来たものである。この事は、これ等の音を耳に聞いた上からも、また、これ等の音を発する時の発音器官の運動の上からも認められる事であつて、これ等の音の性質を明かにするには是非知らなければならない事であるが、しかし、かやうな事を明かに

してゐるのは専門学者だけであつて、その言語を用ゐている一般の人々はカ・サ・ツなどを各一つのもので考へ、それが更に小さな単位から成立つことは考へてゐないのである。

音声学の最小単位である単音、音韻論の最小単位である音素、それぞれ重要ではあるが、実際に、日本語において、最小単位として認識されているのは、それらが一定の順序で並んで、一つに結合した、音声的単位である音節、音韻的単位である拍、ということになるであろう。本研究においても、そのことを念頭に置きながら、音素分布・音素配列について、述べたい。

## 2.2 上代の音韻体系

上代の音韻体系を以下のように設定する。

1. 母音の甲類、乙類の区別がある。
2. 一般拍の直音のみである。

### ①母音に甲乙の区別がある拍

キ、ギ、ケ、ゲ、コ、ゴ、ソ、ゾ、ト、ド、ノ、ヒ、ビ、ヘ、ベ、ミ、メ、ヨ、ロ

### ②母音音素 /a i u e o/

乙類母音 /I E O/

甲乙の区別をもたない拍の母音音素は、便宜上、甲類の母音に入れるが、それは即ち、甲類であるというわけではない。

### ③半母音音素 /j w/

/j/に続く母音音素 /a u e o/

/w/に続く母音音素 /a i e o/

### ④子音音素 /k g s z t d n h b m r/

(カ行、ガ行、サ行、ザ行、タ行、ダ行、ナ行、ハ行、バ行、マ行、ラ行)

## 2.3 中古の音韻体系

上代の音韻体系が崩壊してくるのだが、何がどこまで崩壊していたのかを規定することは不可能である。そこで、各時代は、便宜上、平安時代初期とし、音韻体系を以下のように

に設定する。

1. 母音の甲類、乙類の区別は無くなる。
2. ア行のエ（衣・榎）とヤ行のエ（枝・江）の区別は残っている。
3. イ音便・ウ音便・促音便・撥音便は生じている。
4. 長音は生じていない。
5. 韻尾鼻音には[m][n][ɲ]の3種類の区別が存在する。  
[m]「三」(sa m), 「南」(na m)  
[n]「弁」(be n), 「右大臣」(zi n)  
[ɲ]「相」(sa ɲ), 「更衣」(ka ɲ)
6. 拗音、合拗音はまだ一拍では発音されず、2拍で発音される。  
「命婦」(mi ja ɲ), 「勅使」(ti jo ku)
7. ハ行転呼音はまだ生じていない。

①母音音素 /a i u e o/

②半母音音素 /j w/

/j/に続く母音音素 /a u e o/

/w/に続く母音音素 /a i e o/

③子音音素 /k g s z t d n h b m r/

(カ行、ガ行、サ行、ザ行、タ行、ダ行、ナ行、ハ行、バ行、マ行、ラ行)

④韻尾鼻音[m][n][ɲ]の3種類は、撥音とみなし、/M N G/で表す。

韻尾鼻音[m][n]と音便で生じた以下の音は同じものとする。

ム音便<sup>2</sup>・・・jomitaru → jomdaru マ行の/m/ではなく、撥音/M/とする。

ン音便・・・arazarunari → arazanari ナ行の/n/ではなく、撥音/N/とする。

⑤特殊拍 /N M G Q/

## 2.4 中世の音韻体系

中古の音韻体系から、大きく変化する現象がある。平安時代に、その兆しが見え始め、鎌倉時代、室町時代を経て、室町末期に確立したものである。その現象を以下にまとめ、それを以って、中世の音韻体系とする。

1. ハ行転呼音が生じている。

2. ヤ行のエ, ワ行のヰ, エ, ヲが, ア行のイ, エ, オと同じになる。

3. 拗音, 合拗音が1拍となる。

合拗音は, /kwa/ /gwa/のみである。漢語における「クィ」「クエ」, 及びその濁音は, 中古においては, 2拍で発音すると設定した。その後, 1拍で発音された時期もあったであろうが, この時代においては, すでに「キ」「ケ」及び, その濁音と同音になっている。

4. 韻尾鼻音は, 次のように変化する。

[m]「三」(sa m), 「南」(na m) →撥音/N/へ

[n]「弁」(be n), 「右大臣」(zi n) →撥音/N/へ

[ŋ]「亭子」(te ŋ), 「相」(sa ŋ) →母音/i/または/u/へ

5. 長音が生じる。

6. オ段の長音に開合の区別がある。

「アウ」「カウ」のようにア段に「ウ」がついたものと, 「アフ」「カフ」のようにア段に「フ」がついたものは, ハ行転呼音により, それぞれ同音になって, さらに, その多くが長音になった。「オウ」「コウ」のようにオ段に「ウ」がついたものと, 「オフ」「コフ」のようにオ段に「フ」がついたものも, 同様である。前者は, 開長音に, 後者は合長音となる。

7. 入声/T/のみ存在する。

8. パ行が加わる。

①母音音素 /a i u e o ɔ/

ただし, /ɔ/は開長音の前半部分でしか存在しえない。

②半母音音素/j w/

/j/に続く母音音素 /a u o ɔ/

/w/に続く母音音素 /a ɔ/

③子音音素 /k g s z t d n h b p m r/

(カ行, ガ行, サ行, ザ行, タ行, ダ行, ナ行, ハ行, バ行, パ行, マ行, ラ行)

④特殊拍 /N Q T R/

## 2.5 現代の音韻体系

現代日本語の音韻体系で、中世と大きく変わった点は以下の通りである。それを以って、現代の音韻体系とする。

1. 開合の区別がなくなる。
2. 「ジ」と「ヂ」, 「ズ」と「ヅ」の区別がなくなり, 「ジ」「ズ」となる。
3. 入声／T／がなくなる。
4. 外来語音ができる。詳しくは, 6.4 で述べる。

①母音音素 /a i u e o/

②半母音音素 /j w/

/j/に続く母音音素 /a u o/

/w/に続く母音音素 /a/

③子音音素 /k g s z t d n h b p m r/

(カ行, ガ行, サ行, ザ行, タ行, ダ行, ナ行, ハ行, バ行, パ行, マ行, ラ行)

ザ行, ダ行は, 次のように設定する。

ザ行      /    za    zi    zu    ze    zo    zja    zju    zjo    /

ダ行      /    da                      de    do                      /

④特殊拍 /N Q R/

ここで引き音節について明記しておく。直前の母音から独立しているか引きのばされているかということの判定には、問題となるところもある。中世の資料は、ローマ字で記されており、母音か引き音節かの区別について明記されているので、問題はないが、現代においては、仮名表記と発音が異なるため、基準が必要である。そこで、引き音節であるかどうかは、『明解日本語アクセント辞典』第二版に従うこととする。

『明解日本語アクセント辞典』に、引き音節について、次のような解説がある。なお、注意事項は、関連するもののみを引用する。また、アクセントの高低を示す記号は省略した。

一般に日本語では、あ列音拍の次の「あ」、い列音の拍の次の「い」などは引き音に発音される。  
この辞書では引き音として一を用いた。

但し、次のような場合に注意。

- (3) 「きれい (綺麗)」, 「せんせい (先生)」の「い」のような、え列音の拍の次の「い」は、丁寧  
に発音した場合、仮名表記にひかれて“エイ”の音が出る人もあるが、普通の発音では“エ  
ー”と引き音で発音される。この辞書では小さい★の印をつけて、エイ★と表記し、両様の  
発音を代表させた。

キレー, キレイ→キレイ★ (綺麗)

但し、次のようなものは例外である。

- (ii) 「テープ(tape)」などの外来語は引き音のみを原則とするが、イの音が相当慣用となっ  
ている場合に限り、デート, デイト(date)のように併記した。

表記の方法には、上記のように、引き音節とそうでない場合の両方を併記している場合  
と、イの下に★印をつけて示している場合がある。引き音節がどれぐらい使用されている  
かを知るために、いずれの場合にせよ、引き音節になる場合があると表記してある場合は、  
引き音節として扱うことにした。

## 2.6 音素分布表の作成

第3章から第6章まで、各時代の音素分布表を出現位置別に作成した。音素分布表は、  
音素の分布であると同時に、拍の分布表でもある。

表は別紙資料として稿末にあげる。例えば、3.1の音素表は〈音素表 3.1-N〉と表し、〈音  
素表 3.1-N〉は実際に得られた度数を示している。Nは、語頭における音素分布なら、1、  
語末における音素分布なら、2、語全体における音素分布なら、3とする。度数だと、分  
布がわかりにくいので、総計を分母として出した百分率の表も作成した。総計とは、すな  
わち、子音音素の合計、母音音素の合計、拍の合計のことを指す。これらは、すべて同じ  
数値となる。表のタイトルは、〈音素表 3.1-N'〉のように3番目の数字に「'」をつけて  
いる。

縦軸に子音音素、横軸に母音音素、半母音音素+母音音素を並べた。子音を伴わない単  
独母音拍、単独半母音拍については、子音がØという意味で、単独母音拍の場合は、子音  
を／X／で、単独半母音拍の場合は、子音を／x／で表す。

引き音節は中世から設定している。母音音素／a i u e o／の右に、／a: i: u: e: o:／と引き音節のように見える列があるが、これは次の拍に引き音節が来る母音音素を別に示したものである。例えば「訓読み」の「訓」の場合、「ク」の次は撥音で引き音節ではないため、子音／k／と母音／u／が交差するところにカウントされる。しかし、「空を切る」の「空」の「ク」は次に引き音節が来るので子音／k／と／u:／の交差するところにカウントされる。／ja ju jo／の右の／ja: ju: jo:／も同様である。〈音素表〉の母音の合計欄は3段に分かれ、母音合計①②③としてある。1段目合計①は次の拍に引き音節が来ない母音音素と、次の拍に引き音節が来る母音音素がそれぞれで合計されている。2段目合計②は、両者を合算し、1拍目に出現する母音音素の合計ということになる。さらに、3段目合計③は、母音音素の合計を知るために、半母音音素の有無で別々にした合計②を合算している。子音音素との合計は、半母音音素を伴わない④、半母音音素を伴う⑤、撥音・促音の⑥、以上を合算した⑦で示す。④、⑤それぞれでの子音音素全部の合計は、母音合計①と交差するところに示され、子音全体⑦と母音合計①が交差する表右下の数値は、拍の合計に一致する。

## 2.7 音素配列表の作成

ここでは母音の音素配列について述べる。拍数に関わらず、出現する母音音素について1番目、2番目、3番目と考えて3回ずつ数える。音素配列では、母音／a i u e o／と、半母音を伴った／ja ju je jo wa wi we wo／を別に扱うこととする。言い換えるならば、1S+1Vで、一つの新たな母音とみなすということである。ただし、稿末の資料〈音素配列表〉から、母音／a i u e o／のみで集計することも可能である。

母音が∅である撥音、促音、引き音節も母音配列の中に入れた。引き音節の場合は、／R／だと、どの母音の次の拍なのかがわからないため、母音ごとに個別に集計した。オ段の引き音節は、「:o」のように、母音の前に「:」をつけて、それを示している。ア段ならば、「:a」である。

なお、各時代で設定したように、／N M G T Q／、／i I e E o O ɔ／など、音素が異なる場合は、すべて別扱いとした。〈音素配列表〉は、すべて掲載すると、紙幅をとるので、テキスト類、すなわち、『万葉集』の和歌、『源氏物語』、『天草版平家物語』、『中央公論』における〈音素配列表〉は、すべて掲載することとし、その他は、上位の一部分のみの掲載とする。



語頭、語末であることがわかるように、語頭の音素の前に「{」を二つ、語末の音素の後に「}」を二つ補う。すると、1 拍語なら 3 つの組み合わせ、2 拍語なら 4 つの組み合わせ、3 拍語なら 5 つの組み合わせができる。つまり、拍数+2 の組み合わせができることになる。

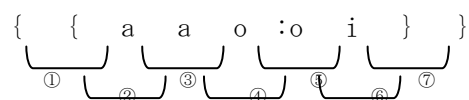
以下に母音配列の例を示す。

(例)

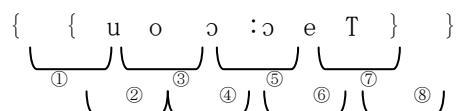
i 「矢 (や)」 (1 拍語の母音の場合)    ii 「畚 (もっこ)」 (3 拍語の母音の場合)



iii 「雨覆い (あまおーい)」 (5 拍語の母音の場合)



iv 「雨露霜雪 (うろさうせツ)」 の場合 (6 拍語の母音の場合)



i の組み合わせは、前から順に次の 3 つである。

① { { ja	② { ja }	③ ja }
----------	----------	--------

ii の組み合わせは、前から順に次の 5 つである。

① { { o	② { o Q	③ o Q o	④ Q o }	⑤ o }
---------	---------	---------	---------	-------

iii の組み合わせは、前から順に次の 7 つである。

① { { a	② { a a	③ a a o	④ a o :o	⑤ o :o i	⑥ :o i }	⑦ i }
---------	---------	---------	----------	----------	----------	-------

iv の組み合わせは、前から順に次の 8 つである。

① { { u	② { u o	③ u o っ	④ o っ :o	⑤ っ :o e	⑥ :o e T	⑦ e T }	⑧ T }
---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	-------

本研究では、語や音を提示するとき、意味をわかりやすくするために、「 」をつけて漢字仮名交じり表記で示しているが、本研究で扱うのは音であるため、続けて、第2章で設定した、音素表記を用いて音素で表している。ただし、片仮名、あるいは平仮名をもって、音表記の代用をしている箇所もあるが、それは、仮名と音が一致している場合のみとしている。仮名で区別できない場合は、音素表記を用いて示す。

(例)

「解洗衣」／t0 ki Xa ra hi g0 r0 mo／

「おほん／M／」

「蝟皮 (いひ)」・・・「い」とあれば、ア行

### 第3章 上代日本語の音韻構造

上代日本語は、どのような音素分布、音素配列をしているのであろうか。本章は、『万葉集』を調査対象として、『万葉集』に用いられている和語名詞の音素分布、及び音素配列を調べ、その音韻的特徴について述べる。また、和語名詞だけではなく、『万葉集』巻17、及び18の和歌を調査対象として、同様の調査を行い、上代日本語の音韻構造について概観する。

#### 3.1 『万葉集』における和語名詞の音韻構造

##### 3.1.1 調査資料

この節では、上代に用いられた和語名詞について、調査する。資料的制約上、散文について調査できないので、現存最古で、古来親しまれてきた和歌集であるということから、『万葉集』を上代の特徴を示すものとして扱う。

和語名詞の特徴を知るために、『万葉集』に使用されている和語名詞をすべて抜き出した。調査資料は古典索引刊行会(2003)『萬葉集索引』を用いた。ただし、語の切り方の基準は、『古典対照語い表』に従った。

例えば、『古典対照語い表』の単位の長さ〔4〕の規定には次のようにある。例は一部を挙げる。

〔4〕〈名詞＋の（が）＋名詞〉の形は、原則としてきりはなす。

(例) くもの／い、山の／は、をの／へ、ふじの／やま、うめが／はな  
したがって、『萬葉集索引』には、「山のは」で一語であっても、2語に切る。

調査対象は一般名詞を対象にしているため、『古典対照語い表』に人名・地名とあるものは省いた。また、東国語・未詳である語、母音の甲乙不明である語も省いた<sup>3</sup>。また、『古典対照語い表』に、枕詞とあるものも省いている。

宮島(1971)『古典対照語い表』を資料としたほうが、宮島(1989)『フロッピー版古典対照語い表および使用法』があり、万葉集の語彙を採録するのに便利ではあるが、調査に正宗(1974)『万葉集総索引』を用いているため、現在では学問水準が異なる語が含まれること、また、連濁を起こしたかどうか索引によって違うときは、『古典対照語い表』は、池田(1953)『源氏物語大成 索引篇』を基準にしているため、連濁が統一されてしまうことが問題として挙げられるので使用しなかった。

### 3.1.2 拍数別に見た語数

『万葉集』における和語名詞（代名詞を含む）を採録した結果、3310 語得られた。拍ごとの語数は【表 3.1.1】に示す。

【表 3.1.1】『万葉集』和語名詞の拍数別に見た語数（1 語平均 3.65 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	合計
語数	91	559	878	1059	406	233	82	2	3310
百分率	2.7	16.9	26.5	32.0	12.3	7.0	2.5	0.1	100.0

1 語は最大 8 拍である。8 拍の語は、「解洗衣」／t0 ki Xa ra hi g0 r0 mo／、「二綾裏沓」／hu ta Xa xya si ta gu tu／である。また、1 語あたりの平均拍数は、3.65 拍である。「秋山」／Xa ki xya ma／、「鶯」／Xu gu hi su／、「壮鹿」／sa xwo si ka／などの 4 拍語が最も多く 32.0%，次いで、「思」／Xo mo hi／、「春菜」／ha ru na／、「野守」／no mo ri／などの 3 拍語が 26.5% で、4 拍語と 3 拍語で全体の 58.5% を占める。1 拍語は 2.7% である。

### 3.1.3 音素分布

『万葉集』における和語名詞の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 3.1-1〉、語末〈音素表 3.1-2〉、語全体〈音素表 3.1-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 3.1-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素の出現率を【表 3.1.2】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数を分母とする百分率である。

【表 3.1.2】『万葉集』和語名詞の語頭における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
765	400	463	0	363	0	388	1	206	349	0	375	0	3310
23.1	12.1	14.0	0.0	11.0	0.0	11.7	0.0	6.2	10.5	0.0	11.3	0.0	100.0

語頭に濁音、ラ行音が来ないことは数値でも一目でわかる。／d／に 1 とあるのは、親しい間柄の人を意味する「どち」であるが、『万葉集』では、単独で用いられることはないで、語の認定を変更すべきであるかもしれない。「どち」が用いられている 12 例中、11 例が「思ふどち」の形で現れ、残り 1 例は「旅別るどち」である。

最も多く出現するのは、／X／（単独母音拍の子音部）の 23.1% であり、続いて／k／

14.0%，次が／x／（単独半母音拍の子音部）の12.1%である。息の妨害がない子音∅と、この時代、調音点が最も奥である／k／が語頭に多い点が興味深い。

次に、語頭における母音音素の出現率を【表 3.1.3】に挙げる。上段は度数、下段は母音総数を分母とする百分率である。なお、半母音は計算する際、考慮に入れていない。以下、特に記述する場合を除いて、音素分布の出現率を出す際、半母音を計算に入れないのは、論を通じて同じである。

【表 3.1.3】『万葉集』和語名詞の語頭における母音の音素分布

a	i	I	u	e	E	o	0	計
1358	686	14	544	65	18	414	211	3310
41.0	20.7	0.4	16.4	2.0	0.5	12.5	6.4	100.0

語頭において、最も多く現れる母音は／a／の41.0%で、その次は／i／の20.7%である。／e／の出現率は2.0%，乙類音の／E／を加えたとしても、2.5%と非常に低い。乙類音の／I／／E／は、非常に少ない<sup>4</sup>。

次に、語頭における多頻度拍を【表 3.1.4】に挙げる。語頭において、多い音素について、見たときと、多い拍で見たときと比べるとどうなるだろうか。稿末別紙資料〈音素表 3.1-1〉で、子音と母音の交差しているところは、拍の出現率である。

【表 3.1.4】『万葉集』和語名詞の語頭多頻度拍

拍	／Xa／	／ka／	／Xi／	／ta／	／si／	／mi／	／Xo／	／ha／	／na／	／xja／
度数	316	231	197	163	160	147	143	135	117	117
百分率	9.5	7.0	6.0	4.9	4.8	4.4	4.3	4.1	3.5	3.5

母音／a／を含む拍が上位10のうち6つあり、母音／i／を含む拍が3つある。子音分布と拍の分布は結果が異なる。子音の分布と母音の分布から、拍の期待値を出し、そのずれについて、考察することも考えられるが、本研究では、度数を提示するまでとする。

稿末別紙資料〈音素表 3.1-2〉は、語末における音素分布である。子音音素の出現率を【表 3.1.5】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数を分母とする百分率である。

【表 3.1.5】『万葉集』和語名詞の語末における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
15	207	332	117	299	53	342	162	270	389	69	598	457	3310
0.5	6.3	10.0	3.5	9.0	1.6	10.3	4.9	8.2	11.8	2.1	18.1	13.8	100.0

語頭において、最も多く出現した／X／はほとんど出現しない。上代は、母音が語中や語末に来るのを嫌ったとよく知られている通りである。最も多いのは／m／の 18.1%，次いで／r／の 13.8%，／h／の 11.8%と続く。当時の／h／は両唇音であったことを考えると、調音点前方にある子音が語末に現れやすいと言える。

次に、語末における母音音素の出現率を【表 3.1.6】にあげる。

【表 3.1.6】『万葉集』和語名詞の語末における母音の音素分布

a	i	I	u	e	E	o	0	計
912	906	155	184	402	157	370	224	3310
27.6	27.4	4.7	5.6	12.1	4.7	11.2	6.8	100.0

語末においては、／u／の出現率が低いことが特徴である。最も多い母音は、／a／の 27.6%であるが、／i／もほぼ同じ出現頻度である。甲乙の区別をしなければ、32.1%となり、／i／類が最も多いことになる。

次に、語末における多頻度拍を挙げる。

【表 3.1.7】『万葉集』和語名詞の語末多頻度拍

拍	／ma／	／ri／	／ra／	／mi／	／si／	／ki／	／ha／	／hi／	／t0／	／sa／
度数	254	196	142	132	115	114	113	113	101	99
百分率	7.7	5.9	4.3	4.0	3.5	3.4	3.4	3.4	3.1	3.0

／t0／以外の拍の母音は／a／か／i／である。語末において、／ma／／ri／／ra／／mi／／ha／／hi／など、子音／m／／r／／h／と、母音／a／／i／の組み合わせが多い。

稿末別紙資料〈音素表 3.1-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 3.1.8】【表 3.1.9】【表 3.1.10】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

語全体においては、子音音素では、／k／の 13.5%が最も多く、次いで、／m／の 13.3%，／t／の 11.9%，／h／の 10.9%と続く。母音音素では、乙類も／I／／E／の出現率は極めて低い。最も多いのは／a／で 36.6%を占める。

『万葉集』における和語名詞全体では、母音音素／a／の出現頻度が高い。上位 10 の拍のうち、7つが／a／を伴う拍である。

【表 3.1.8】『万葉集』和語名詞の語全体における子音音素

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
869	1025	1632	464	1181	119	1442	437	879	1320	238	1607	884	12097
7.2	8.5	13.5	3.8	9.8	1.0	11.9	3.6	7.3	10.9	2.0	13.3	7.3	100.0

【表 3.1.9】『万葉集』和語名詞の語全体における母音音素

a	i	I	u	e	E	o	0	計
4432	2529	223	1773	622	214	1345	959	12097
36.6	20.9	1.8	14.7	5.1	1.8	11.1	7.9	100.0

【表 3.1.10】『万葉集』和語名詞の多頻度拍

拍	/ma/	/ka/	/si/	/ha/	/ta/	/mi/	/na/	/tu/	/ja/	/sa/
度数	653	643	487	482	421	406	403	395	370	355
百分率	5.4	5.3	4.0	4.0	3.5	3.4	3.3	3.3	3.1	2.9

### 3.1.4 音素配列

『万葉集』における和語名詞の母音音素の配列について調べた結果、1047 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 3.1〉として、その一部を挙げる。【表 3.1.11】は、度数 155 以上の母音配列を示したものである。なお、〈音素配列表 3.1〉では、母音音素の前に「\_」を記しているが、【表 3.1.11】では省略する。以下、同様である。

【表 3.1.11】『万葉集』和語名詞の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	{ { a	1186	/a/ が語頭	13	{ i a	215	語頭が /i/-/a/ で始まる
2	i } }	890	/i/ が語末	14	a a a	210	/a/-/a/-/a/ の連続
3	a } }	862	/a/ が語末	15	u a }	205	語末が /u/-/a/ で終わる
4	{ { i	678	/i/ が語頭	15	0 } }	205	/0/ (乙類) が語末
5	{ a a	481	語頭が /a/-/a/ で始まる	17	a a i	200	/a/-/a/-/i/ の連続
5	{ { u	481	/u/ が語頭	18	{ a u	190	語頭が /a/-/u/ で始まる
7	e } }	354	/e/ が語末	19	{ u a	176	語頭が /u/-/a/ で始まる
8	a i }	343	語末が /a/-/i/ で終わる	20	u } }	172	/u/ が語末
9	a a }	310	語末が /a/-/a/ で終わる	21	{ { 0	171	/0/ (乙類) が語頭
10	o } }	308	/o/ が語末	22	u i }	168	語末が /u/-/i/ で終わる
11	{ { o	306	/o/ が語頭	23	E } }	157	/E/ (乙類) が語末
12	{ a i	241	語頭が /a/-/i/ で始まる	24	I } }	155	/I/ (乙類) が語末

【表 3.1.11】から母音の配列順序を見ると、／a／の2連続が語頭、語末に多く見られる。母音／a／-／i／の配列も語頭、語末に多い。3母音の連続では、／a／-／a／-／a／、／a／-／a／-／i／が多いことがわかる。『万葉集』における和語名詞らしい音素分布、音素配列があるとすれば、これらの配列がそうなのかもしれない。

## 3.2 『万葉集』における和歌の音韻構造

### 3.2.1 上代資料『万葉集』

調査資料は新日本古典文学大系の『萬葉集』を用い、適宜、新編日本古典文学全集『萬葉集』も参照した。『万葉集』の和語名詞の調査には、古典索引刊行会(2003)『萬葉集索引』を使用し、それは、古典索引刊行会(2001)『萬葉集 CD-ROM 版』を底本としたものであるので、そちらを使用すべきであったかもしれないが、和語名詞については、ほぼ違いがないので、問題はない。

本研究は、音を調べるのが目的であるので、万葉仮名主体で書かれている巻の歌のみを調査対象とする。万葉仮名が主体で書かれているのは、巻第14、15、17、18、20であるが、巻第14、巻第20は東歌、防人歌が含まれているので省く。巻第17から巻第20は、家持の歌日誌のような性格を持つものの、万葉末期を代表する歌人でもあり、詠まれた年代も730年から750年の間と判明しているので、年代を特定できるという点で、他の巻より資料としてよいと思われる。そこで、巻第17から順に歌のみで1万拍になるまで採録する。「花」「船」「家」など正訓字が用いられている場合も、調査対象とし、母音の甲乙、清濁は『時代別国語辞典上代編』に従って読んだ。

また、歌に「或いは云ふ」「一に云ふ」その他の原注があっても、それらは考慮せず、データには含めないこととした。具体例を以下にすべて記す。

〔巻第17〕

3896の第4句・・・「思ひしをれば」ではなく「浮きてしをれば」とする説をとる。

家尔氏母 多由多敷命 浪乃宇倍尔 宇伎氏之乎礼婆 於久香之良受母

これは、「或いは云ふ」「一に云ふ」の例ではないが、新日本古典文学大系の『万葉集』の注に次のようにあるため、「浮きてしをれば」とする。

第四句は西本願寺本や類聚古集・広瀬本などで「思之乎礼波」、結句の下に「一云宇



伎氏之乎礼八」とあって、これに拠る注釈も多い。しかし巻十七では「おもふ」はすべて仮名表記であり、「思」は全部音仮名として用いられている。類聚古集や広瀬本の訓は「うきてしをれば」であり、歌の表現としてもこの方が自然である。「思」に誤写され、一云が加えられた経緯は不明だが、元暦校本や古葉略類聚鈔の本文を原形と認める説による。

3995 の第 4 句・・・「見ぬ日久しみ」ではなく「見ぬ日さまねみ」とする。

多麻保許乃 美知尔伊泥多知 和可礼奈婆 見奴日佐麻祢美 孤悲思家武可母 一云、不<sub>レ</sub>見日久弥  
恋之家牟加母

4018 の結句・・・「鶴騒くなり」ではなく「鶴さはに鳴く」とする。

美奈刀可是 佐牟久布久良之 奈呉乃江尔 都麻欲妣可波之 多豆左波尔奈久 一云、多豆佐和久奈  
里

〔巻第 18〕

4037 の第 2 句の別案、あるいは第 6 句として、元来は仏足石歌であったと考えられる・・・  
「君が問はすも」は省略する。

乎敷乃佐吉 許芸多母等保里 比祢毛須尔 美等母安久倍伎 宇良尔安良奈久尔 一云、伎美我等波  
須母

4043 の初句・・・「ほととぎす」ではなく「明日の日の」とする。

安須能比能 敷勢能宇良未能 布治奈美尔 気太之伎奈可受 知良之氏牟可母 一頭云、保等登芸須

4057 の第 4 句・・・「玉扱き敷きて」ではなく「玉敷き満てて」とする。

多万之賀受 伎美我久伊弓伊布 保里江尔波 多麻之伎美豆々 都芸豆可欲波牟 或云、多麻古伎之  
伎豆

巻第 17 の最初の歌 3890 番から巻第 18 の 4089 の長歌・第 6 句までで、2693 語、10003 拍である。これを調査対象とする。

### 3.2.2 上代特殊仮名遣いの例外

巻第 18 は伝来過程で著しい破損があったとされる巻である。平安時代に大幅な補修がされたことが上代特殊仮名遣いの例外、稀な字母、清濁の例外などからわかる。大野(1945)はそれを 5 群に分け、表で示している。大野(1977)で、総字数も入れて表にまとめている。

本研究は、上代の音韻構造を明らかにすることが目的であるので、上代特殊仮名遣いの例外のうち、甲乙に関するもの、また、清濁の例外は認めず、奈良時代の音韻に訂正し、

データとした。『万葉集』の時代にすでにゆれがあるものは、個々の語によって判断した。その際、『時代別国語辞典上代編』を判断の基準に用いた。以下に具体例をいくつか示す。

〔上代特殊仮名遣いの異例の例〕

巻第 17-3940

・許己呂波刀氣旦・・・「刀」は甲類音であるが、新日本古典文学大系の注によれば、この仮名を用いた万葉集で唯一の例である。ここは乙類音とする。

巻第 18-4044

・波万へ余里・・・「余」は乙類音であるが、ここは甲類音とする。

巻第 18-4047, 4048, 4049, 4055

・多流比売野・・・「野」は甲類音であるが、ここは乙類音とする。

巻第 18-4047

・多努之久安曾敵・・・「曾」は乙類音であるが、ここは甲類音とする。

巻第 18-4049

・見礼度安可須介利・・・「度」は甲類音であるが、ここは乙類音とする。「須」は清音仮名であるが、ここは濁音とする。

巻第 18-4082

・安米比度之・・・天人の「度」が甲乙も清濁も合わない。乙類音・清音とする。

〔ゆれの例〕

巻第 17-3893

・伊佐魚取・・・「と」は記紀歌謡においても甲乙の混乱が見られる。概して乙類音が多いので、「とる」の「と」は乙類音に統一する。

巻第 17-3898

・多度伎毛思良受・・・語源的には「手＝付く」と思われ、「カモヅクーカモドク」などの例からも甲類音が当然と思われるが、事実上、乙類音が多く用いられるので、「たどき」の「ど」は乙類音に統一する。「度」は甲類音であるが、乙類音とする。

参照、巻第 17-3962 多騰伎乎之良尔・・・「騰」は乙類音

巻第 17-3928, 3937

・須流須辺乃奈左・・・「便」は「すへ」「すべ」の両形があったと考えられる。清音仮名

の場合は清音で、濁音仮名の場合は濁音で入力することにする。したがって、ここでは清音とする。

巻第 17-3962, 3969

・世牟須弁能・・・「弁」は濁音仮名であるので、濁音とする。

### 3.2.3 拍数別に見た語数、及び語種

付属語の範囲は「長い単位」に準ずるが、現代語にない付属語は、古典索引刊行会(2009)の品詞分類に従う。動詞の連用形に直接続いて補助動詞的に用いられた「きこゆ」「たまふ」などは切らずに付属語として扱う。枕詞については、一語として扱う。枕詞かどうかの判定は、索引や古語辞典によって異なるので、佐佐木(1956)『萬葉集事典』によった<sup>5</sup>。

『万葉集』の和歌を 10003 拍、採録すると、延べ語数で 2693 語得られた。拍数別にみると、【表 3.2.1】のようになる。

【表 3.2.1】『万葉集』和歌の拍数別に見た語数（1 語平均 3.71 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	計
語数	30	465	861	540	636	10	148	3	2693
百分率	1.1	17.3	32.0	20.1	23.6	0.4	5.5	0.1	100.0

1 語は最大 8 拍である。1 語平均は 3.71 拍である。和歌を語で切ると、「いざり」／Xi za ri／、「海人の」／Xa ma n0／、「泊てむ」／ha te mu／、「思ふ」／Xo mo hu／のような 3 拍が 32.0% で最も多いことがわかる。5 音、7 音が基調となる『万葉集』であるが、意味のまとまりで切ると、実際は 3 拍が最も多いのである。続いて、「ほととぎす」／ho t0 t0 gi su／、「み園生の」／mi s0 n0 hu n0／、「あらなくに」／Xa ra na ku ni／、「なかるべし」／na ka ru bE si／のような 5 拍語が 23.6%、「秋風」／Xa ki ka ze／、「心を」／k0 k0 r0 xwo／、「過ぎにし」／su gI ni si／のような 4 拍語が 20.1% となる。6 拍と 8 拍は単独母音拍を含む字余りの句がほとんどである<sup>6</sup>。また、『万葉集』の歌は句をまたがって語を形成するものはなかった<sup>7</sup>。

なお、『万葉集』で、漢語はほとんど出現しない。自立語のみを調査した宮島(1992)の「語種別統計」を見ると、延べ語数では、和語 50031 語に対して、漢語 25 語、混種語 14 語で、計 50070 語である。漢語と混種語の占める割合は、わずか 0.1% にも満たない。異なり語

数では、漢語 20 語、混種語 7 語である。漢語の例は、「香」「餓鬼」「百濟」「五位」「朝参」などである。この節の調査範囲においても漢語は見られなかった。したがって、すべて和語である。

### 3.2.4 音素分布

『万葉集』から得た 10003 拍、2693 語の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 3.2-1〉、語末〈音素表 3.2-2〉、語全体〈音素表 3.2-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 3.2-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 3.2.2】【表 3.2.3】【表 3.2.4】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 3.2.2】『万葉集』和歌の語頭における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
610	291	434	5	312	0	353	4	192	271	0	221	0	2693
22.7	10.8	16.1	0.2	11.6	0.0	13.1	0.1	7.1	10.1	0.0	8.2	0.0	100.0

【表 3.2.3】『万葉集』和歌の語頭における母音の音素分布

a	i	I	u	e	E	o	0	計
1038	581	8	391	78	19	316	262	2693
38.5	21.6	0.3	14.5	2.9	0.7	11.7	9.7	100.0

【表 3.2.4】『万葉集』和歌の語頭多頻度拍

/Xa/	/ta/	/Xi/	/na/	/ka/	/mi/	/Xo/	/k0/	/si/	/ki/	/sa/
247	159	154	140	131	118	114	109	106	97	97
9.2	5.9	5.7	5.2	4.9	4.4	4.2	4.0	3.9	3.6	3.6

濁音、ラ行音が語頭に来ることは、ほとんどなく、子音を伴わない単独母音拍が 22.7% で、最も多いことがわかる。続いて、/k/ の 16.1%、/t/ の 13.1% である。和歌を対象にして、名詞だけではなく、すべての品詞を調査しても、語頭においては、子音を伴わない単独母音拍、つまり、息の妨害を受けない母音と、この時代、調音点が最も奥である /k/ が語頭に多く出現するのである。

語頭における母音音素は、／a／が 38.5%で最も多く、／e／が 2.9%と少ない。

甲乙の区別を考えると、乙類の／I／／E／は非常に少ない。乙類の／I／が語頭にくるのは、「霧（キリ）立ち渡り」（巻第 17-4003）など「霧」が 3 例、「梅の木」（巻第 17-4006），「我が身」（巻第 18-4078），「いざり焚く火の」（巻第 17-3899）「火さへ燃えつつ」（巻第 17-4011），「潮のはや王ば」（巻第 18-4034）の 8 例である。

／E／が語頭にくるのは、／kE／が「旦長きものを」（巻第 17-3957），「消ずてわたる」（巻第 17-4004），「旦の長けむそ」（巻第 17-4006），「けだしくも」（巻第 17-4011），「けだし来鳴かず」（巻第 18-4043）の計 5 例，／hE／が「川の上（へ）に」（巻第 17-3953），動詞「経」の連用形「月経ぬ」（巻第 17-3948）など 6 例<sup>8</sup>で、計 7 例，／mE／は、「恵みたまはな」（巻第 17-3930），「君が且を見ず」（巻第 17-3934），「めぐしもなしに」（巻第 17-3798），「且に見ぬ」（巻第 18-4039），「荒磯のめぐり」（巻第 18-4049），「珍しき君が」（巻第 18-4050），「珍しく思ほゆるかも」（巻第 18-4084）の計 7 例，合計 19 例のみである。

稿末別紙資料〈音素表 3.2-2〉は、語末における音素分布である。子音音素，母音音素，拍の出現率を【表 3.2.5】【表 3.2.6】【表 3.2.7】にまとめる。上段は度数，下段は子音総数，母音総数，拍総数を分母とする百分率である。

【表 3.2.5】『万葉集』和歌の語末における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
1	157	210	97	219	52	256	41	737	203	110	375	235	2693
0.0	5.8	7.8	3.6	8.1	1.9	9.5	1.5	27.4	7.5	4.1	13.9	8.7	100.0

【表 3.2.6】『万葉集』和歌の語末における母音の音素分布

a	i	I	u	e	E	o	0	計
469	660	24	499	184	25	310	522	2693
17.4	24.5	0.9	18.5	6.8	0.9	11.5	19.4	100.0

【表 3.2.7】『万葉集』和歌の語末多頻度拍

拍	／n0／	／ni／	／mo／	／si／	／ru／	／ha／	／te／	／ba／	／xwo／	／ku／
頻度	373	280	197	128	123	121	104	102	99	88
百分率	13.9	10.4	7.3	4.8	4.6	4.5	3.9	3.8	3.7	3.3

／n／が27.4%で最もよく用いられる。次いで／m／の13.9%である。調音点が前方にある子音が語末に多く現れる。

語末においては、甲乙の区別をすると、／i／が24.5%で最も多い。乙類の／0／は、確実に区別のあるものしか分けておらず、／mo／など、おそらく区別があったであろうと思われるものも、甲類に分類しているにも関わらず、乙類の／0／が19.4%であるのは興味深い。乙類の／0／は語頭よりも語末に現れやすいようである。

拍では、／n0／が最も多く、13.9%である。助詞「の」が多く使用されているためである。

稿末別紙資料〈音素表 3.2-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 3.2.8】【表 3.2.9】【表 3.2.10】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 3.2.8】『万葉集』和歌の語全体における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r	計
638	698	1397	329	922	93	1178	203	1351	939	232	1217	806	10003
6.4	7.0	14.0	3.3	9.2	0.9	11.8	2.0	13.5	9.4	2.3	12.2	8.1	100.0

【表 3.2.9】『万葉集』和歌の語全体における母音の音素分布

a	i	I	u	e	E	o	0	計
2879	2334	136	1538	671	191	1040	1214	10003
28.8	23.3	1.4	15.4	6.7	1.9	10.4	12.1	100.0

【表 3.2.10】『万葉集』和歌の多頻度拍

拍	／n0／	／si／	／ni／	／ka／	／na／	／mo／	／t0／	／ki／	／mi／	／ta／
頻度	441	427	403	397	367	363	345	345	312	307
百分率	4.4	4.3	4.0	4.0	3.7	3.6	3.4	3.4	3.1	3.1

全体では／k／が14.0%で最も多く、次いで、／n／の13.5%、／m／の12.2%、／t／の11.8%の順である。和語名詞のみの調査と比べ、／n／が上位に現れている。

語全体で最も多く用いられる母音は／a／の28.8%である。乙類の／I／／E／の使用頻度は他の母音と比べて明らかに低い。しかし、イ列・エ列・オ列で甲乙のない音素の数を

甲類音に加えているので、すべての数が甲類音であることを示すものではない。それにしても、乙類／I／／E／の出現頻度は低い。大野(1977)では、『万葉集』の万葉仮名で書いてある巻から 41000 拍を取り出して、その使用度数を調査している。それによると、「ケ・ヘ・メ・ゲ・ベ」は甲乙の母音がそれぞれ、拮抗して出現する、「キ・ヒ・ミ・ギ・ビ」は、甲乙の母音がそれぞれ、89.5%, 10.5%の出現率で、甲類が多く出現する、「コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ・ゴ・ゾ・ト」は、甲乙の母音がそれぞれ、16.3%, 83.7%の出現率で、乙類の母音が多く出現するとしている。しかし、母音全体から見ると、非常に少ない。甲乙の別があるものに限定せずに、比べると、／I／対／i／、／E／対／e／、／O／対／o／は、それぞれ、1 対 17.2, 1 対 3.5, 1.2 対 1 である。

拍では、／n0／／t0／／ni／が多く、助詞の影響が強く現れている。

### 3.2.5 音素配列

『万葉集』における和歌の母音音素の配列について調べた結果、904 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 3.2〉として、そのすべてを挙げる。【表 3.2.11】は、度数 100 以上の母音配列を示したものである。

【表 3.2.11】『万葉集』和歌の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	{ { a	908	／a／が語頭	13	a i }	193	語末が／a／-／i／で終わる
2	i } }	658	／i／が語末	14	e } }	177	／e／が語末
3	{ { i	578	／i／が語頭	15	a u }	167	語末が／a／-／u／で終わる
4	0 } }	518	／0／（乙類）が語末	16	{ i a	163	語頭が／i／-／a／で始まる
5	u } }	483	／u／が語末	17	{ a u	162	語頭が／a／-／u／で始まる
6	a } }	444	／a／が語末	18	a a i	145	／a／-／a／-／i／の連続
7	{ { u	333	／u／が語頭	19	a a }	133	語末が／a／-／a／で終わる
8	{ a a	312	語頭が／a／-／a／で始まる	20	a a a	129	／a／-／a／-／a／の連続
9	{ { o	255	／o／が語頭	21	i 0 }	126	語末が／i／-／0／で終わる
10	{ { 0	229	／0／（乙類）が語頭	22	i i }	117	語末が／i／-／i／で終わる
11	{ a i	225	語頭が／a／-／i／で始まる	23	{ i i	111	語頭が／i／-／i／で始まる
12	o } }	207	／o／が語末	24	{ 0 0	100	語頭が／0／-／0／で始まる

和語名詞の場合と同じく、／a／の 2 連続が語頭、語末に多く見られる。／a／-／i／の配列も語頭、語末に多い。母音の 3 連続を見ると、18 位の／a／-／a／-／i／、20 位の／a／-／a／-／a／が多く現れる母音配列である。

和語名詞と異なるのは、／u／が語末に多く現れる点である。語末が／a／-／u／で終わ

る語も 15 位で 167 例ある。

### 3.2.6 拍の配列

次に、2 拍の配列から『万葉集』の音韻的特徴を見る。【表 3.2.12】は実際に出てきた 1697 の配列の組み合わせのうち、度数 35 以上の配列を示したものである。

語頭に多く使用される拍は、「あ」「た」「い」「な」「か」で、語末に多く使用される拍は、「の（乙）」「に」「も」「し」「る」である。

語頭・語末以外で多く現れる拍の配列で多いのは、「やま」「きみ」「おも」「たま」「たち」である。これらは『万葉集』でよく使用される語彙と関連がある。なお、拍の配列の調査は、『万葉集』の和歌のみとする。

【表 3.2.12】『万葉集』和歌の拍の配列

位	配列	度数	位	配列	度数	位	配列	度数	位	配列	度数
1	n0 }	373	15	{ si	106	29	{ ha	75	433	ta ma	46
2	ni }	280	16	te }	104	30	{ tu	68	44	su }	44
3	{ Xa	247	17	ba }	102	31	{ xwa	66	44	ta ti	44
4	mo }	197	18	xwo }	99	32	ri }	65	44	na }	44
5	{ ta	159	19	{ ki	97	32	{ hi	65	44	{ su	44
6	{ Xi	154	19	{ sa	97	34	{ xja	64	48	ka mo	40
7	{ na	140	21	{ Xu	94	35	{ ma	59	49	tu }	39
8	{ ka	131	22	{ t0	89	36	{ xju	58	49	ha na	39
9	si }	128	23	ku }	88	37	xja ma	57	51	zu }	38
10	ru }	123	24	t0 }	87	37	ki mi	57	51	{ se	38
11	ha }	121	25	mu }	82	39	Xo mo	54	51	{ ho	38
12	{ mi	118	26	ga }	80	40	{ xwo	49	54	hu }	37
13	{ Xo	114	27	ki }	78	41	mi }	48	55	ma }	36
14	{ k0	109	28	{ hu	77	41	{ ko	48	56	na ku	35

### 3.3 上代日本語の音韻構造

以上、上代日本語の音韻構造について、『万葉集』を資料として述べてきた。『万葉集』における和語名詞を拍数別に見ると、4 拍の語が 32.0% で最も多く、次いで 3 拍の語が 26.5% で、二つを合わせて全体の 58.5% を占める。語の平均拍数は、3.65 拍である。また、『万葉集』の和歌を資料とし、巻第 17 からの歌のみを対象に、10000 拍を採り、語に切ると、2693 語得られた。平均拍数は 3.71 拍である。拍数別にみると、3 拍の語が 32.0% で



最も多く、次いで5拍の語が23.6%である。

和語名詞における音素分布を出現位置別に見ると、語頭では、／X／（単独母音拍の子音部）が23.1%で最も多く出現し、次いで／k／の14.0%である。母音音素は、／a／が41.0%で最も多く、乙類の／I／／E／はほとんど出現しない。語末では、子音音素は／m／の18.1%が最も多く、／r／の13.8%、／h／の11.8%と続く。母音音素は、語頭と同様、最も多かったのは／a／の27.6%であるが、／i／も27.4%で、ほとんど変わらない。乙類の／I／の4.7%を合わせると、／a／よりも多い。語全体では、子音音素は、／k／の13.5%が最も多く、次いで／m／の13.3%、／t／の11.9%と続く。母音音素は／a／が36.6%で最も多い。語末の拍では、／t0／以外の拍の母音は／a／か／i／である。語末において、／ma／／ri／／ra／／mi／／ha／／hi／など、子音／m／／r／／h／と、母音／a／／i／の組み合わせが多い。母音配列は、／a／の2連続が語頭、語末に多く見られる。／a／-／i／の配列も語頭、語末に多い。3連続では、／a／-／a／-／a／、／a／-／a／-／i／が多い。

テキスト類としての、『万葉集』の和歌を対象にした調査では、語頭では、／X／が22.7%で最も多く出現し、次いで／k／の16.1%である。母音音素は、／a／が38.5%で最も多く、乙類の／I／／E／はほとんど出現しない。語末では、子音音素は／n／が27.4%で突出している。次いで、／m／の13.9%、／t／の9.5%、／r／の8.7%と続く。母音音素で、最も多かったのは／i／の24.5%である。乙類の／I／／E／は、ともにわずか0.9%しかない。乙類の／0／が19.4%と多く出現すること、／u／が18.5%と語末に多く出現することが特徴である。拍では、／n0／が最も多く、13.9%である。助詞「の」が多く使用されているためである。

語全体では、子音音素は、／k／の14.0%が最も多く、次いで／n／の13.5%、／m／の12.2%、／t／の11.8%、と続く。母音音素は／a／が28.8%で最も多い。母音配列は、和語名詞と同じく、／a／の2連続が語頭、語末に多く見られる。／a／-／i／の配列も語頭、語末に多い。3連続では、／a／-／a／-／a／、／a／-／a／-／i／が多い。多頻度拍は、／n0／／si／／ni／／ka／／na／／mo／／t0／／ki／／mi／／ta／である。

和語名詞と比較すると、語頭においてはほとんど差が見られない。しかし、歌として詠まれた場合、用言は活用し、付属語を伴う場合もあり、平均拍数や語末に和語名詞の場合と異なった特徴が現れる。

母音音素では、歌を資料とした場合、子音音素では、／n／の出現頻度が突出する。母音

音素では語末に／i／や乙類の／0／が多く出現する。多頻度拍を見ても、歌を資料とした場合は、／n0／／ni／／mo／／t0／／ki／が上位に現れ、助詞や助動詞の影響を思わせる。しかし、母音連続では、上位に来る配列は変わらず、／a／-／a／-／i／、／a／-／a／-／a／が多い。

## 第4章 中古日本語の音韻構造

中古日本語は、どのような音素分布、音素配列をしているのであろうか。本章は、『源氏物語』を調査対象として、『源氏物語』に用いられている和語名詞の音素分布、及び音素配列を調べ、その音韻的特徴について述べる。また、和語名詞だけではなく、『源氏物語』の「桐壺」の巻を調査対象として、同様の調査を行い、中古日本語の音韻構造について概観する。

### 4.1 『源氏物語』における和語名詞の音韻構造

#### 4.1.1 調査資料

この節では、中古に用いられた和語名詞について、調査する。【表 4.1.0】は宮島(1992)『古典対照語い表』に掲載されている語種別統計の表で、【表 4.1.0a】は異なり語数、【表 4.1.0b】は延べ語数である。それぞれ、上段から、順に、和語、漢語、混種語の語数を示している。

【表 4.1.0a】宮島(1992)語種別統計・異なり語数

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉	計
和	2896	896	3359	1769	2104	9936	4413	3279	1916	926	1989	1586	1203	6478	19677
漢	1190	231	1230	146	276	1020	640	235	6	44	4	89	88	20	3264
混	154	21	230	35	88	465	193	84	1	14	1	17	21	7	936
計	4240	1148	4819	1950	2468	1142	5246	3598	1923	984	1994	1692	1312	6505	12387

【表 4.1.0b】宮島(1992)語種別統計・延べ語数

徒然	方丈	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉	計
14740	2235	24101	6890	7732	194745	30243	21459	11933	3369	10000	6729	4864	350031	389071
2116	268	4349	295	849	10529	2164	774	21	103	13	183	220	25	21909
256	24	762	58	156	2518	498	165	1	24	2	19	40	14	4537
17112	2527	29212	7243	8737	207792	32905	22398	11955	3496	10015	6931	5124	50070	415517

宮島(1992)は、『万葉集』『源氏物語』など、14の古典作品における単語の使用度数を記した語彙表である。宮島(1992)の調査によると、中古の代表的な作品である『源氏物語』は、他の13作品と比較して、延べ語数では、約208000語で、圧倒的に多い。次に多い『万葉集』は約50000語、その次に多い『枕草子』は約33000語であるから、その量の多さがわかる。異なり語数でも、当然『源氏物語』が最も多く、約11400語、次に多いのが『万

葉集』で約 6500 語、その次に多いのが『枕草子』で約 5200 語である。したがって、『源氏物語』を調査することによって、中古に用いられた和語名詞の音韻構造を述べることは、妥当であると考ええる。

調査資料は、宮島(1989)『フロッピー版古典対照語い表および使用法』を用いた。宮島(1989)では、『源氏物語』の調査には、池田(1953)『源氏物語大成 索引篇』を使用している。宮島(1989)の電子データを使用して、『源氏物語』に用いられている和語名詞を抜き出した。一般名詞を対象とするため、人名・地名とあるものは省いた。『古典対照語い表』では、枕詞を特別に扱わず、例えば、「芦がちる」は名詞「芦」と動詞「ちる」とに、それぞれ合併しているが、それでもなお、枕詞と記してある語があるので、それらは省いた。

また、「お・おん・おほん・み・ご(御)」などの接辞は助詞なみに扱い、省いてあるが、「おまし、おんぞ、みかど、みこ」などは例外としてつけている。

#### 4.1.2 「御」の読み方

榊原(1982)で、「御」の読み方についての詳細な調査がある。「御」は、仮名で「お、おん、おほむ、おほん、み、ご」などと表記されるので、このような仮名表記のものを平安時代の書写であると思われる写本から拾って、それを考察している。和語名詞と関係のある点について、以下に挙げる。

- ①「お」は、「おとも(供)」「おまし」「おまへ」「おもと」などの例が多い。「おとも」を除いてはマ行音のマとモとの音に「お」がついている。マ行音が語頭でない語についた「御」を「お」と表記することは殆どなかった。
- ②「おむ」「おん」に関しては極めて例が少ない。「御」を「おむ」「おん」と表記することは、平安時代においては特殊な場合であったと言える。
- ③「おほ」とする語は用例も少なく、一般的な表記ではない。
- ④「おほみ」の現れる資料は和歌関係に限定される。古今集の国歌大観番号四番の詞書の「二条のきさき」の「おほみうた」以外はすべて天皇に関した場合に限って使用されている。「おほみ」は漢字で表記されずに仮名で表記されることが多かったのではないか。
- ⑤「おほむ」と「おほん」については「おほむ」が古い形であるようである。両者の違いについては特に見られない。「さうさう(葬送)」「れう(料)」などの漢語についた例もある。

『古典対照語語い表』では、「おんぞ」「おんぞもの」「ことおんかたがた」の3語が「おん」と読む例としてあるが、②にあるように「おん」と読む例は極めて少ないことから、「おほんぞ」「おほんぞもの」「ことおほんかたがた」であるとする。なお、⑤より「おほむ」が古い形であることから、「ん」は「む」、すなわち／M／であるとした。

#### 4.1.3 拍数別に見た語数

『源氏物語』における和語名詞（代名詞を含む）を採録した結果、3570語得られた。拍ごとの語数は【表 4.1.1】に示す。

【表 4.1.1】『源氏物語』和語名詞の拍数別に見た語数（1語平均 3.96 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	61	475	832	1083	608	360	118	27	5	1	3570
百分率	1.7	13.3	23.3	30.3	17.0	10.1	3.3	0.8	0.1	0.0	100.0

1語は最大10拍である。10拍の語は、「椎本」の巻にある「一所一所」／hi to to ko ro hi to to ko ro／である。また、1語あたりの平均拍数は、3.96拍である。平均拍数は、『万葉集』よりも0.3拍長い。「暁」／Xa ka tu ki／、「古」／Xi ni si he／、「方々」／ka ta ga ta／、「設」／si tu ra hi／など4拍語が最も多く、30.3%、次いで、「遊び」／Xa so bi／、「入江」／Xi ri xje／、「例」／ta me si／、「都」／mi xja ko／など、3拍語の23.3%が多い。『万葉集』における和語名詞の調査【表 3.1.1】では、3拍語の次に多いのは、2拍語の16.9%であったが、『源氏物語』における和語名詞を対象とすると、2拍語よりも5拍語のほうが多く、17.0%である。

#### 4.1.4 音素分布

『源氏物語』における和語名詞の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 4.1-1〉、語末〈音素表 4.1-2〉、語全体〈音素表 4.1-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 4.1-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 4.1.2】【表 4.1.3】【表 4.1.4】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 4.1.2】『源氏物語』和語名詞の語頭における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
768	388	613	1	326	1	383	2	208	484	3	393	0
21.5	10.9	17.2	0.0	9.1	0.0	10.7	0.1	5.8	13.6	0.1	11.0	0.0

N	M	G	Q	合計
0	0	0	0	3570
0.0	0.0	0.0	0.0	100.

【表 4.1.3】『源氏物語』和語名詞の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
1254	750	664	107	795	0	3570
35.1	21.0	18.6	3.0	22.3	0.0	100.0

【表 4.1.4】『源氏物語』和語名詞の語頭多頻度拍

拍	/ka/	/Xa/	/ko/	/hi/	/Xo/	/Xi/	/Xu/	/ha/	/mi/	/ta/
度数	254	246	199	198	182	171	165	144	139	135
百分率	7.1	6.9	5.6	5.5	5.1	4.8	4.6	4.0	3.9	3.8

子音音素で、最も多く出現するのは、/X/（単独母音拍の子音部）21.5%であり、続いて/k/の17.2%、/h/の13.6%と続く。『万葉集』と大きく変わらない結果である。母音音素では、語頭において最も多く現れるのは/a/の35.1%で、その次は/o/の22.3%、/i/の21.0%と続く。/e/の出現率は3.0%とやはり低い。拍では、ア行は/Xe/以外は、すべて上位に入っている。『万葉集』では、/Xa/が9.5%で最も多く、次が/ka/の7.0%であった。和語名詞の語頭において/Xa//ka/はよく使用される拍である。

稿末別紙資料〈音素表 4.1-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 4.1.5】【表 4.1.6】【表 4.1.7】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 4.1.5】『源氏物語』和語名詞の語末における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
16	194	334	117	465	57	448	142	243	320	121	499	611
0.4	5.4	9.4	3.3	13.0	1.6	12.5	4.0	6.8	9.0	3.4	14.0	17.1

N	M	G	Q	合計
0	3	0	0	3570
0.0	0.1	0.0	0.0	100.0

【表 4.1.6】『源氏物語』和語名詞の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
926	1289	146	569	637	3	3570
25.9	36.1	4.1	15.9	17.8	0.1	100.0

【表 4.1.7】『源氏物語』和語名詞の語末多頻度拍

拍	/ri/	/sa/	/mi/	/ki/	/to/	/hi/	/si/	/ma/	/ro/	/ra/
度数	268	259	207	188	184	166	150	138	138	119
百分率	7.5	7.3	5.8	5.3	5.2	4.6	4.2	3.9	3.9	3.3

子音音素では、語頭において、最も多く出現した／X／はほとんど出現しない。母音が語中や語末に来るのを嫌ったことがまだ継続している。最も多いのは／r／の 17.1%，次いで／m／の 14.0%，／s／の 13.0%，／t／の 12.5%と続く。『万葉集』における名詞の調査結果とは、少し異なる。『万葉集』においては、／r／と／m／の順位が異なり、／h／が 3 番目であった。名詞の数としては、260 語、増えただけであるが、／r／の出現率が上がり、歯茎音／s／／t／が、両唇音であった／h／を上回っている。歯茎音の出現率が高くなっている。

母音音素では、語末においては、／u／の出現率が低い。最も多い母音は、／i／の 36.1%で、／a／の 25.9%がこれに次ぐ。『万葉集』と比較すると、／u／の出現率が低いのは同じだが、甲乙の区別をしないとしたら、『万葉集』では、32.1%であるから、4.0 ポイント、／i／の出現率が高くなっている。

拍では、語末においては、母音／i／の出現率が高いこともあり、上位 10 のうち、半数が／i／を伴う拍である。『万葉集』では、／ri／は、2 番目に多く出現し、5.9%であったから、1.6 ポイント増え、最も多く出現する拍となった。

／sa／が 7.3%も使用されていることについて、簡単に触れる。語末に「さ」を持つ語は、「朝」／Xa sa／、「笠」／ka sa／、「草」／ku sa／や、これらの語を後項に持つ複合語が考えられるが、『万葉集』から、それほど「さ」を語末に持つ名詞が増えるとは思われ

ない。語末に「さ」を持つ語のほとんどは、「あさましさ」「おぼつかなさ」のように、形容詞の語幹に接辞の「さ」がついて名詞となった語である。『万葉集』にも「楽しさ」「苦しさ」など、形容詞から派生した名詞もあるが、多くは、「草」「笠」を後項に持つ複合語である。出現位置別の多頻度拍の成分を調べることによって、拍の文法性<sup>9</sup>を見ることができると言えよう。『万葉集』では、際立って多くなかった拍が、『源氏物語』で多く使用され、その後、どのような歴史をたどるかを見ることによって、形容詞の派生名詞の特性の歴史の一端、言い換えるならば、名詞の語構成の歴史が見えるかもしれない。あるいは、それは、作品の特徴を捉えていることになるのかもしれない。本研究では、詳しく言及していないので、可能性の示唆にとどめる。

稿末別紙資料〈音素表 4.1-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 4.1.8】【表 4.1.9】【表 4.1.10】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。なお、半母音は計算する際、考慮に入れていない。

【表 4.1.8】『源氏物語』和語名詞の語全体における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
1059	918	1914	715	1446	226	1786	568	878	1327	423	1556	1266
7.5	6.5	13.5	5.1	10.2	1.6	12.6	4.0	6.2	9.4	3.0	11.0	9.0

N	M	G	Q	合計
4	50	0	0	14136
0.0	0.4	0.0	0.0	100.0

【表 4.1.9】『源氏物語』和語名詞の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
4561	3373	1930	1045	3173	54	14136
32.3	23.9	13.7	7.4	22.4	0.4	100.0

【表 4.1.10】『源氏物語』和語名詞の多頻度拍

拍	/ka/	/si/	/to/	/ta/	/sa/	/ma/	/ko/	/mi/	/hi/	/ki/
度数	656	584	581	518	499	496	495	480	466	407
百分率	4.6	4.1	4.1	3.7	3.5	3.5	3.5	3.4	3.3	2.9



語全体において、子音音素では、／k／の 13.5%が最も多く、次いで、／t／の 12.6%、／m／の 11.0%、／s／の 10.2%と続く。まだハ行転呼音を起こしていないと設定しているので、／h／はその次の 9.4%である。『万葉集』と比較すると、ほぼ同様の結果であるが、『万葉集』においては、／m／、／x／（単独半母音拍の子音部）の出現率が、やや高い。

母音音素で最も多いのは、／a／の 32.3%、次に／i／の 23.9%、／o／22.4%と続く。和語名詞が調査対象なので、特殊拍はほとんど出現しない。撥音で出現するのは、ほとんどが、マ行が音便化した／M／である。

／M／

「朝臣（あそん）」「髪挿（かんざし）」「上達部（かんだちめ）」「西東（にしひんがし）」

「御息所（みやすんどころ）」「女（をんな）」など。

／N／ 4 例のみ

「仮名（かんな）」「北の政所（まんどころ）」「政所（まんどころ）」「真名（まんな）」

#### 4.1.5 音素配列

『源氏物語』における和語名詞の母音音素の配列について調べた結果、737 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 4.1〉として、その一部を挙げる。【表 4.1.11】は、度数 184 以上の母音配列を示したものである。

【表 4.1.11】『源氏物語』和語名詞の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	i } }	1257	／i／が語末	13	o o }	335	語末が／o／-／o／で終わる
2	{ { a	1101	／a／が語頭	14	o o o	332	／o／-／o／-／o／の連続
3	a } }	874	／a／が語末	15	a a i	263	／a／-／a／-／i／の連続
4	{ { i	739	／i／が語頭	15	u i }	263	語末が／u／-／i／で終わる
5	{ { o	644	／o／が語頭	17	o i }	236	語末が／o／-／i／で終わる
6	o } }	603	／o／が語末	18	a a a	230	／a／-／a／-／a／の連続
7	{ { u	601	／u／が語頭	19	{ a i	229	語頭が／a／-／i／で始まる
8	e } }	509	／e／が語末	20	{ i o	223	語頭が／i／-／o／で始まる
9	a i }	469	語末が／a／-／i／で終わる	21	a e }	219	語末が／a／-／e／で終わる
10	{ a a	430	語頭が／a／-／a／で始まる	22	{ i a	197	語頭が／i／-／a／で始まる
11	{ o o	390	語頭が／o／-／o／で始まる	23	o o i	188	／o／-／o／-／i／の連続
12	a a }	368	語末が／a／-／a／で終わる	24	{ u a	184	語頭が／u／-／a／で始まる

【表 4.1.11】から母音の配列順序を見ると、／a／の2連続が語頭、語末に多く見られる。母音／a／-／i／，／o／-／o／の配列も語頭、語末に多い。3母音音素の連続として、／o／-／o／-／o／が最も多いのが特徴的である。その他、／a／-／a／-／i／，／a／-／a／-／a／，／o／-／o／-／i／も多く用いられる。

## 4.2 『源氏物語』の音韻構造

### 4.2.1 中古資料『源氏物語』

調査資料は、池田(1953)『源氏物語大成 校異篇』を用い、「桐壺」の巻の最初から1万拍分を採った。『源氏物語大成』を用いたのは、語の切り方の基準は『古典対照語い表』に従ったのだが、その調査資料として本資料が使用されているからである。『源氏物語大成』の底本については、凡例に以下のような説明がある。なお、旧字体は新字体に改める。

前記ノ諸本ノ異文ヲ標記スルタメニ、ソノ中カラ底本トスベキモノヲ選択スルニ当ツテハ、厳密ナ考証ヲ重ネタ結果、藤原定家ノ青表紙本ヲ以テ之ニ当テルコトトシ、花散里・柏木・早蕨ノ三帖ハ現存スル定家本ヲ用キタ。ソノ他ノ諸帖ニ於テハ、現存諸本中定家本ノ形態ヲ最も忠実ニ伝ヘテキルト考ヘラレル大島本ヲ用キタ。但シ、桐壺・夢浮橋ノ二帖ハ大島本が補写デアリ、初音ハ大島本が別本系統ノ本文デアリ、浮舟ハ大島本ガ之ヲ闕イデキルカラ、コレヲ諸帖ハ大島本に次グベキ地位ヲ有スル池田本ヲ用キタ。

本研究の調査対象は「桐壺」であるので、『源氏物語大成』が使用した底本は池田本である。

### 4.2.2 語の読み方

漢字や仮名で書かれたものが実際にどのように読まれていたかは、定かではない<sup>10</sup>。しかし、音素分布を調べるためには、読みを確定することが必要である。

金田一(1986)が、平安朝日本語の復元を試みているので、参考にしつつ、当時の読みを確定した。

以下、問題となる点、その対処策を挙げる。なお、底本の歴史的仮名遣いが誤っている場合は訂正した。

イ．撥音や促音の表記、または有無

「あなり（あるなりの撥音便）」、「案内（あない）」

ロ．清濁、歴史的仮名遣いのゆれ

ハ. ウ音便の扱い, 「思給」「給て」の読み方

ニ. 「御」の読み方

ホ. 「漢語」の読み方

イ. 撥音や促音はあることを前提とする。撥音便の無表記は, 復元し, 「あなり」は「あんなり」／Xa N na ri／とし, 「読んだる」は／xjo M da ru／とする。ただし, 底本に「読みたる」とある場合は, 音便形にせず, そのままにする。撥音／MN／の表記は定まっていないので, 表記に関係なく, その語源に従って, ／M N／を読み分ける。

助詞の「なむ」や助動詞「む・けむ・らむ」の「む」は／M／とした。「やんごとなし」, 「女(をんな)」の「ん」も／M／とした。

「御息所(みやすどころ)」「案内(あない)」は撥音の無表記か, そうではないのか, 判断できないので, 語によって変えることはせず, すべて「みやすん／m／どころ」「あん／n／ない」とした。

ロ. 清濁の問題は容易には決定しがたいので, 『源氏物語大成索引』の読みに従うこととする。柳井(1999)『源氏物語索引』も適宜, 参照した。比較すると, 『源氏物語大成索引』は, 比較的濁音で読んでいる語が多い。

(例)『源氏物語大成索引』「おほせごと」「ことごとし」「ひたぶるなり」

『源氏物語索引』 「おほせこと」「ことことし」「ひたふるなり」など。

また, 「いはけなし」「いわけなし」のように歴史的仮名遣いにゆれがあるものも『源氏物語大成索引』に従い「いわけなし」とした。但し, 「遺言(ゆゐごん)」のように現在では誤りとされている歴史的仮名遣いについては「ゆいごん」と訂正する。

ハ. ウ音便となった, 「思ふ給」などの「ふ」は「う」に変換して入力する。江口(1975)は『源氏物語大成』を資料として, 音便を下接語との関連から考察している。その調査によると, ウ音便形「思う」(複合動詞を含む)の用例 127 例はすべて「思ふ」と表記される。「給ふ」のウ音便形は「う」表記が 72 例, 「ふ」表記が 38 例である。

ウ音便形「思う」の下接語は「給ふ(四段)」「給ふ(下二段)」の二語のみで, 用例数はそれぞれ 4 例, 123 例である。ウ音便形「給う」については, 下接語が「て, けり」など比較的多くの語に続いて用いられるという傾向があると指摘している。

従って、「思ふ」が「給ふ」に続き、「思給」とある場合は、ウ音便を生じ、「おもうたまふ」となったとみなす。「給ふ」は特に際立った特徴がみられないので、一様に音便化せず、例えば「給て」の場合は、「たまひて」とする<sup>11</sup>。

二．榊原(1982)で、「御」の読み方についての詳細な調査がある。「御」は、仮名で「お、おん、おほむ、おほん、み、ご」などと表記されるので、このような仮名表記のものを平安時代の書写であると思われる写本から拾って、その使い分けを考察している。簡単にまとめると次のようになる。

- ①「お」は、「おとも（供）」「おまし」「おまへ」「おもと」などの例が多い。「おとも」を除いてはマ行音のマとモとの音に「お」がついている。マ行音が語頭でない語についた「御」を「お」と表記することは殆どなかった。
- ②「おむ」「おん」に関しては極めて例が少ない。「御」を「おむ」「おん」と表記することは、平安時代においては特殊な場合であったと言える。
- ③「おほ」とする語は用例も少なく、一般的な表記ではない。
- ④「おほみ」の現れる資料は和歌関係に限定される。古今集の国歌大観番号四番の詞書の「二条のきさき」の「おほみうた」以外はすべて天皇に関した場合に限って使用されている。「おほみ」は漢字で表記されずに仮名で表記されることが多かったのではないか。
- ⑤「おほむ」と「おほん」については「おほむ」が古い形であるようである。両者の違いについては特に見られない。「さうさう（葬送）」「れう（料）」などの漢語についた例もある。
- ⑥「み」のつく用例は⑤に次いで多く、漢語につく例も若干ある。宮中、殿舎、調度、仏教、神祇の語が多い。
- ⑦「おほむ」が地の文、「み」が会話文と明瞭に区別されている語がある。「おもひ」「かた」「かたち」「くるま」「けはひ」「こゝろばへ」「ざ」「すくせ」「しぞく」「つぼね」「て」「なか」「ものがたり」「よ」
- ⑧「おほむ」のついた場合は、地の文と会話文との両方に、「み」のついた場合は会話文に限って用いられる。「こゝろ」「こゝろざし」「こと」「さと」

本研究でも、榊原(1982)の調査結果に従い、「御」を「お」「み」「おほ<sup>ん</sup>／M／」「ご」に読み分ける。⑧の場合は、会話文の場合は「み」と読むこととした。

調査の結果、「みこ（御子）」、「みす（御簾）」、「みやす所<sup>12</sup>（御息所）」、「おまへ（御前）」は「御」は用いられず、仮名表記されていたので問題はなく、漢字「御」が用いられているのは 107 語であった。「お」と読んだのは「御とも」1 語、「み」は 9 語、「おほ<sup>ん</sup>／M／」84 語、「ご」13 語（すべて「御覧ず」）であった。

ホ. 漢語の読み方は i から v のように規定する。

- i /M N G/を区別する。
- ii 漢音、呉音を混せて読むことはせず、どちらかの読みに統一する。
- iii 連濁、連声はまだ生じていなかったとする。
- iv 慣用音、日本語化した音については、個別に定める<sup>13</sup>。
- v 歴史的仮名遣いでは、ア行の「エ」とヤ行の「エ」が区別されない。従って、『韻鏡』を用いて、区別をする。

漢和辞書は『全訳漢辞海』第二版を用い、漢音、呉音を調べる。歴史的仮名遣いは本辞書に従う。本辞書を用いる理由は、慣用音を少なくしていること、歴史的仮名遣いに重きを置いていることの2点である。

(例)

- i 「更衣（カ<sup>ン</sup>イ）」／ka G Xi／, 「楊貴妃（ヤ<sup>ン</sup>クキヒ）」／xja G ku xwi hi／,  
「大納言（ダイナゴ<sup>ン</sup>）」／da Xi na go N／

ii-iii

「上衆」／zi xja G <sup>s</sup>i xju／, 「三位（サ<sup>ン</sup>[m]キ）」／sa M <sup>x</sup>wi／

「後涼殿」／ko Xu ri xja G <sup>t</sup>e<sup>14</sup> N／

ただし、漢語サ変動詞は除く。「御覧ず」／go ra M <sup>z</sup>u／

- iv 「博士」／ha ka se／

- v 「液」／<sup>x</sup>je<sup>15</sup> ki／

#### 4.2.3 拍数別に見た語数、及び語種

『源氏物語』の「桐壺」の巻の最初から1万拍を採録する。語の途中で切ることはでき

ないので、語の終わりまで採録すると、語の数は 2109 語になった。合計 10006 拍である。拍数別に見ると、【表 4.2.1】のようになる。

【表 4.2.1】『源氏物語』「桐壺」の拍数別に見た語数（1 語平均 4.74 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	11 拍	12 拍	13 拍	16 拍	17 拍	合計
語数	25	305	413	400	300	215	182	110	75	42	26	8	6	1	1	2109
百分率	1.2	14.5	19.6	19.0	14.2	10.2	8.6	5.2	3.6	2.0	1.2	0.4	0.3	0.0	0.0	100.0

1 語は最大 17 拍である。「まゐらせたてまつり給はぬなりけり<sup>16</sup>」が最も長い語であった。1 語平均は、4.74 拍である。「桐壺」の文を語で切ると、「匂」／ni ho hi／、「人の」／hi to no／、「並べ」／na ra be／、「嘆く」／na ge ku／などの 3 拍語と、「いづれの」／Xi du re no／、「我はと」／xwa re ha to／、「いよいよ」／Xi xjo Xi xjo／、「おはする」／Xo ha su ru／、「見えたり」／mi xje ta ri／などの 4 拍語が、それぞれ 19.6%、19.0%と多く、合わせて 38.5%である。「いと」／Xi to／、「親」／Xo xja／、「音を」／ne xwo／、などの 2 拍の語や、「いつしかと」／Xi tu si ka to／、「知りたまふ」／si ri ta ma hu／などの 5 拍の語、「心づかひ」／ko ko ro du ka hi／、「車よりも」／ku ru ma xjo ri mo／、「思し召すに」／Xo bo si me su ni／、「思しいづる」／Xo bo si Xi du ru／などの 6 拍語、「里がちなるを」／sa to ga ti na ru xwo／、「聞こえ給はず」／ki ko xje ta ma ha zu／などの 7 拍の語も多く見られる。全体的に分散している。

なお、『源氏物語』では、『万葉集』のようにすべてが和語ではない。本研究では、テキストとして、『源氏物語』を調査対象としているため、見出し語としての語ではなく、出現形のまま、調査している。そこで、テキスト全体の語種の割合ではなく、付属語を除いた自立語の語種を調査して、おおよその語種の割合を示す。

宮島（1970）で、「ことなり語数では、助詞・助動詞をかぞえても、かぞえなくても、大差はないが、延べ語数では、ほとんど倍になってしまうのだから大変である」と述べている。助詞・助動詞は、ほぼ和語であることを考えると、ここに示す数値よりも、実際は、漢語の占める比率はかなり低いと言える。

『源氏物語』では、2109 語のうち、漢語が 97 語、漢語と和語の混種語が 25 語で、全体の 5.8%である。

#### 4.2.4 音素分布

『源氏物語』から得た 10006 拍, 2109 語の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 4.2-1〉, 語末〈音素表 4.2-2〉, 語全体〈音素表 4.2-3〉の音素表をそれぞれ作成し, 表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 4.2-1〉は, 語頭における音素分布である。子音音素, 母音音素, 拍の出現率を【表 4.2.2】【表 4.2.3】【表 4.2.4】にまとめる。上段は度数, 下段は子音総数, 母音総数, 拍総数を分母とする百分率である。

【表 4.2.2】『源氏物語』「桐壺」の語頭における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
637	172	344	23	185	4	166	3	180	168	4	219	4
30.2	8.2	16.3	1.1	8.8	0.2	7.9	0.1	8.5	8.0	0.2	10.4	0.2

N	M	G	Q	合計
0	0	0	0	2109
0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

【表 4.2.3】『源氏物語』「桐壺」の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
705	432	242	81	649	0	2109
33.4	20.5	11.5	3.8	30.8	0.0	100.0

【表 4.2.4】『源氏物語』「桐壺」の語頭多頻度拍

拍	/Xo/	/Xi/	/ka/	/na/	/ko/	/Xa/	/mi/	/hi/	/Xu/	/sa/
度数	278	152	144	132	131	115	90	74	73	66
百分率	13.2	7.2	6.8	6.3	6.2	5.5	4.3	3.5	3.5	3.1

子音音素では, /X/ (単独母音拍の子音部) で始まる語が, 最も多く, 全体の 3 割を占める。『万葉集』の 22.7% と比べて, 7.5 ポイントも多い。これは, 接頭辞「御」がついた「おまへ」/Xo ma he/ が 2 例, 「御時」「御もてなし」「御おもひ」など/Xo ho M/ がついた語が 84 例あることが関係しているであろう。次いで, /k/ の 16.3%, /m/ の 10.4% と続く。母音音素では, /a/ が最も多く 33.4%, 次いで/o/ の 30.8% である。/e/ の

出現率は低い。拍では、／Xo／の出現率が特に高い。『源氏物語』の特徴であると言える。

稿末別紙資料〈音素表 4.2-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 4.2.5】【表 4.2.6】【表 4.2.7】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。なお、半母音は計算する際、考慮に入っていない。

【表 4.2.5】『源氏物語』「桐壺」の語末における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
72	131	183	13	82	69	339	77	447	182	61	186	220
3.4	6.2	8.7	0.6	3.9	3.3	16.1	3.7	21.2	8.6	2.9	8.8	10.4

N	M	G	Q	合計
6	33	8	0	2109
0.3	1.6	0.4	0.0	100.0

【表 4.2.6】『源氏物語』「桐壺」の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
226	469	392	218	757	47	2109
10.7	22.2	18.6	10.3	35.9	2.2	100.0

【表 4.2.7】『源氏物語』「桐壺」の語末多頻度拍

拍	／no／	／ni／	／to／	／mo／	／te／	／ru／	／ki／	／xwo／	／ha／	／ri／
度数	237	186	160	144	138	105	103	98	87	71
百分率	11.2	8.8	7.6	6.8	6.5	5.0	4.9	4.6	4.1	3.4

語頭において、最も多く出現した／X／は 3.4%の出現率で低い。最も多いのは／n／の 21.2%、次いで／t／の 16.1%、／r／の 10.4%と続く。母音音素では、語末において、最も多く出現する母音は、／o／の 35.9%、次いで／i／の 22.2%である。拍では、／no／／ni／／to／／te／や、／ru／／ri／などが多い。これは、助詞や、動詞、助動詞「る」「らる」「り」「たり」「けり」「なり」「めり」の活用語尾の影響であろう。

稿末別紙資料〈音素表 4.2-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 4.2.8】【表 4.2.9】【表 4.2.10】にまとめる。上段は度数、下段は



子音総数，母音総数，拍総数を分母とする百分率である。なお，半母音は計算する際，考慮に入れていない。

【表 4.2.8】『源氏物語』「桐壺」の語全体における子音の音素分布

X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	m	r
853	560	1237	241	886	157	1331	265	1112	891	290	981	932
8.5	5.6	12.4	2.4	8.9	1.6	13.3	2.6	11.1	8.9	2.9	9.8	9.3

N	M	G	Q	合計
39	177	54	0	10006
0.4	1.8	0.5	0.0	100.0

【表 4.2.9】『源氏物語』「桐壺」の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
2802	2190	1256	1024	2464	270	10006
28.0	21.9	12.6	10.2	24.6	2.7	100.0

【表 4.2.10】『源氏物語』「桐壺」の多頻度拍

拍	/ta/	/si/	/ma/	/to/	/ka/	/na/	/no/	/ni/	/ri/	/ko/
度数	441	429	414	395	386	369	350	322	309	306
百分率	4.4	4.3	4.1	3.9	3.9	3.7	3.5	3.2	3.1	3.1

語全体において，子音音素では，/t/の 13.3%が最も多く，次いで，/k/の 12.4%，/n/の 11.1%と続く。『源氏物語』においては，/t/の出現率が/k/よりも多いのが特徴である。母音音素で最も多いのは，/a/の 28.0%，次に/o/の 24.6%である。

4.2.3 で述べたように，『源氏物語』において，漢語の占める割合は少なく，本研究の資料の範囲でも 5.8%を下回る。したがって，語全体を調査しても，特殊拍は 2.7%しか出現していない。その中でも，最も多く用いられるのは，/M/であった。

#### 4.2.5 音素配列

『源氏物語』「桐壺」1万拍の母音音素の配列について調べた結果，725の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 4.2〉として，そのすべてを挙げる。【表 4.2.11】は，度数 139 以上の母音配列を示したものである。

【表 4.2.11】から母音の配列順序を見ると、／o／の2連続が語頭、語末に多くみられる。／a／-／i／，／i／-／o／の配列も語頭、語末に多い。3母音音素の連続の組み合わせが多いのが特徴である。／a／-／a／-／i／，／a／-／e／-／a／，／o／-／o／-／i／，／o／-／o／-／o／，／a／-／a／-／a／，／a／-／a／-／u／，／i／-／a／-／a／も多く用いられる。

【表 4.2.11】『源氏物語』『桐壺』の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	o } }	652	／o／が語末	13	a u }	202	語末が／a／-／u／で終わる
2	{ { a	628	／a／が語頭	14	a a i	198	／a／-／a／-／i／の連続
3	{ { o	582	／o／が語頭	15	{ i o	187	語頭が／i／-／o／で始まる
4	i } }	468	／i／が語末	16	o o }	179	語末が／o／-／o／で終わる
5	{ { i	429	／i／が語頭	17	{ a i	170	語頭が／a／-／i／で始まる
6	{ o o	414	語頭が／o／-／o／で始まる	18	a e a	167	／a／-／e／-／a／の連続
7	u } }	385	／u／が語末	19	o o i	154	／o／-／o／-／i／の連続
8	{ { u	220	／u／が語頭	20	a i }	152	語末が／a／-／i／で終わる
9	a } }	217	／a／が語末	21	o o o	151	／o／-／o／-／o／の連続
10	{ a a	210	語頭が／a／-／a／で始まる	22	a a a	143	／a／-／a／-／a／の連続
11	i o }	209	語末が／i／-／o／で終わる	23	a a u	139	／a／-／a／-／u／の連続
11	e } }	209	／e／が語末	23	i a a	139	／i／-／a／-／a／の連続

### 4.3 中古日本語の音韻構造

以上、中古日本語の音韻構造について、『源氏物語』を資料として述べてきた。『源氏物語』における和語名詞を拍数別に見ると、4拍の語が30.3%で最も多く、次いで3拍の語が23.3%で、二つを合わせて全体の53.6%を占める。語の平均拍数は、3.96拍である。

また、『源氏物語』の「桐壺」の巻を冒頭から10000拍を採り、語に切ると、2109語得られ、平均拍数は4.74拍であった。拍数別にみると、3拍の語が19.6%で最も多いが、4拍語も19.0%で、その差はあまりなく、二つを合わせて38.5%である。2拍や5拍から7拍の語も多く見られる。

和語名詞における音素分布を出現位置別に見ると、語頭では、／X／が21.5%で最も多く出現し、次いで／k／の17.2%である。母音音素は、／a／が35.1%で最も多く、次いで、／o／の22.3%，／i／の21.0%である。

語末では、子音音素は／r／の17.1%が最も多く、／m／の14.0%，／s／の13.0%，／t／の12.5%と続く。母音音素は、最も多かったのは／i／の36.1%であり、次が／a／の

25.9%である。拍では、／ri／／sa／が、それぞれ7.5%、7.3%の出現率である。

語全体では、子音音素は、／k／の13.5%が最も多く、次いで／t／の12.6%、／m／の11.0%、／s／の10.2%と続く。母音音素は／a／が32.3%で最も多い。母音配列は、／a／の2連続が語頭、語末に多く見られる。／a／-／i／、／o／-／o／の配列も語頭、語末に多い。3母音音素の連続として、／o／-／o／-／o／が最も多いのが特徴的である。その他、／a／-／a／-／i／、／a／-／a／-／a／、／o／-／o／-／i／も多く用いられる。多頻度拍は、／ka／／si／／to／／ta／／sa／／ma／／ko／／mi／／hi／／ki／である。

テキスト類の調査としての、『源氏物語』の「桐壺」の巻の調査では、語頭では、／X／が30.2%で最も多く出現する。次いで／k／の16.3%、／m／の10.4%と続く。母音音素は、／a／が33.4%で最も多く、次は、／o／の30.8%である。

語末では、子音音素は／n／が21.2%で最も多く、／t／の16.1%、／r／の10.4%と続く。母音音素で、最も多かったのは／o／の35.9%であり、次が／i／の22.2%である。拍では、／no／／ni／／to／／te／や、／ru／／ri／などが多い。これは、助詞や、動詞、助動詞「る」「らる」「り」「たり」「けり」「なり」「めり」の活用語尾の影響であろう。

語全体では、子音音素は、／t／の13.3%が最も多く、次いで／k／の12.4%、／n／の11.1%と続く。母音音素は／a／が28.0%で最も多く、次が／o／の24.6%である。母音配列は、／o／の2連続が語頭、語末に多くみられる。／a／-／i／、／i／-／o／の配列も語頭、語末に多い。3母音音素の連続の組み合わせが多いのが、『源氏物語』の特徴である。／a／-／a／-／i／、／a／-／e／-／a／、／o／-／o／-／i／、／o／-／o／-／o／、／a／-／a／-／a／、／a／-／a／-／u／、／i／-／a／-／a／が多く用いられる。多頻度拍は、／ta／／si／／ma／／to／／ka／／na／／no／／ni／／ri／／ko／である。

以下、『万葉集』との比較である。

素材レベルの調査では、『源氏物語』における和語名詞と『万葉集』における和語名詞には、全体的に見て、顕著な差は見られない。あえて、異なる点を挙げるとすれば、語末における子音音素の分布である。『万葉集』においては、／m／が18.1%で最も多く、次いで／r／の13.8%、／h／の11.8%と続く。『源氏物語』と比較すると、／r／と／m／の順位が異なり、／h／の出現率も9.0%となり、子音全体の6番目となる。名詞の数としては、260語増えただけであるが、／r／の出現率が、『万葉』の13.8%から17.1%と3.3ポイント上がり、歯茎音／s／／t／が、それぞれ13.0%、12.5%で、両唇音であった／h／の9.0%を上回っている。両唇音の出現率が低くなり、歯茎音の出現率が高くなっている。母

音音素では、最も多い母音は、／i／の 36.1%で、／a／の 25.9%がこれに次ぐ。甲乙の区別をしなければ、『万葉集』では、／i／は 32.1%であるから、4.0 ポイント、／i／の出現率が高くなっている。拍は、『源氏物語』では、／ri／が最も多く出現し、7.5%である。『万葉集』では、／ri／は、2 番目に多く出現し、5.9%であったから、1.6 ポイント増えている。

運用レベルの調査では、『万葉集』の和歌の調査では、1 語平均が、3.71 拍であった。『源氏物語』の 1 語平均は、4.74 拍であるから、約 1 拍長い。音素分布・音素配列については、第 7 章で述べることにするが、あえて、異なる点を挙げれば、語頭において、子音音素は、／X／の出現率、甲乙の別を考えなければ、母音音素／o／の出現率が、『万葉集』に比べ、『源氏物語』のほうが高くなっていることが特徴である。『万葉集』では、／X／22.7%、『源氏物語』では、／X／30.2%で、／X／は、7.5 ポイント、『万葉集』では、／o／21.5%、『源氏物語』では／o／30.8%で、／o／は 9.4 ポイント、ともに『源氏物語』のほうが、多くなっている。これは、接頭辞「御／Xo／」の影響が考えられる。

## 第5章 中世日本語の音韻構造

中世日本語は、どのような音素分布、音素配列をしているのであろうか。本章は、『日葡辞書』を調査対象として、『日葡辞書』に用いられている和語名詞、漢語の音素分布、及び、音素配列を調べ、その音韻的特徴について述べる。また、和語名詞、漢語だけではなく、『天草版平家物語』を調査対象として、同様の調査を行い、中世日本語の音韻構造について概観する。

### 5.1 調査資料『邦訳日葡辞書』

『日葡辞書』は、日本イエズス会によって1603年に本篇、翌年に補遺の部が加えられた、日本語とポルトガル語の対訳辞書である。当時の日本語を豊富に収め、中世国語資料として非常に価値の高い文献である。

長崎版日葡辞書の伝本として現存しているもので、複製本が出版されているのは次の3部である。オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本の複製本である『日葡辞書』（1960 岩波書店）、『日葡辞書』（1973 勉誠社）、パリ国立図書館蔵本の複製本である『日葡辞書 パリ本』（1976 勉誠社）、エヴォラ公立図書館蔵本の複製本である『エヴォラ本日葡辞書』（1998 清文堂出版）。本研究で使用した『日葡辞書』は、ボードレイ文庫蔵本を底本とする『邦訳日葡辞書』（1980）である。

『日葡辞書』が編纂された目的は、序言によると、「この国のキリスト教を育成し伸張させようと新たに渡来するパアデレやイルマンたちに、日本語学習の手引きともなり助けともなるものを供するため」である。この大事業は、先行のラテン語の辞書（1595年天草版羅葡日対訳辞書）などを参考にしたり、「日本語をよく知っている者のうち何人かが、日本語に精通している数人の日本人の援助をも得て、この辞書を検討増補」したりして完成に至ったのである。「日本語の語彙が非常に豊富であつて、その用法が多様である」ために、「望みどおりの完全なものにはなっていない」と記してはあるものの、「単に各語の一般通用の意味や用法だけではなく、特殊な意味や比喩的な用法、さらには話し言葉にも、また文書の言葉にも存する多種多様な、また典雅な言い方に至るまで説明されている」ので、「日本人自身のためにも大いに役立つことであろう」と明記してある。つまり、単なる対訳辞書にとどまらず、日本人が国語辞書としても使えるということである。

『日葡辞書』は、キリスト教を広める宣教師たちの日本語の手引きを主としているため、口語に重点がおかれ、またそのため、九州地方の方言も含まれてはいるが、語数も豊富で

あり、調査する価値が十分にあると考える。

しかし、辞書の編集方針や、語源意識、文法解釈などが現代日本の学問水準・基準と異なるため、種々の問題が生じる。そこで、5.2 で、問題点を挙げ、通時的に比較することができるよう基準を整える。現代語の調査対象は『新潮現代国語辞典』（以下、『新潮』ともする）であるので、判断の基準は、新潮に従う。

## 5.2 研究方法

### 5.2.1 見出し語の立て方

『邦訳日葡辞書』のまえがきに次のように書いてある。

先ず原本の記述を尊重する立場を採った。その立場から訳業を進めていくと、往々にして、原文に示されている日本語の語形をはじめ意義や用法に関して、日本側の資料によって裏づけしにくい場合がある。また、一般に知られているところとは異なった、特殊な説明がなされたものについては、その正否を判定することが容易でない。特定の条件下において実在したものか単なる誤解や不正確な知識に基づく欠陥かは、簡単に断定できない例が少なくない。説明中の記号や用語にも、印刷上の誤植とそうでないものとを区別しにくいことが多い。これらに対しては、明確な誤謬でないかぎり軽々に否定することを避けるようにした。

『邦訳日葡辞書』では、見出し語は、訂正せずに原本の記述に忠実にあげ、語義説明のあとで、明確な誤りに対しては、「・・・の誤り」「・・・の誤植」と記し、そうでない場合には、「・・・の誤りか」「・・・とあるべきものか」のように説明している。

本研究では、原本の記述を尊重する立場を採りつつ、当時の規範的な語形を見出し語として挙げるべく、『邦訳日葡辞書』の記述を参考にして誤りと思われるものは訂正し、正しい語形にしてデータにした。

ただし、室町時代後期において、慣用的に用いられていた、あるいは、どちらか決めかねる、次のような場合は、改めることはしなかった。表記は『邦訳日葡辞書』の仮名表記（片仮名を平仮名にした）、漢字表記による。

1. 悪獣，猛獣・・・「あくじゅ」，「まうじゅ」で短音のままにし，長音にはしなかった。（cf. 毒獣・・・どくじゅう）
2. 金銀銅，五盛陰苦・・・「こんがうだう」，「ごじゃうわうく」とし，「こんごんだう」「ごじゃうをんく」とはしなかった。（cf. 茅屋・・・補遺の「ぼんをく」）

は「ばうをく」に訂正)

3. 厚・・・「こう」「かう」の開合両形があるが、開合の違いに意味上の違いは対応していない<sup>17</sup>ので、原本のままにした。
4. 「ちゅうやく」・・・語源については、十薬「じゅうやく」と重薬「ちゅうやく」のどちらかわからないので、原本のままにした。

また、次のような語は個別に判断した。

5. 炙豆腐・・・「あぶりどうふ」とあったが、他の「豆腐」の例はすべて、開音なので、「あぶりだうふ」とした。
6. 文豆・・・「ぶんだう」とあったが、他の「豆」は漢音「とう」であるので、「ぶんどう」とした。
7. 寮・・・「りやう」「りょう」両形出てくるが、室町後期では、中国の南方音が禅僧によって伝えられた結果、開音が多く用いられていた<sup>18</sup>。したがって、衆寮は「しゅりょう」とあったが、「しゅりやう」とした。
8. 「ちゃうかう」・・・語義説明からすれば、定香「ちゃうかう」ではなく、常香「じゃうかう」とすべきなので、「じゃうかう」とした。

### 5.2.2 品詞の認定

副詞や助詞、助動詞の定義がポルトガル語の定義と異なるため、注意を払わなければならない。特に、形容詞や形容動詞の連用形を副詞としている例が目立つ。『日葡辞書』で問題となる品詞はすべて日本文法に合わせる。判断の根拠は、『新潮国語辞典古語現代語』『新潮現代国語辞典』に依る。この辞書が根拠にしている日本文法は、現在、学校教育で教科用に用いているもので、いわゆる橋本文法に沿うものである。

問題となる語の例に次のようなものがある。『日葡辞書』で、副詞や形容動詞、連語として挙げられているが、名詞として数えなければならない和語名詞があり、一部をここに挙げる。すべての語は稿末に資料〈付表A〉として挙げる。なお、名詞と形容動詞二つの用法がある場合は、名詞とする。

9. 裸な、鼻付きに〈副詞〉、物越しに、似合いの、†毛切りの、沿ひ退きの、たが（誰が）、たつに、または、たて（縦）に、〈副詞〉月替りに、生まれ落ちに、痺れが切るる、やけどに遭ふ

### 5.2.3 品詞の違い

5.2.2 と関連することであるが、例えば漢語の愚鈍という語を例にとると、

愚鈍

愚鈍な

愚鈍に

愚鈍さ

と挙げられている。これは、名詞、形容動詞連体形、一字下げて、形容動詞連用形、派生による形容動詞の名詞であるが、例えば、名詞がなかったり、あるいは「～な（形容動詞連体形）」の横に、1.（または）として「～に（形容動詞連用形）」が挙げられていたり、あるいは何かが欠けたり、「～に」の横に副詞と書いてあったりなかったり、あるいはすべて一項目ずつ挙げられていたりすると実に様々なバリエーションがある<sup>19</sup>。『新潮』では、愚鈍（名・形動）と一語掲載されているだけである。よって、『日葡辞書』でもこのような場合、見出し語としては一語として扱う。

形容詞の場合も同様である。派生による名詞、連用形を挙げているのが典型的な例であるが、これも先述のように、3項目あったりなかったり、連用形の横に副詞と書いてあったりなかったり、3語をすべて一項目ずつ挙げてあったりと様々なバリエーションがある。現代語でも、形容詞の連用形を副詞とする場合（「早く」）があるし、「さ」や「み」がついた名詞形（「明るさ」「明るみ」）を載せている場合もある。名詞を一字下げて載せている場合と、一つの見出し項目として載せている場合の区別はないと思われる。よって、形容詞の派生による名詞は一字下げていても、一項目として扱う。

漢語の音韻的特徴を見る場合、品詞による差はあまり見られないので、漢語は一括して調査する<sup>20</sup>。したがって、形容動詞や副詞、連語としてしかない見出し語は、後項要素や付属語を省いて、語形を整えて調査対象とする。語例は稿末に資料〈付表B〉として、挙げる。

### 5.2.4 同語別語判断

日本語でも辞書によって、見出し語の立て方はやや異なるが、『日葡辞書』では日本語の感覚とは異なる意味のはばをもった語がいくつか存在する。一つの単語と認めるかどうか『新潮』に依ることとする。

異なる意味のはばを持った語の例に、「くわうや」がある。それには、「広き野」という



意味と「荒野」という意味があるが、『日葡辞書』では同語として扱っている。このような例は「広野」と「荒野」の2語として数える。

あるいは、同語を別語として挙げている例もいくつかある。例えば「をさえ」が別語として2語あるが、それぞれの説明は「例、(押さへ勢) 敵を押しとどめたり、敵を山路とか隘路とかへ通さないようにするために・・以下略」「押しとどめること、また妨害すること」である。このような語は同語と判断し、1語として数える。

### 5.2.5 補遺による重複

補遺で\*がついているものは定義では本篇に含まれているものと重複している語のほずであるが、そうでないものも含まれる。また、補遺には、本篇の語義を訂正補完したものも少なくなく、見出し語としては重複している。

### 5.2.6 表記法による重複

例えば、開音「きやう」には qiō, qeō, 合音「きよう」には, qeō, qiō の表記法がある。『日葡辞書』の序言に次のように記されている。

Fiōrō (兵糧), Meōji (名字) などのように長音調〔開長音〕をもっている語では、われわれはこれらの第一音節を E 字または I 字で〔Feōrō, Meōji, または, Fiōrō, Miōji のように〕書くことにする。また, Fiō (豹), Qiō (興) などのように短音調〔合長音〕を持っている語でも、同様に〔I 字または E 字で Fiō, Qiō, または, Feō, Qeō のように書くことに〕する。それは次のような理由にもとづく。すなわち仮名(Cana)文字では一方〔長音調〕を Fiau (ひやう) と書き、他方〔短音調〕を Feu (へう) と書くけれども、実際の発音においては、I 字〔Fiau〕よりも E 字〔Feu〕の方に近いというわけではない。(中略) しかし、仮名(Cana)による表記法に従って E 字で書くことも一般に行われているので、われわれは本書で、これらの語をば区別なく E 字でも I 字でも表記している。

つまり、I 字, E 字に関わらず、これらは同一の発音と考えてよいとすると、同一語が別の箇所では載録されていることになる。これらも一語として扱わなければならない。

また、「イ」は本来、i を用いるが、y でも表した語もある。「蝟皮 (いひ)」「ごいん (五音)」、ユ を yu ではなく、iyu でも表した語、「めゆい (目結い)」などもある。

そのほか、「Fiai.」という見出し語に「Fiyai.」を見よとある。ポルトガル語の二重母

音 ia の渉り音がヤに近く発音されるため、便宜上載せてあるだけで、「Fiai.」を「ひやい（冷い）」と読む語ではない。したがって、これも重複の語例である。そのほか、「Age.」の例もある。これは、ポルトガル語では、j と g が通用するところから、出た語で、これは、「あぜ（堰）」である。

ここでは、音は同じであるにもかかわらず、表記が異なるため、重複している語は、片方を削除した。

### 5.2.7 略号 l. により並べられた見出し語

略号 l.（または）は、日本語やポルトガル語の文中に頻繁に現れるが、見出し語に他の日本語を並べ掲げる場合にも多く用いられる。例を見てみると互いに関係のある語をもつものを並べたようであるが、その趣が様々である。森田(1993)が、まとめているので以下に記す。

① 同じ語の同音異表記形

Qeô. l, qiô. / Soreacu. l, soriacu.

② 同語の清濁二形

Anchũ. l, angiũ. / Vbuguinu. l, vbuqinu.

③ 漢語の漢音形と呉音形

Niguen. l, nigon. / Sanga. l, Xenga.

④ 語の原形と省略（短縮）形

Masa. l, masame. / Namexi. l, Namexigaua.

⑤ 漢語の入声形と開音節化形

Qetyen. l, qechien. / Matçudai. l, Matdai.

⑥ 語の原形と転化形

Camayete. l, Camaite. / Ibitçu. l, iybitçu.

⑦ 語幹と活用形

Cannô. l, cãnôna. / Nauozari. l, nauozarini.

⑧ 語末に小異ある二形

Carisomeno. l, Carisomena. / Farucana. l, farucano.

例外 類義の別語を並べたもの

Qeôten. l, sôten. / Voricami. l, fineri.

これらの見出し語の両形は、本篇補遺中に挙げられているものが多いが、若干の見落としもある。まずは、これらすべて見出し語として存在すると考えた上で、2.3, 2.4, 2.6で述べたものは省き、見出し語としたい。

上記の例で言うと、①⑦⑧は同語で、それら以外は別語として扱う。

## 5.2.8 『邦訳日葡辞書』における仮見出し語の問題

『邦訳日葡辞書』では、辞書の不備、表記による引きにくさを解消するために、仮見出し語を載せているが、この仮見出し語には種々のものがある。以下、仮見出し語を分析し、見出し語として数えるかどうか示したい。

まず『邦訳日葡辞書』の凡例を引用する。

- d. 語頭に：印をつけたものは、新たに訳者の立てた仮見出し語であり、次のような場合に属する。
  - i. 原本の見出し語以外のところに現れた日本語で、見出し語としては立てられていないもの
  - ii. 原本の見出し語のローマ字綴りが異例であったり、誤ったりしているものは、検索に便するために正しい形を仮見出し語に立てる
  - iii. オ段の拗長音節を、開音は～iō, 合音は～eo と綴るという通則に従わないものは、通則による形を見出し語に立てる

ii と iii は既に述べた。これらは省くものとする。問題となるのは、i の場合である。しかし、仮見出し語はさらに次の3つに分けられる。

i - 1 原文の見出し語以外のところに現れた日本語で、見出し語としては立てられていないもの

例：Acane momen. アカネモメン（茜木綿）

Acane. アカネ（茜）¶ Acane momen. （茜木綿）

: Aqe fanare, ruru. アケハナレ, ルル（明け離れ, るる）

Aqe, uru, eta. アケ, クル, ケタ（明け, くる, けた）¶ Yoga aqe fanaruru.  
（夜が明け離るる）

i - 2 見出し語の後項成分で、見出し語としては立てられていないもの

例 : Cucumi, u. ククミ, ム (含み, む)

Fumicucumi, u, ùda. フミククミ, ム, ャダ (踏み含み, む, うだ)

Nuicucumi, mu, unda. ヌイククミ, ム, ンダ (縫い含み, む, んだ)

i - 3 略号 1. で並列された見出し語で、本篇補遺中に収録されていないもの

例 : Icqí. イッキ (一忌)

† Ixxúqi. 1, Icqí. イッシュウキ. または, イッキ (一周忌. または, 一忌)

i - 3 については、2.7 で述べた通りデータとして採録する。i - 1, i - 2 は、省略することとする。なぜならば、定義で用いられている語はすべて定義されなければならないという考えは現代のものであり、『日葡辞書』編纂期にはそのような考えはなかったであろうし、また、『日葡辞書』の定義に出てくる語を、『邦訳日葡辞書』がすべて仮見出しとして挙げているかどうかを確認することは難しいからである。

「定義にあるすべての語はすべて説明されなければならない」とは、ズグスタのいう定義の原則の一つである。しかし、この問題は大部分の辞書で時折起こっていることで、本研究の音素分布表を作成する目的からすれば、それほど重要でないと考える。したがって、本研究でも始めから見出し語になかった語はとらないこととする。

#### 5.2.9 「連語」について

最後に、「連語」について述べたい。本研究では、連語を「いくつかの単語からなるもの<sup>21)</sup>」とする。「連語」かどうかの区別は難しく、立項するか、さらに品詞は何にするか、「連語」として扱うのか、名詞等として扱うのか、辞書によってもさまざまである。実際、『新潮』においても、「連語」として立ててある見出し項目は、例えば「あ」の項を見ても「あいいれない」「あいまって」「あえず (敢えず)」「あきたらぬ」「あきたりない」「あしからず」「あずかりしらない」「あたらずさわらず」「あたらない」「あったもんだ」「あってみれば」「あてられる」「あなかしこ」「あらばこそ」「あらんかぎり」「ありし (有りし)」「あります」「ありません」「ありもしない」「ありゃ」「ありやなしや」「あるもんか」「あれから」など、さまざまである。矢澤 (1995) は「連語は、事実上、登録語彙のごみ溜めになってしまっている」と述べている。

連語は構成上の単位であって、品詞として成立するものではない。また、その位置づけも難しく、宮地(1985)では、

▽水のあわ ▽袋のねずみ ▽もとのもくあみ ▽つるの一声 ▽あとの祭り ▽  
虫の息 ▽草葉のかげ ▽すずめの涙 ▽あげ句のはて など、ノ助詞による二語  
の連語句は、慣用句とも複合語とも連語ともいえるだろう。

としている。『新潮』においても、「水のあわ」と「虫の息」は一項目として立ててあるが、それ以外は、追い込み項目で説明されている。

また、石井(2005)では次のように述べている。

単語と連語との間には、構文活動の場で、話し手にとって「できあい」のものであるか、話し手自らが「つくりだす」ものであるか、という原則的な違いがある。複合語も単語であるから、話し手にとってできあいのものであることが大原則である。ただし、複合語は、「名づけ」という場においては、話し手（つくり手）自らが新しくつくりだせるものである。われわれのまわりにあるすべての複合語は、かつて、そのようにして誰かが新しくつくったものであるはずである。

辞書に載せてあるということは、少なくとも「できあい」のものとして認識されていたと見てもよいと思われる。そこで、「親しい仲」「近いころ」「まめなところ」「安からず」「えさがたい」など、異なる品詞が組み合わさってできた、明らかに句と思われるものは、連語とし、「ノ助詞による二語の連語句」などは、基本的には単語（複合語）として扱う。

また、次のような条件にある上位成分を共通に持つ語が多くある場合、見出し語としては数えるが、音素分布表を作成する場合には除くこととする。『新潮』の調査と条件を同じにするためである。

(1) 和語は、三拍以上の場合。

ころころ【心】…あたり、…あて、…ある、…いき、…いれ

(2) 漢語は、漢字二字以上の熟語である場合。

あんぜん【安全】…かみそり、…かんり

(3) 助詞の「の」をもつ形が複合語の上位に立ち、その形の複合語が多い場合。

いちの【一の】…いと、…ぜん、…とり

実際、(3)の例で、連語としたのは、「時の～」「年の～」「月の～」「山の～」である。

### 5.3 『日葡辞書』における和語名詞の音韻構造

#### 5.3.1 拍数別に見た語数

5.2 の基準に基づいて、語を採録した結果、9,642 語の和語名詞が得られた。和語名詞には、代名詞を含んでいる。拍ごとの語数は【表 5.3.1a】に示す。【表 5.3.1b】は 5.2.9 で述べた、追込み項目になる語を省いて得た結果である。

【表 5.3.1a】『日葡辞書』和語名詞の拍数別に見た語数

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	合計
語数	96	1,076	2,415	3,668	1,711	514	141	17	4	9,642
百分率	1.0	11.2	25.0	38.0	17.7	5.3	1.5	0.2	0.0	100.0

【表 5.3.1b】『日葡辞書』和語名詞の拍数別に見た語数（1 語平均 3.69 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	合計
語数	96	1,076	2,415	3,561	1,279	294	79	8	3	8,811
百分率	1.1	12.2	27.4	40.4	14.5	3.3	0.9	0.1	0.0	100.0

1 語は最大 9 拍である。9 拍以上の語を挙げると、次のようになる。

かたなのあいじるし（刀の合印）、こいのけぎりのしる（鯉のけぎりの汁）、  
くろぎづくりのいえ（黒木造の家）、すきびたいのかむり（透額の冠）

「刀の合印」は「刀」を見出し語とした連語としているため、【表 5.3.1b】では、調査対象とはなっていない。「鯉のけぎりの汁」は「鯉」「けぎり」「汁」のすべてが辞書に掲載されているので、本来ならば、3 語に切ったほうがよいのかもしれない。「黒木造の家」「透き額の冠」は前項の「黒木造」「透額」は見出し語にはないが、後項の「家」「冠」は掲載されている。助詞「の」で結ばれた語を複合語ではなく、連語と認定したならば、9 拍語はないということになるであろう。

【表 5.3.1b】が本研究の調査対象である。8811 語であり、1 語あたりの平均拍数は 3.69 拍である。『万葉集』が 3.65 拍、『源氏物語』が 3.96 拍であるから、『万葉集』とほぼ同じ長さである。最も多いのは、「炙籠」／Xa bu ri ko／、「相生」／Xa Xi Xo Xi／、「小舅」／ko zju R to／、「魂」／ta ma si Xi／などの 4 拍語の 40.4%、次に多いのが、「青葉」／Xa Xo ba／、「浜路」／ha ma di／、「小枝」／sa Xe da／、「菰」／su zu na／などの 3 拍語で 27.4%、全体の 7 割弱を占める。

『日葡辞書』全体で、和語名詞がどれぐらいの割合を占めているかというと、『日葡辞書』の見出し語数が確定していないので、おおよそでしか述べられないが、『日葡辞書』の見出し語数は、解題によると、32,293 語である。論者も 5.2 で定めた基準で整理したところ、約 32,000 語ぐらいになるという見通しを持っている。見出し語数を約 32000 語とすると、和語名詞は【表 5.3.1a】より 9,642 語であるので、およそ 30%ということになる。他の品詞も含めた和語全体では、約 53%<sup>22</sup>、混種語が約 6%を占めるということも付け足しておきたい<sup>23</sup>。

### 5.3.2 音素分布

『日葡辞書』における和語名詞の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 5.3-1〉、語末〈音素表 5.3-2〉、語全体〈音素表 5.3-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 5.3-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.3.2】【表 5.3.3】【表 5.3.4】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。中世から、長音が出現する。各拍の度数は、後に引き音節が来る拍も足している。／Xo／が 4.8%なのは、／X／が／o／と交差する 4.0 と、／o:／と交差する 0.8 を足しているからである。

【表 5.3.2】『日葡辞書』和語名詞の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
0	1863	621	1521	25	895	12	1066	37	570	1284	49	0	862
0.0	21.1	7.0	17.3	0.3	10.2	0.1	12.1	0.4	6.5	14.6	0.6	0.0	9.8

r	N	Q	T	合計
6	0	0	0	8811
0.1	0.0	0.0	0.0	100.0

【表 5.3.3】『日葡辞書』和語名詞の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
3179	1729	1681	520	1661	41	0	8811
36.1	19.6	19.1	5.9	18.9	0.5	0.0	100.0

【表 5.3.4】『日葡辞書』和語名詞の語頭多頻度拍

拍	/ka/	/Xa/	/hi/	/ha/	/Xo/	/Xu/	/Xi/	/si/	/ta/	/ko/
度数	689	611	468	425	423	409	368	345	332	320
百分率	7.8	6.9	5.3	4.8	4.8	4.6	4.2	3.9	3.8	3.6

子音音素で、最も多く出現するのは、/X/（単独母音拍の子音部）の 21.1%である。次いで、/k/の 17.3%、/h/の 14.6%、/t/の 12.1%と続く。母音音素は、/a/が最も多く、36.1%である。/i/19.6%、/u/19.1%、/o/18.9%で、その差はあまりない。/e/は 5.9%でやはり低い。『万葉集』では甲乙の区別をしないで、2.5%、『源氏物語』では、3.0%であるから、徐々に増えてきている。拍では、ア行は/Xe/以外は、すべて上位に入っている。『万葉集』では、/Xa/が 9.5%で最も多かったが、『源氏物語』『日葡辞書』では、/ka/が、それぞれ 7.1%、7.8%で最も多い。和語名詞の語頭において/Xa/ /ka/はよく使用される拍である。

稿末別紙資料〈音素表 5.3-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.3.5】【表 5.3.6】【表 5.3.7】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 5.3.5】『日葡辞書』和語名詞の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
53	822	300	1144	391	1056	142	978	331	612	66	349	8	972
0.6	9.3	3.4	13.0	4.4	12.0	1.6	11.1	3.8	6.9	0.7	4.0	0.1	11.0

r	N	Q	T	合計
1568	18	0	1	8811
17.8	0.2	0.0	0.0	100.0

【表 5.3.6】『日葡辞書』和語名詞の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
1890	3610	406	1559	1274	0	72	8811
21.5	41.0	4.6	17.7	14.5	0.0	0.8	100.0



【表 5.3.7】『日葡辞書』和語名詞の語末多頻度拍

拍	/ri/	/ki/	/si/	/Xi/	/mi/	/sa/	/ra/	/ti/	/me/	/to/
度数	803	580	513	474	401	386	331	320	267	259
百分率	9.1	6.6	5.8	5.4	4.6	4.4	3.8	3.6	3.0	2.9

子音では、最も多く出現するのは、/r/の17.8%である。次いで、/k/の13.0%、/s/の12.0%と続く。『万葉集』『源氏物語』では、母音が語中語末に来るのを嫌ったが、『日葡辞書』においては、音便、ハ行転呼音により、/X/が9.3%出現する。代わりに/h/の出現率が『源氏物語』の9.0%から、0.7%へと8.3ポイントも減った。『源氏物語』の和語名詞語末の結果で、歯茎音/s/ /t/の出現率が高くなったことを挙げたが、『日葡辞書』では、それらよりも/k/の出現率のほうが高くなっている。

母音音素は、語末においては、/u/の出現率が4.6%で低い。『万葉集』『源氏物語』でも共通の特徴である。最も多いのは、/i/の41.0%、次いで/a/の21.5%であるが、その隔たりが大きいのが特徴である。/i/の出現率がだんだん高くなっている。甲乙の区別をしなかった場合、『源氏物語』は『万葉集』に比べ、4.0ポイント高くなって、36.1%であった。『日葡辞書』では、『源氏物語』と比べて、さらに4.9ポイント高くなっている。/i/の出現率が高くなっていることは、語構成と関係があるであろう。

拍では、語末においては、母音/i/の出現率が高いこともあり、上位10のうち、6つが/i/を伴う拍である。/ri/が最も多く出現する。『源氏物語』では、/ri/は7.5%で、『万葉集』よりも1.6ポイント増えたが、『日葡辞書』では、9.1%出現し、『源氏物語』より、さらに1.6ポイント増えた。語末と語構成には関係がありそうである。

稿末別紙資料〈音素表 5.3-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.3.8】【表 5.3.9】【表 5.3.10】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 5.3.8】『日葡辞書』和語名詞の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
299	3882	1634	4557	1655	3295	584	3678	1238	2365	1640	1235	20	3325
0.9	11.9	5.0	14.0	5.1	10.1	1.8	11.3	3.8	7.3	5.0	3.8	0.1	10.2

r	N	Q	T	合計
2963	90	76	4	32540
9.1	0.3	0.2	0.0	100.0

【表 5.3.9】『日葡辞書』和語名詞の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
10406	8361	4549	2924	5727	104	469	32540
32.0	25.7	14.0	9.0	17.6	0.3	1.4	100.0

【表 5.3.10】『日葡辞書』和語名詞の多頻度拍

拍	/ka/	/si/	/Xi/	/ri/	/ki/	/ta/	/ma/	/to/	/sa/	/na/
度数	1545	1527	1280	1221	1092	1082	1080	944	901	884
百分率	4.7	4.7	3.9	3.8	3.4	3.3	3.3	2.9	2.8	2.7

和語名詞において、よく用いられる子音音素は、/k/の14.0%、/X/の11.9%、/t/の11.3%、/m/の10.2%、/s/の10.1%である。母音音素で最も多いのは、/a/の32.0%、次に/i/の25.7%である。拍では、/Xi/や/ri/が加わったのが、『万葉集』や『源氏物語』では見られなかった特徴である。

### 5.3.3 音素配列

『日葡辞書』における和語名詞の母音音素の配列について調べた結果、922の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 5.3〉として、その一部を挙げる。【表 5.3.11】は、度数423以上の母音配列を示したものである。

【表 5.3.11】『日葡辞書』和語名詞の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	i } }	3610	/i/が語末	13	a e }	655	語末が/a/-/e/で終わる
2	{ { a	2818	/a/が語頭	14	{ a i	637	語頭が/a/-/i/で始まる
3	{ { i	1729	/i/が語頭	15	a a }	618	語末が/a/-/a/で終わる
4	a } }	1621	/a/が語末	16	a a i	595	/a/-/a/-/i/の連続
5	{ { u	1568	/u/が語頭	17	{ { e	520	/e/が語頭
6	e } }	1559	/e/が語末	18	o o }	506	語末が/o/-/o/で終わる
7	{ { o	1497	/o/が語頭	19	a a a	496	/a/-/a/-/a/の連続
8	o } }	1254	/o/が語末	20	{ u i	462	語頭が/u/-/i/で始まる
9	a i }	1247	語末が/a/-/i/で終わる	21	{ i o	461	語頭が/i/-/o/で始まる
10	{ a a	1112	語頭が/a/-/a/で始まる	22	{ i a	438	語頭が/i/-/a/で始まる
11	u i }	834	語末が/u/-/i/で終わる	23	{ o o	432	語頭が/o/-/o/で始まる
12	o i }	702	語末が/o/-/i/で終わる	24	{ o i	423	語頭が/o/-/i/で始まる

【表 5.3.11】から母音の配列順序を見ると、/a/-/a/, /a/-/i/, /o/-/o/ の配列が語頭、語末に多い。『万葉集』、『源氏物語』でも、/a/-/a/, /a/-/i/ の配列は語頭、語末に多く用いられており、和語名詞における特徴的な音素配列だと言える。

3 母音音素の連続として、/a/-/a/-/i/, /a/-/a/-/a/ が多いことがわかる。語末が /u/-/i/, /o/-/i/, /a/-/e/ で終わる配列が、『源氏物語』より上位に上がってきている。

## 5.4 『日葡辞書』における漢語の音韻構造

### 5.4.1 拍数別に見た語数

5.2 の基準に基づいて、語を採録した結果、13,030 語の漢語が得られた。拍ごとの語数は【表 5.4.1a】に示す。【表 5.4.1b】は、5.2.9 で述べた追込み項目になる語を省いて得た結果である。

【表 5.4.1a】『日葡辞書』漢語の拍数別に見た語数

	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	111	1,011	4,563	6,557	404	257	93	29	4	1	13,030
率	0.9	7.8	35.0	50.3	3.1	2.0	0.7	0.2	0.0	0.0	100.0

【表 5.4.1b】『日葡辞書』漢語の拍数別に見た語数（1 語平均 3.52 拍）

	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	111	1,011	4,558	6,497	286	153	43	16	3	1	12,679
率	0.9	8.0	35.9	51.2	2.3	1.2	0.3	0.1	0.0	0.0	100.0

1 語は最大 9 拍である。9 拍以上の語を挙げると、次のようになる。一字一字独立した語が多いことがわかる。

げんにびぜっしんい（眼，耳，鼻，舌，身，意），みょうほうれんげきやう（妙法蓮華經），けんもんきゅうみたん（見，聞，嗅，味探），†しきしやうかうみそく（色声香味触），しやうわうしゃくびやっこく（青黄赤白黒）

調査対象は、【表 5.4.1b】である。12679 語であり、1 語あたりの平均拍数は 3.52 拍で

ある。漢語のみの調査は『日葡辞書』が最初なので、『日葡辞書』の和語名詞と比較すると、和語名詞の平均拍数は3.69拍であるから、0.17拍短いことになる。

最も多いのは、「悪口」／Xa Q ko R／、「変滅」／he N me T／、「山行」／sa N kō R／などの4拍語で、51.2%、全体のほぼ半分を占める。次に多いのは、「文武」／bu N pu／、「脚気」／ka Q ke／、「如法」／njo ho R／などの3拍語で35.9%である。3拍語と4拍語を合わせて、87.2%、全体の9割弱を占める。

『日葡辞書』の見出し語数を約32000語とすると、漢語は【表5.4.1a】より13030語があるので、漢語の占める割合は約41%ということになる。

#### 5.4.2 音素分布

『日葡辞書』における漢語の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表5.4-1〉、語末〈音素表5.4-2〉、語全体〈音素表5.4-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表5.4-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表5.4.2】【表5.4.3】【表5.4.4】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表5.4.2】『日葡辞書』漢語の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
0	1024	347	2053	820	2398	865	1110	567	312	1118	723	0	554
0.0	8.1	2.7	16.2	6.5	18.9	6.8	8.8	4.5	2.5	8.8	5.7	0.0	4.4

r	N	Q	T	合計
788	0	0	0	12679
6.2	0.0	0.0	0.0	100.0

【表5.4.3】『日葡辞書』漢語の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
2936	2249	1844	1808	2496	1346	0	12679
23.2	17.7	14.5	14.3	19.7	10.6	0.0	100.0

【表 5. 4. 4】『日葡辞書』漢語の語頭多頻度拍

拍	/Xi/	/si/	/se/	/ka/	/ko/	/sa/	/ta/	/ki/	/zi/	/ha/
度数	510	458	393	367	326	302	277	272	271	264
百分率	4.0	3.6	3.1	2.9	2.6	2.4	2.2	2.1	2.1	2.1

最も多く出現する子音音素は、/s/の 18.9%，次いで/k/の 16.2%である。語頭において、/k/は、和語、漢語、ともによく用いられる音素である。

母音音素では、/a/が 23.2%と最も多い。

稿末別紙資料〈音素表 5. 4-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5. 4. 5】【表 5. 4. 6】【表 5. 4. 7】にまとめる。【表 5. 4. 7】の多頻度拍についてであるが、第 2 章の 2. 1 で、母音が何であっても共通の弁別的特徴があると認めて、引き音節は、一つの音韻論的単位とみなし、直前の母音の重複ではなく、/R/とすると定めたが、すべて合わせると、数値が高くなるので、どの母音の引き音節なのか、半母音を伴っているのかも合わせて見るために、設定とは異なるが、それぞれ分けた。/ɔ:/とあるのは、/ɔ/の後に来る引き音節のことである。

【表 5. 4. 5】『日葡辞書』漢語の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
2911	1453	90	2176	348	707	428	202	163	31	112	131	58	93
23.0	11.5	0.7	17.2	2.7	5.6	3.4	1.6	1.3	0.2	0.9	1.0	0.5	0.7

r	N	Q	T	合計
183	2797	0	796	12679
1.4	22.1	0.0	6.3	100.0

【表 5. 4. 6】『日葡辞書』漢語の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
695	2731	1849	221	679	0	6504	12679
5.5	21.5	14.6	1.7	5.4	0.0	51.3	100.0

漢語の語末においては、かなり偏った分布になる。引き音節が 23.0%で最も多く、次いで、撥音の 22.1%，入声音の 6.3%を加えると、全体の約半分を語末においては、特殊拍

が占める。子音音素では、／k／が 17.2%と最も多く、語頭、語末においてもよく用いられることがわかる。

母音音素は、特殊拍が多いことから、∅ が約半分を占め、母音音素の中では、／i／が 21.5%で最も多い。

【表 5.4.7】『日葡辞書』漢語の語末多頻度拍

拍	／N／	／ɔ:／	／ku／	／Xi／	／o:／	／T／	／u:／	／ki／	／si／	／zi／
度数	2797	1566	1364	1352	822	796	523	413	253	218
百分率	22.1	12.4	10.8	10.7	6.5	6.3	4.1	3.3	2.0	1.7

同じことの繰り返しになるが、語末では、特殊拍が多いため、拍でも特殊拍が上位に入る。引き音節の中でも、／ɔ:／（開長音の引き音節）が 12.4%で最も多いことがわかる。／o:／（合長音の引き音節）が 6.5%であるから、約 1 対 2 で／ɔ:／が多く出現する。

稿末別紙資料〈音素表 5.4-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.4.8】【表 5.4.9】【表 5.4.10】にまとめる。

【表 5.4.8】『日葡辞書』漢語の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
5708	4315	781	6535	1904	4779	2136	2476	1339	771	1690	1396	263	1176
12.8	9.7	1.8	14.6	4.3	10.7	4.8	5.6	3.0	1.7	3.8	3.1	0.6	2.6

r	N	Q	T	合計
1688	5818	734	1100	44609
3.8	13.0	1.6	2.5	100.0

【表 5.4.9】『日葡辞書』漢語の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
5828	7896	5682	3811	5059	2973	13360	44609
13.1	17.7	12.7	8.5	11.3	6.7	29.9	100.0

【表 5.4.10】『日葡辞書』漢語の多頻度拍

拍	／N／	／Xi／	／ku／	／ɔ:／	／jɔ:／	／T／	／si／	／o:／	／ki／	／ju:／
度数	5818	3363	2482	1385	1381	1100	992	928	904	816
百分	13.0	7.5	5.6	3.1	3.1	2.5	2.2	2.1	2.0	1.8

子音音素は、／k／が最も多く、14.6%である。／x／が1.8%、／m／が2.6%、／n／が1.7%と低い出現率である。母音音素は、∅が29.9%で最も多く、次いで／i／の17.7%である。／o／は、短音と合長音の前半部分を足したものであり、／ɔ／は、開長音の前半部分でしかありえないため、それぞれ、11.3%、6.7%となっている。拍では、撥音／N／が最も多く、13.0%、／Xi／、／ku／、／si／、／ki／以外は、すべて特殊拍である。／jo:/／ju:/など、半母音+母音の後に来る引き音節も多く出現している。

また、入声音が上位に出現しているのは、『日葡辞書』の特徴で、2.5%(1100例)を確認することができ、促音／Q／の1.6%(734例)の1.5倍である。規範のもとにつくられたとはいえ、高い出現率である。その多くは語末に出現する。語末に現れた入声音は、796例で、入声全体の72.4%にあたる。

入声音の中で、唯一もとの音[t]に近い形で長く残った音であるが、舌内入声韻尾というよりも、異なる音価を持っていたか、あるいは、入声音は実際の会話ではあまり用いられなかったか、など考えるべき課題は多い。

### 5.4.3 音素配列

『日葡辞書』における漢語の母音音素の配列について調べた結果、1354の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表5.4〉として、その一部を挙げる。【表5.4.11】は、度数640以上の母音配列を示したものである。

【表5.4.11】『日葡辞書』漢語の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度	説明
1	N } }	2797	／N／（撥音）が語末	13	:o } }	822	合音の引き音節が語末
2	i } }	2730	／i／が語末	14	T } }	796	／T／（入声音）が語末
3	{ { a	2267	／a／が語頭	15	{ e N	788	語頭が／e／-／N／で始まる
4	{ { i	2249	／i／が語頭	16	ɔ :o }	748	開音が語末
5	{ { e	1808	／e／が語頭	17	{ a i	730	語頭が／a／-／i／で始まる
6	u } }	1652	／u／が語末	18	jo :o }	729	語末2拍が／j／+／ɔ／-引き音節
7	{ { o	1642	／o／が語頭	19	{ { ju	716	／ju／が語頭
8	:o } }	1566	開音の引き音節が語末	20	i N }	691	語末が／i／-／N／で終わる
9	{ { u	1128	／u／が語頭	21	{ i N	668	語頭が／i／-／N／で始まる
10	{ { jo	854	／jo／が語頭	22	a i }	646	語末が／a／-／i／で終わる
11	e N }	831	語末が／e／-／N／で終わる	23	e i }	640	語末が／e／-／i／で終わる
12	{ a N	825	語頭が／a／-／N／で始まる	23	{ e i	640	語頭が／e／-／i／で始まる

【表 5.4.11】から母音の配列順序を見ると、3 母音音素の連続が上位になく、母音音素と特殊拍の組み合わせが目立つ。また、半母音音素が上位に含まれている。5.4.2 で触れたように、／x／は極めて少ない。つまり、拗音が多く出現しているということである。

## 5.5 『天草版平家物語』の音韻構造

### 5.5.1 中世資料『天草版平家物語』

中世のキリシタン資料である『天草版平家物語』をとりあげることとする。資料は、近藤(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』影印・翻字篇を用いた。出版年は扉絵に記してあり、1592 年である。

口語資料としては、狂言や抄物のほうが適当かもしれないが、『日葡辞書』と同じキリシタン資料で、ローマ字表記のため、読みの確定ができること、『日葡辞書』にも多く引用されていること<sup>24</sup>、出版年が明らかなことから、調査の対象とした。口訳編著者はファビアンである。ファビアンについては、福島(2003)の第三章「ファビアン伝」に詳しい記述がある。底本の『平家物語』の影響は受けているが、「日本の言葉とイストリヤを習ひ知らんと欲する人のために世話に和らげたる平家の物語」であること、また、「読誦の人に対して書す」には、「言葉を学びがてらに日域の往時を訪ふべき書これ多しと言へども、なかんづく叡山の住侶、文才に名高き玄恵法印の制作平家物語に如くはあらじと思ひ、これを選んで書写せんと欲するに臨んで、またわが師宣ふは：兩人相對して雑談をなすがごとく、言葉のてにはを書写せよとなり」とあることから、『平家物語』が選ばれたのは、当時の人々の生活に根付いていたからであろう。日本語を学びつつ、日本の歴史や文化を学ぼうとしていたこと、日本語を学ぶ者が理解できるように易しく表現した口語文であることは間違いない。

同じキリシタン資料として、『天草版伊曾保物語』もあるが、短編の集合体であるので、まとまった一つの話ではないこと、また、原作が西洋文学であるので、本研究の資料としては適当ではないと考えた。

上代、中古と同様、巻第一の本文最初から対話部分のみで1万拍をデータとして採る。『天草版平家物語』は、喜一検校と右馬の允の対話形式であるので、対話が始まる際に、「VM.」「Q I.」とあり、どちらが話しているかが示されているが、それらはデータの対象から省いた。



なお、『天草版平家物語』のローマ字表記に誤りがある場合は、『天草版平家物語語彙用例総索引（1）』の翻字で訂正してあるので、そちらをデータとして採った。

## 5.5.2 拍数別に見た語数、及び語種

『天草版平家物語』の巻第一の本文の最初から1万拍を採録する。語の途中で切ることはいないので、語の終わりまで採録すると、語の数は2347語になった。合計、10,004拍である。

1.3.4の「語の認定」の補足であるが、『雑誌用語の変遷』の規定に入っていない語の認定の例を追加する。規定では、以下のようにある。

つぎの類は「よむ」に合併。

よみなさい、一なさる、一候、一たまふ、一たまえ、一たてまつる

およみなさい、一なさる、一ください、一くださる、一する、一ねがう、一あそばす、

一申しあげる、一いたす、一いただく

つぎの類は「研究する」に合併。

研究できる／研究される、一させる、／一さす、／研究いたす、一なさる、一あそばす、

「御研究—」もおなじ。

追加するのは、「お語りあれ」は一語とし、「語る」に合併する。「語りませうず」の「まらする」は付属語並みに扱い、「語る」に合併する。

拍数別に見ると、【表 5.5.1】のようになる。

【表 5.5.1】『天草版平家物語』の拍数別に見た語数（1語平均4.26拍）

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍	8拍	9拍	10拍	11拍	12拍	14拍	合計
語数	5	300	584	589	409	205	122	68	42	17	4	1	1	2347
率	0.2	12.8	24.9	25.1	17.4	8.7	5.2	2.9	1.8	0.7	0.2	0.0	0.0	100.0

1語は最大14拍である。14拍の語は「思ひ知らせ奉らいでは」／Xo mo Xi si ra se ta te ma tu ra Xi de wa／である。1語平均は、4.26拍である。『源氏物語』の1語平均が4.74拍であるので、約0.5拍短いことになる。「ござる」／go za ru／、「奴じゃ」／xja tu dja／、「位」／ku ra Xi／、「安い」／xja su Xi／などの3拍語が24.9%、「驕りを」

／Xo go ri Xo／，「申した」／mɔ R si ta／，「主殿」／sju R do no／などの4拍語が25.1%で多く，合わせると50.0%である。『源氏物語』も3拍語，4拍語が多く，合わせて38.5%であったが，『天草版平家物語』のほうが11.5ポイント高い。『源氏物語』では，6拍以上の語が，31.6%であったが，『天草版平家物語』では，19.6%である。

ここで，語種について見てみる。付属語を除いた自立語の語種を調査すると，全2347語のうち，和語が1789語で76.2%，漢語が379語で16.1%，混種語が179語で7.6%であった。『日葡辞書』の見出し語においては，5.4.1で述べたように約41%を漢語が占めていたが，実際に文の中での使用率は，それほど高くはない。

### 5.5.3 音素分布

『天草版平家物語』から得た10004拍，2347語の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表5.5-1〉，語末〈音素表5.5-2〉，語全体〈音素表5.5-3〉の音素表をそれぞれ作成し，表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表5.5-1〉は，語頭における音素分布である。子音音素，母音音素，拍の出現率を【表5.5.2】【表5.5.3】【表5.5.4】にまとめる。上段は度数，下段は子音総数，母音総数，拍総数を分母とする百分率である。

【表5.5.2】『天草版平家物語』の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
0	401	191	400	132	316	25	223	22	118	193	20	0	278
0.0	17.1	8.1	17.0	5.6	13.5	1.1	9.5	0.9	5.0	8.2	0.9	0.0	11.8

r	N	Q	T	合計
28	0	0	0	2347
1.2	0.0	0.0	0.0	100.0

【表5.5.3】『天草版平家物語』の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
601	431	316	123	765	111	0	2347
25.6	18.4	13.5	5.2	32.6	4.7	0.0	100.0

【表 5.5.4】『天草版平家物語』の語頭多頻度拍

拍	/ko/	/Xo/	/Xi/	/Xa/	/go/	/so/	/na/	/ta/	/ki/	/hi/
度数	170	116	115	111	104	86	86	77	76	76
百分率	7.2	5.0	4.9	4.7	4.4	3.7	3.7	3.3	3.2	3.2

子音音素では、/X/で始まる語が 17.1%で最も多いのは、これまで見てきた『万葉集』の和歌や『源氏物語』の「桐壺」の巻と同じだが、その出現率は、それぞれ 22.7%, 30.2%であるから、それらと比べると、やや低い数値である。次に多い子音/k/は 17.0%であるから、『万葉集』の 16.1%, 『源氏物語』の 16.3%とほぼ同じである。/X/ /k/は、安定して、語頭に多く出現すると言える。母音音素では、/o/が最も多く、32.6%である。『万葉集』や『源氏物語』においては、語頭において最も多く出現するのは、/a/で、それぞれの出現率は、38.5%, 33.4%であった。これまでは、語頭には現われなかった濁音/go/が上位に入っている。これは、「ござる」と接頭辞の「御」が多く用いられたため、文体の影響が出ているのであろう。

稿末別紙資料〈音素表 5.5-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.5.5】【表 5.5.6】【表 5.5.7】にまとめる。

【表 5.5.5】『天草版平家物語』の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
66	254	151	45	69	50	34	548	96	620	0	72	0	152
2.8	10.8	6.4	1.9	2.9	2.1	1.4	23.3	4.1	26.4	0.0	3.1	0.0	6.5

r	N	Q	T	合計
172	16	0	2	2347
7.3	0.7	0.0	0.1	100.0

【表 5.5.6】『天草版平家物語』の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
498	405	138	393	829	0	84	2347
21.2	17.3	5.9	16.7	35.3	0.0	3.6	100.0

【表 5. 5. 7】『天草版平家物語』の語末多頻度拍

拍	/no/	/te/	/ni/	/Xo/	/to/	/mo/	/ta/	/ru/	/ba/	/ga/
度数	324	263	246	173	149	139	123	76	70	68
百分	13.8	11.2	10.5	7.4	6.3	5.9	5.2	3.2	3.0	2.9

これまで、語末にはほとんど出現しなかった、／X／が、10.8%出現している。これは、子音音素全体の3番目に高い数値である。最も多く用いられるのは、／n／の26.4%、次が／t／の23.3%である。この二つの音素で全体の49.8%を占める。語末に現れやすい音素と言える。母音音素は、／o／が35.3%と最も多い。拍では、「の」「て」「に」「を」「と」「た」「ば」「が」など、助詞の影響が強く出ている。「る」は用言の活用語尾、助動詞の影響である。

稿末別紙資料〈音素表 5.5-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 5.5.8】【表 5.5.9】【表 5.5.10】にまとめる。

【表 5.5.8】『天草版平家物語』の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
449	1076	552	949	345	781	265	1410	378	1060	255	213	7	797
4.5	10.8	5.5	9.5	3.4	7.8	2.6	14.1	3.8	10.6	2.5	2.1	0.1	8.0

r	N	Q	T	合計
1003	243	206	15	10004
10.0	2.4	2.1	0.1	100.0

【表 5.5.9】『天草版平家物語』の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	ɔ	∅	計
2409	1761	864	1201	2605	251	913	10004
24.1	17.6	8.6	12.0	26.0	2.5	9.1	100.0

【表 5.5.10】『天草版平家物語』の多頻度拍

拍	/ta/	/to/	/no/	/Xi/	/mo/	/Xo/	/ni/	/te/	/re/	/ko/
度数	438	432	424	417	346	348	332	322	289	267
百分率	4.4	4.3	4.2	4.2	3.4	3.5	3.3	3.2	2.9	2.7

語全体において、子音音素では、／t／の14.1%が最も多く、次いで、／X／の10.8%、

／n／の 10.6%，／r／の 10.0%と続く。／h／の出現率は 2.5%と、大きく減少したことも特徴である。『日葡辞書』における漢語の音素分布を調べた結果では、入声音／T／は、2.5%の出現率であったが、テキスト内では、漢語の使用率がそれほど、高くないこともあり、あまり用いられず、0.1%の出現にとどまった。母音音素では、／o／が最も多く、26.0%であった。そのうち、合長音の前半部分である／o／は、〈音素表 5.5-3〉の／o:／／jo:／の合計を足して得られる数値、1.3%である。／ɔ／は、母音全体の 2.5%のみの出現である。合長音と比べると、1 対 2 で開長音が多いことがわかる。拍では、／xi／／xo／が、上位に入ってきたのは、『万葉集』『源氏物語』では見られなかったことである。

#### 5.5.4 音素配列

『天草版平家物語』の母音音素の配列について調べた結果、898 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 5.5〉として、そのすべてを挙げる。【表 5.5.11】は、度数 100 以上の母音配列を示したものである。

【表 5.5.11】『天草版平家物語』の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	o } }	822	／o／が語末	13	o o o	162	／o／-／o／-／o／の連続
2	{ { o	660	／o／が語頭	14	a e a	147	／a／-／e／-／a／の連続
3	{ { a	543	／a／が語頭	15	wa } }	141	／wa／が語末
4	{ { i	431	／i／が語頭	16	u } }	138	／u／が語末
5	i } }	405	／i／が語末	17	{ a i	126	語頭が／a／-／i／で始まる
6	e } }	393	／e／が語末	18	{ { e	123	／e／が語頭
7	a } }	344	／a／が語末	19	{ o a	107	語頭が／o／-／a／で始まる
8	{ o o	290	語頭が／o／-／o／で始まる	20	a i }	106	語末が／a／-／i／で終わる
9	o o }	275	語末が／o／-／o／で終わる	21	o i }	105	語末が／o／-／i／で終わる
10	{ { u	231	／u／が語頭	21	{ { jo	105	／jo／が語頭
11	i o }	189	語末が／i／-／o／で終わる	23	i e }	102	語末が／i／-／e／で終わる
12	{ a a	165	語頭が／a／-／a／で始まる	24	e a e	100	／e／-／a／-／e／の連続

母音配列を見ると、／o／の 2 連続が語頭、語末に多く見られる。／wa／の語末も多く用いられている。助詞「は」がハ行転呼音を起こしたためである。3 母音音素の連続では、／o／-／o／-／o／，／a／-／e／-／a／，／e／-／a／-／e／が多い。

## 5.6 中世日本語の音韻構造

以上、中世日本語の音韻構造について、『日葡辞書』『天草版平家物語』を資料として述べてきた。『日葡辞書』の見出し語は、約 32000 語で、和語は約 53%、漢語は約 41%、混種語は約 6 %である。

和語名詞は、8811 語で、4 拍語が最も多く、40.4%、次いで 3 拍語の 27.4%、合わせて、全体の 67.8%を占める。平均拍数は 3.69 拍である。

素材レベルの調査である『日葡辞書』の和語名詞の語頭においては、子音音素で、最も多く出現するのは、/X/の 21.1%である。次いで、/k/の 17.3%、/h/の 14.6%、/t/の 12.1%と続く。母音音素は、/a/が最も多く、36.1%である。/i/19.6%、/u/19.1%、/o/18.9%で、その差はあまりない。/e/の出現率は 5.9%で低い。拍では、/ka/が 7.8%の出現率で最も多い。

語末においては、子音音素で、最も多く出現するのは、/r/の 17.8%である。次いで、/k/の 13.0%、/s/の 12.0%と続く。母音音素で、最も多いのは、/i/の 41.0%、次いで/a/の 21.5%である。/u/の出現率は 4.6%で低い。拍では、語末においては、母音/i/の出現率が高いこともあり、上位 10 のうち、6 つが/i/を伴う拍である。

語全体では、多く出現する子音音素は、/k/の 14.0%、/X/の 11.9%、/t/の 11.3%、/m/の 10.2%、/s/の 10.1%である。母音音素で最も多いのは、/a/の 32.0%、次に/i/の 25.7%である。拍では、/ka/ /si/などが 4.7%の出現率でよく使用されている。

以下、『万葉集』『源氏物語』と比較する。

1 語あたりの平均拍数は、『万葉集』3.65 拍、『源氏物語』3.96 拍、『日葡辞書』3.69 拍である。『源氏物語』の平均拍数がやや長い。

語頭においては、特に大きな変化はない。/e/は、語頭には出現しにくい音素であるが、『万葉集』では甲乙の区別をしないで 2.5%、『源氏物語』では 3.0%、『日葡辞書』は 5.9%であるから、徐々に増えてきている。『万葉集』では、/Xa/が 9.5%で最も多く、次が/ka/の 7.0%であったが、『源氏物語』『日葡辞書』では、/ka/がそれぞれ、7.1%、7.8%で最も多く、次は/Xa/で、ともに 6.9%である。和語名詞の語頭において/Xa/ /ka/は語頭でよく使用される拍である。

語末において、子音音素は、『万葉集』『源氏物語』では、母音が語中語末に来るのを嫌い、/X/は、それぞれ 0.5%、0.4%とほとんど出現しなかったが、『日葡辞書』においては、音便、ハ行転呼音により、9.9%出現する。代わりに/h/の出現率が 0.7%と、『万

葉集』の 11.8%, 『源氏物語』の 9.0% から大幅に減った。『源氏物語』の和語名詞語末の結果で、歯茎音 /s/ /t/ の出現率が高くなったことを挙げたが、『日葡辞書』では、それよりも /k/ の出現率のほうが高くなっている。母音音素は、/u/ の出現率が低いのは、『万葉集』『源氏物語』でも共通の特徴である。『日葡辞書』の母音音素で、最も多いのは、/i/ の 41.0% である。甲乙の区別をしなかった場合、『源氏物語』は『万葉集』に比べ、4.1 ポイント高くなって、36.1% であった。『日葡辞書』では、『源氏物語』と比べて、さらに 4.9 ポイント高くなっている。/i/ の出現率が高くなっていることは、語構成と関係があるであろう。拍では、母音 /i/ の出現率が高いこともあり、上位 10 のうち、6 つが /i/ を伴う拍である。/ri/ が最も多く出現する。『源氏物語』では、/ri/ は 7.5% で、『万葉集』よりも 1.6 ポイント増えたが、『日葡辞書』では、9.1% 出現し、『源氏物語』より、さらに 1.6 ポイント増えた。語末と語構成には関係がありそうである。

語全体では、子音音素は、/h/ の大幅減少、/X/ の増加に注目したい。/h/ の出現率は、『万葉』から、10.9%, 9.4%, 5.0%, /X/ の出現率は、7.2%, 7.5%, 11.9% と変化している。/m/ も 13.3%, 11.0%, 10.2% と減少している。母音音素は、/i/ /e/ が増加傾向にある。多頻度拍では、/Xi/ や /ri/ が加わったのが、『万葉集』や『源氏物語』では見られなかった特徴である。

母音配列では、3 母音音素の連続として、/a/-/a/-/i/, /a/-/a/-/a/ が多いことがわかる。語末が /u/-/i/, /o/-/i/, /a/-/e/ で終わる配列が、『源氏物語』より上位に上がってきている。

漢語は、12679 語で、4 拍語が 51.2% と最も多く、次が 3 拍語の 35.9% で、この二つで、全体の 9 割弱を占める。平均拍数は、3.52 拍である。

漢語は、中世からの調査であるので、ここでは、『日葡辞書』の和語名詞と比較しながら、その音韻的特徴について述べたい。

和語にはほとんど現れなかった濁音、ラ行音の出現率が、/g/ 6.5%, /z/ 6.8%, /d/ 4.5%, /b/ 5.7%, /r/ 6.2% と高く、和語において 21.1% と最も多く出現した /X/ の出現率が漢語では、8.1% と 13 ポイント低い。また、漢語において、/x/ の出現率が 2.7% と低いのは特徴的である。『日葡辞書』の和語名詞の場合、/x/ の出現率は、7.0% であった。

最も多く出現する子音音素は、/s/ の 18.9%, 次いで /k/ の 16.2% である。語頭にお

いて、／k／は、和語、漢語、ともによく用いられる音素である。

母音音素では、／a／が 23.2%と最も多い。和語では 5.9%と低かった／e／の出現率が漢語では、14.3%と高いのも漢語の特徴である。

漢語の語末においては、かなり偏った分布になる。和語と異なり、特殊拍が多く出現する。引き音節が 23.0%で最も多く、次いで、撥音の 22.1%，入声音の 6.3%を加えると、全体の約半分を語末においては、特殊拍が占める。子音音素では、／k／が 17.2%と最も多く、語頭、語末においてもよく用いられることがわかる。母音音素は、特殊拍が多いことから、∅が約半分を占め、母音音素の中では、／i／が 21.5%で最も多い。拍では、引き音節の中では、／ɔ:/（開長音の引き音節）が 12.4%で最も多いことがわかる。／o:/（合長音の引き音節）が 6.5%であるから、約 1 対 2 で／ɔ:/が多く出現する。

語全体で見ると、子音音素では、／k／が 14.6%で最も多く用いられる。撥音の 13.0%，引き音節の 12.8%も出現率が高い。母音音素では、特殊拍が多いため、∅が全体の 29.9%を占め、次に多いのは、／i／の 17.7%である。／k／は和語名詞でも 14.0%で最も多く出現する。／k／の出現率が高いのは、和語も同じである。

母音の配列順序を見ると、3 母音音素の連続が上位になく、母音音素と特殊拍の組み合わせが目立つ。また、半母音音素が上位に含まれている。単独半母音拍は少ないので、拗音が多く出現しているということである

運用レベルの調査として、『天草版平家物語』の巻第一の本文の最初から、対話文のみを 10000 拍採って、語に切ると、2347 語得られる。4 拍語が 25.1%，3 拍語が 24.9%で、合わせて全体の 50.0%である。平均拍数は、4.26 拍である。

語頭において、子音音素は、／X／が 17.1%で最も多く出現する。次いで、／k／が 17.0%である。母音音素は、／o／が 32.6%で最も多く出現する。拍では、／ko／／Xo／／Xi／／Xa／などが多く出現している。

語末において、子音音素は、／X／が、10.8%出現している。これは、子音音素全体の 3 番目に高い数値である。最も多く用いられるのは、／n／の 26.4%，次が／t／の 23.3%である。この二つの音素で全体の 49.8%を占める。語末に現れやすい音素と言える。母音音素は、／o／が 35.3%と最も多い。拍では、「の」「て」「に」「を」「と」「た」「ば」「が」など、助詞の影響が強く出ている。「る」は用言の活用語尾、助動詞の影響である。

語全体において、子音音素では、／t／の 14.1%が最も多く、次いで、／X／の 10.8%，



／n／の 10.6%，／r／の 10.0％と続く。『日葡辞書』における漢語の音素分布を調べた結果では、入声音／T／は、2.5％の出現率であったが、運用レベルのテキスト内では、漢語の使用率が、自立語のみの調査で、混種語を合わせても 23.8％でそれほど、高くないこともあり、あまり用いられず、0.1％の出現にとどまった。母音音素では、／o／が最も多く、26.0％であった。そのうち、合長音の前半部分である／o／は 1.3％である。／o／は、母音全体の 2.5％の出現である。母音全体で見ると、／o／の出現率は低いが、合長音と比べると、1 対 2 で開長音のほうが多いことがわかる。拍では、／ta／／to／／no／／xi／が 4％以上の出現率である。

以下、『万葉集』『源氏物語』と比較する。

『万葉集』の和歌の 1 語平均は 3.71 拍、『源氏物語』の 1 語平均は 4.74 拍であった。『天草版平家物語』は、4.26 拍であるから、『万葉集』より、約 0.6 拍拍長く、『源氏物語』よりも約 0.5 拍短い

語頭において、子音音素では、／X／で始まる語が 17.1％で最も多いのは、これまで見てきた『万葉集』の和歌や『源氏物語』の「桐壺」の巻と同じだが、その出現率は、それぞれ 22.7％、30.2％であるから、それらと比べると、やや低い数値である。次に多い子音／k／は 17.0％であるから、『万葉集』の 16.1％、『源氏物語』の 16.3％とほぼ同じである。／X／／k／は、安定して、語頭に多く出現すると言える。母音音素では、／o／が最も多く、32.6％である。『万葉集』や『源氏物語』においては、語頭において最も多く出現するのは、／a／で、それぞれの出現率は、38.5％、33.4％であった。拍では、これまでは、語頭には現われなかった濁音／go／が上位に入っている。これは、「ござる」と接頭辞の「御」が多く用いられたためで、文体の影響が出ているのであろう。

語末では、これまで、ほとんど出現しなかった、／X／が 10.8％、出現しており、これは、子音音素全体の 3 番目に高い数値である。

語全体では、子音音素は、／h／の出現率が、2.5％と大きく減少している。拍では、／xi／／xo／が、上位に入ってきたのは、『万葉集』『源氏物語』では見られなかったことである。

## 第6章 現代日本語の音韻構造

現代日本語は、どのような音素分布、音素配列をしているのであろうか。本章は、『新潮現代国語辞典』第2版を資料として、和語名詞、及び漢語の音素分布、及び、音素配列を調べ、その音韻的特徴について述べる。また、和語名詞、漢語だけではなく、『中央公論』を調査対象として、同様の調査を行い、現代日本語の音韻構造について概観する。

### 6.1 調査資料『新潮現代国語辞典』第2版

山田俊雄他編『新潮現代国語辞典』第2版(2000)を用いることとする。『新潮現代国語辞典』の序には、「辞書編集の趣意と眼目とを明らかにする」とし、「現代および近い将来にわたって、言語の不易・流行を念頭におきつつ、もっとも緊要な過去百二十年ほどの日本語の全体像を登録し、それを、しかるべき出典をもつ実用例によって、簡潔に体得し得るように配慮した」と記してある。現代日本語の全体像を登録しようとしている編集者の意図が窺える。

この辞書を資料とする最も大きな理由は、『新潮国語辞典現代語・古語』が見出し語の固有・借用を平仮名・片仮名で記し分けた方式を受け継ぎ、語種の判定に非常に有用であるからである。国立国語研究所も、語種辞書『かたりぐさ』<sup>25</sup>で語種の判定に『新潮現代国語辞典』第2版を用いている。なお、小学館『新選国語辞典』も第8版2001年から、和語を平仮名アンチック体、漢語を平仮名ゴシック体、外来語をカタカナのアンチック体で表示し、また語種別の集計データもあり、大変有用であるので、必要に応じて参照する。

### 6.2 『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音韻構造

#### 6.2.1 拍数別に見た語数

『新潮現代国語辞典』に収録されている見出し語のうち、和語名詞（代名詞を含む）をすべて抜き出した。複数の品詞を有する語は、最初に名詞が挙げてある場合は採録し、2番目以降に名詞の用法がある場合は対象としない。すべて抜き出すと、全部で13,015語であった。『新潮現代国語辞典』第2版に収録されている和語名詞13,015語を拍数別に分類すると、【表6.2.1】のようになる。

1語は最大10拍である。1語しかない9拍語は「ひかれもののこうた」、10拍語は「やきつくすささげもの」である。1語あたりの平均は3.71拍である。

「大雨」／Xo R Xa me／、「姉さん」／ne R sa N／、「骨折り」／ho ne Xo ri／などの

4拍語が 45.4%で最も多く、次に多い、「あわせ（合）（裕）」／Xa xwa se／, 「手綱」／ta zu na／, 「ぼかし」／bo ka si／などの3拍語が 26.7%で、二つを合わせると、72.1%となる。3拍語と4拍語で全体の7割強を占める。

【表 6. 2. 1】『新潮現代国語辞典』和語名詞の拍数別に見た語数（1語平均 3.71 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	111	1, 294	3, 471	5, 910	1, 873	298	48	8	1	1	13, 015
百分率	0.9	9.9	26.7	45.4	14.4	2.3	0.4	0.1	0.0	0.0	100.0

## 6. 2. 2 音素分布

『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 6. 2-1〉, 語末〈音素表 6. 2-2〉, 語全体〈音素表 6. 2-3〉の音素表をそれぞれ作成し, 表は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 6. 2-1〉は, 語頭における音素分布である。子音音素, 母音音素, 拍の出現率を【表 6. 2. 2】【表 6. 2. 3】【表 6. 2. 4】にまとめる。上段は度数, 下段は子音総数, 母音総数, 拍総数を分母とする百分率である。

【表 6. 2. 2】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
0	2709	1032	2099	74	1330	42	1448	177	924	1687	120	20	1348
0.0	20.8	7.9	16.1	0.6	10.2	0.3	11.1	1.4	7.1	13.0	0.9	0.2	10.4

r	N	Q	合計
5	0	0	13015
0.0	0.0	0.0	100.0

【表 6. 2. 3】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
4493	2587	2435	848	2652	0	13015
34.5	19.9	18.7	6.5	20.4	0.0	100.0

【表 6. 2. 4】『新潮現代国語辞典』の語頭多頻度拍

拍	/ka/	/Xo/	/Xa/	/ha/	/hi/	/Xi/	/Xu/	/si/	/mi/	/ma/
度数	926	790	749	615	569	566	530	490	426	424
百分率	7.1	6.1	5.8	4.7	4.3	4.3	4.1	3.8	3.3	3.3

語頭には濁音，ラ行音が少ない。これは，上代より続く位置による制限である。／X／が20.8%と最も多く，次いで，／k／の16.1%，／h／の13.0%と続く。母音音素では，／a／の34.5%が最も多い。拍では，／ka／の出現率が7.1%と高い。

稿末別紙資料〈音素表 6. 2-2〉は，語末における音素分布である。子音音素，母音音素，拍の出現率を【表 6. 2. 5】【表 6. 2. 6】【表 6. 2. 7】にまとめる。

【表 6. 2. 5】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
93	1082	427	1852	567	1323	349	1375	259	778	89	542	32	1564
0.7	8.3	3.3	14.2	4.4	10.2	2.7	10.6	2.0	6.0	0.7	4.2	0.2	12.0

r	N	Q	合計
2606	77	0	13015
20.0	0.6	0.0	100.0

【表 6. 2. 6】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
2351	5645	608	2567	1674	170	13015
18.1	43.4	4.7	19.7	12.9	1.3	100.0

【表 6. 2. 7】『新潮現代国語辞典』の語末多頻度拍

拍	/ri/	/si/	/ki/	/mi/	/Xi/	/ke/	/ra/	/me/	/ti/	/re/
度数	1472	900	880	660	617	467	446	434	425	345
百分率	11.3	6.9	6.8	5.1	4.7	3.6	3.4	3.3	3.3	2.7

位置による制限で，語頭では／r／がほとんど出現しないが<sup>26</sup>，語末の子音音素では／r／が著しく多く，20.0%，次いで，／k／の14.2%，／m／の12.0%，／t／の10.6%と続く。語末では語頭に比べて，濁音／g z d b／が多い。その理由は，「落ち葉」「値上げ」な

ど、連濁、動詞連用形名詞の影響である。また、語頭に多く出現した、／h／が、ハ行転呼音が理由で語末では少ない。和語名詞において、語末には／r／がよく用いられる。その理由については、6.7で述べる。

語中語末で、単独母音拍が来るのを避けていたが、次第に、語中語尾にも単独母音拍が出現するようになる。『日葡辞書』の和語名詞においては、語末における単独母音拍の出現率は、9.9%であった。『新潮現代国語辞典』では、8.3%である。ここで、単独母音拍／Xa／／Xu／／Xo／について詳しく見てみたい。

〈音素表 6.2-1〉を見ると、語頭では749例と多く出現した単独母音拍／Xa／が、〈音素表 6.2-2〉を見ると、語末では出現しない。ハ行転呼音とは、ハ行がワ行に変化し、さらにア行に変化するのであるが、／wa／が／Xa／に変化することはなかったことも、／Xa／が語末に現れないことに影響しているだろう。

語頭〈音素表 6.2-1〉では530例だった／Xu／も、語末〈音素表 6.2-2〉では、3例（1拍語の「卯、兎、鶉」）しかない。これらは1拍語なので、語頭と語末が同じであるから、例外としてもよいであろう。語末に単独母音拍の／Xa／／Xu／が来ると、和語らしくないと感じるのも、数値の上からもわかる。

／Xo／も語頭〈音素表 6.2-1〉では790例（646+144）だったが、語末〈音素表 6.2-2〉では126例と約6分の1である。主に、本来は音韻の制限を受けて出現しないはずであるが、ハ行転呼音や、ワ行音の変化によって、出現したものである。

母音音素では、／i／が最も多く、全体の43.4%を占める。『日葡辞書』では、41.0%であったから、さらに2.4ポイント増えている。母音音素では、／i／／e／が語頭に比べて多い。これは、動詞連用形名詞の影響が大きいと考えられる。詳しくは6.6で述べる。／u／は、やはり語末で少なく、4.7%しかない。

頻度9以下の一般拍の語末拍（拗音除く）を9つ挙げると、

／Xa／0、／pi／0、／pu／1、／pe／2、／Xu／3、／gu／3、／he／3、／mu／9、／zo／9である。パ行はもともと少ないが、／u／を持つ拍が目につく。／u／で終わる和語名詞は少ないことがわかる。

稿末別紙資料〈音素表 6.2-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6.2.8】【表 6.2.9】【表 6.2.10】にまとめる。

【表 6. 2. 8】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
494	5746	2572	6930	2451	4317	1571	5279	1189	3299	2193	1802	127	5158
1. 0	11. 9	5. 3	14. 3	5. 1	8. 9	3. 3	10. 9	2. 5	6. 8	4. 5	3. 7	0. 3	10. 7

r	N	Q	合計
4637	287	272	48324
9. 6	0. 6	0. 6	100. 0

【表 6. 2. 9】『新潮現代国語辞典』和語名詞の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
14746	12712	6682	4886	8245	1053	48324
30. 5	26. 3	13. 8	10. 1	17. 1	2. 2	100. 0

【表 6. 2. 10】『新潮現代国語辞典』和語名詞の多頻度拍

拍	/ka/	/ri/	/si/	/ki/	/Xi/	/ma/	/mi/	/ta/	/na/	/Xa/
度数	2132	2107	2109	1871	1774	1590	1552	1446	1296	1209
百分率	4. 4	4. 4	4. 4	3. 9	3. 7	3. 3	3. 2	3. 0	2. 7	2. 5

語全体では、子音音素では、/k/が14.3%と最も多く、次いで、/X/の11.9%、/t/の10.9%、/m/の10.7%と続く。母音音素では、/a/が最も多く、30.5%であり、次が/i/の26.3%である。拍では、/ka/が最も多く用いられている。『日葡辞書』における和語名詞と非常によく似た音素分布である。

### 6. 2. 3 音素配列

『新潮現代国語辞典』における和語名詞の母音音素の配列について調べた結果、1044の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 6. 2〉として、その一部を挙げる。【表 6. 2. 11】は、度数 568 以上の母音配列を示したものである。

【表 6. 2. 11】から母音の配列順序を見ると、/a/の2連続が語頭、語末に多く見られる。母音/a/-/i/、/u/-/i/、/o/-/i/、/a/-/e/の配列も語頭、語末に多い。3母音音素の連続として、/a/-/a/-/i/、/i/-/a/-/i/が多いのが特徴的である。これまで、3母音音素の連続として、上位にあった/a/-/a/-/a/は、566例で、25位であった。

【表 6. 2. 11】『新潮現代国語辞典』和語名詞の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	i } }	5645	/i/ が語末	13	a e }	1031	語末が /a/-/e/ で終わる
2	{ { a	3917	/a/ が語頭	14	{ a i	959	語頭が /a/-/i/ で始まる
3	{ { i	2587	/i/ が語頭	15	{ { e	848	/e/ が語頭
4	e } }	2567	/e/ が語末	16	a a }	818	語末が /a/-/a/ で終わる
5	{ { o	2369	/o/ が語頭	17	a a i	796	/a/-/a/-/i/ の連続
6	{ { u	2214	/u/ が語頭	18	{ u i	795	語頭が /u/-/i/ で始まる
7	a i }	2018	語末が /a/-/i/ で終わる	19	{ o i	695	語頭が /o/-/i/ で始まる
8	a } }	2009	/a/ が語末	20	o o }	631	語末が /o/-/o/ で終わる
9	o } }	1627	/o/ が語末	21	{ i o	613	語頭が /i/-/o/ で始まる
10	{ a a	1332	語頭が /a/-/a/ で始まる	22	{ i a	608	語頭が /i/-/a/ で始まる
11	u i }	1282	語末が /u/-/i/ で終わる	23	{ a e	587	語頭が /a/-/e/ で始まる
12	o i }	1043	語末が /o/-/i/ で終わる	24	i a i	568	/i/-/a/-/i/ の連続

#### 6. 2. 4 品詞別・拍数別に見た語数

ここで、『新潮現代国語辞典』に収録されている和語名詞以外の品詞、和語動詞、和語形容詞、和語形容動詞、和語副詞について、その音韻的特徴についてまとめたい。自立語のみを調査対象としたが、連体詞や接続詞などは数が少ないため、省略した。【表 6. 2. 12】は品詞別、拍数別に見た語数である。

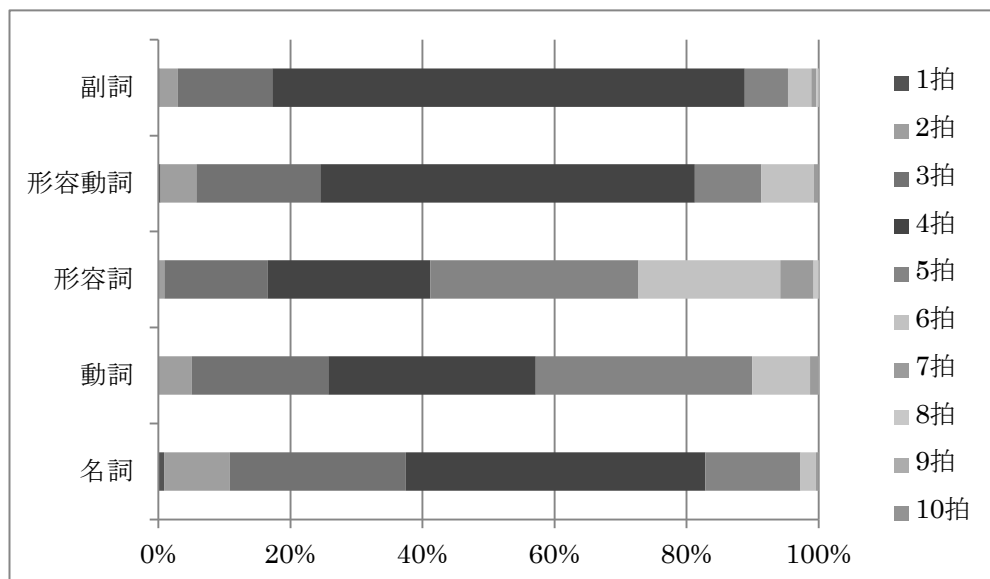
【表 6. 2. 12】『新潮現代国語辞典』における品詞別、及び拍数別に見た語数

	名詞		動詞		形容詞		形容動詞		副詞		計	拍別
1 拍	111	0.9	0	0.0	0	0.0	1	0.4	3	0.2	115	0.6
2 拍	1294	9.9	251	5.1	6	0.9	15	5.4	42	2.8	1608	7.9
3 拍	3471	26.7	1027	20.7	102	15.6	52	18.8	216	14.3	4868	23.8
4 拍	5910	45.4	1559	31.4	161	24.7	157	56.7	1082	71.5	8869	43.4
5 拍	1873	14.4	1626	32.8	206	31.5	28	10.1	99	6.6	3832	18.8
6 拍	298	2.3	435	8.8	140	21.4	22	7.9	53	3.5	948	4.6
7 拍	48	0.4	63	1.3	33	5.1	2	0.7	12	0.8	158	0.8
8 拍	8	0.1	1	0.0	5	0.8	0	0.0	5	0.3	19	0.1
9 拍	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0
10 拍	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0
計	13015	100.0	4962	100.0	653	100.0	277	100.0	1512	100.0	20419	100.0
品詞別	63.7		24.3		3.2		1.4		7.4		100.0	

品詞ごとに左の列には、語数を、右の列に品詞ごとに拍数別に見た語数の比率をフォント Century で示している。品詞ごとに語数の合計を示し、その下には、すべての語数を足した 20419 語のうち、各品詞がどのぐらいの割合を示しているか示している。名詞が最も多く、63.7%、次に動詞が多く 24.3%、2 品詞で全体の 9 割弱を占める。

〔グラフ 6.2.1〕は、品詞ごとに拍数別に見た語数の割合を示したグラフである。名詞においては、6.2 で述べたように、「綾織り（あやおり）」「幻（まぼろし）」などの 4 拍語が最も多い。動詞、形容詞は、「起き上がる」「買い替える」、「荒っぽい」「珍しい（めずらしい）」などの 5 拍語が、4 拍語よりも、それぞれ、1.4 ポイント、6.8 ポイント多い。形容動詞は、「浅はか」「細やか」「懇ろ」などの 4 拍語が最も多く、その比率は他の品詞よりも大きいのが特徴である。副詞も、「時たま」「はきはき」などの 4 拍語が 71.5% も占める。「りんりん」「じろじろ」「わんわん」などの音象徴語が多く含まれるからである。

〔グラフ 6.2.1〕



#### 6.2.5 品詞別に見た音素分布

和語名詞の音素分布については、6.2.2 で見たので、ここでは、他の品詞の音素分布について述べたい。ただし、動詞、形容詞、形容動詞は活用するため、終止形ですべて調査するのは、あまり意味をなさないため、語頭のみの調査とする。【表 6.2.13】は名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞における語頭の音素分布を示したものである。語頭のみの調査であるので、特殊拍を構成する音素については省略した。品詞の右横の比率は、品詞毎

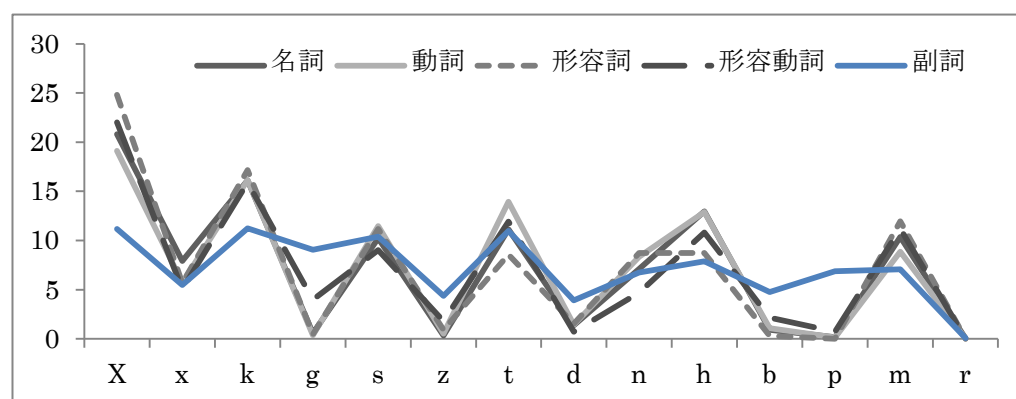


の各子音音素の占める割合である。

【表 6. 2. 13】 品詞別に見た語頭における子音の音素分布

	名詞	比率	動詞	比率	形容	比率	形動	比率	副詞	比率	合計	比率
X	2709	20.8	949	19.1	162	24.8	61	22.0	169	11.2	4050	19.8
x	1032	7.9	283	5.7	37	5.7	14	5.1	83	5.5	1449	7.1
k	2099	16.1	801	16.1	112	17.2	44	15.9	170	11.2	3226	15.8
g	74	0.6	18	0.4	3	0.5	11	4.0	137	9.1	243	1.2
s	1330	10.2	569	11.5	73	11.2	25	9.0	157	10.4	2154	10.5
z	42	0.3	26	0.5	6	0.9	5	1.8	66	4.4	145	0.7
t	1448	11.1	692	13.9	56	8.6	33	11.9	166	11.0	2395	11.7
d	177	1.4	71	1.4	10	1.5	2	0.7	59	3.9	319	1.6
n	924	7.1	414	8.3	57	8.7	13	4.7	102	6.7	1510	7.4
h	1687	13.0	640	12.9	57	8.7	30	10.8	119	7.9	2533	12.4
b	120	0.9	54	1.1	2	0.3	6	2.2	72	4.8	254	1.2
p	20	0.2	6	0.1	0	0.0	2	0.7	104	6.9	132	0.6
m	1348	10.4	439	8.8	78	11.9	31	11.2	107	7.1	2003	9.8
r	5	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.1	6	0.0
合計	13015	100.0	4962	100.0	653	100.0	277	100.0	1512	100.0	20419	100.0

〔グラフ 6. 2. 2〕



これまで、名詞を中心に音素分布について述べてきた。辞書の見出し語において、和語の自立語を調査対象とすると、【表 6. 2. 12】より、その約 60%が名詞である。実際に、テキストで用いられる場合は、後述の 6. 5 の【表 6. 5. 0a】からもわかるように、用言も多く使用される。

語頭における音素分布の特徴として、／X／（単独母音拍の子音部）が多く出現すること

を述べてきた。【表 6.2.13】より、和語名詞においては、20.8%の比率である。動詞、形容詞、形容動詞も語頭において、最も多いのは、／X／である。名詞のみの特徴ではなく、他の品詞についても同様であることがわかる。副詞は、音象徴語を多く含むことから、他の品詞とは異なる特徴を示す。語頭においても、濁音が他の品詞より多く出現する。／p／が6.9%と多いことも特徴である。

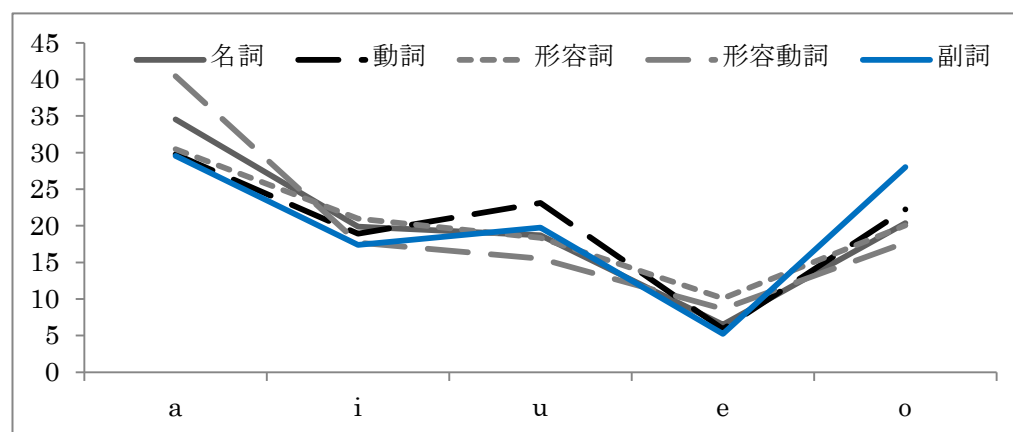
次に母音の音素分布について【表 6.2.14】にまとめる。品詞の右横の比率は、品詞ごとの各母音音素の占める割合である。

最も多く用いられる母音は、各品詞とも／a／である。語頭における母音の音素分布は、品詞に関係なく、ほぼ同じである。

【表 6.2.14】品詞別に見た語頭における母音の音素分布

	名詞	比率	動詞	比率	形容	比率	形動	比率	副詞	比率	合計	比率
a	4493	34.5	1478	29.8	199	30.5	112	40.4	447	29.6	6729	33.0
i	2587	19.9	940	18.9	137	21.0	49	17.7	263	17.4	3976	19.5
u	2435	18.7	1147	23.1	120	18.4	43	15.5	299	19.8	4044	19.8
e	848	6.5	292	5.9	66	10.1	24	8.7	79	5.2	1309	6.4
o	2652	20.4	1105	22.3	131	20.1	49	17.7	424	28.0	4361	21.4
合計	13015	100.0	4962	100.0	653	100.0	277	100.0	1512	100.0	20419	100.0

〔グラフ 6.2.3〕



以上、和語における音素分布について述べた。次の節は、漢語の音韻構造について述べる。

### 6.3 『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造

#### 6.3.1 字数・語構成別、及び拍数別に見た語数

調査対象は『新潮現代国語辞典』の見出し語として載っているすべての漢語である。ただし、梵語は調査対象から除外した。例えば、サンスクリット語の音訳である「阿羅漢」「釈迦」などは採録していない。また、混種語も調査対象から省いた。

単字項目については、造語成分ではなく、自立用法（名詞、動詞、形容動詞、タリ形動、副詞）がある語についてのみ、1字漢語として取り上げる。なお、漢語を品詞によって分けず、漢語全体の音素分布の調査を行うこととする。

『新潮現代国語辞典』の見出しの漢語は、すべてで33406語である。字数・語構成別の語数を【表 6.3.0】に示す。（ ）の中は語例である。1)～6)は語構成上分割できず、7)以降は、分割できるものであるが、その語構成も『新潮現代国語辞典』によった<sup>27)</sup>。

【表 6.3.0】『新潮現代国語辞典』漢語の字数・語構成別に見た語数

		1 字	2 字	3 字	4 字	5 字	6 字	7 字
1)	1 拍	237(胃)						
2)	2 拍	946(愛)	3(妓夫)					
3)	3 拍	1(埒)	5(布袋)	1(不如帰)				
4)	4 拍		19(沢庵)	3(甚兵衛)	1(胡麻菓子)			
5)	5 拍			7(道明寺)	1(土左衛門)			
6)	6 拍			1(唐変木)				
7)	1 拍+1 拍		1396(意志)					
8)	1 拍+2 拍		5425(理想)	41(過保護)				
9)	1 拍+3 拍			181(胃下垂)	1(御無沙汰)			
10)	1 拍+4 拍			222(亜熱帯)	1(擬羊皮紙)			
11)	1 拍+5 拍				3(非社会性)			
12)	1 拍+6 拍				5(亜高山帯)			
13)	2 拍+1 拍		5541(倉庫)	13(受話器)				
14)	2 拍+2 拍		17416(感心)	100(悪趣味)	4(是是非非)			
15)	2 拍+3 拍			310(一個人)	7(四捨五入)			
16)	2 拍+4 拍			419(悪感情)	30(裸子植物)			
17)	2 拍+5 拍				23(正多面体)	2(新古典主義)		
18)	2 拍+6 拍				4(性染色体)	5(多肢選択法)		
19)	2 拍+8 拍					1(副交感神経)		
20)	3 拍+1 拍			50(過熟児)				

21)	3 拍+2 拍			189(花崗岩)	13(車間距離)			
22)	3 拍+3 拍				36(自業自得)			
23)	3 拍+4 拍				66(千差万別)			
24)	3 拍+6 拍					1(征夷大將軍)		
25)	3 拍+8 拍							1 <sup>28</sup>
26)	4 拍+1 拍			101(拡声器)	2(被保険者)			
27)	4 拍+2 拍			280(柑橘類)	30(音標文字)	2(御都合主義)		
28)	4 拍+3 拍				78(悪戦苦闘)	8(過酸化水素)		
29)	4 拍+4 拍				87(観葉植物)	2(不可侵条約)		
30)	4 拍+5 拍					2(含水化合物)	1(不飽和化合物)	
31)	4 拍+6 拍					1(頸腕症候群)	1(一挙手一投足)	
32)	5 拍+1 拍				3(不定型詩)			
33)	5 拍+2 拍				13(筋無力症)	1(金山寺味噌)		
34)	5 拍+3 拍					3(多国籍企業)		
35)	5 拍+4 拍					3(無脊椎動物)		
36)	5 拍+5 拍						3(高分子化合物)	
37)	5 拍+6 拍						1(二等辺三角形)	
38)	6 拍+1 拍				2(八十八夜)			
39)	6 拍+2 拍				4(腸閉塞症)	1(紀事本末体)		
40)	6 拍+3 拍					2(大回轉競技)		
41)	6 拍+4 拍					1(十一面觀音)		
42)	6 拍+5 拍						1(一卵性双生児)	
43)	6 拍+6 拍						1(頸肩腕症候群)	
44)	7 拍+2 拍					2(総代理店制)		
45)	7 拍+4 拍						2(百八十度回轉)	
46)	8 拍+1 拍				1(三六〇度)	1(三十三回忌)		
47)	1+1+1 拍			1(未曾有)				
48)	1+1+2 拍			1(序破急)				
49)	1+2+1 拍			3(知情意)				
50)	1+2+2 拍			4(衣食住)				
51)	2+1+1 拍			1(身口意)				
52)	2+1+2 拍			2(天地人)				
53)	2+2+1 拍			4(真善美)				
54)	2+2+2 拍			8(松竹梅)				
55)	1+1+2+2 拍				1(喜怒哀樂)			
56)	1+2+1+2 拍				2(地水火風)			
57)	1+2+2+2 拍				3(起承転結)			
58)	2+1+1+2 拍				1(鰥寡孤独)			
59)	2+2+1+1 拍				1(行住坐臥)			

60)	2+2+1+2 拍				2(空即是色)			
61)	2+2+2+2 拍				1(冠婚葬祭)			
	合計(33406)	1184	29805	1942	426	38	10	1

最も多い漢語は、2字漢語である。全 33406 語のうち、29805 語であり、全体の 9 割近く (89.2%) を占める。その中でも 14) 2 拍 + 2 拍が最も多く、17416 語、2 字漢語 29805 語のうちの 58.4%、全漢語のうちの 52.1%を占める。つまり、全漢語のうちの半分以上が 2 拍 + 2 拍の 4 拍 2 字漢語である。

玉村(1984)に、常用漢字表の字音の頭音、末音の分布表が示されているが、2029 例の読み方のうち、1 拍は 488 例、2 拍は 1541 例である。漢字のみを見ても、2 拍の読み方が全体の 75.9%を占めていることがわかる。辞書には常用漢字表にない字音 (「布袋」など)、表外字 (「埒」など) も含まれているが、それを考慮しないで述べると、例えば 2 字漢語の場合、最初に 2 拍の読み方が来る比率が 1541/2029、次も 2 拍の読み方が来る比率が 1541/2029、つまり 2 拍 + 2 拍になる比率は  $1541/2029 \times 1541/2029 \times 100 = 57.7\%$  である。2 字漢語 29805 語のうち 2 拍 + 2 拍は 58.4%出現するという結果とほぼ同じ結果が出ている。

【表 6.3.1】は字数に関係なく拍数別に見た語数である。4 拍語は計算すると (【表 6.3.0】の 4) 9) 14) 20) 48) 49) 51) を足す)、17780 語であり、全漢語のうちの 53.2%を占める。中野 (1973) では、新聞の語彙調査により、異なり語数で漢語 16735 語を得ているが、そのうち 4 拍語は 9040 語で、漢語全体の 54.0%を占める。調査対象と調査方法が違っても異なりでは、4 拍の漢語が半分を占めるという同様の結果が出ていることがわかる<sup>29</sup>。

【表 6.3.1】『新潮現代国語辞典』漢語の拍数別に見た語数 (1 語平均 3.62 拍)

	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	11 拍	12 拍	合計
本調査語数	237	2345	11028	17780	864	817	202	107	13	7	5	1	33406
百分率	0.7	7.0	33.0	53.2	2.6	2.4	0.6	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

中野(1973)	393	1895	5300	9040	59	35	13*						16735
----------	-----	------	------	------	----	----	-----	--	--	--	--	--	-------

\*中野(1973)では 7 拍以上の語は分類せずにまとめて 13 語として掲載している。

### 6.3.2 音素分布

『新潮現代国語辞典』における漢語の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 6.3-1〉、語末〈音素表 6.3-2〉、語全体〈音素表 6.3-3〉の音素表をそれぞれ作成し、表

は別紙資料として稿末にあげる。

稿末別紙資料〈音素表 6.3-1〉は、語頭における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6.3.2】【表 6.3.3】【表 6.3.4】にまとめる。上段は度数、下段は子音総数、母音総数、拍総数を分母とする百分率である。

【表 6.3.2】『新潮現代国語辞典』漢語の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
0	2261	1033	6399	2008	6637	2423	3256	974	844	3262	1406	0	1127
0.0	6.8	3.1	19.2	6.0	19.9	7.3	9.7	2.9	2.5	9.8	4.2	0.0	3.4

r	N	Q	合計
1776	0	0	33406
5.3	0.0	0.0	100.0

子音で最も多く出現するのは、／s／／k／で、それぞれ、19.9%、19.2%である。この二つの音素で全体の約4割を占める。

しかし、各子音音素をよく見ると、直音と拗音の割合が異なる。各子音音素が半母音音素を伴う比率について見てみる。5.4の『日葡辞書』の漢語の調査で、【表 5.4.10】【表 5.4.11】でも触れたが、拗音が多く出現している。ここで、どの子音音素が半母音を多く伴うのかについて、詳しく見てみる。この場合、子音Øである単独母音拍と、現代語では、合拗音を作らない／w／は考察の対象とならない。

〈音素表 6.3-1〉の半母音＋子音計⑤を見ると、頻度2位の／k／は全6399個のうち拗音が941個(14.7%)なのに対して、頻度1位の／s／は全6637個のうち拗音は1869個(28.2%)である。倍近く／s／に拗音が多いことがわかる。語頭に出現する子音の中で半母音音素を最も高い割合で伴って出現する子音音素は／z／、全2423個のうち拗音は968個(40.0%)であった。

【表 6.3.2'】語頭において各子音音素が半母音を伴う比率（数値は%）

子音音素	/z/	/s/	/r/	/t/	/n/	/k/	/g/	/b/	/h/	/m/
各子音における半母音を伴う比	40.0	28.2	23.1	22.0	15.5	14.7	11.3	6.0	5.2	5.0

次に語頭に多く出現する母音について見る。

【表 6. 3. 3】『新潮現代国語辞典』漢語の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
7608	5708	4869	5569	9652	0	33406
22.8	17.1	14.6	16.7	28.9	0.0	100.0

母音／o／が 28.9%で最も多く、／a／の 22.8%，以下、／i／，／e／，／u／の順に出現する。ただし、次に引き音節が来るかどうかは大きく異なる。漢語はその音韻的特徴として、引き音節が多く出現することが挙げられる。／o／が 9652 個で最も多く出現するが、61.1%の比率で次に引き音節が来る。それに対して、次に多い／a／は 7608 個であるが、2 拍目が引き音節になる比率はゼロである。もっとも、ア段長音は本調査では、語頭だけでなくどの位置でも出現しなかった。イ段長音も著しく少なく、今回の調査で得られたのは、詩歌、四時、蠱眞、弑虐、判官蠱眞の 5 例のみである。4 番目の／e／の次に引き音節が来る比率は 34.6%であるが、これを引き音節とみない立場をとれば、オ段長音が多いという特徴はもっと顕著になる。

ついでに、語頭拍の半母音音素と次の引き音節の関係についてふれておく。半母音音素を伴わない母音合計（子音合計④）は 26802 個、半母音を伴う母音合計（⑤）は 6505 個である。2 拍目に引き音節が来る母音に注目してみると、母音音素のみと半母音音素＋母音音素では顕著な差が見られる。母音音素のみの場合、2 拍目に引き音節が来ない母音の合計は、21084 個、2 拍目に引き音節が来る母音は 5718 個、それに対して、半母音音素＋母音音素の場合は、2 拍目に引き音節が来ないものは 3463 個、2 拍目に引き音節が来る場合は 3042 個である。つまり、半母音音素を伴わない母音音素のみの場合、次に引き音節が来る比率が 21.3%なのに対して、半母音音素＋母音音素の連続は次に引き音節が来る比率が 46.8%と高くなるのである。半母音音素を伴った母音音素の次にオ段長音が来る比率（ $2419/3488 \times 100 = 69.4\%$ ）、ウ段長音が来る比率（ $623/2302 \times 100 = 27.1\%$ ）は、半母音音素を伴わない母音の次にオ段長音が来る比率（ $3480/6164 \times 100 = 56.5\%$ ）、ウ段長音が来る比率（ $305/2567 \times 100 = 11.9\%$ ）と比べて高いことがわかる。

【表 6. 3. 3'】

	第 2 拍が引き音節でない	第 2 拍が引き音節である	合計
語頭拍が半母音を伴わない	21084 (78.7%)	5718 (21.3%)	26802 (100.0%)
語頭拍が半母音を伴う	3463 (53.2%)	3042 (46.8%)	6505 (100.0%)

次に、語頭に多く出現する拍について見る。

【表 6.3.4】『新潮現代国語辞典』漢語の語頭多頻度拍

拍	/ka/	/ko/	/si/	/se/	/Xi/	/ki/	/hu/	/sa/	/ke/	/ha/
度数	1875	1627	1448	1434	969	884	852	849	840	789
百分率	5.6	4.9	4.3	4.3	2.9	2.6	2.6	2.5	2.5	2.4

語頭において、/ka/の出現率が最も多く、5.6%である。これは、『日葡辞書』の和語名詞と同じ結果で、語種が異なるにも関わらず、同じ拍の出現率が最も高いのは、面白い。なお、和語名詞の場合はの/kā/の出現率は7.1%である。

稿末別紙資料〈音素表 6.3-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6.3.5】【表 6.3.6】【表 6.3.7】にまとめる。

【表 6.3.5】『新潮現代国語辞典』漢語の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m
9648	2614	268	5801	746	1843	847	2731	194	27	380	337	191	189
28.9	7.8	0.8	17.4	2.2	5.5	2.5	8.2	0.6	0.1	1.1	1.0	0.6	0.6

r	N	Q	合計
363	7227	0	33406
1.1	21.6	0.0	100.0

【表 6.3.6】『新潮現代国語辞典』漢語の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
1725	6247	6742	129	1688	16875	33406
5.2	18.7	20.2	0.4	5.1	50.5	100.0

【表 6.3.7】『新潮現代国語辞典』漢語の語末多頻度拍

拍	/N/	/o:/	/ku/	/Xi/	/tu/	/e:/	/ki/	/si/	/ka/	/zi/
度数	7227	6091	3483	2525	2218	2083	1377	755	632	464
百分率	21.6	18.2	10.4	7.6	6.6	6.2	4.1	2.3	1.9	1.4

語末においては、引き音節/R/が 28.9%で最も多い。全体の3割弱を占める。次に多いのは、撥音の/N/で 21.6%である。この二つは特殊拍である。したがって、語末における母音の音素分布では、母音∅が約半分を占めることになる。特殊拍以外で、語末に多



く用いられる子音は、／k／の 17.4%である。出現する母音の中では、／u／が 20.2%で最も多く、次が／i／の 18.7%である。

漢字音が日本に入ってきて、長い年月を経て、韻尾が次のように変化し、現代においては、【表 6.3.5】【表 6.3.6】【表 6.3.7】のような分布を示すに至った。

すなわち、韻尾がどのように変化したのかを見ると、

母音の類 [i] [u]・・・単独母音拍か引き音節へ

鼻音の類 [n] [m] [ŋ]・・・[n] [m] は撥音、[ŋ] は、引き音節か、単独母音拍へ

入声の類 [p] [t] [k]・・・[t] [k] は／t／／k／か促音へ、[p] は引き音節か促音へとなる。それぞれの具体的な数値が表から読み取れる。

稿末別紙資料〈音素表 6.3-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6.3.8】【表 6.3.9】【表 6.3.10】にまとめる。

【表 6.3.8】『新潮現代国語辞典』漢語の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p
18858	9905	2080	19612	4328	14435	5511	9751	2239	1708	5007	3044	761
15.6	8.2	1.7	16.2	3.6	11.9	4.6	8.1	1.9	1.4	4.1	2.5	0.6

m	r	N	Q	合計
2419	3979	15335	1905	120877
2.0	3.3	12.7	1.6	100.0

子音では、引き音節／R／は2位で子音全体の 15.6%を占め、／X／と／x／の子音0と合わせると、子音全体では1位となり全体の 25.5%，およそ四分の一を占める。引き音節は語頭に立たないにも関わらず、高い数値である。撥音も語頭には立たないが、子音全体では3位で 12.7%である。その他、語頭に出現する子音音素との違いは／h／が挙げられる。語頭では接辞「不」が多用されることもあり<sup>30</sup>、9.8%で3位だったが、全体で見ると、8位で 4.1%である。

また、語頭における音素分布と同様に、／k／は全 19612 個のうち拗音が 1709 個(8.7%)なのに対して、／s／は全 14435 個のうち、拗音は 4206 個(29.1%)である。語頭における比較より、さらに／k／に拗音が少ない。子音の中で、半母音音素を最も高い割合で伴って出現する子音音素は／z／、全 5511 個のうち拗音は 2102 個(38.1%)である。

【表 6.3.8'】各子音音素が半母音を伴う比率（数値は%）

子音音素	/z/	/s/	/r/	/t/	/n/	/g/	/k/	/b/	/m/	/h/	/p/
各子音における半母音を伴う比	38.1	29.1	25.1	14.5	13.8	11.0	8.7	6.0	5.7	5.2	4.2

次に、母音音素について見てみる。

【表 6.3.9】『新潮現代国語辞典』漢語の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
15537	18319	18811	11798	20314	36098	120877
12.9	15.2	15.6	9.8	16.8	29.9	100.0

母音では、母音∅である引き音節、撥音、促音を除いて、多く出現するものから並べると、／o／の16.8%、／u／の15.6%、／i／の15.2%、／a／の12.9%、／e／の9.8%となる。／o／は語頭でも全体でも多く用いられる。／u／は語頭では最も少なかったが、全体では2番目、／i／はどちらの場合でも真ん中であり、／a／は語頭では2番目だったが、全体では4番目、／e／は全体としてあまり用いられない。なお、／o／は、60.4%（ $(6992+5281)/20314 \times 100$ ）の比率で次に引き音節が来る。／e／は、34.9%（ $4114/11798 \times 100$ ），／i／は、13.1%（ $(664+1802)/18811 \times 100$ ）の比率で引き音節が来る。／o／は他の母音に比べて次に引き音節が来る割合が圧倒的に多い。

また、半母音音素を伴う拍と次の引き音節の関係について、ここでもふれておく。〈音素表 6.3-3〉を参照する。半母音音素を伴わない母音合計は70950個、半母音音素+母音音素合計（⑤）は13588個である。2拍目に引き音節が来ない母音の合計は、59175個、2拍目に引き音節が来る母音は11775個（④の／R／），それに対して、半母音音素+母音音素の場合は、2拍目に引き音節が来ない母音は6505個、2拍目に引き音節が来る母音は7083個（⑤の／R／）である。つまり、半母音音素を伴わない母音音素のみの場合、次に引き音節が来る比率が16.5%なのに対して、半母音音素+母音音素の連続は次に引き音節が来る比率が52.1%と高くなる。漢語の特徴として、さらに顕著な結果が出た。

【表 6.3.9'】

	次の拍が引き音節でない	次の拍が引き音節である	合計
半母音を伴わない拍	59175 (83.4%)	11775 (16.5%)	70950 (100.0%)
半母音を伴う拍	6505 (47.9%)	7083 (52.1%)	13588 (100.0%)

次に、拍について述べる。

【表 6. 3. 10】『新潮現代国語辞典』漢語の多頻度拍

拍	/N/	/o:/	/Xi/	/ku/	/jo:/	/e:/	/ka/	/tu/	/si/	/ki/
度数	15335	6992	6573	6271	5281	4114	3877	3196	3084	2984
百分率	12.7	5.8	5.4	5.2	4.4	3.4	3.2	2.6	2.6	2.5

撥音／N／，／o／の後の引き音節／o:/／は，特殊拍で，語頭には立たないが全体としてはよく用いられている。また 3 位 4 位の／i／／ku／も語頭における音素分布表〈音素表 6. 3-1〉を見ると，それほど高い数値ではない。／i／が語頭に現れるのは 969 例，／ku／が語頭に現れるのは 232 例である。つまり，／i／は全 6573 個のうち 14.7%が，／ku／は全 6271 個のうち，3.7%のみが語頭に現れるということになる。主に，語中語尾で用いられる拍である。／ka／は語頭では 1875 例(48.4%)で最も多く出現し，全体でも 5 位で漢語においてよく用いられる拍であると言える。また，出現位置にかかわらず，漢語全体においても出現しなかった拍は，／hju／／pju／／mju／である。

### 6. 3. 3 音素配列

『新潮現代国語辞典』における漢語の母音音素の配列について調べた結果，1113 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 6. 3〉として，その一部を挙げる。【表 6. 3. 11】は，度数 1900 以上の母音配列を示したものである。特殊拍が目立つ。

【表 6. 3. 11】『新潮現代国語辞典』漢語の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	N } }	7227	／N／(撥音) が語末(母音 Ø)	13	{ { u	2567	／u／が語頭
2	{ { a	6794	／a／が語頭	14	{ jo:o	2419	語頭が／j/+/o/-/R/
3	u } }	6320	／u／が語末	15	{ e N	2402	語頭が／e/-/N/で始まる
4	i } }	6247	／i／が語末	16	{ a i	2382	語頭が／a/-/i/で始まる
5	{ { o	6164	／o／が語頭	17	e N }	2379	語末が／e/-/N/で終わる
6	:o } }	6091	オ段引き音節が語末	18	{ { ju	2302	／ju／が語頭
7	{ { i	5708	／i／が語頭	19	{ a N	2249	語頭が／a/-/N/で始まる
8	{ { e	5569	／e／が語頭	20	e :e }	2083	語末 2 拍が／e/-/R/
9	{ { jo	3488	／jo／が語頭	20	:e } }	2083	エ段引き音節が語末
10	{ o:o	3480	語頭が／o/-/R/で始まる	22	a i }	1995	語末が／a/-/i/で終わる
11	o :o }	3325	語末 2 拍が／o/-/R/	23	{ e :e	1929	語頭が／e/-/R/で始まる
12	jo :o }	2766	語末 2 拍が／j/+/o/-/R/	24	a N }	1900	語末が／a/-/N/で終わる

## 6.4 『中央公論』における外来語の音韻構造

### 6.4.1 現代資料『中央公論』

6.2, 及び 6.3 では, 辞書を資料として調査してきたが, この節では, 雑誌『中央公論』に実際に使用されている外来語を調査対象にする。なお, 『新潮現代国語辞典』初版を対象とした外来語の語形の調査には, 橋本(1997)がある。

本節では, 雑誌『中央公論』1906 年から 2006 年までの 10 年ごと, 11 年度分の語彙表を資料として, 調査することにした。内容, 対象の面で一般性があり, 創刊年が 1887 年と古い『中央公論』の語彙調査が 1986 年まで行われているので, 1996 年と 2006 年の調査を新たに加え, それを資料とした。辞書の見出し語数と比べて, 語数は少なくなるが<sup>31</sup>, 実際に使用されている語の調査に近づくことはできるであろう。

標本ぬきだしの単位は, 1/10 ページである。以下これを「ブロック」とよぶ。ブロックの決定は行数によっている。1 ブロックの言語量は, 年によって異なるため, 延べ 10,000 語の標本をとるために必要なブロックの数も年によって違う。1 年を通じての合計ページ数も異なるので, 抽出比も一定していない。以下, 各年の抽出比である。

【表 6.4.1】

	総ページ	抽出ブロック数	抽出比
1906	1,890	466	1/41
1916	4,170	462	1/90
1926	6,344	452	1/140
1936	7,016	421	1/167
1946	1,460	310	1/47
1956	4,360	337	1/129
1966	5,268	359	1/147
1976	5,090	379	1/134
1986	4,812	403	1/119
1996	4,960	418	1/119
2006	4,402	454	1/97
計	49,772	4,461	1/112

### 6.4.2 外来語の定義

外来語の定義については, 1.3.3 で述べたが, 説明を補足する。本研究での外来語の判定は, 『新潮現代国語辞典』に従った。漢語は含まないが, サンスクリット語, アイヌ語は含む。語種の判定に迷う場合は, 『新選国語辞典』第 8 版も参照した。混種語は対象から除いた。ローマ字略語は対象に含めるが, 外国語の語句がそのままアルファベット表記され

ている場合は、外国語として外来語と区別し、対象に含めなかった。但し、日本語の語句の中に、語の一部としてアルファベットで取り入れられている場合は、調査対象とした。外来語がルビとして使用される場合も、調査対象に含めた。

固有名詞については、「英」「米」など、外国名を漢字一字で記したものは外来語として含めなかったが、「亜米利加」「独逸」など国名として略されずに表記されたものや、「澳」（オーストラリア）「土」（トルコ）など、音を漢字一字に略したものは「おー」「と」と読んで、外来語として扱っている。

#### 6.4.3 外来語の音韻体系

現代語においては、外来語も含めて調査する必要があるが、これまで採ってきた音韻体系には、当てはまらない音素が用いられる。そこで、本節では、外来語の音韻体系について、整理する。

外来語は、和語や漢語に比べて語数が少ないうえに、表記、発音にゆれが激しいため、その音韻体系の設定には困難が伴う。外来語音のうち、何を日本語の一部として認めるかには、様々な先行研究があり、松崎（1993a）がまとめて一覧表の形式で示しているので、それを【表 6.4.2】として引用する。

松崎自身は、先行研究で指摘されたすべてを認める立場であり、言わば固有音を含めた拍の全体は【表 6.4.3】のように示される。

本節では、この松崎の【表 6.4.3】の拍をすべて認める。【表 6.4.3】中の二重下線\_\_は、平成3年内閣告示第2号の『『外来語の表記』に用いる仮名と符号の表』のうち第1表にある仮名、波下線\_\_\_は、第2表にある仮名である。閣告示第2号の『『外来語の表記』に用いる仮名と符号の表』は、6.4.4に載せている。

フの位置づけは問題があるところである。小泉（1990）は、フはハ行の正規音であるが、新たにファ行が認定されると、フはその両唇摩擦という音の性質上、新設のファ行へ移動しなければならないとしている。松崎以後に現れた研究として猪塚・猪塚（2003）があって、先行研究にない「フョ」を認め、フに関係する拍の配列を次のように示している。□で囲んだのが外来語音であり、テュ・デュは認められていない。

ナ	ヌ	ネ	ノ
ニャニ	ニユ	□ニエ	ニョ
ハ		ヘ	ホ

ヒャヒ ヒュ ヒェ ヒョ  
ファ フ フェフォ  
フィフユ フヨ

この配列では、/i/ を伴った拍はすべて半母音をふくむことになり、煩雑である。松崎はフをハ行音に属するとし、この点でも本節は松崎による。猪塚・猪塚の「フヨ」も認め、松崎の【表 6. 4. 3】の /fju/ の右に /fjo/ として設定する。

合拗音は認めない研究が多く、松崎も猪塚・猪塚も認めていない。松崎の【表 6. 4. 3】にもあげられていないが、合拗音を認める研究に次がある。表記は文献に用いられているものをそのまま引用する。

金田一 (1967)	ku_a
吉田 (1983)	kwa kwo
カッケンブッシュ・大曾 (1990)	kwa kwi kwe kwo gwa gwe

本節では、カッケンブッシュ・大曾を拡張してグイ、グオで合拗音を認める。音素表記は次のようにする。

/kwa kwi kwe kwo/ (クア, クイ, クエ, クオ)/gwa gwi gwe gwo/ (グア, グイ, グエ, グオ)

#### 【表 6. 4. 2】外来語音の解釈

	シェ	ジエ	エ	ヒエ	ニエ	ツァ	ツェ	ツォ	スィズ	イツィ	ティデ	イトゥ	トゥテ	デュファ	フィ	フェ	フォ	フユ	ウィ	ウェ	ウォ
1	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○
2	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○
3	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○
4	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
5	○	○	○	○	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○
6	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
7	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○
8	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
9	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○
10	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×
11	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表中の記号 1. R. A(1975), 2. 亀井・金田一 (1955), 3. 金田一(1967), 4. 馬淵(1971), 5. 城生(1977), 6. 古田(1980), 7. 吉田(1983), 8. 沢木(1983), 9. 上村(1989), 10. 小泉(1990), 11. カッケンブッシュ・大曾(1990)

【表 6.4.3】

／si se sa so su／ (スィ セ サ ソ ス)	
／zi ze za zo zu／ (ズィ ゼ ザ ズ ズ)	／sji sje sja sjo sju／ (シ <u>シエ</u> シヤ ショ シュ)
／zji zje zja zjo zju／ (ジ <u>ジエ</u> ジャ ジョ ジュ)	／ci ce ca co cu／ (ツィ <u>ツエ</u> ツァ ツォ ツュ)
	／cji cje cja cjo cju／ (チ <u>チエ</u> チャ チョ チュ)
／i e a o u／ (イ エ ア オ ウ)	／hi he ha ho hu／ (ヒ ヘ ハ ホ フ)
／je ja jo ju／ (ヰ <u>ヰエ</u> ヤ ヨ ユ)	／hje hja hjo hju／ (ヒエ ヒヤ ヒョ ヒュ)
／ni ne na no nu／ (ニ ネ ナ ノ ヌ)	
／nje nja njo nju／ (ニエ ニヤ ニョ ニュ)	
／gi ge ga go gu／ (ギ <u>ゲ</u> ガ コ ク)	／ki ke ka ko ku／ (キ ケ カ コ ク)
／gja gjo gju／ (ギヤ ギョ ギュ)	／kja kjo kju／ (キャ キョ キュ)
／ri re ra ro ru／ (リ レ ラ ロ ル)	
／rja rjo rju／ (リヤ リョ リュ)	
／bi be ba bo bu／ (ビ <u>ベ</u> バ ホ フ)	／pi pe pa po pu／ (ピ <u>ペ</u> パ ポ フ)
／bja bjo bju／ (ビヤ ビョ ビュ)	／pja pjo pju／ (ピヤ ピョ ピュ)
／mi me ma mo mu／ (ミ メ マ モ ム)	
／mja mjo mju／ (ミヤ ミョ ミュ)	
／di de da do du／ (ヂ <u>ヂエ</u> タ ト <u>ト</u> ヅ)	／ti te ta to tu／ (ティ <u>テ</u> タ ト <u>ト</u> ヅ)
／dju／ (ヂュ)	／tju／ (チュ)
／wi we wa wo／ (ウィ <u>ウェ</u> リ <u>ウ</u> ヅ)	／fi fe fa fo／ (フィ <u>フェ</u> ファ <u>フ</u> ヅ)
	／fju／ (フュ)
／N Q R／ (ノ ヱ ヲ)	

本節の外来語音は、【表 6.4.3】のすべての音と、／fjo／ (フヨ)、及び、／kwa kwi kwe kwo／ (クア、クィ、クエ、クオ)／gwa gwi gwe gwo／ (グア、グィ、グエ、グオ)とする。

#### 6.4.4 外来語の表記

標準語形が一つにかぎらないことは、和語や漢語においても、「むずかしい～むづかしい」「さみしい～さびしい」「きりはり～きりばり」「けんきゅうしょ～けんきゅうじょ」のような例からもわかるが、外来語の場合は、標準語形を定めるには難しい点が多い。

第1表				
ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キシ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ				
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ			デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ	ピ	プ	ペ	ポ
キャ		キュ		キョ
シャ		シュ		ショ
チャ		チュ		チョ
ニャ		ニユ		ニョ
ヒャ		ヒユ		ヒョ
ミャ		ミユ		ミョ
リャ		リユ		リョ
ギャ		ギユ		ギョ
ジャ		ジュ		ジョ
ピャ		ピユ		ピョ
ン	(撥音)			
ッ	(促音)			
ー	(長音符号)			

第1表

ツァ                      チェ  
                             ツェ    ツォ  
                             ティ  
ファ    フィ              フェ    フォ  
                             ジェ  
                             ディ  
                             デュ

第2表

                             イェ  
                             ウェ    ウォ  
                             クエ    クォ  
                             ウィ  
クァ    クイ              クォ  
                             ツイ  
                             トゥ  
グァ                      ドゥ  
ヴァ    ヴィ              ヴェ    ヴォ  
                             ヴ  
                             テュ  
                             フュ  
                             ヴュ

表記の上では、外来語の表記は、現代かなづかいを適用することができず、また、新しく入ってきて、まだ定着しきれていない語もあるため、表記を一定にすることが難しい。例えば、英語の ” processor” は、「プロセサ」「プロセッサ」「プロセサー」「プロセッサー」「プロセサア」「プロセッサア」の6通りの表記が可能である<sup>32</sup>。

外来語の表記の基準としては、まず、昭和29年(1954)に国語審議会部会報告として発表された「外来語の表記について」がある。その後、平成3年(1991)6

月に「外来語の表記」に関する内閣告示第2号が出て一部変更された。左上の表はその「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表である。

昭和29年報告と平成3年告示の大きな違いは、①昭和29年報告では、なるべくほかのカナで書く、あるいは言及されていなかった、「シェ」「チェ」「ツァ、ツェ、ツォ」「ティ」「ファ、フィ、フェ、フォ」「ジェ」「ディ」「デュ」を第1表に入れ、「一般的に用いる仮名」としたこと、②平成3年告示で、「外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名」として、新たに「イェ」「クイ、クエ、クォ」「ツイ」「トゥ」「ドゥ」「テュ」「フュ」「ヴュ」を追加したことである<sup>33</sup>。

変更の背景には、外国語教育などの影響で、近年日本語音ではあまり発音されなかった音を意識して使用する人が増えたことや、原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする傾向も見られるということがあるのだろう。

内閣告示以外にも、電気工学系で用いられる『学術用語集』や共同通信社の『記者ハンドブック』などで、表記についての記述がある<sup>34</sup>。

本研究は、記述の差異を記すのが目的ではなく、外来語においては表記のゆれが多く見



られること、その背景について述べるにとどまる。なお、表記のゆれについて計量的に調査したものに、宮島(1974)(1984)、松崎(1992)(1993b)、坂本(2002)、発音のゆれを面談で調査した永田(1988)などがある。

#### 6.4.5 表記と発音の関係

表記のゆれと発音のゆれは無関係ではない。表記のゆれが見られるのには、発音のゆれがあるはずである。またその逆もあるであろう。本調査で表記のゆれがあったものを稿末に資料〈付表C〉としてまとめた。発音ではなく、促音や撥音、長音や拗音の表記だけが変わった語や、「ヂ」「ヅ」を用いている語も含まれるが、これらは音素調査の上では重要ではない。引き音節かどうかは、『明解日本語アクセント辞典』によった<sup>35</sup>。外来語を扱う上で特に問題となるのは、特殊拍の有無、母音交替、子音交替、半母音の有無などである。音素の違いは勿論、「フィ」や「フイ」、「ウイ」や「ウィ」ではどちらをとるかによって、拍数が変わってくる。しかし、複数ある語形のうち、どれが標準形か決めにくい。したがって、基本的には、出現形をその語の語形とし、複数の表記例がある場合は、最も一般的に用いられていると考えられるものを代表形として定めた。異なり語数の調査のときは、この代表形を用いることとする。

表記や発音にゆれがあるのは前述の通りだが、果して、表記と発音は一致しているのだろうか。和語や漢語でも特に引き音節において、現代仮名遣いと発音が一致していない。外来語の場合はさらに多種多様の問題がある。まず、挙げられるのは、表記が違ってても、発音が同じ場合である。原語の表記や発音「v」の場合、「ヴァ、ヴィ・・・」を用いてもよいことになっているが<sup>36</sup>、有声唇歯摩擦音は日本語にはない音なので、正しく発音できる人は少ないであろう。したがって、表記に「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ、ヴュ」とあっても、発音は「バ、ビ、ブ、ベ、ボ、ビュ」と同じである。「ヂ、ヅ、ヂャ、ヂュ、ヂェ、ヂョ」が「ジ、ズ、ジャ、ジュ、ジェ、ジョ」と同じであるのも無論である。もっとも、「ヂ、ヅ、ヂャ、ヂュ、ヂェ、ヂョ」は、「外来語の表記」では用いない仮名である。

また、話者によって発音できない音も存在する。高齢の話者は、外来語音を正しく発音できない場合が多い。「ファン」と表記されていても、「フアン」と発音することもあるだろう。高齢層だけの問題ではない。松崎(1992)の記述によると、大学生29人を対象にした調査で、発音は日本語式に「ウイスキー」24人が「ウィスキー」5人を上回ったが、表記は「ウィスキー」19人、「ウイスキー」10人と、英語式のほうが上回ったという調査結果

もある。一個人の間でも、発音と表記にゆれがあるのである。どちらが標準語形かを決めるのは甚だ困難な作業である。雑誌で実際に使われた外来語の出現形を標準形にするのは妥当であると考ええる。

#### 6.4.6 外来語の語数

『中央公論』の1906年から2006年まで、10年ごとに1万語を抽出し、その語種分布を示した。延べ語数を【表 6.4.4】に、ことなり語数を【表 6.4.5】に示す。

【表 6.4.4】『中央公論』外来語の延べ語数

	年度	1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1986	1996	2006
延べ	和語	5799	6049	6069	5773	5353	5751	5390	5482	5184	5296	5039
	漢語	3260	3012	2906	3135	3448	3090	3409	3087	3377	3241	3327
	外来語	87	87	112	148	154	243	238	371	352	429	404
	混種語	854	852	913	944	1045	916	963	1060	1087	1034	1230
	計	10000	10000	10000	10000	10000	10000	10000	10000	10000	10000	10000

【表 6.4.5】中央公論』外来語の異なり語数

	年度	1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1986	1996	2006
異なり	和語	1595	1600	1709	1623	1319	1424	1335	1522	1293	1396	1381
	漢語	2189	2090	2047	2242	2246	2040	2341	2241	2335	2245	2281
	外来語	72	69	86	108	113	161	190	281	282	338	301
	混種語	627	654	694	777	761	716	783	892	885	847	996
	計	4483	4413	4536	4750	4439	4341	4649	4936	4795	4826	4959

『中央公論』101年、11年度分、11万語のうち、外来語は異なり語数1542、延べ語数2625であった。ここでは、辞書の代わりに、『中央公論』で実際に用いられている外来語の調査を行うので、異なり語数での調査となる。1542語を対象に音素分布表を作成する。

#### 6.4.7 拍数別に見た語数

拍数と語数の関係を【表 6.4.6】に示す。上段は拍数、下段は語数である。

2006年の調査では、<http://www.chuko.co.jp/>、[chuokoron@nifty.com](mailto:chuokoron@nifty.com)など、URLやメールアドレスなども出現し、それらを1語として扱ったため、非常に長い語が存在することになった。拍数の合計は8165拍、平均は5.30拍である。URLやメールアドレスであ

る 44 拍以上の語を 1 語とするのは、無理があるとも言えるので、それらを省いて、平均拍数を求めると、5.11 拍となる。『新潮現代国語辞典』を対象として調査した、和語名詞 3.71 拍、漢語の 3.62 拍と比べると、1 拍以上長い。最も多いのは、「アイデア」「スタート」などの 4 拍語である。

【表 6.4.6】『中央公論』外来語の拍数別に見た語数（1 語平均 5.30 拍）

拍数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
語数	1	81	282	377	264	199	133	87	42	29	20	9	4	2

15	17	19	44	45	64	67	96	計
4	1	2	1	1	1	1	1	1542

#### 6.4.8 音素分布

異なり語数 1542 語を対象に音素分布表〈音素表 6.4-3〉を作成した。詳述しないため、出現位置別の表は作成せず、語全体の音素分布表のみである。この節で、設定したものの、出現しなかったのは、「イエ」「クァ」「クィ」「クェ」「グァ」「グェ」「グォ」「スイ」「ズィ」「ドウ」「デュ」「ニエ」「ヒエ」「フュ」であった。合拗音は「クォンデ」「グイッチャルディーニ」（ともに人名）で現れたのみであった。

音素全体としては、特殊音が多いこと、／r／、単独母音拍の使用頻度が高いこと、母音では／u／の使用頻度が高いことが特徴である。本研究では音素分布には、特に触れず、現代語の音韻体系について、述べたい。

この節で、外来語を含めた調査をするにあたり、現代の音韻体系について、改めて設定をし直した。しかし、〈音素表 6.4-3〉を見てみると、外来語のみの調査であるにも関わらず、新しく設定した外来語音はそれほど出現していないことがわかる。

外来語音の出現頻度を【表 6.4.7】に示す。なお、これまでの音素表記との混乱を避けるため、仮名表記で代用する。出現しなかった先述の 14 音は省略する。

【表 6.4.7】

ウイ	ウエ	ウオ	クオ	グイ	シェ	ジエ	テイ	トゥ	ツァ	ツイ	ツエ	ツォ	チェ	デ <sup>°</sup> イ	デ <sup>°</sup> ユ
10	8	8	1	1	4	13	51	4	5	2	1	3	6	39	5

ファ	フィ	フェ	フォ	合計
23	14	8	8	214

全拍数が 8165 であるので、その出現率は、2.6%ということになる。【表 6.4.5】より、外来語は増加傾向にあるものの、全体から見れば、どの年度も数パーセントの出現率であり、和語や漢語に比べると、その占める割合は少ないことがわかる。したがって、本節で、外来語音を設定するために、音韻体系について見直したが、外来語の与える影響は少ないと言える。

音韻体系について、外来語を考慮して、音素分布表は、新しい設定で作成するが、これまでの調査と比較するために、/c/は/t/と、/f/は/h/と合算するのがよいと考える。「シ」は、/s/と/ji/のように、半母音を入れて、設定したが、本研究では、出現率を出すときに、半母音を考慮していないので、半母音について考察するとき以外は、問題とならない。

## 6.5 『中央公論』の音韻構造

### 6.5.1 調査対象

調査対象は、『中央公論』の語彙調査を行った年度の中で、最も新しい年である 2006 年の 1 月から 12 月に発行された雑誌『中央公論』から抽出した 1 万語を用いた。総拍数は 49556 拍である。他の時代の調査は 1 万拍を対象としているため、量としては約 5 倍の大きさとなる。そのようにした理由は、辞書の見出しの調査でも規模が膨らんだのに見合うようにするためである。

語の採集の方法はすべて国立国語研究所(1987)に従っている。6.4.1 で述べたように、2006 年の 1 年間を通じての合計ページ数は、4402 ページ、抽出ブロック数は 454 であるので、抽出比は 1/97 である。

### 6.5.2 拍数別に見た語数

『中央公論』から採集した 1 万語を見出し語形に直し、語種及び品詞別に分類すると、【表 6.5.0】のようになる。品詞の分類は『分類語彙表』による。

和語が 50.4%で、テキスト全体の半分を占める。漢語は、33.3%、外来語は 4.0%のみである。「長い単位」で切っているのが、漢語サ変動詞は、すべて混種語となることもあり、その比率はやや高く、混種語は、12.3%である。その中でも、和語＋漢語が最も多く、9.5%である。

【表 6. 5. 0a】語種及び品詞別（延べ）

品詞・語種	和語	漢語	外来語	和+漢	和+外	漢+外	和+漢+外	計
体の類	1528	2986	389	432	26	210	26	5597
用の類	2439	–	–	501	8	–		2948
相の類	876	337	15	20	1	1		1250
その他の類	197	8						205
計	5040	3331	404	953	35	211	26	10000

ここでは、テキスト類として、『中央公論』を調査するので、延べの語種がわかればよいのだが、参考に異なりの語種及び品詞別に示したものも載せておく。【表 6. 5. 0b】は異なりを語種及び品詞別に示したものである。延べ1万語で、異なりは4958語得られた。和語名詞は異なり565語、延べ1528語であり、漢語は異なり2280語、延べ3331語である。和語名詞は平均2.7回用いられるのに対して、漢語は平均1.5回である。頻度が音素分布にどのような影響を与えるかについては、入江(2009)に記述がある。

【表 6. 5. 0b】語種及び品詞別（異なり）

品詞・語種	和語	漢語	外来語	和+漢	和+外	漢+外	和+漢+外	計
体の類	565	2083	288	377	26	194	26	3559
用の類	551	0	0	349	7	0	0	907
相の類	216	195	13	16	1	1	0	442
その他の類	48	2	0	0	0	0	0	50
計	1380	2280	301	742	34	195	26	4958

1万語を拍数別に見ると、【表 6. 5. 1a】のようになる。上段は拍数、下段は語数である。

【表 6. 5. 1a】2006年『中央公論』の拍数別に見た語数（1語平均4.96拍）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
24	1220	1831	2100	1947	932	678	433	312	140	116	86	47	38	23	14
17	18	19	20	21	22	23	24	25	34	39	44	45	64	67	96
13	11	6	3	5	4	4	2	3	1	1	2	1	1	1	1

非常に長い語が存在するのは、6.4.7で述べたように、URLやメールアドレスを一語としたためである。1語平均は4.96拍である。34拍以上の8語を除くと、4.92拍となる。「あいだに」／Xa Xi da ni／、「藤原」／hu zi xwa ra／、「いたのだ」／Xi ta no da／、

「付き合う」／cu ki Xa Xu／, などの4拍語が最も多く 21.0%, 次が「巨人ファン」／kjo zi N fa N／, 「行政の」／gjo R se R no／, 「指弾して」／sji da N sji te／などの5拍語で19.5%, そして, 「方は」／ka ta xwa／, 「畔」／ho to ri／, 「深い」／hu ka Xi／, 「見ろよ」／mi ro xjo／などの3拍語の18.3%と続く。3つの拍数の比率はあまり変わらず, 3拍から5拍の間に偏り, 全体の6割弱を占める。

ここで, 見出し語と実際にテキストで運用された形の出現形の拍数について, 調査する。延べ1万語で, 和語名詞は異なりで565語である。辞書の見出し語数と比べると, 少ない数ではあるが, 見出し語形に直して, 拍数別に見ると, 【表 6.5.1b】のようになる。

【表 6.5.1b】『中央公論』の和語名詞見出し語異なり (1語平均 3.62 拍)

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	12	123	165	143	58	32	20	9	2	1	565
百分率	2.1	21.8	29.2	25.3	10.3	5.7	3.5	1.6	0.4	0.2	100.0

最大10拍で, 1語あたりの平均は, 3.62拍である。6.2で『新潮現代国語辞典』を対象に調査した結果は, 【表 6.2.1】より, 見出し語数13015語で, 1語あたりの平均拍数は3.71拍であった。運用レベルで使われる和語名詞は, 0.09拍短いことになる。辞書を対象に同様の調査をすると, 4拍語が最も多く, 全体の45.4%を占めていたが, 実際に運用された和語名詞をもとに, 見出し語形にして調査をすると, 4拍語よりも3拍語のほうが多く使用されている。拍数の少ない語のほうが多く使用されているということになる。これに使用頻度をかけたものが, 【表 6.5.1c】である。

【表 6.5.1c】『中央公論』の和語名詞見出し語延べ (1語平均 2.84 拍)

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	合計
語数	39	778	353	220	68	37	20	10	2	1	1528
百分率	2.6	50.9	23.1	14.4	4.5	2.4	1.3	0.7	0.1	0.1	100.0

さらに, 短い2拍語が約半分を占めている。平均拍数も2.84拍となり, さらに短くなった。しかし, 実際には, 名詞だけで運用されるわけではない。助詞がついて, テキスト内で運用される。では, 次に, 出現形の調査を延べで行う。助詞の影響で, 1拍弱の拍の増

加が見込まれる。

【表 6.5.1d】『中央公論』の和語名詞出現形延べ（1 語平均 3.90 拍）

拍数	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	5 拍	6 拍	7 拍	8 拍	9 拍	10 拍	11 拍	合計
語数	4	98	642	389	228	91	40	20	12	2	2	1528
百分率	0.3	6.4	42.0	25.5	14.9	6.0	2.6	1.3	0.8	0.1	0.1	100.0

辞書の見出し語，テキストで使用された語を見出し語に直したものの，それに，実際の使用頻度をかけたもの，さらに，助詞がついて，運用された語，つまり出現形のままで調査したものを比較することによって次のことがわかった。

『新潮現代国語辞典』においては，和語名詞は 4 拍語が最も多く，全体の 45.4% を占めていたが，『中央公論』で実際に使用された和語名詞から見出し語に直して，同様の調査をすると，3 拍語が 29.2% で，4 拍語の 25.3% より多かった。さらに，使用された頻度をかけると，2 拍語が最も多く，全体の 50.9% を占め，3 拍語は 23.1%，4 拍語は 14.4% であった。しかし，実際に運用される際は，助詞がつくので，出現形のままで調査をした。すると，3 拍語が最も多くなり，42.0% を占めることとなった。出現形では，1 語あたりの平均拍数は，【表 6.5.1d】より，3.90 拍となった。

### 6.5.3 音素分布

『中央公論』から抽出した 1 万語，49556 拍分の音素分布表を出現位置別に作成した。語頭〈音素表 6.5-1〉，語末〈音素表 6.5-2〉，語全体〈音素表 6.5-3〉の音素表をそれぞれ作成し，表は別紙資料として稿末にあげる。なお，第 7 章で，半母音について述べるので，語全体の音素分布表〈音素表 6.5-3〉のみ，これまでの音韻体系と同様に，／c／／f／を設定していない音素分布表を〈音素表 6.5-4〉として作成した。

稿末別紙資料〈音素表 6.5-1〉は，語頭における音素分布である。子音音素，母音音素，拍の出現率を【表 6.5.2】【表 6.5.3】【表 6.5.4】にまとめる。

【表 6.5.2】『中央公論』の語頭における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t/c		d	n	h/f		b
0	1939	417	1676	226	1559	378	640	353	291	707	757	6	174
0.0	19.4	4.2	16.8	2.3	15.6	3.8	6.4	3.5	2.9	7.1	7.6	0.1	1.7

p	m	r	N	Q	合計
30	651	196	0	0	10000
0.3	6.5	2.0	0.0	0.0	100.0

【表 6. 5. 3】『中央公論』の語頭における母音の音素分布

a	i	u	e	o	Ø	計
2772	2486	1155	973	2614	0	10000
27.7	24.9	11.6	9.7	26.1	0.0	100.0

【表 6. 5. 4】『中央公論』の語頭多頻度拍

拍	/Xi/	/ko/	/ka/	/Xa/	/si/	/na/	/Xo/	/ta/	/so/	/ki/
度数	883	577	507	501	426	390	347	311	310	230
百分率	8.8	5.8	5.1	5.0	4.3	3.9	3.5	3.1	3.1	2.3

語頭においては、／X／が 19.4%と最も多く、次いで、／k／の 16.8%、／s／の 15.6%と続く。母音音素は、／a／が 27.7%で最も多く、／o／の 26.1%、／i／の 24.9%、／u／11.6%、／e／9.7%の順になる。

稿末別紙資料〈音素表 6. 5-2〉は、語末における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6. 5. 5】【表 6. 5. 6】【表 6. 5. 7】にまとめる。

【表 6. 5. 5】『中央公論』の語末における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t/c		d	n	h/f		b
294	1150	849	362	689	273	74	1711	96	522	2390	6	0	107
2.9	11.5	8.5	3.6	6.9	2.7	0.7	17.1	1.0	5.2	23.9	0.1	0.0	1.1

p	m	r	N	Q	合計
2	379	914	182	0	10000
0.0	3.8	9.1	1.8	0.0	100.0

【表 6. 5. 6】『中央公論』の語末における母音の音素分布

a	i	u	e	o	Ø	計
2631	1459	1165	1220	3049	476	10000
26.3	14.6	11.7	12.2	30.5	4.8	100.0



【表 6. 5. 7】『中央公論』の語末多頻度拍

拍	/no/	/ni/	/xwa/	/Xo/	/te/	/ga/	/ru/	/to/	/ta/	/de/
度数	1298	866	747	733	670	655	614	586	455	403
百分率	13.0	8.7	7.5	7.3	6.7	6.6	6.1	5.9	4.6	4.0

子音音素は、／n／が 23.9%で最も多く、次いで、／t／の 18.1%，／X／の 11.5%，／r／の 9.1%と続く。母音音素は、／o／が 30.5%で最も多く、次いで／a／が 26.3%である。拍は、「の」「に」「は／xwa／」「を／Xo／」「て」「が」「と」など、助詞を思い起こさせるものや、「る」「た」「で」など、用言や助動詞の語尾を思わせるものが、上位に来ている。

稿末別紙資料〈音素表 6. 5-3〉は、語全体における音素分布である。子音音素、母音音素、拍の出現率を【表 6. 5. 8】【表 6. 5. 9】【表 6. 5. 10】にまとめる。

【表 6. 5. 8】『中央公論』の語全体における子音の音素分布

R	X	x	k	g	s	z	t/c		d	n	h/f		b
3996	5397	1987	6122	1820	4684	1532	4169	1513	1809	4550	1241	19	821
8.1	10.9	4.0	12.4	3.7	9.5	3.1	8.4	3.1	3.7	9.2	2.5	0.0	1.7

p	m	r	N	Q	合計
330	2159	3389	3010	1008	49556
0.7	4.4	6.8	6.1	2.0	100.0

【表 6. 5. 9】『中央公論』の語全体における母音の音素分布

a	i	u	e	o	∅	計
11254	9026	6079	5392	9791	8014	49556
22.7	18.2	12.3	10.9	19.8	16.2	100.0

【表 6. 5. 10】『中央公論』の多頻度拍

拍	/N/	/Xi/	/ka/	/no/	/to/	/ta/	/si/	/ku/	/ni/	/o:/
度数	3010	2765	1867	1786	1531	1448	1438	1437	1397	1223
百分	6.1	5.6	3.8	3.6	3.1	2.9	2.9	2.9	2.8	2.5

語全体では、子音音素は、／k／が 12.4%で最も多く、次いで／t／の 11.5%，／X／の

10.9%, /s/ の 9.5% と続く。母音音素は, /a/ が 22.7%, /o/ が 19.8%, /i/ が 18.2% である。拍では, 撥音の出現率が最も高かった。

#### 6.5.4 音素配列

『中央公論』の母音音素の配列について調べた結果, 1576 の配列の組み合わせができた。稿末に資料〈音素配列表 6.5〉として, そのすべてを挙げる。【表 6.5.11】は, 度数 410 以上の母音配列を示したものである。

【表 6.5.11】『中央公論』の音素配列

位	配列	度数	説明	位	配列	度数	説明
1	o } }	2880	/o/ が語末	13	{ a i	639	語頭が /a/-/i/ で始まる
2	{ { a	2505	/a/ が語頭	14	{ i a	518	語頭が /i/-/a/ で始まる
3	{ { i	2396	/i/ が語頭	15	i o }	513	語末が /i/-/o/ で終わる
4	{ { o	2114	/o/ が語頭	16	{ { jo	499	/jo/ が語頭
5	a } }	1724	/a/ が語末	17	{ o :o	488	語頭が /o/-/R/ で始まる
6	i } }	1380	/i/ が語末	18	{ a a	466	語頭が /a/-/a/ で始まる
7	e } }	1203	/e/ が語末	19	{ i u	460	語頭が /i/-/u/ で始まる
8	u } }	1137	/u/ が語末	20	{ a u	449	語頭が /a/-/u/ で始まる
9	{ { e	970	/e/ が語頭	21	a i }	438	語末が /a/-/i/ で終わる
10	{ { u	847	/u/ が語頭	22	o o }	416	語末が /o/-/o/ で終わる
11	wa } }	713	/wa/ が語末	23	u o }	414	語末が /u/-/o/ で終わる
12	{ o o	672	語頭が /o/-/o/ で始まる	24	i a }	410	語末が /i/-/a/ で終わる

/wa/ が語末に来る配列が上位に来ているのが特徴的である。合拗音は出現しないので, すべて, 子音を伴わない単独半母音拍である。母音 /o/-/o/ の配列が語頭, 語末に多い。3 母音の連続で最も多いのは, 〈音素配列表 6.5〉より, 25 位の /a/-/i/-/a/ である。

#### 6.6 現代日本語の音韻構造

以上, 現代日本語の音韻構造について, 『新潮現代国語辞典』と『中央公論』を資料として述べてきた。現代日本語に関しては, 記述量が多いので, 簡潔にまとめる。また, 第 7 章で, 日本語の日本語の音韻構造の歴史として全体をまとめるので, 他の時代との比較は省略する。

『新潮現代国語辞典』における和語名詞は全部で 13,015 語であった。拍数別に分類すると, 4 拍語が 45.4% で最も多く, 次に多い 3 拍語 26.7% を合わせると, 全体の 72.1% で,

3拍語と4拍語で全体の四分の三弱を占める。1語平均は、3.71拍である。和語名詞だけでなく、動詞、形容詞、形容動詞、副詞についても調査した。これら5品詞の中で、名詞が63.7%と最も多く、動詞の24.3%と合わせると、全体の9割弱を占める。名詞、形容動詞、副詞においては、4拍語が最も多いが、動詞、形容詞は5拍語が最も多い。

漢語は、全部で33406語である。最も多い漢語は、2字漢語である。全33406語のうち、29805語であり、全体の9割近く(89.2%)を占める。その中でも2拍+2拍が最も多く、17416語で、2字漢語29805語のうちの58.4%、全漢語のうちでも52.1%を占める。つまり、全漢語のうちの半分以上が2拍+2拍の4拍2字漢語である。1語平均は、3.62拍である。

現代の音韻構造を調査するにあたり、外来語に出現する音素をこれまで設定した音韻体系の中にどう組み込むか、再考した。新しく、/c/ /f/の音素を追加することにより、これまで、「シ」は、/s/ + /i/としてきたが、/si/は、「スイ」とし、「シ」は半母音を加えた/sji/とした。「チ」も同様である。

1906年から2010年までの101年、11年度分の『中央公論』を調査対象とし、外来語の音素分布を調べた。その結果、異なり語数1542語が得られ、1語平均は、5.30拍で、和語名詞3.71拍、漢語3.62拍よりも、1拍以上長いことがわかった。音素分布では、新しく設定した外来語音の出現率は、全拍数のうち、わずか2.6%であった。テキストの中の、外来語もどの年度も数パーセントの使用にとどまっており、外来語音を考えて、音素体系を見直したが、外来語の影響は少ないと言える。そこで、新しく設定した、/c/は/t/と、/f/は/h/と考察するときに、合算して、これまでの調査と比較することにする。

テキスト類として、『中央公論』の語彙調査を行った年度の中で、最も新しい年度である2006年の1月から12月に発行された雑誌『中央公論』から抽出した1万語を対象に、これまでと同様の調査をした。和語が50.4%で、テキスト全体の半分以上を占める。漢語は、33.3%、外来語は4.0%のみである。混種語は、12.3%である。和語+漢語が最も多く、9.5%である。1万語を拍数別に見ると、4拍語が最も多く、21.0%、次が5拍語で19.5%、3拍語の18.3%と続く。数値はあまり変わらず、3拍から5拍の間に偏り、全体の58.8%を占める。1語平均は4.96拍である。

『新潮現代国語辞典』における和語名詞の音素分布では、語頭では、子音音素を伴わない/X/が20.8%と最も多く、次いで、/k/の16.1%、/h/の13.0%と続く。母音音素では、/a/の34.5%が最も多い。語末では、子音音素は/r/が多く、20.0%、次いで、/k/の14.2%、/m/の12.0%、/t/の10.6%と続く。語頭に多く出現した、/h/が、

ハ行転呼音が理由で語末では少ない。語中語末で、単独母音拍が来るのを避けていたが、次第に、語中語尾にも単独母音拍が出現するようになる。ただし、語頭では749例と多く出現した単独母音拍／Xa／が、語末では出現しない。ハ行転呼音とは、ハ行がワ行に変化し、さらにア行に変化するのであるが、／wa／が／Xa／に変化することはなかったことも、／Xa／が語末に現れないことに影響しているだろう。母音音素では、／i／が最も多く、全体の43.4%を占める。／u／は語末で少なく、4.7%しかない。／u／で終わる和語名詞は少ないことがわかる。母音音素では、／i／／e／が語頭に比べて多い。これは、動詞連用形名詞の影響が大きい。

また、和語名詞だけではなく、動詞、形容詞、形容動詞、副詞の音素分布についても調べた。語頭における和語名詞の音素分布の特徴として、子音を伴わない単独母音拍が20.8%で、多く出現することを述べてきた。動詞、形容詞、形容動詞も語頭において、最も多いのは、単独母音拍である。名詞のみの特徴ではなく、他の品詞についても同様であることがわかる。副詞は、音象徴語を多く含むことから、他の品詞とは異なる特徴を示す。語頭においても、濁音が他の品詞より多く出現する。／p／が6.9%と多いことも特徴である。

『新潮現代国語辞典』における漢語の音素分布では、語頭で最も多く現れる子音音素は、／s／の19.9%である。次に多い子音音素は／k／の19.2%、そして、／h／の9.8%、／t／の9.7%と続く。また、語頭では母音音素は／o／が28.9%、／a／が22.8%、／i／が17.1%、／e／が16.7%、／u／が14.6%の順に出現する。語末では、引き音節／R／が28.9%で最も多い。全体の3割弱を占める。次に多いのは、撥音の／N／で21.6%である。この二つは特殊拍である。したがって、語末における母音の音素分布では、母音∅が約半分を占めることになる。すべての漢語の子音音素を調査した場合、最も多い子音音素は／k／の16.2%である。次いで、引き音節／R／が15.6%、撥音／N／12.7%、／s／11.9%、単独母音拍8.2%、と続く。語頭では子音3位だった／h／は全体では8位であり、語頭により多く出現する音素であると言える。すべての漢語の母音音素を調査した場合、特殊拍が多いので、母音∅が最も多く29.9%、最も多く用いられる母音音素は／o／の16.8%である。ついで、／u／15.6%、／i／15.2%、／a／12.9%、／e／9.8%となる。ただし／o／は60.4%の割合で次に引き音節が来る。なお、本調査では／a／の次には引き音節は来なかった。イの引き音節も著しく少ない。すべての漢語の拍を調査した場合、最も多く用いられる拍は撥音／N／6.1%、次いで、引き音節／o:/5.8%、／Xi／5.4%、，／ku／5.2%である。

1906年から2010年までの101年、11年度分の『中央公論』における外来語の音素分布の調査では、「イエ」「クァ」「クィ」「クエ」「グァ」「グエ」「グォ」「スイ」「ズィ」「ドゥ」「テュ」「ニエ」「ヒエ」「フュ」が、調査範囲の中では出現しなかった。これは、表記との関連もあり、実際に使用されていないという意味ではない。また、新しく外来語音とした音素の出現率は、外来語すべてにおいて、わずか2.6%であり、テキストの中での外来語の使用率と合わせて考えてみても、その影響はわずかであり、これまでの音韻体系で問題はないと考えた。

テキスト類として、『中央公論』から抽出した1万語を対象にした音素分布の調査では、語頭においては、/X/が、19.4%と最も多く、次いで、/k/の16.8%、/s/の15.6%と続く。母音音素は、/a/が27.7%で最も多く、/o/の26.1%、/i/の24.9%、/u/11.6%、/e/9.7%の順になる。語末においては、子音音素は、/n/が23.9%で最も多く、次いで、/t/の18.1%、/X/の11.5%、/r/の9.1%と続く。母音音素は、/o/が30.5%で最も多く、次いで/a/が26.3%である。語全体では、子音音素は、/k/が12.4%で最も多く、次いで/t/の11.5%、/X/の10.9%、/s/の9.5%と続く。母音音素は、/a/が22.7%、/o/が19.8%、/i/が18.2%である。母音配列は、/wa/が語末に来る配列が上位に来ているのが特徴的である。母音/o/-/o/の配列が語頭、語末に多い。3母音の連続で最も多いのは、/a/-/i/-/a/である。

## 6.7 現代日本語における和語名詞と語構成との関わり

ここでは、和語名詞と語構成の関わりについて述べる。和語名詞の音素分布を出現位置別に見たとき、『源氏物語』『日葡辞書』『新潮現代国語辞典』では、「り」が多く出現した。『源氏物語』では、「さ」も多く出現した。「さ」は、形容詞から名詞を派生させる接辞「さ」、「り」は動詞との関連が考えられる。本節では、特に、語末の母音が/i//e/である和語名詞を中心に、語構成との関連について述べる。

### 6.7.1 語の構成

単語を構成する要素は、それだけで単語となることもある語基と、つねに語基と結合して単語の構成要素となる接辞に大きく分けられる。また、語基と接辞の組み合わせによって、次のように分類できる。

{ 単純語・・・ 語基ひとつからなる (例: 目, 山, 光)  
 { 合成語 { 派生語→語基と接辞からなる (例: お家, 憂さ)  
               { 複合語→語基 (ふたつ以上) だけからなる (例: 手足, 突き当たり, 上着, 我々)

### 6.7.2 拍数別の語構成

2 拍から 4 拍までの和語名詞を拍数別に単純語と合成語, また, 語の切れ目がどこにあるかによって, 分類したものを【表 6.7.1】に示した<sup>37</sup>。

語がどのように構成されているかを知るための語の切れ目は、『新潮現代国語辞典』第 2 版に従う。凡例の見出しの項目を一部, 引用する。

見出し

三, 複合語や漢字熟語は, 語源的または構造的に見て, 二つの部分に分け, その間を少しあけて示した。

あお あお【青青】

ゲン ジツ【現実】

三分・四分されるものもあり, 複合語であっても音転によって部分に分けられない語もある。また, 固有名詞は単純語として扱い, 見出しの仮名は漢字の音訓を示す。

カン カ コドク【(鰥寡孤独】

シン ゼン ビ【真善美】

テン チ ジン【天地人】

みょうと【((夫((妻】

エンタロウ【円太郎】

当然のことながら, 拍数が増えるにしたがって, 合成語の割合が増えている。また拍数別に見ても 4 拍語が全体の 45.4% (6.2【表 6.2.1】参照) を占め, 最も多いのだが, その中でも 2 拍 + 2 拍が 4 拍語の中で 84.3% を占めている。和語名詞全体から見ても, 38.3% と四割弱を占めていることになる<sup>38</sup>。漢語における調査でも, 33,406 語のうち, 17,520 語が 2 拍 + 2 拍の語であり, 全体の 52.4% (6.3【表 6.3.0】14) 参照) を占める。和語, 漢語ともに, 拍数別の語構成は 2 拍 + 2 拍が多いことがわかった。

その他, 和語名詞では, 1 拍 + 2 拍, 2 拍 + 1 拍, 2 拍 + 3 拍の語が多い。

【表 6. 7. 1】

2 拍名詞	語構成	語例	語数	百分率	3 拍名詞	語構成	語例	語数	百分率
単純語	○○	有り, 蟻	1,129	87.2%	単純語	○○○	秋刀魚	888	25.6%
合成語①	○+○	木場, 牙	165	12.8%	合成語①	○+○○	木靴	1237	35.6%
合成語②					合成語②	○○+○	旅路	1300	37.5%
合成語③					合成語③	○+○+○	茸	46	1.3%
合計			1,294	100.0%				3471	100.0%

4 拍名詞	語構成	語例	語数	百分率
単純語	○○○○	集まり, おたふく, 蟋蟀, 計らい	210	3.6%
合成語①	○+○○○	御下がり, 見通し, 歯車, 日当たり	485	8.2%
合成語②	○○+○○	折り込み, 貝殻, 逃げ道, 人聞き	4980	84.3%
合成語③	○○○+○	明るさ, 歌い手, 如月, だだっこ	91	1.5%
合成語④	○+○+○○	果物, 酔の物, 黄昏, 日の丸	53	0.9%
合成語⑤	○○+○+○	息の根, おととい, 熊の胆, わたつみ	90	1.5%
合成語⑥	○+○+○+○	てにをは	1	0.0%
合計			5910	100.0%

5 拍名詞	語構成	語例	語数	百分率
単純語	○○○○○	かたつむり, 滞り, ほととぎす	18	1.0%
合成語①	○+○○○○	居候, お姉さん, しあさって	54	2.9%
合成語②	○○+○○○	赤とんぼ, 肩ならし, 綿ぼこり	1497	79.9%
合成語③	○○○+○○	上がった, うってつけ, 被り物	201	10.7%
合成語④	○○○○+○	新し味, 恨みっこ, わからずや	17	0.9%
合成語⑤	○+○+○○○	えのあぶら, たなごころ, 火の車	12	0.6%
合成語⑥	○+○○+○○	お月さま, お酉さま, お星さま	3	0.2%
合成語⑦	○○+○+○○	秋の空, 生みの親, 関ヶ原	71	3.8%
合計			1873	100.0%

### 6. 7. 3 語構成別音素分布

ここでは、語構成によって、音素分布にどのような違いが現れるかについて、語と語が結合するときの音韻変化の一つである連濁に注目して述べる。【表 6. 7. 2】は、結合部分に濁音（／g z d b／）がどの程度出現するか数値で示す。3 拍名詞合成語③、4 拍名詞合成語③～⑥は語数が少ないため、調査の対象としない。また 5 拍名詞も単純語の数が少ないので、省略する。

連濁ではない濁音、例えば、3 拍名詞合成語①に属する「仕出し（シダシ）」の／d／、

3拍名詞合成語②に属する「足場（アシバ）」の／b／なども含まれているが、およその傾向は出ていると思われる。合成語の結合部分の濁音は、その拍の子音音素総数の3割弱から3割強を占め、単純語の同位置のそれと比較すると、およそ倍となっている。

【表 6.7.2】

結合部分の子音	g	z	d	b	濁音合計	総数	百分率
2拍単純語 2拍目	55	49	26	67	197	1129	17.4%
2拍合成語① ○+○	12	6	12	23	53	165	32.1%
3拍単純語 2拍目	67	59	31	61	218	888	24.5%
3拍合成語① ○+○○	164	106	81	112	463	1237	37.4%
3拍単純語 3拍目	41	24	15	35	115	888	13.0%
3拍合成語② ○○+○	125	41	57	140	363	1300	27.9%
4拍単純語 2拍目	11	11	6	9	37	210	17.6%
4拍合成語① ○+○○○	63	45	21	40	169	485	34.8%
4拍単純語 3拍目	13	4	6	10	33	210	15.7%
4拍合成語② ○○+○○	720	365	239	363	1687	4980	33.9%

#### 6.7.4 合成和語名詞の結合形式

『総合雑誌の用語』（後編）に、二単位の結合になる和語名詞(1,131語)について、その結合形式と語数を調べた結果が示されている。和語名詞を構成する要素のうち、語基としては、主に名詞・動詞連用形名詞・形容詞語幹の3種があり、これらが結合し合って、語を構成する。ここでは延べ語数は省略し、異なり語数のみを引用する。

【表 6.7.3】

結合形式	語数	百分率	語例
(1) 名詞+名詞	445	39.3%	朝日, 手紙, 父親
(2) 名詞+居体言 <sup>39</sup>	244	21.6%	夜明け, 夕暮れ, 間借り
(3) 居体言+名詞	154	13.6%	仕事, 立場, 笑い話
(4) 名詞+形容詞語幹	23	2.0%	色白, 身近, 身重
(5) 形容詞語幹+名詞	42	3.7%	悪口, 若者, 丸顔
(6) 居体言+居体言	29	2.6%	割合, 行き来, 取り引き
(7) 複合動詞からの転成	143	12.6%	呼びかけ, 結び付き
(8) 形容詞語幹+居体言	13	1.1%	渋好み, 長生き
(9) 疊語	38	3.4%	人々, われわれ, 長々
(10) 居体言+形容詞語幹	0	0.0%	待ち遠, 望み薄
(11) 形容詞語幹+形容詞語幹	0	0.0%	たかひく, 薄青



(1) に属するものが最も語数が多く、(2) (3) (7) がこれに次ぐ。この4つで全体の 87.2%を占め、4大勢力となっている。和語名詞を構成する2大成分は、名詞と動詞連用形名詞（複合動詞からの転成を含む）である。6.2 で述べたように、名詞語末の子音音素では／r／、母音音素では／i／、／e／が多い。和語名詞語末拍と動詞連用形名詞がどのように関わっているのか、語の最終成分を調べて、その割合を示すことによって、理由を明らかにしたい。

#### 6.7.5 語末に多く出現する拍

語末に多く出現する拍、頻度 400 以上の拍を【表 6.7.4】に挙げる。〈音素表 6.2-2〉

【表 6.7.4】

拍	／ri／	／si／	／ki／	／mi／	／Xi／	／ke／	／ra／	／me／	／ti／
度数	1472	900	880	660	617	467	446	434	425

上位5つの拍はすべて母音音素が／i／である。他のイ列音は、／g z d b／と、もともと少ない／p／、ハ行転呼音が理由で出現しなくなった／h／、残りは／n／である。五段活用動詞の連用形は／i／で終わるので、大いに関係がありそうである。そこで、次に語の最終成分について調査する。

#### 6.7.6 動詞連用形名詞の定義

ここで改めて、本研究での動詞連用形名詞の定義をしたい。動詞連用形名詞とは、動詞の連用形から形成された名詞のことである。複合動詞の連用形も同様であるとし、特に区別しない。また、「虫さされ」の「さされ」のように助動詞が付いた動詞も動詞に準ずると考えて、その連用形も、動詞連用形名詞に含むことにする。ただし、「果てし」のように、助詞がついたものは含まない。また、本研究では、語の最終拍と動詞連用形名詞の割合を示すことによって明らかにすることが目的であるので、「たらい」のように、「てあらい（手洗い）」が母音結合を起こしている場合も、最終成分は動詞連用形名詞と考えた。

しかし、「迎え」のように「迎え」が変化した語は、最終拍が変化しているので、動詞連用形名詞とせず、動詞由来の語とした。「手ぐすね」「おなら」のように、「ねり」「ならし」が変化したもの、また、連用形以外の他の活用形から転成した「そのけ」「見てくれ」なども、動詞由来の語とした。動詞連用形名詞であるかどうかは、『日本国語大辞典』第2版

によった。見出し語の下に「動詞（・・・）の連用形の名詞化」とあるものを動詞連用形名詞とした<sup>40</sup>。

#### 6.7.7 語末母音が／i／／e／である語の最終成分

和語名詞の最終成分の内訳を【表 6.7.5】に示す。名詞，動詞連用形名詞，形容詞語幹，接辞<sup>41</sup>，動詞由来の語，形容詞由来の語「おしろい，おすし，たのもし，なし，おもき」など，副詞由来の語，助詞が付いた語，語源不明の語に分類した。

【表 6.7.5】語末母音が／i／／e／である和語名詞の最終成分内訳

	名詞	動詞連用形 名詞	形容詞語幹	接辞	動詞 由来	形容詞 由来	副詞 由来	助詞	語源 不明	合計
／i／	2070	3432	0	47	0	38	12	1	45	5645
／e／	1292	1215	0	33	7	0	0	6	14	2567
計	3362	4647	0	80	7	38	12	7	59	8212

『総合雑誌の用語』（後編）の調査（【表 6.7.3】）では，最終成分に名詞が来る比率は 56.7%，動詞連用形名詞（複合動詞からの転成も含む）が来る比率は 37.9%である<sup>42</sup>。動詞連用形名詞となるのは，語末母音が／i／／e／の場合である。語末母音が／i／である語 5,645 語のうち，60.8%の 3,432 語，語末母音が／e／である語 2,567 語のうち，47.3%の 1,215 語が動詞連用形名詞である。

全和語名詞から見ると，13,015 語のうち，35.7%の 4,647 語の最終成分が動詞連用形名詞ということになる。二単位の結合になる和語名詞(1,131 語)を対象とした『総合雑誌の用語』（後編）の調査結果 37.9%とほぼ同様の結果が出ている。

#### 6.7.8 語末における上位 9 つの拍を持つ語の最終成分

最後に，語末の上位 9 つの拍の最終成分が何であることを明らかにしたい。【表 6.7.4】に挙げられた上位 9 つの拍の最終成分を，語の拍数ごとに【表 6.7.6】に示す。ただし，名詞，動詞連用形名詞以外はすべてその他としてまとめる。丸数字は順位である。7 位の／ra／446 は，名詞 402，動詞連用形名詞 0，その他 44（内訳：接尾辞 23，形容詞語幹 5，動詞由来 6，副詞 2，不明 8）である。

【表 6. 7. 6】

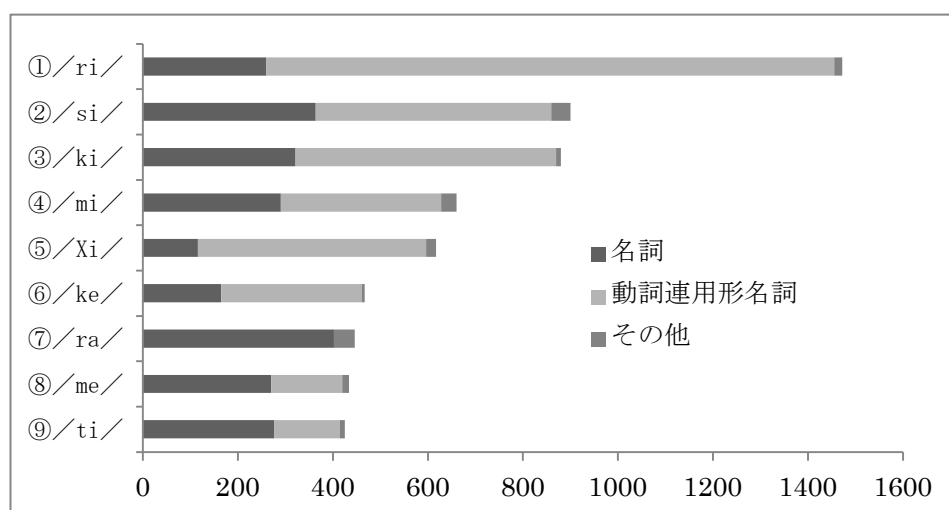
①/ri/	名詞	動連名	その他	計	②/si/	名詞	動連名	その他	計
1 拍					1 拍				
2 拍	36	42	1	79	2 拍	38	13	1	52
3 拍	52	217	7	276	3 拍	63	84	10	157
4 拍	117	534	9	660	4 拍	203	192	24	419
5 拍	45	347		392	5 拍	50	188	4	242
6 以上	10	55		65	6 以上	10	19	1	30
計	260	1195	17	1472	計	364	496	40	900

③/ki/	名詞	動連名	その他	計	④/mi/	名詞	動連名	その他	計
1 拍	2			2	1 拍	5			5
2 拍	31	31		62	2 拍	29	16	1	46
3 拍	96	95	4	195	3 拍	72	100	27	199
4 拍	150	357	5	512	4 拍	147	140	3	290
5 拍	32	49	1	82	5 拍	25	74	1	100
6 以上	10	17		27	6 以上	12	8		20
計	321	549	10	880	計	290	338	32	660

⑤/Xi/	名詞	動連名	その他	計	⑥/ke/	名詞	動連名	その他	計
1 拍	6			6	1 拍	2			2
2 拍	17	18		35	2 拍	21	18		39
3 拍	30	98	5	133	3 拍	52	61	2	115
4 拍	44	198	8	250	4 拍	70	194	1	265
5 拍	8	136	2	146	5 拍	19	19	3	41
6 以上	11	30	6	47	6 以上	1	4		5
計	116	480	21	617	計	165	296	6	467

⑧/me/	名詞	動連名	その他	計	⑨/ti/	名詞	動連名	その他	計
1 拍	5			5	1 拍	2			2
2 拍	24	12		36	2 拍	35	5		40
3 拍	138	37	12	187	3 拍	50	27	2	79
4 拍	81	84	2	167	4 拍	156	92	6	254
5 拍	17	14		31	5 拍	29	11	3	43
6 以上	5	3		8	6 以上	5	2		7
計	270	150	14	434	計	277	137	11	425

〔グラフ 6.7.1〕



それぞれの拍において、2拍語では、最終成分は名詞が多いか、動詞連用形名詞とあまり変わらないかである。拍数が増えるにしたがって、動詞連用形名詞が増える傾向が見られる。西尾(1988)に「〈取り・聞き・比べ・だまし・奪い〉なども、その単独の形では名詞になりにくい、複合的な形では名詞化される」とあるが、それを裏付ける結果と言える。

また、拍によって、最終成分の内訳が随分異なることがわかる。/ri/は、/ri/全体の81.2%が動詞連用形名詞と圧倒的に多いが、/me/ /ti/では、逆に名詞のほうが多い。これらは、元の動詞の音韻構造にも触れなければならないが、本研究では割愛する。

以上、現代日本語における和語名詞の音韻構造について、音素分布を作成し、語構成との関わりから考察を試みた。和語名詞で最も多いのは4拍語で、全体の45.4%を占める。語構成別にみると、2拍+2拍の語が和語名詞全体の38.3%を占め、最も多い。語の成分の結合部分では、連濁の影響で単純語の場合と比べて、濁音が約2倍出現する。語末では、母音音素/i/ /e/が多いが、動詞連用形名詞は、4,647語で、和語名詞全体の35.7%であることがわかった。拍ごとにみると、異なった結果が得られた。語頭には出現しない/ri/が語末では最も多く出現するが、その81.2%が動詞連用形名詞である。

## 第7章 日本語の音韻構造の歴史

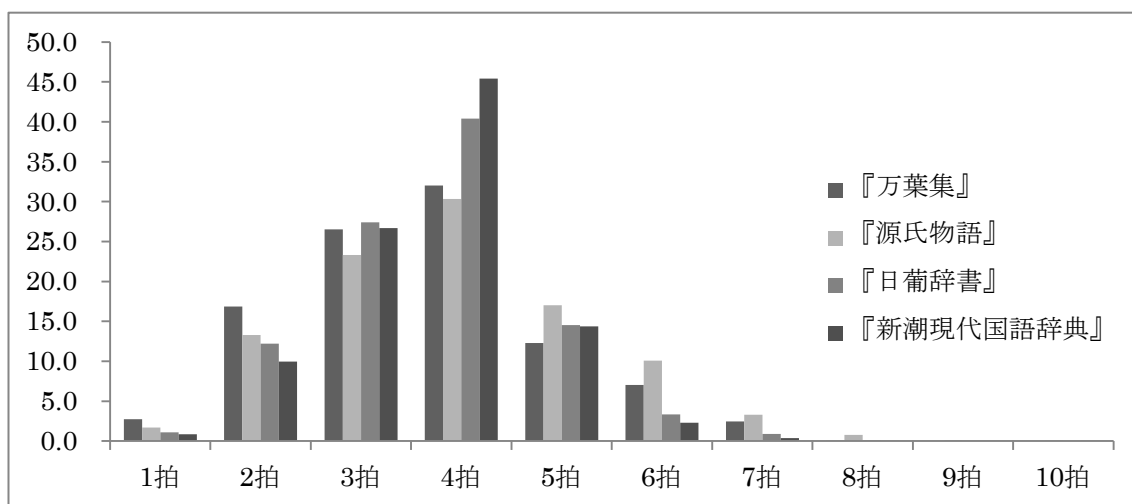
『万葉集』、『源氏物語』、『日葡辞書』、『天草版平家物語』、『新潮現代国語辞典』、『中央公論』を資料として、同じ条件でデータを採り、出現位置別に見た音素分布、また、音素配列を調べることによって、日本語の音韻構造について時代ごとに述べてきた。この章で日本語の音韻構造の歴史としてまとめたい。

### 7.1 和語名詞における音韻構造の歴史

#### 7.1.1 拍数別に見た語数

各時代で、和語名詞を採録した結果をグラフにまとめると、次のようになる。〔グラフ 7.1.1〕は、拍ごとの語数が、各時代において占める割合をそれぞれ示している。左から、『万葉集』、『源氏物語』、『日葡辞書』、『新潮現代国語辞典』の順に並んでいる。

〔グラフ 7.1.1〕



『万葉集』では、1拍語、2拍語が多いことがわかる。上代日本語では、拍数の少ない語の比重が大きく、後代では1、2拍語も増加したが、多拍語の増加がそれを大きく上回ったことになる。

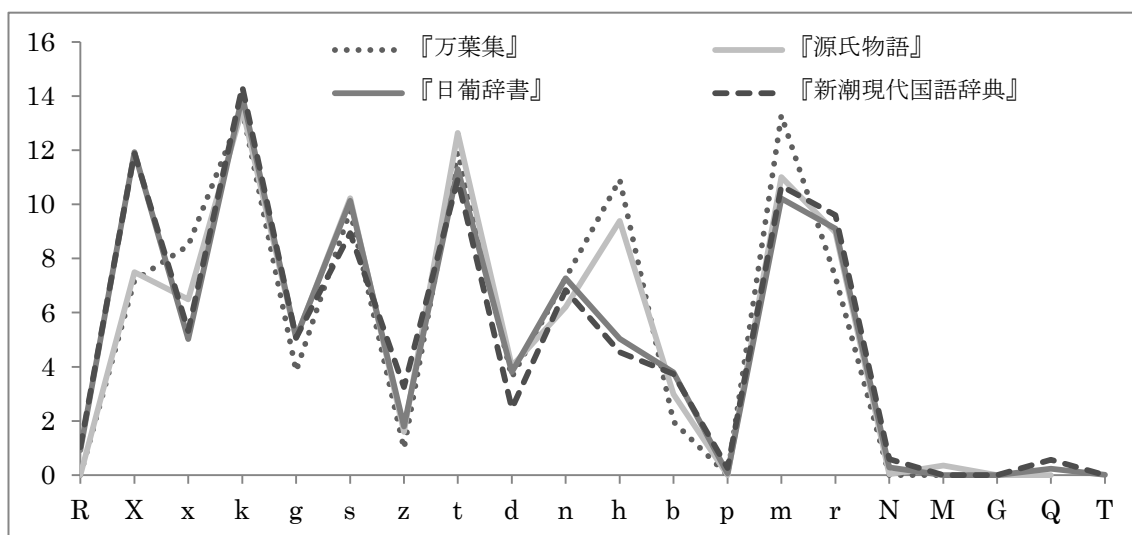
各時代を通して最も多いのは4拍語である。『新潮現代国語辞典』では、他の時代よりもその割合が高く、全体の45.4%を占めている。6.7.2で述べたように、しかも、その4拍和語名詞5910語のうち、4980語、全体の84.3%が2拍+2拍で構成されている。日本語は2拍を基本として、その組み合わせとなる4拍語が時代を経るごとに増えてきたのではないと思われる。

時代を経るごとに語数が多くなるのは、予想できることであるが、『日葡辞書』と『新潮現代国語辞典』を比べると、『日葡辞書』の見出し語数は、解題によると、32,293語で、『新潮現代国語辞典』の見出し語数は凡例によると、79,000余語である。収録語数は、1対2.5で、『新潮現代国語辞典』のほうが大きい。和語名詞の増加は『日葡辞書』8,811語と『新潮現代国語辞典』13,015語と、約1対1.5で、辞書の大きさに比べて、それほど増えていないといえる。中世からは、それほど増加していないとも言える。上代・中古にどれだけの語が存在したのか、確かめようがないので、限られた資料でのみの言及であるため、その可能性があるというのにとどめる。

### 7.1.2 和語名詞の音素分布の歴史

次に、和語名詞において、各時代でよく用いられる子音音素、母音音素について見てみる。出現位置別ではなく、語全体で用いられている音素の歴史を見ることにする。〔グラフ7.1.2〕は子音音素、〔グラフ7.1.4〕は母音音素の分布の歴史をまとめたものである。〔グラフ7.1.2〕の横軸は、各子音音素、縦軸はその出現率である。〔グラフ7.1.4〕の横軸は、各母音音素、縦軸はその出現率である。左から、『万葉集』（以下、『万葉』）、『源氏物語』（以下、『源氏』）、『日葡辞書』（以下、『日葡』）、『新潮現代国語辞典』（以下、『新潮』）の順に並んでいる。

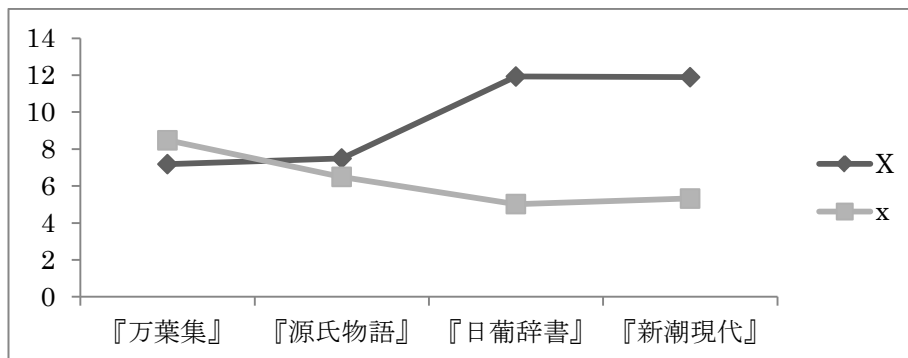
〔グラフ7.1.2〕



まず、各時代とも子音を伴わない、つまり、／X／（単独母音拍子音部）と／x／（単独半母音拍子音部）を合わせた子音Øが最も多いのだが、半母音を伴うかどうかは時代によ

って異なる。『万葉』、『源氏』では、半母音を多く伴っている。／x／は、『万葉』、『源氏』に多く用いられ、『日葡』、『新潮』で、／X／が多く使用されている。

〔グラフ 7.1.3〕



子音音素では、和語名詞において、／k／の出現率が高い。次に／t／がよく用いられる。時代で異なるのは、／m／／r／である。『万葉』では、／m／の出現率が高いが、／r／の出現率は低い。その他、違いが見られるのは、／h／である。まだハ行転呼音を起こしていないため、『万葉』、『源氏』で多く用いられている。／ha／は、／xwa／となり、それ以外はア行となるので、『万葉』、『源氏』に出現する／h／のうち、半分ぐらいが、子音∅である／X／か／xwa／のどちらかに振り分けられていることになる。『万葉』、『源氏』では出現していた／xwa xwi xwe xwo／もワ／xwa／以外は／Xi Xe Xo／となる。全体の流れをもう一度確認すると、【表 7.1.1】のようになる。

【表 7.1.1】

	X (ア行)	x (ヤ行)	x (ワ行)
『万葉』	7.2	5.7	2.7
『源氏』	7.5	4.0	2.5
『日葡』	11.9	3.0	2.1
『新潮』	11.9	3.4	1.9

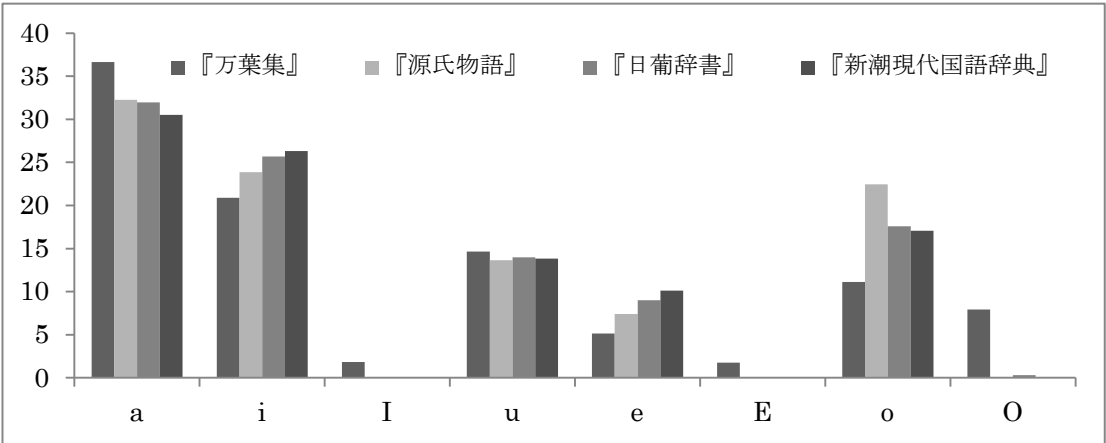
ア行は増加、ヤ行・ワ行は減少という傾向が見られる。ワ行は／xwi xwe xwo／をなくしたが、新たに／ha／から転じた／xwa／を得た。現代では、／xwa／しかないのにも関わらず、万葉のころから、0.8 ポイントの減少で押さえている。

次に、母音音素について見てみる。『万葉』では、甲類乙類の別があるので、／I／／E／／0／を別に表を作っている。甲乙の別についてはよく知られているところだが、実際に数を調べてみると、／0／以外の／I／／E／の出現頻度は極めて低い。しかも語頭にはほとんど用いられない。稿末資料〈音素表 3.1-1〉から、語頭に用いられる／I／／E／の数を調べると、／I／は総使用例 223 (〈音素表 3.1-3〉参照) のうち 14 例 (内、5 例は 1 拍語)、／E／は総使用例 214 (〈音素表 3.1-3〉参照) のうち 18 例 (内、7 例は 1 拍語) しかない。

これらの意味するところについては、別の機会に詳しく考察したい。

甲乙の別があるとする、『万葉』では／i／／e／／o／の使用例が他と比べて少ないが、それぞれに、／I／／E／／O／を足して甲乙を合併すると、母音の出現頻度に大きな差はない。あえて違いを挙げるとすれば、『万葉』では、／a／が多く使用されていること、／i／／e／は徐々に出現頻度が増えていることぐらいである。

〔グラフ 7.1.4〕



### 7.1.3 各時代における多頻度拍

【表 7.1.2】各時代における上位 10 の拍について

		『万葉』	『源氏』	『日葡』	『新潮』
/Xa/	1				○
/Xi/	2			○	○
/ka/	4	○	○	○	○
/ki/	3		○	○	○
/ko/	1		○		
/sa/	3	○	○	○	
/si/	4	○	○	○	○
/ta/	4	○	○	○	○
/tu/	1	○			
/to/	2		○	○	
/na/	3	○		○	○
/ha/	1	○			
/hi/	1		○		
/ma/	4	○	○	○	○
/mi/	3	○	○		○
/xja/	1	○			
/ri/	2			○	○

稿末別紙資料の音素表で、子音と母音の交差しているところは、拍の出現率である。各時代で多い拍の特徴をまとめると、次のようになる。

『万葉』で、／ma／が最も多いのは他の時代では見られないので、『万葉』らしい拍と言える。『日葡』と『新潮』では、『万葉』・『源氏』では見られなかった／Xi／／ri／が上位に上がってきている。4拍語が増えていること、／i／／e／／r／の出現頻度が徐々に増えていることから、動詞連用形名詞を語の最後の項に持つ語が増えてきていることが予想される。



【表 3. 1. 10】で触れたことであるが、万葉では／a／の出現頻度が高い。上位 10 の拍のうち、7 つが／a／を伴う拍である。他の時代には上位に上がってこない／ha／／tu／／xja／は万葉集の特徴的な拍である。

#### 7. 1. 4 各時代における音素配列

各時代の音素配列を見ると、／a／-／a／-／a／、／a／-／a／-／i／が多いことがわかる。ただし、／a／-／a／-／a／の配列が出てくる順位は、『万葉』から『新潮』に向けて、14 位、18 位、19 位、25 位とやや下がり気味である。／a／-／a／-／i／は、『万葉』から『新潮』に向けて、17 位、15 位、16 位、17 位と安定している。『源氏』の音素配列の特徴として、それらの音素配列よりも上の順位の 14 位にある／o／-／o／-／o／がある。

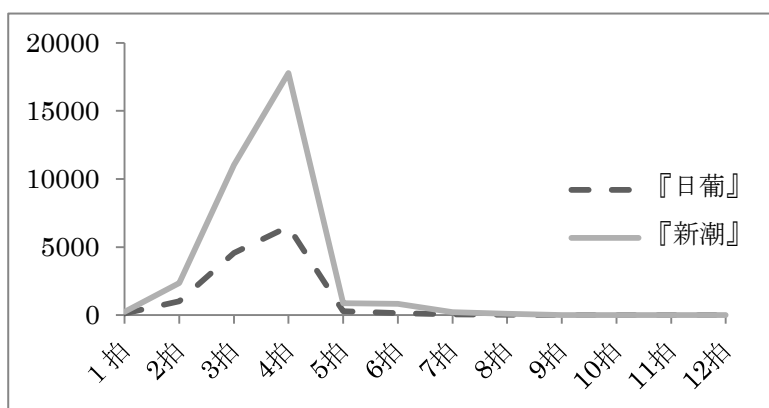
語末に／i／、／e／が多くなるため、／a／-／i／、／u／-／i／、／o／-／i／、／a／-／e／が語末に来る語が、時代を経るごとに、上位に来ている。

### 7. 2 『日葡辞書』と『新潮現代国語辞典』における漢語の音韻構造の比較

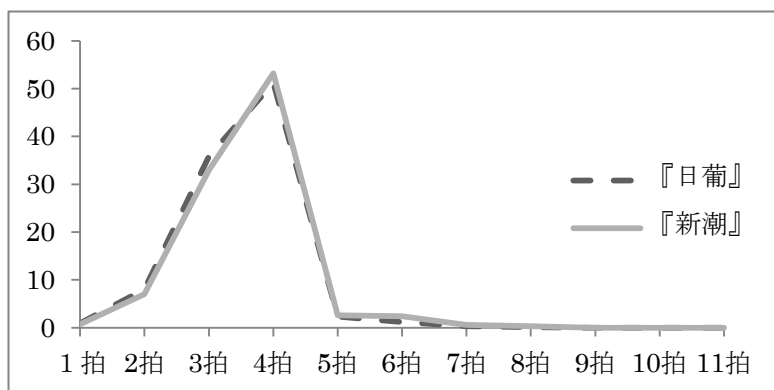
#### 7. 2. 1 拍数別に見た語数

『日葡』と『新潮』を比べると、収録語数は 1 対 2. 5 で『新潮』のほうが大きい。和語名詞の場合は、辞書の大きさの差に比べて、和語名詞の語数の差はそれほど、大きくなかった。漢語では、『日葡』が 12679 語、『新潮』が 33406 語であるから、1 対 2. 6 で、辞書の収録語数の差と同じぐらい差がある。〔グラフ 7. 2. 1〕は拍数別の語数を示したものである。縦軸は語数、横軸は拍数である。拍数別の語数を比率に直して見ると、その差はほとんどない。〔グラフ 7. 2. 2〕

〔グラフ 7. 2. 1〕



〔グラフ 7.2.2〕

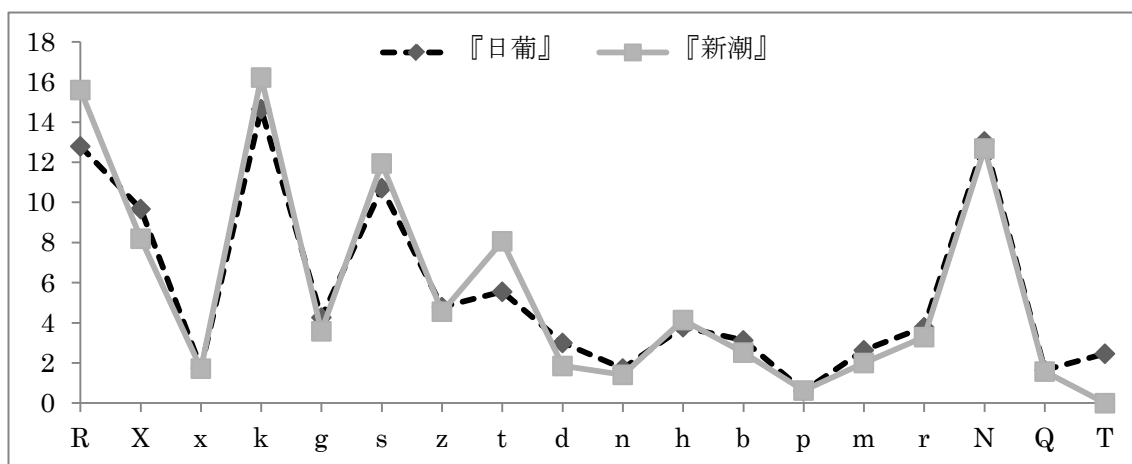


6.3.1 で見たように、『新潮』において、最も多い漢語は、2 字漢語である。全 33406 語のうち、29805 語であり、全体の 9 割近く (89.2%) を占める。その中でも、2 字漢語の 2 拍 + 2 拍が最も多く、17416 語、2 字漢語 29805 語のうちの 58.4%, 全漢語のうちの 52.1% を占める。つまり、全漢語のうちの半分以上が 2 拍 + 2 拍の 4 拍 2 字漢語である。和語名詞と同様、漢語でも、2 拍 + 2 拍が最も多いのである。

## 7.2.2 音素分布の比較

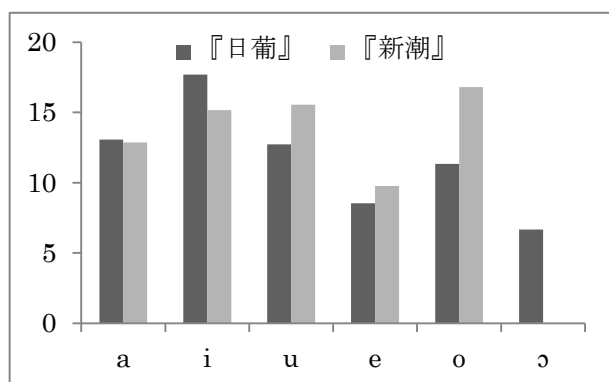
次に、各時代でよく用いられる子音音素、母音音素について見てみる。出現位置別ではなく、語全体で用いられている音素の歴史を見ることにする。〔グラフ 7.2.3〕は子音音素、〔グラフ 7.2.4〕は母音音素の分布の歴史をまとめたものである。〔グラフ 7.2.3〕の横軸は、各子音音素、縦軸はその出現率である。〔グラフ 7.2.4〕の横軸は、各母音音素、縦軸はその出現率である。

〔グラフ 7.2.3〕



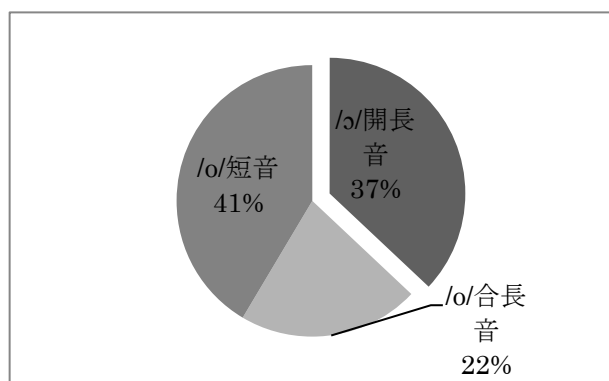
子音音素は、 /k/ /N/ /s/ /t/ /z/ まで順位が同じである。 /t/ の出現率が日葡では低いことを除けば、上位の子音音素は、ほぼ同じ結果である。その他、 /d/ がわずかに『新潮』で低くなっている。

〔グラフ 7.2.4〕



次に、母音音素を比較してみる。  
『日葡』では、 /i/ が多いのが特徴である。『新潮』よりも呉音系統の音が多く残っているためであろう。新潮で、 /u/ が多いのは、入声音がなくなり、開音節化して、母音 /u/ を伴ったことが、理由である。

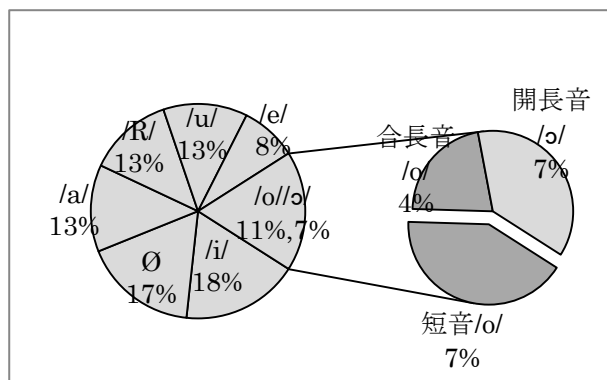
〔グラフ 7.2.5〕 /ɔ/ と /o/



〈音素表 5.4-3〉を見ると、『日葡』では、母音音素 /ɔ/ が 2973 例で、母音音素 /o/ が合長音の前に現れるのは、1730 例、合わせて 4703 例。すべての母音音素 /o/ /ɔ/ (8032 例) のうち、58.6% が開合長音の前に現れる。〔グラフ 7.2.5〕に円グラフ

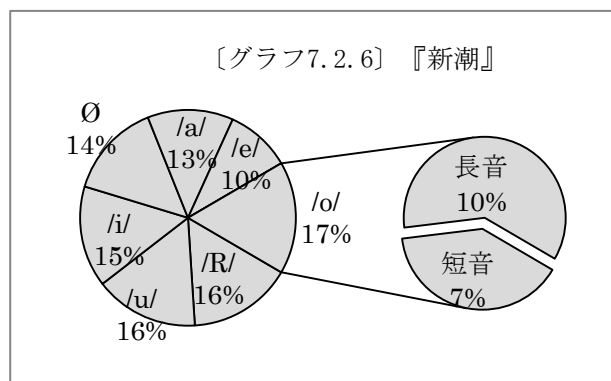
で示す。

〔グラフ 7.2.6〕『日葡』



開長音の前半に現れる /ɔ/ は、母音全体からみると、7% で最も少ない。〔グラフ 7.2.6〕に示す。母音 /o/ を短音と合長音の前半部分とに分けると、合長音の前半部分が4% で、開長音が合長音よりも3% 多く出現する。

〔グラフ 7.2.7〕『新潮』



〈音素表 6.3-3〉を見ると、現代語では、母音音素／o／全体(20314 例)のうち、60.4%(12273 例)が引き音節の前に現れる。〔グラフ 7.2.7〕に示す。〔グラフ 7.2.6〕の開長音の 7%がすべて、／o／の長音に変化したのである。結果として、長音の割合はほとんど変わらないことがわかる。

漢語の音韻構造は、『日葡』と『新潮』とでは、音韻体系が異なることによる差が若干、生じるだけで、拍数別に見た語の割合も、音素分布もほとんど変化がない。

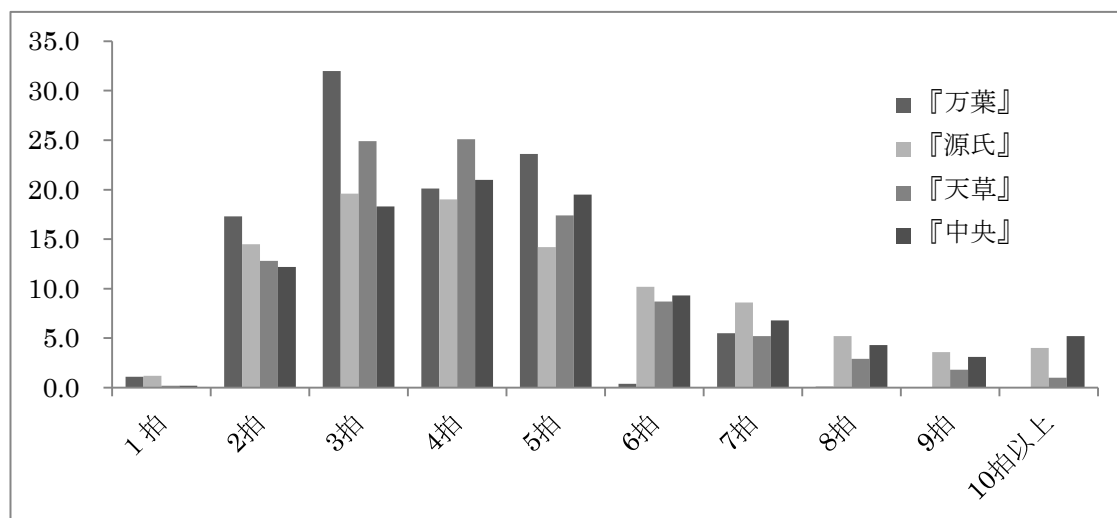
### 7.3 テキスト類における音韻構造の歴史

#### 7.3.1 拍数別に見た語数

各時代で、テキスト類を対象に語に切って、拍数別に見た語数を採集した結果をグラフにまとめると、次のようになる。

〔グラフ 7.3.1〕は、拍ごとの語数が、各時代において占める割合をそれぞれ示している。左から、『万葉集』『源氏物語』『天草版平家物語』（以下、『天草』）、『中央公論』（以下、『中央』）の順に並んでいる。

〔グラフ 7.3.1〕



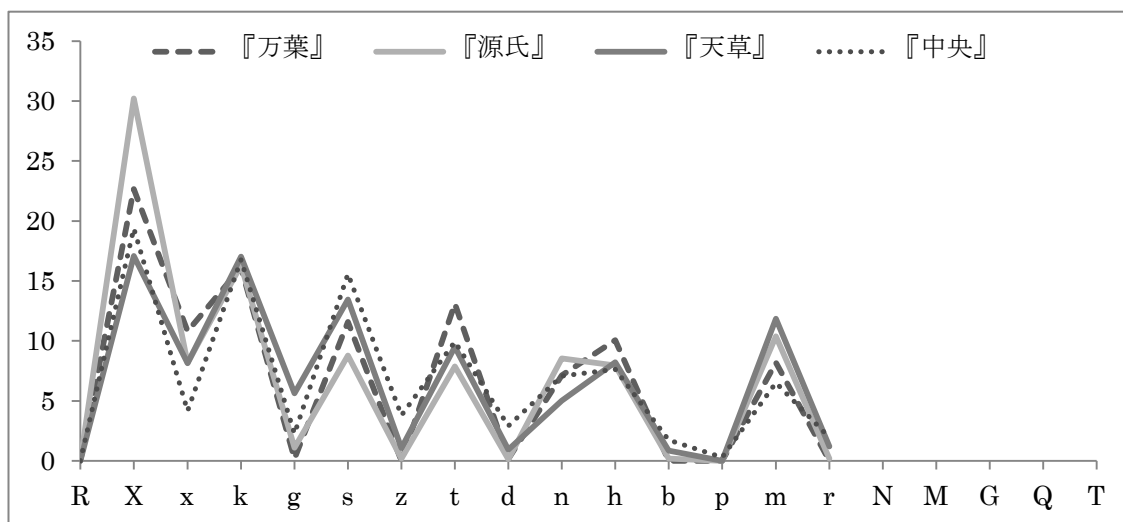
『万葉』が異なる特徴を示している。3拍語、5拍語が多く、6拍語がほとんどないなどは、和歌の様式に関係している。『万葉』は、和歌集であるので、これは、上代日本語の音韻の特徴ではなく、和歌の特徴であるかもしれない。『源氏』の対象範囲の中にも和歌は含まれているが、7首で影響は少ない。

『源氏』『天草』『中央』と時代も作品の特徴も異なるものを調査したが、同じような曲線を描いているのが興味深い。『天草』は3拍語、4拍語を特に多く用いている。『源氏』は、6拍から9拍の語の使用が、『天草』『中央』よりも多い。

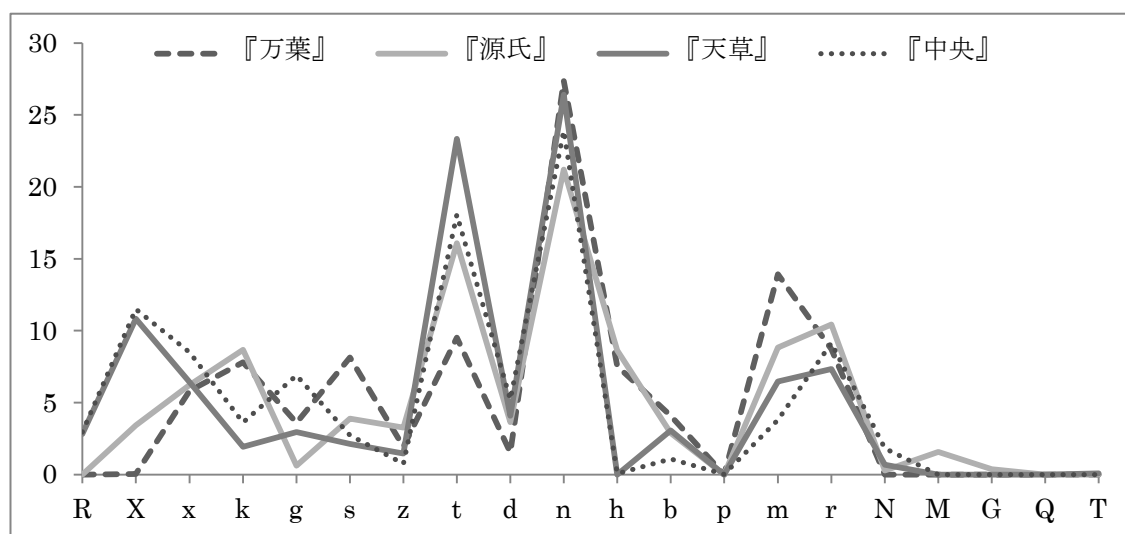
### 7.3.2 音素分布の歴史

次に、各時代でよく用いられる子音音素、母音音素について出現位置別に見てみる。〔グラフ 7.3.2〕は語頭における子音音素、〔グラフ 7.3.3〕は語末における子音音素、〔グラフ 7.3.4〕は語全体における子音音素の分布の歴史をまとめたものである。横軸は、各子音音素、縦軸はその出現率である。〔グラフ 7.3.5〕は語頭における母音音素、〔グラフ 7.3.6〕は語末における母音音素、〔グラフ 7.3.7〕は語全体における母音音素の分布の変遷をまとめたものである。横軸は、各母音音素、縦軸はその出現率である。

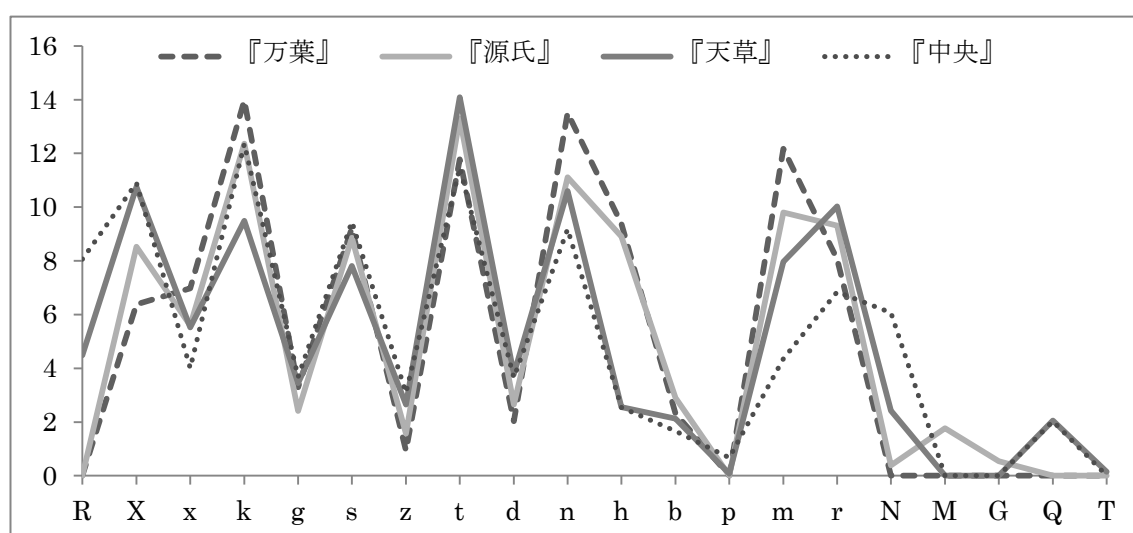
〔グラフ 7.3.2〕 語頭における子音音素



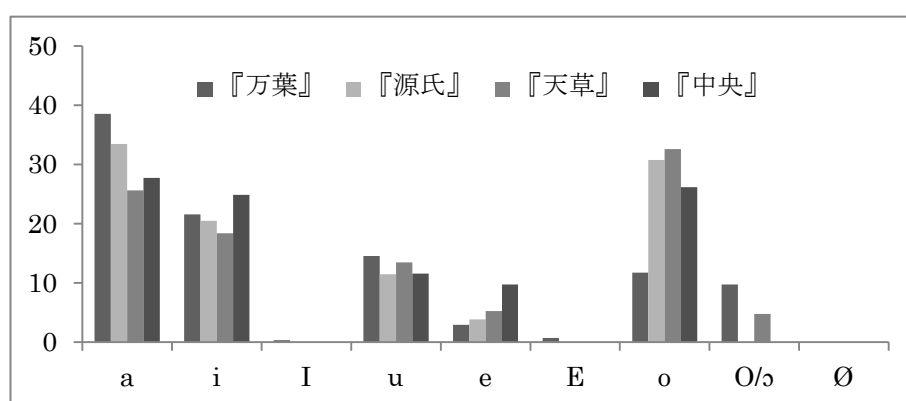
〔グラフ 7.3.3〕 語末における子音音素



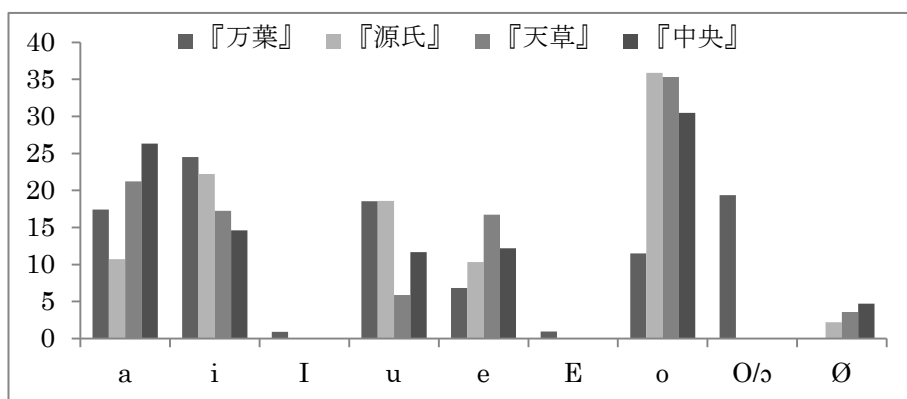
〔グラフ 7.3.4〕 語全体における子音音素



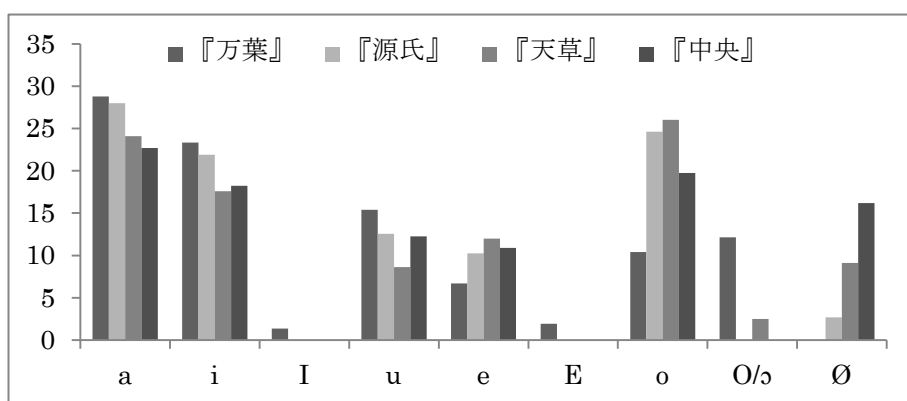
〔グラフ 7.3.5〕 語頭における母音音素



〔グラフ 7.3.6〕 語末における母音音素



〔グラフ 7.3.7〕 語全体における母音音素



語頭においては、時代において、多少の差は見られるが、〔グラフ 7.3.2〕より、子音音素では、／X／、／k／の出現率が高い。〔グラフ 7.3.5〕を見ると、語頭において、よく現われる母音は、／a／、『万葉』は甲乙の別はあるが、ともに／o／と考えると、／o／の出現率も高い。／k／の調音点は、口の奥のほうの軟口蓋であり、母音／a／は、前舌か後舌の低母音、／o／は後舌中母音である。息の妨害がない／X／、調音点は奥、母音は、後舌低母音、後舌中母音であるものから、語を始めることを『万葉』の時代から通して好んだようである。

／e／は語頭には出現しにくい母音である。現代日本語における和語名詞の語頭において出現率が低いという調査結果があるが<sup>43</sup>、テキスト類で、調査をしても、やはり低い出現率である。ただし、6.3.2の【表 6.3.3】で見たように、漢語においては、16.7%の出現率であるから、決して低いわけではない。時代を経るにしたがって、漢語の比重が増え、また、和語名詞自体の／e／の出現率も増えてくることから、他の母音に比べて、低い出現

率ではあるが、徐々に増えてくる。【表 7.3.1】は、語頭における／e／の比率の変遷、【表 7.3.2】は、テキスト類の語頭における／e／の比率の変遷である。

【表 7.3.1】和語名詞の語頭における／e／

『万葉』	『源氏』	『日葡』	『新潮』
2.5 (甲乙合併)	3.0	5.9	6.5

【表 7.3.2】テキスト類の語頭における／e／

『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
3.6 (甲乙合併)	3.8	5.2	9.7

語末においては、子音音素は、／t／／n／、そして／r／の出現率が高い。『万葉』では、／t／の出現率は低い、代わりに／m／の出現率が高い。これらの調音点は歯茎、両唇である。語末には、前のほうで、調音される音がよく使用される。母音音素は、／o／が多い。

各章で、拍についても見たが、／no／／to／など、助詞の影響が強く見られる結果となった。

語全体で見ると、子音音素では、／k／／t／の出現率が高い。日本語でよく使用される音素である。母音音素では、／u／と／e／の出現率が低い。日本語において、前舌中母音である／e／、中舌あるいは後舌高母音である／u／は、あまり用いられないということである。／e／は、／i／と／a／の中間に位置し、／u／は、／i／と／o／の中間に位置するので、間の音はあまり使用しないと言えるだろうか。

開合についても見ておく。【表 7.3.3】は引き音節の出現率を『天草』と『中央』で比較したものである。

【表 7.3.3】引き音節の出現率

	/a:/	/i:/	/u:/	/e:/	/o:/	/ɔ:/	引き音節計
『天草』	0.0		0.7		1.3	2.5	4.5
『中央』	0.2	0.4	1.5	1.6	4.4		8.1

『天草』では、引き音節の合計出現率は 4.5% であり、開長音が 2.5% で最も多く出現する。『中央』では、開長音はなくなるが、代わりにオ段長音が 4.4% 出現する。ウ段長音、エ段長音の出現率もそれぞれ、0.8 ポイント、1.6 ポイント増え、全体として、8.1% の出現率となる。



特殊拍については、どうであろうか。撥音、促音について、【表 7.3.4】にまとめる。

【表 7.3.4】撥音・促音の出現率の変遷

	/N/	/M/	/G/	/Q/	/T/	/R/	特殊拍計
『源氏』	0.4	1.8	0.5	0.0			2.7
『天草』	2.4			2.1	0.1	4.5	9.1
『中央』	6.1			2.0		8.1	16.2

『万葉』では、出現しない特殊拍が、『源氏』では、音便や漢語の影響で、用いられるようになるが、その出現率は低い。『天草』では、中世の音韻の特徴でもある入声だが、実際には、その出現率は 0.1%と非常に低い。促音は、2.1%出現する。『中央』では、撥音の出現率が 6.1%と高くなっている。促音の出現率は『天草』と変わらない。特殊拍の出現率は、『天草』では、9.1%であったのが、『中央』では、16.2%と、7.1 ポイント増えている。一般拍が基本であるのには変わらないが、出現率は確実に増えていると言える。

／h／の急激な減り方にも注目する。ハ行転呼音が起こり、音素の出現率の変動がどのくらいあったのか、テキスト類の／h／／X／／x／の出現率の変遷を【表 7.3.5】にまとめる。／x／の( )の中の数値は、後に続く半母音／j／（ヤ行）と／w／（ワ行）のうちの、／w／が続く／x／の出現率を示している。

【表 7.3.5】／h／ハ行，／X／ア行，／x／ワ行の変遷

	『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/h/	9.4	8.9	2.5	2.5
/X/	6.4	8.5	10.8	10.9
/x/	7.0(2.9)	5.6(2.5)	5.5(2.4)	4.0(2.2)

／h／は、『万葉』で 9.4%、『天草』で 2.5% となり、『万葉』から見ると、6.9 ポイントの減少である。その割には、／X／／x／の出現率は、それほど増えていない。

／X／は、『万葉』の 6.4%から、『天草』で 10.8%となり、4.4 ポイントの増加である。／x／の後に続く半母音が／w／である出現率を見ると、全時代を通じて、それほど変化していないことがわかる。ヤ行のエがア行のエと等しくなり、ハ行がワ行に転ずるも、ワ行のワ以外の、ヰ、ヱ、ヲが、ア行のイ、エ、オと等しくなるので、結果として、ワ行はワしか存在しないのである。そのような重要な音韻史の歴史的現象も、実際に数値で表してみたら、／h／は確かに減っているけれども、半母音／w／の数は、通時的にほとんど変化がない。『天草』と『中央』には、約 400 年の隔たりがあるが、／h／／X／／x／の分布の差はあまりない。時代も、扱った資料の性格も異なるのにも関わらず、このような結果が出

たのは興味深い。

では、半母音／j／／w／については、どうであろうか。『中央』の音素分布表は、音韻体系を統一するため、〈音素表 6.5-4〉を見る。『万葉』『源氏』では、拗音を設定していないので、／x／の後にしか／j／／w／は来ない。半母音は、音素表では、計算する際、考慮に入れていないので、【表 7.3.6】の子音の後に来る半母音／j／／w／の出現率は、半母音の前に来る子音の出現音素で代用する。⑤の半母音＋子音合計列の／k g s z t d n h b p m r／の各出現率を足した数値である。つまり、半母音＋母音で一つの母音とみなし、子音総数から出現率を出している。

【表 7.3.6】半母音の出現率の変遷

	『万葉』		『源氏』		『天草』		『中央』	
／x／の後に 来る半母音	／j／	4.0	／j／	3.1	／j／	3.1	／j／	1.8
	／w／	2.9	／w／	2.5	／w／	2.4	／w／	2.2
	計	7.0	計	5.6	計	5.5	計	4.0
子音の後に 来る半母音	／j／		／j／		／j／	2.1	／j／	4.3
	／w／		／w／		／w／	0.3	／w／	0.0
	計		計		計	2.3	計	4.2
半母音合計	／j／計	4.0	／j／計	3.1	／j／計	5.2	／j／計	6.1
	／w／計	2.9	／w／計	2.5	／w／計	2.7	／w／計	2.2
	計	7.0	計	5.6	計	7.8	計	8.2

／x／の後に来る／j／は『中央』で減っている。／w／の変化がないのは先述の通りである。合拗音は、現代では外来語音としてわずかに観察されるだけで、ほとんど出現しないが、拗音は、『天草』と比較して2.2ポイント増えている。通時的に見ると、半母音／j／の出現率もそれほど変化していない。

／zi di zu du／についても見ておきたい。音声史・音韻史上、重要な四つ仮名問題であるが、実際の出現率はどのようなものであったのだろうか。『中央』で／di du／が／zi zu／と等しくなることによって、／z／と／d／の出現率にどのような変化が起こったのだろうか。

【表 7.3.7】は、／zi di zu du／の出現率の変遷である。

『中央』で／di du／が／zi zu／と等しくなって、確かに、／zi／の出現率は増えたが、／di／の影響は少ないと思われる。『万葉』『源氏』『天草』のすべてで、／di／は、0.1～0.2%の出現率である。【表 7.3.7】の右の表は、子音／z／／d／の出現率の変遷を示して

いる。『万葉』から『源氏』で、／d／の出現率は、0.6 ポイント多いが、／di du／の出現率は0.1 ポイント減っている。『源氏』から『天草』では、／d／の出現率は、1.2 ポイント多いが、／di du／は、0.3 ポイント減っている。これは、／di du／は、あまり用いられず、／da de do／の出現率が高いことを意味している。／di du／の出現率が低いため、その音価が変わったとしても、音素の分布自体にはほとんど影響を与えていない。

【表 7.3.7】／zi di zu du／

	『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/zi/	0.1	0.4	0.5	1.1
/zu/	0.5	0.6	0.5	0.4
計	0.6	1.1	0.9	1.5
/di/	0.2	0.1	0.1	0.0
/du/	0.5	0.5	0.2	0.0
計	0.7	0.6	0.3	0.0

	『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/z/計	0.9	1.6	2.6	3.1
/d/計	2.0	2.6	3.8	3.7

両唇音が減ってきていることについて簡単に触れておく。音声史・音韻史で、唇音退化と言われる現象である。上代、／h／は、〔ɸ〕で両唇音であり、中世に至っても、キリシタン資料でハ行はすべて「f」で表記されているから、まだ両唇音であった。現代と同じ／h／になるのは、有坂(1957)によると、京都では寛文頃、江戸では享保頃である。音価が変わる以前にもハ行転呼音でワ行になり、さらに、ワ以外はア行音化している。ワ行がア行音化したのも、唇音退化の一環である。現代の音韻では、／hu／／p／／b／／m／が両唇音である。／hu／は拍であり、／p／は、中世から生じ、漢語の促音の後や、音象徴語、あるいは、外来語など、出現用途は限られるので、これらは省き、／b／／m／について見てみる。

〔グラフ 7.3.4〕を見ると、明らかに減ってきている。この点からも、唇音退化を指摘することができる。

【表 7.3.8】唇音退化の一端

	『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/b/	2.3	2.9	2.1	1.7
/m/	12.2	9.8	8.0	4.4

### 7.3.3 各時代における多頻度拍

各時代で多い拍をまとめると、【表 7.3.9】のようになる。

『万葉』で、乙類の／0／を区別しないと、／to／／no／は、すべての時代に現れる。  
／ta／／to／／ni／／no／は、時代を通じて、よく使用される拍である。その他、／ka／  
／si／もよく使用される。

【表 7.3.9】各時代における上位 10 の拍について

		『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/Xi/	2			○	○
/Xo/	1			○	
/ka/	3	○	○		○
/ki/	1	○			
/ku/	1				○
/ko/	2		○	○	
/si/	3	○	○		○
/ta/	4	○	○	○	○
/te/	1			○	
/to/	3		○	○	○
/t0/	1	○			
/na/	2	○	○		
/ni/	4	○	○	○	○
/no/	3		○	○	○
/n0/	1	○			
/ma/	1		○		
/mi/	1	○			
/mo/	2	○		○	
/ri/	1		○		
/re/	1			○	
/o:/	1				○
/N/	1				○

【表 7.3.10】3 母音配列

	『万葉』	『源氏』	『天草』	『中央』
/a/-/a/-/i/	18	14	33	42
/a/-/a/-/a/	20	22	45	43
/a/-/a/-/u/	25	23	92	159
/i/-/a/-/a/	27	24	58	78
/a/-/u/-/a/	28	48	110	73
/a/-/i/-/a/	29	25	56	25

#### 7.3.4 各時代における音素配列

次に、音素配列について見てみる。【表 7.3.10】は、『万葉』において、30 位以内  
に出現した母音配列が、時代を経るごとに  
順位の変遷がどのようになるかを見る。数  
値は、それぞれの時代における順位を示す。

『万葉』は、／a／-／a／-／i／、／a／-  
／a／-／a／、／a／-／a／-／u／、／i／-  
／a／-／a／、／a／-／u／-／a／、／a／-  
／i／-／a／が多く、それらは、源氏でも上

位にある。『万葉』と『源氏』は、この範囲では、よく似た音素配列をしている。特に、／  
a／-／a／-／i／、／a／-／a／-／a／は和語名詞においても、通時的によく用いられる音  
素配列である。『万葉集』では漢語が現われず、『源氏物語』でも混種語を含めて 5.8%し  
かなく、また、宮島(1992)によると、『万葉集』『源氏物語』における名詞の比率は、それ  
ぞれ 52.8%, 41.7%であるから、運用された語としての調査においても、同じ音素配列が  
多いという結果になるのであろう。

その他、『源氏』『天草』では、／a／-／e／-／a／がそれぞれ、18 位、14 位、／o／-／o  
／-／o／が、それぞれ 21 位、13 位と多く出現する。『中央』では、／a／-／i／-／a／が、

3 母音連続では、最も上位で 25 位である。

／a／-／a／-／u／が、『源氏』と『天草』を比べると、順位が『天草』で、大きく下がっていることがわかる。／a／-／u／の連続は、中世では、開長音になることが関係していると思われる。

#### 7.4 結論

以上、辞書類、テキスト類を資料として、素材としての語と、運用された語について、出現位置別に、音素分布、及び配列を調査してきた。音韻史を語る上で、母音の甲乙の区別、ハ行転呼音、オ列長音の開合、入声音、四つ仮名などは、重要なことであるが、それらを通時的に見た場合、後世にどのような影響を与えたのか、実際にどのぐらいの出現率で、運用されていたのかを、客観的な数値で示した。本研究の主たる目的は、日本語の音韻の歴史を数値で捉えることであつたので、その目的は果たせたと思われる。本研究を通して、明らかになったことは、日本語の音韻は、安定していて、上代からさほど変化していないということである。

素材としての語の調査で、和語名詞において、時代を経ても、特に大きな変化は見られない。ハ行転呼音による／h／の減少などは当然、見られるけれども、大きくとらえれば、あまり変わっていないと言える。漢語においても、同様である。漢語は、上代、中古ではあまり用いられないため、中世からの調査で、『日葡辞書』と『新潮現代国語辞典』の比較を行ったが、非常によく似た音素分布であつた。

ただし、素材としての語と、運用された語では、音の様相が異なる。テキスト内において、各語の語種や品詞の割合、付属語の有無、活用形が関係しているからである。いずれの時代でも、運用された語の語末に子音音素では、／n／／t／が多く出現している。

運用された語全体の特徴は、子音 0 の母音から始まる語が多い。和語においては、品詞にかかわらず、子音 0 で始まる語が多いことについても確認している。子音では／k／をよく用いる。これは、和語においても漢語においても同じである。母音では、／u／／e／はあまり用いない。音韻史を語る上で、母音の甲乙の区別、ハ行転呼音、オ列長音の開合、入声音、四つ仮名などは、重要な現象であるが、どのような現象でも、一つ一つを取りあげれば、4%程度以下の影響に止まり、古代と現代とを対比しても、音素・拍の出現率の変化はさほど大きくない。また、母音配列としては、／a／-／a／-／i／、／a／-／a／-／a／がよく用いられている。これは、和語名詞において、多く出現する母音配列であるが、

『万葉集』『源氏物語』の運用された語においても多く用いられる。日本語らしさというものがあるとすれば、漢語を取り込んだ上での音韻的特徴として挙げられるだろう。

本研究では、音素分布表を作成し、音素と拍の両面から見てきたが、日本語の音韻構造はまずは、拍で捉えたほうがわかりやすく、その次に音素に分解して、考察するのがよいように思う。通時的に音素分布や音素配列を調査することができたのも、長い歴史の中で、拍の構造がそれほど複雑化していないからこそであろう。

拍の中でも、まずは、一般拍が主流である。現代において、特殊拍が16.2%現われるが、これは、エ段長音も含まれ、引き音節になる場合はすべて含まれているため、最大限と考えてよい。また、一般拍の中でも直音がほとんどである。上代においてはすべてが直音であったが、漢語等の影響で拗音が出現する。しかし、その出現率は、現代においても、わずか4.2%に過ぎず、直音の占める割合は79.6%である。拗音の割合は、音韻体系の設定の仕方、多少、数値は変動するが、それでも全体の約8割を直音が占めるというのは、日本語の音韻構造の根幹は直音であることを意味するであろう。

最後に、本研究から新たに提起できる問題として、以下の点が挙げる。運用された語の調査結果、いずれの時代にも語末に／no／／ni／／te／／ru／がよく用いられている。これは、付属語が影響していると予測はできるが、その数については調査していない。詳細に調査すると、特徴的な語頭、語末の拍や音素の、語種、あるいは、品詞などの文法性が数値として示せるであろう。それは通時的、共時的、あるいは、時代別、語種別、品詞別など、様々な観点からの分析が可能である。

また、音韻史ではなく、音声史としても考えることができる。中古で音便が生じた理由は、漢語の影響であるとも言われるが、漢語は『源氏物語』において、混種語を含めても5.8%と非常に少ない。出現率が低いということの意味を改めて考える必要がある。

さらに、他言語との比較もあり得る。日本語において、語頭には、／k／のように調音点がある奥にある子音や、息の妨害のない母音、語末には、／n／／t／など、調音点がある前の子音の出現率が高いが、それが、日本語固有の特徴であるのかも興味深いところである。

本研究は、音韻の歴史について、数量的な基礎を与えるものである。統計的な処理をすることによって、言語史に関する新たな歴史像を描くことも可能である。

## 注

<sup>1</sup> 濱田(1955)に、以下のような記述がある。

当時の舌内入声韻尾が、音的に〔t〕と〔tsu〕との二層に分れていたものとして、これを音韻論的には如何に解釈すべきであろうか。私の考えは次の通りである。即ち、〔t〕は、少くともそれが国語の音韻体系に加わるべきものとしては、勿論先行する音節の中に含めて、／kat／の様なモーラを考える事は、国語の音節構造の特殊性から云っても無理であり、従って、当然独立した／t／と云うモーラと解さざるを得ない。

<sup>2</sup> 馬淵(1971)による。

<sup>3</sup> 『萬葉集索引』の凡例に、以下のように記してある。

その意味や東語(東国語)の判定・未詳の判定などは、原則的に『新編日本古典文学全集萬葉集①～④』(小学館)によった。ただし、【 】内に表示した漢字は、『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂刊)による場合もある。

なお、甲乙不明の判定は『時代別国語大辞典 上代編』によった。

<sup>4</sup> 乙類音の／I／を持つ語は、「木」「城」／kI／、「岸」／kI si／「霧」／kI ri／、「火」／hI／、「実」「身」／mI／、「皆」／mI na／と、それらを前項に持つ複合語である。乙類音の／E／を持つ語は、「毛」「日」「筍」／kE／、「褻」／kE k0 r0 mo／、「消残」／kE n0 k0 ri／、「上」「舳」／hE／、「目」「海藻」／mE／、「廻」／mE gu ri／、「愛」／mE de／と、それらを前項に持つ複合語である。非常に限られた語のみである。

<sup>5</sup> 古典索引刊行会(2003)『萬葉集索引』で枕詞とされているものに、「わがせこを(17-3890)」「おほきうみの(17-3897)などがあるが、これらは佐佐木(1956)では、枕詞とされていないので、「わが」「せこを」「おほき」「うみの」のように語に切った。

<sup>6</sup> 6拍の語、つまり、単独母音拍があって字余りとなっている句を含む歌の番号は、3897, 3952, 4059, 4068, 4075, 4081, 単独母音拍を含まない字余りとなっている句を含む歌の番号は4081, 字足らずの句を含む歌の番号は3969である。10拍の語は、すべて単独母音拍があって字余りとなっている句で、その句を含む歌の番号は、4014, 4059, 4083である。

<sup>7</sup> 佐佐木信綱(1956)「万葉集概説」の「歌体」の項に次のようにある。音節は拍と同一としてよい。なお、旧字は新字に改めた。

通常、短い句は5音節、長い句は7音節から成るが、それぞれ、意味上のまとまりに対応するものであって、意味上一まとまりをなす音節連続が二つの句にまたがる、いわゆる句割れ、句またがり、万葉集では極めて少数しか見られない。

<sup>8</sup> その他の5例は、「幾代経にけむ」(巻第17-4003)、「月そ経にける」(巻第17-4012)、「月は経につつ」(巻第17-4030)、「年は経にける」(巻第18-4033)、「年は経ぬとも」(巻第18-4039)である。

<sup>9</sup> 石井(2001)が、朝日新聞社説を資料として、平仮名「の」は82.4%が格助詞であるという調査結果から、平仮名の文法性、あるいは、語彙性を示している。

<sup>10</sup> 築島(1960)は、源氏物語や枕草子の当時の発音について、以下のような問題点を挙げている。

平安時代の各音節の音価がどのやうなものであつたか、現在すべてが明らかでない。シ、ス、セ、ソ、ジ、ズ、ゼ、ゾ、など問題である。又、ハ行転呼音は丁度この頃から始つた現象であるが、紫式部や清少納言はどの程これを持つてゐたか問題である。又、後にも述べることであるが、「けそう」とあつても、ケソウと発音したのかケショウと発音したのか俄かに定め兼ねるやうな節もある。

<sup>11</sup> 源氏物語の音便を調査した論文として、その他、用法と音便の相関関係について述べた、甲斐睦朗(1978)「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について—その表現への志向—」『国語国文』47-8などがある。

<sup>12</sup> 実際の読みは、／mi xja su M do ko ro／である。

<sup>13</sup> 「女御」「女房」は「ニヨゴ」「ニヨバ<sup>ン</sup>」とする。榊原(1982)で「女房」「女御」「女院」「女官」の読み方についての論考がある。「平安時代の本来の読みは「によぼう」「によご」「によゐん」「によくわん」であり、「にようぼう」「にようご」「にようゐん」「にようくわん」は後に転化したものとする」とある。「院」は「ケン」／xwi N／とする。「エン」とはしない。「消

息」「才」「博士」は早くから日本語化した語と考え、「セウソコ」「ザエ」「ハカセ」とした。  
<sup>14</sup> 金田一(1986)の後涼殿の読み方の解説に、『色葉字類抄』に、コウリヤウ——とあって、「後」に去声、「涼」に平声の声点がつけられており。これは漢音と見られる。(中略)「殿」は漢音で「テン」と澄む。ここは、連濁がまだ生じていなかったと解する」とある。

<sup>15</sup> 「液」の「エ」は外転第三十三開昔摂喉音清濁四等でヤ行の「エ」

<sup>16</sup> 『源氏物語大成』では、「まいらせたてまつり給はぬなりけり」とある。第1冊校異篇 p16-2

<sup>17</sup> 森田(1993)による。『邦訳日葡辞書』では、「厚」は「コウ」の誤りかとしているが、沼本(1972)に、『厚』字の場合は、他の合音のみしかない字と一律に扱うのではなく時代的・位相的な見地に立って慎重に取扱う必要があると思う」とあるので、訂正はせず、原本のままにした。

<sup>18</sup> 出雲(1963)による。

<sup>19</sup> 遠藤(1971)では、ク・シク・ナリ活用の見出し語の記述形式を分類して、その数値を出している。

<sup>20</sup> 現代語の調査であるが、中野(1975)は、「現代日本語における音素連続の実態(Ⅱ)」で、品詞毎の分析を行い、サ変語幹となる漢語と他の漢語には異なる特徴はないという結果を得ている。

<sup>21</sup> 『新潮現代国語辞典』の裏表紙の「品詞名などに関する略語」の説明。

<sup>22</sup> 森田(1993)では、全篇の見出し語総数 32871 の約 64%を調査して、その範囲内で和語の平均比率は 56%、漢語は約 40%という数値を出している。

<sup>23</sup> 『新選国語辞典』第8版の当辞典に収録した語の内訳によると、混種語の占める割合は 8.4%である。『日葡辞書』は現代にかなり近いと言える。

<sup>24</sup> 『邦訳日葡辞書』(1980)の「補説」8. b 引用文献②平家物語によると、出典を Feiq. と注記し、それが『天草版平家物語』であるものが、72 例、Feiq. と注記されなくても、『天草版平家物語』であるものが、多くあるようである。

<sup>25</sup> 語種辞書『かたりぐさ』は、独立行政法人国立国語研究所、研究開発部門、第一領域によって作成された言語研究、自然言語処理用の語種情報データである。

<sup>26</sup> 本調査の結果、得られたラ行で始まる語は、「るつば、るまた、れこ、ろ(音)、ろは」の 5 語である。

<sup>27</sup> 「輸精管」「輸尿管」は 1 拍 + 2 拍 + 2 拍のように見えるが、3 拍 + 2 拍の誤りと判断した。

<sup>28</sup> 語例は「四国八十八箇所」である。

<sup>29</sup> 中野の調査結果で語数の割に 1 拍漢語が多いのは、調査データが新聞語彙調査の短単位データであるためである。本調査では、造語成分は省いたので語数に現れていない。

<sup>30</sup> 入江(2007)で、3 字漢語の語頭において「不」が 143 回使用されることについて触れた。

<sup>31</sup> 橋本(1997)の調査によると、『新潮現代国語辞典』初版に収録されている 1 拍から 8 拍までの外来語は 5160 語である。

<sup>32</sup> 語形の例は飯田・中村(1994)による。表記が定まらないことは、自然言語処理システムでは問題である。翻訳辞書や電子化辞書を利用するとき、調べたい文字列と見出しが一致しないと検索できない可能性があるからである。それを変形ルールや禁則ルールを適用することにより解決しようとしている。

<sup>33</sup> その他、詳しい違いは坂本(2002)に詳しい。

<sup>34</sup> 『学術用語集』では、例言で「英語のつづりの終わりの -er, -or, -ar などを仮名書きする場合には、次の方針によって語尾の長音符号「ー」を略した」として、その言葉が 3 音節以上の場合を挙げ、また、-gy, -py などは、長音符号を付けるとしている。『記者ハンドブック』では、「外国の地名の書き方」で、「はねる音『ン』、つまる音『ッ』、のぼす音『ー』は、はっきりしたもの以外は、できるだけ省略する」としている。また、用いない表記として、「ヂ、ヅ、ヰ、ヱ、ヲ、ヴ、イエ、クァ、クィ、クェ、クォ、グァ、グィ、グェ、グォ」を挙げている。「トゥ、ドゥ」は原則として用いないとしている。

<sup>35</sup> 共同通信社編(1990)『記者ハンドブック 用字用語の正しい知識 第6版』の「外国の地名の書き方」では、「二重母音「エイ」「オウ」は原則として長音符号で表す」としている。

<sup>36</sup> 平成3年の内閣告示「外来語の表記」Ⅱ第2表に示す仮名に関するものによると、「ヴァ」



「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」は、外来音ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォに対応する仮名であり、一般的には、「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」で書くことができるとある。

<sup>37</sup> 1拍語はすべて単純語であるのは言うまでもない。6拍語以上は、語数も少なく、語の切れ目の分類が多岐にわたるので省略する。

<sup>38</sup> 西尾(1988)に、4拍の略語が目立って多い理由として、「略語が作られるときに、このもっとも例数の多い優勢な長さのパターンにおちつこうとする傾向が働いているのではないか。特に、「2・2」で4拍の形式のものは、二つの成分から同量の部分を取り、上下のバランスがとれて、もっとも安定した略語の形式になっているのであろう」という記述がある。実際、和語名詞、漢語の中で、最も多い形式は「2・2」(2拍+2拍)である。

<sup>39</sup> 「動詞の連用形が名詞化したものを、ここでは居体言とよんでおく。」と注記してある。

<sup>40</sup> 『日本国語大辞典』第2版の記述を参考にすることによって、「くさり(鎖)」「うがい(嗽)」のように、元の動詞は現代ではあまり用いられないため、見落としがちな動詞連用形名詞を取り出すことができる。しかし、これですべて取り出せるわけではない。「けむり」などのように「けむる」の連用形の名詞化と考えられるのに、『日本国語大辞典』第2版にそのような記述がない場合もある。上代に「けぶる」「けむる」がなかったためと思われるが、転成名詞としない特別な理由が見当たらないものは、適宜判断し、動詞連用形名詞とした。『日本国語大辞典』の用例だけでは、名詞と動詞のどちらが先に存在したのか、判断しかねる場合が多いからである。したがって、『日本国語大辞典』に動詞が存在すれば、動詞連用形名詞とした。なお、「生み」のように、なぜか、動詞「生む」の連用形の名詞化という記述がない語もいくつかある。これらも動詞連用形名詞とした。

<sup>41</sup> 接辞の認定は非常に難しい。今回は語末の調査なので、接尾辞のみ扱うが、形式名詞(「ほど」など)との区別、副助詞とされるもの(「がてら」「ばかり」「まで」「くらい」)との違いなど、接尾辞との境界は必ずしも明確ではない。したがって、本研究では、石井(1989)、宮地(1982)を参考にして、以下を接尾辞とした。すべてをあげず、主に本研究に関係する接尾辞を記す。～え(重)、～か(日)、～げ(気)、～さ、～じ(路)、～たち(達)、～だらけ、～たり(人)、～とせ(歳)、～み(味)、～め(目)、～ら(等)

<sup>42</sup> 『総合雑誌の用語』(後編)の調査では、形容詞の語幹に接尾語の「さ、み、げ」などをつけて名詞を構成する場合は、それぞれ全体を一語源単位と考えている点と、疊語を設けている点が、本研究と異なる。

<sup>43</sup> 玉村(1984)に、2拍和語名詞の語頭母音の分布の調査結果から、「現代日本語の中で、とくに和語名詞の語頭部分においては出現率の低いものであるから、/e/の連続というのはきわだって珍しいものという印象を与える結果になる」とある。また、樺島(1957)に、「上代において、二音節名詞の同一語根内にエエという母音配列はあり得なかったと推測しても間違いはなからう」とある。

## 参考文献

- 有坂秀世(1957)『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂
- 飯田敏幸・中村行宏(1994)「変形ルールと規則ルールを用いた片仮名の表記ゆらぎの解消法『情報処理学会論文誌』35-11
- 池田亀鑑(1953)『源氏物語大成 校異篇 索引篇』中央公論社
- 石井久雄(1990)「『中央公論』1986年の用語」『研究報告集11』国立国語研究所
- 石井久雄(1991)「仮名および音の出現頻度の諸調査」『計量国語学』第18巻第2号
- 石井久雄(2001)「ひらがなの文法性・語彙性」『同志社大学留学生別科紀要』創刊号
- 石井正彦(1989)「語構成」『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』明治書院
- 石井正彦(2005)「語構成研究と連語」『国文学解釈と鑑賞』70-7 至文堂
- 出雲朝子(1963)「室町時代における『寮』の字音について」『国語学』第54集
- 李敦柱著, 藤井茂利訳(2004)『漢字音韻学の理解』風間書房
- 稲岡耕二編(1994)『万葉集事典』學燈社
- 猪塚元・猪塚恵美子著, 町田健編(2003)『日本語音声学のしくみ』シリーズ・日本語のしくみを探る2 研究社
- 今栄国晴(1960)「日本語のdigramの相対頻度とその特性」『心理学評論』4
- 入江さやか(1996)「現代日本語における和語3拍名詞について—出現位置別に見た音素分布の分析と考察—」『同志社国文学』第43号
- 入江さやか(2002)「現代日本語における和語3拍名詞の音韻構造—語構成別に見た音素分布の分析—」『同志社大学留学生別科紀要』第2号
- 入江さやか(2004)「現代日本語における形容詞語幹の音韻構造について—音素分布の分析と考察—」『同志社大学留学生別科紀要』第4号
- 入江さやか(2007)「現代日本語における漢語の音韻構造—『新潮現代国語辞典』第2版の見出し語を資料として—」『同大語彙研究』IX
- 入江さやか(2008)「現代日本語における和語名詞の音韻構造—語構成との関わりから—」『同大語彙研究』X
- 入江さやか(2009)「現代日本語の音韻構造—『中央公論』を資料として—」『同大語彙研究』11
- 入江さやか(2010)「『中央公論』101年の語彙」『同大語彙研究』13

- 上野力(1991)「日本語の音節構造について—『百人一首』の語彙から—」『常葉学園短期大学紀要』22
- 上村幸雄(1989)五十音図の音声学『講座日本語と日本語教育第二巻』明治書院
- 江口正弘(1975)「中古和文資料における動詞の音便形——源氏物語のイ音便ウ音便を中心に——」『国語と国文学』52-5
- 江口正弘(2009)『天草版平家物語全注釈』新典社
- 遠藤潤一(1971)「日葡辞書の漢語語幹形容動詞」『国語と国文学』48-9
- 遠藤潤一(1976)「日葡辞書の動詞見出し語記述における一問題 そのⅡ—現在形表示の異例をめぐって—」『徳島大学学芸紀要』人文科学第26巻
- 大野晋(1945)「万葉集巻第十八の本文について」『国語と国文学』22巻3号
- 大野晋(1977)「音韻の変遷(1)」『岩波講座日本語5音韻』岩波書店
- 大西雅雄(1932)「頻度(frequency)から見た音素の価値」『音声学協会会報』26
- 甲斐睦朗(1978)「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について—その表現への志向—」『国語国文』47-8
- カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子(1990)『外来語の形成とその教育』日本語教育指導参考書  
16 国立国語研究所
- 樺島忠夫(1957)「母音配列を調べる」『計量国語学』2
- 亀井孝, 金田一春彦(1955)国語音節一覧表(『国語学辞典』付録) 東京堂
- 河井芳文・堀田修・間々田和彦(1980)「幼児用読み物における平仮名, および音節の使用頻度と, 文字指導への示唆」『東京学芸大学紀要』第1部門教育科学31
- 共同通信社編(1990)『記者ハンドブック 用字用語の正しい知識 第6版』共同通信社
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』東京堂
- 金田一春彦(1986)『朗読源氏物語——平安朝日本語復元による試み——』大修館書店
- 小泉保(1990)「私の五十音図観」『日本語学』9-2
- 国田百合子(1965)「女房詞と日葡辞書の婦人語との関係」『近代語研究』第1集
- 呉美寧(1999)「『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱について」『国語国文研究』第111号  
北海道大学国語国文学会
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』秀英出版

- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表』増補改訂版 大日本図書
- 古典索引刊行会(2001)『萬葉集CD-ROM版』塙書房
- 古典索引刊行会(2003)『萬葉集索引』塙書房
- 古典索引刊行会(2009)『萬葉集電子総索引 (CD-ROM)』塙書房
- 近藤政美(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠社
- 小島憲之・木下正俊・東野治之(1996)『萬葉集④』新編日本古典文学全集 9 小学館
- 榊原邦彦(1982)『平安語彙論考』教育出版センター
- 坂本充(2002)「どうする？外来語の表記と発音—放送と外来語全国調査(3)」『放送研究と調査』52(10)
- 佐佐木信綱(1956)『萬葉集事典』平凡社
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之(2003)『萬葉集 四』新日本古典文学大系 4 岩波書店
- 沢木幹栄(1980)「2 モーラ連続の種類とその出現数」『日本人の知識階層における話し言葉の実態—表現意図および文の長さ、音韻、構文—』「日本語教育のための言語能力の測定」資料 1, 国立国語研究所(解説) 水谷 修・沢木 幹栄(1980)「音韻について」『日本人の知識階層における話し言葉の実態』「日本語教育のための言語能力の測定」研究報告書, 国立国語研究所
- 沢木幹栄(1983)「日本語の音声と音韻」『「ことば」シリーズ 18 言葉と音声』文化庁
- Sidney, I. Landau(1984) *Dictionaries, The Art & Craft of Lexicography*. New York: Charles Scribner's Sons. (シドニー, I. L. 小島義郎・増田秀夫・高野嘉明(訳)(1988)『辞書のすべて』研究社出版)
- 城生佰太郎(1977)「現代日本語の音韻」『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店
- 染田利信(1966)「出現頻度から見た子音および母音の特性」『天理大学学報』17-3
- 玉村文郎(1984)(1985)『語彙の研究と教育』(上)(下) 国立国語研究所
- 玉村文郎(2004)「漢字・漢語のかたちとはたらき—漢字圏の現在—」『同志社国文学』第 61 号
- 陳世娟(2004)「単純和語動詞の名詞化について—『日葡辞書』を中心に—」『東洋大学大学院紀要』41
- 築島裕(1960)「作品と当時の発音、源氏物語、枕草子」『国文学解釈と鑑賞』25-10

- Trubetzkoy, N. S. (1958) *Grundzüge der Phonologie*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht  
(second edition). (トゥルベツコイ, N. S. 長嶋善郎 (訳) (1980) 『音韻論の原理』 岩波書店)
- 藤堂明保 (1980) 『中国語音韻論 その歴史的研究』 光生館
- 永田高志 (1988) 「外来音の定着とその意識」 『Sophia Linguistica』 23/24 上智大学
- 中野洋 (1973) 「現代日本語の音素連続の実態」 国立国語研究所報告 49 『電子計算機による国語研究 V』
- 中野洋 (1975) 「現代日本語の音素連続の実態 II — 品詞の分類 —」 国立国語研究所報告 54 『電子計算機による国語研究 VII』
- 西尾寅弥 (1988) 「語構成と造語法」 『現代語彙の研究』 明治書院
- 沼本勝明 (1972) 「『厚』の開合について」 『国語国文』 第 41 巻第 1 号
- 野村雅昭 (1989) 「語構成」 『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』 明治書院
- 橋本進吉 (1950) 『国語音韻の研究』 岩波書店
- 橋本進吉 (1966) 『国語音韻史』 岩波書店
- 橋本和佳 (1997) 「外来語の語形 — 3 拍語の場合 —」 『同志社国文学』 第 46 号
- 濱田敦 (1955) 「語末の促音」 『国語国文』 第 24 巻第 1 号
- 林大 他 (1958) 『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語』 (後編) 国立国語研究所報告 13
- 福島邦道 (2003) 『天草版平家物語叢録』 笠間書院
- 古田東朔, 山口秋穂, 鈴木英夫 (1980) 『新国語概説』 くろしお出版
- Bloch, Bernard (1950) *Studies in Colloquial Japanese. IV Phonemics. Language 26. 1*  
Miller, Roy Andrew (eds.) (1970) *Bernard Bloch on Japanese*. Yale University Press  
(ブロック, B. 林 英一 (訳) (1975) 『ブロック日本語論考』 研究社)
- 文化庁 (2001) 『公用文の書き表し方の基準 (資料集)』 増補二版 第一法規
- 堀田修 (1984) 「文字・音節の使用頻度による平仮名の文字習得要因に関する研究」 『教育心理学研究』 32-1
- 正木好弘 (1991) 「現代日本語で多用される音について」 『中京国文学』 10
- 正宗敦夫編 (1974) 『萬葉集總索引単語編』 平凡社
- 松崎寛 (1992) 「外来語音におけるゆれの類型 — 辞書類の表記を中心として —」 『言語学論叢』 第 10・11 号

松崎寛(1993a)「外来語音と現代日本語音韻体系」『日本語と日本文学』18 筑波大学

松崎寛(1993b)「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」『東北大学文学部日本語学科論集』

3

馬淵和夫(1970)『韻鏡校本と廣韻索引』新訂版, 巖南堂書店

馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院

宮地裕(1982)「現代語の語構成」『現代の語彙 講座日本語の語彙7』明治書院

宮地裕(1985)「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』4-1 明治書院

宮島達夫(1970)「古典の品詞統計」『計量国語学』53

宮島達夫(1971)(1992)『古典対照語い表』笠間書院

宮島達夫・高木翠(1974)「外来語の表記の変化とゆれ」『計量国語学』第71号

宮島達夫・高木翠(1984)「雑誌九十種資料の外来語表記」『研究報告書』5 国立国語研究所報告 79

宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄編(1989)『フロッピー版古典対照語い表および使用法』笠間書院

森田武(1993)『日葡辞書提要』清文堂出版

文部省(1979)『学術用語集』電気工学編 電気学会

矢澤真人(1995)「辞書の記述と利用—「一字漢字」と「連語」をめぐって—」『日本語学』14-4 明治書院

柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎(1999)『源氏物語索引』新日本古典文学大系別巻 岩波書店

屋名池誠(1993)「ある連音忌避」『国語研究』松村明先生喜寿記念会 明治書院

吉田則夫(1983)「音声・音韻」『国語概説』(佐伯哲夫, 山内洋一郎編) 和泉書院

## 辞書類

上代語辞典編集委員会(1967)『時代別国語大辞典上代編』三省堂

金田一春彦監修(1981)『明解日本語アクセント辞典』第二版, 三省堂

金田一京助他(2002)『新選国語辞典』第八版, 小学館

佐藤進・濱口富士雄(2006)『全訳漢辞海』第二版, 三省堂

土井忠雄・森田武・長南実(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店

室町時代語辞典編修委員会(2000)『時代別国語大辞典』室町時代編 三省堂  
山田潔(1998)『邦訳日葡辞書逆索引』笠間索引叢刊 118 笠間書院  
山田俊雄他(1995)『新潮国語辞典現代語・古語』第二版, 新潮社  
山田俊雄他(2000)『新潮現代国語辞典』第二版, 新潮社  
『日葡辞書』(1960) 岩波書店  
『日葡辞書 パリ本』(1976) 勉誠社  
『エヴォラ本日葡辞書』(1998) 清文堂出版  
『日本国語大辞典』第二版(2000) 小学館

## 資料〈音素分布表〉

第3章から第6章まで、各時代の音素分布表を出現位置別に作成した。音素分布表は、音素の分布であると同時に、拍の分布表でもある。

3.1の音素表は〈音素表3.1-N〉と表し、〈音素表3.1-N〉は実際に得られた度数を示している。Nは、語頭における音素分布なら、1，語末における音素分布なら、2，語全体における音素分布なら、3とする。度数だと、分布がわかりにくいので、総計を分母として出した百分率の表も作成している。

総計とは、すなわち、子音音素の合計、母音音素の合計、拍の合計のことを指す。これらは、すべて同じ数値となる。表のタイトルは、〈音素表3.1-N'〉のように3番目の数字に「'」をつけている。

縦軸に子音音素、横軸に母音音素、半母音音素+母音音素を並べた。子音を伴わない単独母音拍、単独半母音拍については、子音が0という意味で、単独母音拍の場合は、子音を／X／で、単独半母音拍の場合は、子音を／x／で表す。

引き音節は中世から設定している。母音音素／a i u e o／の右に、／a: i: u: e: o:/と引き音節のように見える列があるが、これは次の拍に引き音節が来る母音音素を別を示したものである。例えば「訓読み」の「訓」の場合、「ク」の次は撥音で引き音節ではないため、子音／k／と母音／u／が交差するところにカウントされる。しかし、「空を切る」の「空」の「ク」は次に引き音節が来るので子音／k／と／u:/の交差するところにカウントされる。／ja ju jo／の右の／ja: ju: jo:/も同様である。

〈音素表〉の母音の合計欄は3段に分かれ、母音合計①②③としてある。1段目合計①は次の拍に引き音節が来ない母音音素と、次の拍に引き音節が来る母音音素がそれぞれで合計されている。2段目合計②は、両者を合算し、1拍目に出現する母音音素の合計ということになる。さらに、3段目合計③は、母音音素の合計を知るために、半母音音素の有無で別々にした合計②を合算している。子音音素との合計は、半母音音素を伴わない④、半母音音素を伴う⑤、撥音・促音の⑥、以上を合算した⑦で示す。④、⑤それぞれでの子音音素全部の合計は、母音合計①と交差するところに示され、子音全体⑦と母音合計①が交差する表右下の数値は、拍の合計に一致する。



## 資料 『万葉集』の和語名詞

〈音素表3.1-1〉 語頭における音素分布

[illegible]

〈音素表3.1-1'〉 語頭における音素分布

[illegible]

資料 『万葉集』の和語名詞

〈音素表3.1-2〉語末における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	2	11		1	1				15													15
x										43	12	36	26	19	136	7	16	12	36	71		207
k	57	114	48	7	1	38	46	21	332													332
g	9	16	34	2	1	44	11		117													117
s	99	115		26	42		11	6	299													299
z	3	10		14	24			2	53													53
t	69	77		38	26		31	101	342													342
d	29	58		26	27		17	5	162													162
n	68	25		19	78		55	25	270													270
h	113	113	17	20	69	29	28		389													389
b	17	23	16	3	6	1	3		69													69
m	254	132	40	1	30	45	96		598													598
r	142	196		15	49		10	45	457													457
N																						
Q																						
合計①	862	890	155	172	354	157	308	205	3103	43	12	36	26	19	136	7	16	12	36	71		3310
合計②																						
合計③	912	906	155	184	402	157	370	224														

〈音素表3.1-2'〉語末における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	0.1	0.3		0.0	0.0				0.5													0.5
x										1.3	0.4	1.1	0.8	0.6	4.1	0.2	0.5	0.4	1.1	2.1		6.3
k	1.7	3.4	1.5	0.2	0.0	1.1	1.4	0.6	10.0													10.0
g	0.3	0.5	1.0	0.1	0.0	1.3	0.3		3.5													3.5
s	3.0	3.5		0.8	1.3		0.3	0.2	9.0													9.0
z	0.1	0.3		0.4	0.7			0.1	1.6													1.6
t	2.1	2.3		1.1	0.8		0.9	3.1	10.3													10.3
d	0.9	1.8		0.8	0.8		0.5	0.2	4.9													4.9
n	2.1	0.8		0.6	2.4		1.7	0.8	8.2													8.2
h	3.4	3.4	0.5	0.6	2.1	0.9	0.8		11.8													11.8
b	0.5	0.7	0.5	0.1	0.2	0.0	0.1		2.1													2.1
m	7.7	4.0	1.2	0.0	0.9	1.4	2.9		18.1													18.1
r	4.3	5.9		0.5	1.5		0.3	1.4	13.8													13.8
N																						
Q																						
合計①	26.0	26.9	4.7	5.2	10.7	4.7	9.3	6.2	93.7	1.3	0.4	1.1	0.8	0.6	4.1	0.2	0.5	0.4	1.1	2.1		100.0
合計②																						
合計③	27.6	27.4	4.7	5.6	12.1	4.7	11.2	6.8														

## 資料 『万葉集』の和語名詞

〈音素表3.1-3〉 語全体における音素分布

[illegible]

〈音素表3.1-3'〉 語全体における音素分布

[illegible]

資料 『万葉集』の和歌

〈音素表3.2-1〉語頭における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	247	154		94	1		114		610													610
x										64	58	4	12	33	171	66	3	2	49	120		291
k	131	97	4	29	11	5	48	109	434													434
g								5	5													5
s	97	106		44	38		7	20	312													312
z									0													0
t	159	21		68	10		6	89	353													353
d							4		4													4
n	140	17		17	4		8	6	192													192
h	75	65	3	77	6	7	38		271													271
b									0													0
m	59	118	1	4	2	7	30		221													221
r									0													0
N																						
Q																						
合計①	908	578	8	333	72	19	255	229	2402	64	58	4	12	33	171	66	3	2	49	120		2693
合計②																						
合計③	1038	581	8	391	78	19	316	262														

〈音素表3.2-1'〉語頭における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	9.2	5.7		3.5	0.0		4.2		22.7													22.7
x										2.4	2.2	0.1	0.4	1.2	6.3	2.5	0.1	0.1	1.8	4.5		10.8
k	4.9	3.6	0.1	1.1	0.4	0.2	1.8	4.0	16.1													16.1
g								0.2	0.2													0.2
s	3.6	3.9		1.6	1.4		0.3	0.7	11.6													11.6
z									0.0													0.0
t	5.9	0.8		2.5	0.4		0.2	3.3	13.1													13.1
d							0.1		0.1													0.1
n	5.2	0.6		0.6	0.1		0.3	0.2	7.1													7.1
h	2.8	2.4	0.1	2.9	0.2	0.3	1.4		10.1													10.1
b									0.0													0.0
m	2.2	4.4	0.0	0.1	0.1	0.3	1.1		8.2													8.2
r									0.0													0.0
N																						
Q																						
合計①	33.7	21.5	0.3	12.4	2.7	0.7	9.5	8.5	89.2	2.4	2.2	0.1	0.4	1.2	6.3	2.5	0.1	0.1	1.8	4.5		100.0
合計②																						
合計③	38.5	21.6	0.3	14.5	2.9	0.7	11.7	9.7														

資料 『万葉集』の和歌

〈音素表3.2-2〉語末における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X		1							1													1
x										25	16	4	4	4	53		2	3	99	104		157
k	24	78	10	88		5	3	2	210													210
g	80	2	4	5		5		1	97													97
s	7	128		44	7			33	219													219
z	2	5		38	7				52													52
t	3	20		39	104		3	87	256													256
d	7	4		1	12		2	15	41													41
n	44	280		24	15		1	373	737													737
h	121	25	5	37	8	6	1		203													203
b	102	2	2	2	1	1			110													110
m	36	48	3	82	1	8	197		375													375
r	18	65		123	22			7	235													235
N																						
Q																						
合計①	444	658	24	483	177	25	207	518	2536	25	16	4	4	4	53		2	3	99	104		2693
合計②																						
合計③	469	660	24	499	184	25	310	522														

〈音素表3.2-2'〉語末における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X		0.0							0.0													0.0
x										0.9	0.6	0.1	0.1	0.1	2.0		0.1	0.1	3.7	3.9		5.8
k	0.9	2.9	0.4	3.3		0.2	0.1	0.1	7.8													7.8
g	3.0	0.1	0.1	0.2		0.2		0.0	3.6													3.6
s	0.3	4.8		1.6	0.3			1.2	8.1													8.1
z	0.1	0.2		1.4	0.3				1.9													1.9
t	0.1	0.7		1.4	3.9		0.1	3.2	9.5													9.5
d	0.3	0.1		0.0	0.4		0.1	0.6	1.5													1.5
n	1.6	10.4		0.9	0.6		0.0	13.9	27.4													27.4
h	4.5	0.9	0.2	1.4	0.3	0.2	0.0		7.5													7.5
b	3.8	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0			4.1													4.1
m	1.3	1.8	0.1	3.0	0.0	0.3	7.3		13.9													13.9
r	0.7	2.4		4.6	0.8			0.3	8.7													8.7
N																						
Q																						
合計①	16.5	24.4	0.9	17.9	6.6	0.9	7.7	19.2	94.2	0.9	0.6	0.1	0.1	0.1	2.0		0.1	0.1	3.7	3.9		100.0
合計②																						
合計③	17.4	24.5	0.9	18.5	6.8	0.9	11.5	19.4														

資料 『万葉集』の和歌

〈音素表3.2-3〉語全体における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	253	163		99	1			122	638													638
x										146	110	36	50	62	404	86	10	16	182	294		698
k	397	345	42	229	66	42	81	195	1397													1397
g	150	65	14	39		30	12	19	329													329
s	178	427		148	72		30	67	922													922
z	23	9		53	7		1		93													93
t	307	132		226	146		22	345	1178													1178
d	42	20		47	39		12	43	203													203
n	367	403		63	52		25	441	1351													1351
h	294	203	41	163	74	38	126		939													939
b	146	27	10	33	3	9	4		232													232
m	281	312	29	142	18	72	363		1217													1217
r	209	218		186	141		10	42	806													806
N																						
Q																						
合計①	2647	2324	136	1428	619	191	808	1152	9305	146	110	36	50	62	404	86	10	16	182	294		10003
合計②																						
合計③	2879	2334	136	1538	671	191	1040	1214														

〈音素表3.2-3'〉語全体における音素分布

	a	i	I	u	e	E	o	0	子音合計④	ja	ju	je	jo	j0	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
X	2.5	1.6		1.0	0.0			1.2	6.4													6.4
x										1.5	1.1	0.4	0.5	0.6	4.0	0.9	0.1	0.2	1.8	2.9		7.0
k	4.0	3.4	0.4	2.3	0.7	0.4	0.8	1.9	14.0													14.0
g	1.5	0.6	0.1	0.4		0.3	0.1	0.2	3.3													3.3
s	1.8	4.3		1.5	0.7		0.3	0.7	9.2													9.2
z	0.2	0.1		0.5	0.1		0.0		0.9													0.9
t	3.1	1.3		2.3	1.5		0.2	3.4	11.8													11.8
d	0.4	0.2		0.5	0.4		0.1	0.4	2.0													2.0
n	3.7	4.0		0.6	0.5		0.2	4.4	13.5													13.5
h	2.9	2.0	0.4	1.6	0.7	0.4	1.3		9.4													9.4
b	1.5	0.3	0.1	0.3	0.0	0.1	0.0		2.3													2.3
m	2.8	3.1	0.3	1.4	0.2	0.7	3.6		12.2													12.2
r	2.1	2.2		1.9	1.4		0.1	0.4	8.1													8.1
N																						
Q																						
合計①	26.5	23.2	1.4	14.3	6.2	1.9	8.1	11.5	93.0	1.5	1.1	0.4	0.5	0.6	4.0	0.9	0.1	0.2	1.8	2.9		100.0
合計②																						
合計③	28.8	23.3	1.4	15.4	6.7	1.9	10.4	12.1														

資料 『源氏物語』 の和語名詞

〈音素表4.1-1〉 語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	246	171	165	4	182	768												768
x							90	63	4	74	231	63	11	6	77	157		388
k	254	57	89	14	199	613												613
g		1				1												1
s	84	118	67	18	39	326												326
z	1					1												1
t	135	31	115	15	87	383												383
d				1	1	2												2
n	130	24	15	16	23	208												208
h	144	198	107	6	29	484												484
b	1		1	1		3												3
m	106	139	42	22	84	393												393
r						0												0
N																		
M																		
G																		
Q																		
合計①	1101	739	601	97	644	3182	90	63	4	74	231	63	11	6	77	157		3570
合計②																		
合計③	1254	750	664	107	795													

〈音素表4.1-1'〉 語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	6.9	4.8	4.6	0.1	5.1	21.5												21.5
x							2.5	1.8	0.1	2.1	6.5	1.8	0.3	0.2	2.2	4.4		10.9
k	7.1	1.6	2.5	0.4	5.6	17.2												17.2
g		0.0				0.0												0.0
s	2.4	3.3	1.9	0.5	1.1	9.1												9.1
z	0.0					0.0												0.0
t	3.8	0.9	3.2	0.4	2.4	10.7												10.7
d				0.0	0.0	0.1												0.1
n	3.6	0.7	0.4	0.4	0.6	5.8												5.8
h	4.0	5.5	3.0	0.2	0.8	13.6												13.6
b	0.0		0.0	0.0		0.1												0.1
m	3.0	3.9	1.2	0.6	2.4	11.0												11.0
r						0.0												0.0
N																		
M																		
G																		
Q																		
合計①	30.8	20.7	16.8	2.7	18.0	89.1	2.5	1.8	0.1	2.1	6.5	1.8	0.3	0.2	2.2	4.4		100.0
合計②																		
合計③	35.1	21.0	18.6	3.0	22.3													

資料 『源氏物語』 の和語名詞

〈音素表4.1-2〉 語末における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	1	10	5			16												16
x							47	16	31	22	116	5	32	29	12	78		194
k	54	188	4	44	44	334												334
g	11	49		38	19	117												117
s	259	150	17	31	8	465												465
z	18	12	5	20	2	57												57
t	106	91	38	29	184	448												448
d	24	40	20	29	29	142												142
n	47	20	10	67	99	243												243
h	62	166	12	59	21	320												320
b	35	56	4	19	7	121												121
m	138	207	1	101	52	499												499
r	119	268	14	72	138	611												611
N																	3	
M																		3
G																		
Q																		
合計①	874	1257	130	509	603	3373	47	16	31	22	116	5	32	29	12	78	3	3570
合計②																		
合計③	926	1289	146	569	637													

〈音素表4.1-2'〉 語末における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	0.0	0.3	0.1			0.4												0.4
x							1.3	0.4	0.9	0.6	3.2	0.1	0.9	0.8	0.3	2.2		5.4
k	1.5	5.3	0.1	1.2	1.2	9.4												9.4
g	0.3	1.4		1.1	0.5	3.3												3.3
s	7.3	4.2	0.5	0.9	0.2	13.0												13.0
z	0.5	0.3	0.1	0.6	0.1	1.6												1.6
t	3.0	2.5	1.1	0.8	5.2	12.5												12.5
d	0.7	1.1	0.6	0.8	0.8	4.0												4.0
n	1.3	0.6	0.3	1.9	2.8	6.8												6.8
h	1.7	4.6	0.3	1.7	0.6	9.0												9.0
b	1.0	1.6	0.1	0.5	0.2	3.4												3.4
m	3.9	5.8	0.0	2.8	1.5	14.0												14.0
r	3.3	7.5	0.4	2.0	3.9	17.1												17.1
N																	0.1	
M																		0.1
G																		
Q																		
合計①	24.5	35.2	3.6	14.3	16.9	94.5	1.3	0.4	0.9	0.6	3.2	0.1	0.9	0.8	0.3	2.2	0.1	100.0
合計②																		
合計③	25.9	36.1	4.1	15.9	17.8													



資料 『源氏物語』 の和語名詞

〈音素表4.1-3〉 語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	318	257	245	8	231	1,059												1,059
x							259	115	50	139	563	126	55	49	125	355		918
k	656	407	239	117	495	1,914												1,914
g	265	121	76	68	185	715												715
s	499	584	176	71	116	1,446												1,446
z	91	54	39	21	21	226												226
t	518	222	401	64	581	1,786												1,786
d	113	69	158	51	177	568												568
n	380	72	43	103	280	878												878
h	388	466	177	127	169	1,327												1,327
b	112	181	73	24	33	423												423
m	496	480	82	172	326	1,556												1,556
r	340	405	106	120	295	1,266												1,266
N																	4	4
M																	50	50
G																		
Q																		
合計①	4,176	3,318	1,815	946	2,909	13,164	259	115	50	139	563	126	55	49	125	355	54	14,136
合計②																		
合計③	4,561	3,373	1,930	1,045	3,173													

〈音素表4.1-3'〉 語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	2.2	1.8	1.7	0.1	1.6	7.5												7.5
x							1.8	0.8	0.4	1.0	4.0	0.9	0.4	0.3	0.9	2.5		6.5
k	4.6	2.9	1.7	0.8	3.5	13.5												13.5
g	1.9	0.9	0.5	0.5	1.3	5.1												5.1
s	3.5	4.1	1.2	0.5	0.8	10.2												10.2
z	0.6	0.4	0.3	0.1	0.1	1.6												1.6
t	3.7	1.6	2.8	0.5	4.1	12.6												12.6
d	0.8	0.5	1.1	0.4	1.3	4.0												4.0
n	2.7	0.5	0.3	0.7	2.0	6.2												6.2
h	2.7	3.3	1.3	0.9	1.2	9.4												9.4
b	0.8	1.3	0.5	0.2	0.2	3.0												3.0
m	3.5	3.4	0.6	1.2	2.3	11.0												11.0
r	2.4	2.9	0.7	0.8	2.1	9.0												9.0
N																	0.0	0.0
M																	0.4	0.4
G																		
Q																		
合計①	29.5	23.5	12.8	6.7	20.6	93.1	1.8	0.8	0.4	1.0	4.0	0.9	0.4	0.3	0.9	2.5	0.4	100.0
合計②																		
合計③	32.3	23.9	13.7	7.4	22.4													

資料 『源氏物語』の「桐壺」

〈音素表4.2-1〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	115	152	73	19	278	637												637
x							36	22	1	48	107	41	3	2	19	65		172
k	144	40	22	7	131	344												344
g		1	2	7	13	23												23
s	66	40	32	13	34	185												185
z	3	1				4												4
t	55	11	56	4	40	166												166
d	3					3												3
n	132	19		8	21	180												180
h	46	74	25	3	20	168												168
b	2	1		1		4												4
m	60	90	10	14	45	219												219
r	2			2		4												4
N																		
M																		
G																		
Q																		
合計①	628	429	220	78	582	1937	36	22	1	48	107	41	3	2	19	65		2109
合計②																		
合計③	705	432	242	81	649													

〈音素表4.2-1'〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	5.5	7.2	3.5	0.9	13.2	30.2												30.2
x							1.7	1.0	0.0	2.3	5.1	1.9	0.1	0.1	0.9	3.1		8.2
k	6.8	1.9	1.0	0.3	6.2	16.3												16.3
g		0.0	0.1	0.3	0.6	1.1												1.1
s	3.1	1.9	1.5	0.6	1.6	8.8												8.8
z	0.1	0.0				0.2												0.2
t	2.6	0.5	2.7	0.2	1.9	7.9												7.9
d	0.1					0.1												0.1
n	6.3	0.9		0.4	1.0	8.5												8.5
h	2.2	3.5	1.2	0.1	0.9	8.0												8.0
b	0.1	0.0		0.0		0.2												0.2
m	2.8	4.3	0.5	0.7	2.1	10.4												10.4
r	0.1			0.1		0.2												0.2
N																		
M																		
G																		
Q																		
合計①	29.8	20.3	10.4	3.7	27.6	91.8	1.7	1.0	0.0	2.3	5.1	1.9	0.1	0.1	0.9	3.1		100.0
合計②																		
合計③	33.4	20.5	11.5	3.8	30.8													

資料 『源氏物語』の「桐壺」

〈音素表4.2-2〉語末における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X		4	50	18		72												72
x							9	7	4	7	27		1	5	98	104		131
k	9	103	67	1	3	183												183
g	10		1	1	1	13												13
s	1	47	22	3	9	82												82
z		6	48	2	13	69												69
t	20	8	13	138	160	339												339
d	10		1	13	53	77												77
n	5	186	16	3	237	447												447
h	87	21	57	8	9	182												182
b	54	3	3	1		61												61
m	8	19	2	13	144	186												186
r	13	71	105	8	23	220												220
N																	6	6
M																	33	33
G																	8	8
Q																		
合計①	217	468	385	209	652	1931	9	7	4	7	27		1	5	98	104	47	2109
合計②																		
合計③	226	469	392	218	757													

〈音素表4.2-2'〉語末における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X		0.2	2.4	0.9		3.4												3.4
x							0.4	0.3	0.2	0.3	1.3		0.0	0.2	4.6	4.9		6.2
k	0.4	4.9	3.2	0.0	0.1	8.7												8.7
g	0.5		0.0	0.0	0.0	0.6												0.6
s	0.0	2.2	1.0	0.1	0.4	3.9												3.9
z		0.3	2.3	0.1	0.6	3.3												3.3
t	0.9	0.4	0.6	6.5	7.6	16.1												16.1
d	0.5		0.0	0.6	2.5	3.7												3.7
n	0.2	8.8	0.8	0.1	11.2	21.2												21.2
h	4.1	1.0	2.7	0.4	0.4	8.6												8.6
b	2.6	0.1	0.1	0.0		2.9												2.9
m	0.4	0.9	0.1	0.6	6.8	8.8												8.8
r	0.6	3.4	5.0	0.4	1.1	10.4												10.4
N																	0.3	0.3
M																	1.6	1.6
G																	0.4	0.4
Q																		
合計①	10.3	22.2	18.3	9.9	30.9	91.6	0.4	0.3	0.2	0.3	1.3		0.0	0.2	4.6	4.9	2.2	100.0
合計②																		
合計③	10.7	22.2	18.6	10.3	35.9													

資料 『源氏物語』の「桐壺」

〈音素表4.2-3〉語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	132	214	180	22	305	853												853
x							116	52	40	104	312	62	31	14	141	248		560
k	386	264	176	105	306	1237												1237
g	72	40	33	39	57	241												241
s	182	429	95	112	68	886												886
z	27	45	63	7	15	157												157
t	441	90	170	235	395	1331												1331
d	57	10	49	38	111	265												265
n	369	322	43	28	350	1112												1112
h	288	214	125	105	159	891												891
b	87	43	23	62	75	290												290
m	414	179	28	83	277	981												981
r	169	309	219	134	101	932												932
N																	39	39
M																	177	177
G																	54	54
Q																		
合計①	2624	2159	1204	970	2219	9176	116	52	40	104	312	62	31	14	141	248	270	10006
合計②																		
合計③	2802	2190	1256	1024	2464													

〈音素表4.2-3'〉語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	子音合計④	ja	ju	je	jo	半母+子計⑤	wa	wi	we	wo	合計⑤	NMGQ計⑥	合計⑦
X	1.3	2.1	1.8	0.2	3.0	8.5												8.5
x							1.2	0.5	0.4	1.0	3.1	0.6	0.3	0.1	1.4	2.5		5.6
k	3.9	2.6	1.8	1.0	3.1	12.4												12.4
g	0.7	0.4	0.3	0.4	0.6	2.4												2.4
s	1.8	4.3	0.9	1.1	0.7	8.9												8.9
z	0.3	0.4	0.6	0.1	0.1	1.6												1.6
t	4.4	0.9	1.7	2.3	3.9	13.3												13.3
d	0.6	0.1	0.5	0.4	1.1	2.6												2.6
n	3.7	3.2	0.4	0.3	3.5	11.1												11.1
h	2.9	2.1	1.2	1.0	1.6	8.9												8.9
b	0.9	0.4	0.2	0.6	0.7	2.9												2.9
m	4.1	1.8	0.3	0.8	2.8	9.8												9.8
r	1.7	3.1	2.2	1.3	1.0	9.3												9.3
N																	0.4	0.4
M																	1.8	1.8
G																	0.5	0.5
Q																		
合計①	26.2	21.6	12.0	9.7	22.2	91.7	1.2	0.5	0.4	1.0	3.1	0.6	0.3	0.1	1.4	2.5	2.7	100.0
合計②																		
合計③	28.0	21.9	12.6	10.2	24.6													

資料 『日葡辞書』の和語名詞  
〈音素表5.3-1〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	半母+ 子計⑤	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦
R																													
X	611	368	409	52	350						73		1863									474	140			7	147		1863
x														209	81	155			29		2	2	1				1		621
k	689	145	305	45	316						4	14	1518														1		1521
g	11	1	3	2	6							2	25																25
s	196	345	183	55	105						1	2	887	6					1	1		8							895
z	2		1	2	1								6	5							1	6							12
t	332	78	283	115	250				1		1	3	1063			1				2	3								1066
d	11		2	15	9								37																37
n	242	85	58	91	92						1		569							1	1								570
h	425	468	210	43	115						17	3	1281			1			2		3								1284
b	15	5	11	11	5						1		48								1	1							49
p																													
m	284	234	98	89	148						1	7	861								1	1							862
r			4		1								5							1	1								6
N																													
Q																													
T																													
合計①	2818	1729	1567	520	1398				1		99	31	8163	220	81	157			32	7	3	500	141			7	148		8811
合計②	2818	1729	1568	520	1497	31								220	113	164	3						141	7					
合計③	3179	1729	1681	520	1661	41																							

〈音素表5.3-1'〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	半母+ 子計⑤	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦
R																													
X	6.9	4.2	4.6	0.6	4.0						0.8		21.1									5.4	1.6			0.1	1.7		21.1
x														2.4	0.9	1.8			0.3		0.0	0.0	0.0				0.0		7.0
k	7.8	1.6	3.5	0.5	3.6						0.0	0.2	17.2									0.0	0.0				0.0		17.3
g	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1							0.0	0.3																0.3
s	2.2	3.9	2.1	0.6	1.2						0.0	0.0	10.1	0.1					0.0	0.0		0.1							10.2
z	0.0		0.0	0.0	0.0								0.1	0.1							0.0	0.1							0.1
t	3.8	0.9	3.2	1.3	2.8				0.0		0.0	0.0	12.1			0.0				0.0	0.0	0.0							12.1
d	0.1		0.0	0.2	0.1								0.4																0.4
n	2.7	1.0	0.7	1.0	1.0						0.0		6.5							0.0	0.0	0.0							6.5
h	4.8	5.3	2.4	0.5	1.3						0.2	0.0	14.5			0.0			0.0		0.0	0.0							14.6
b	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1						0.0		0.5								0.0	0.0							0.6
p																													
m	3.2	2.7	1.1	1.0	1.7						0.0	0.1	9.8								0.0	0.0							9.8
r			0.0		0.0								0.1							0.0	0.0	0.0							0.1
N																													
Q																													
T																													
合計①	32.0	19.6	17.8	5.9	15.9				0.0		1.1	0.4	92.6	2.5	0.9	1.8			0.4	0.1	0.0	5.7	1.6			0.1	1.7		100.0
合計②	32.0	19.6	17.8	5.9	17.0	0.4								2.5	1.3	1.9	0.0						1.6						
合計③	36.1	19.6	19.1	5.9	18.9	0.5																							

〈音素表5.3-2〉 語末における音素分布

[illegible]

〈音素表5.3-2'〉 語末における音素分布

[illegible]

〈音素表5.3-3〉 語全体における音素分布

[illegible]

〈音素表5.3-3'〉 語全体における音素分布

[illegible]

資料 『日葡辞書』の漢語  
〈音素表5.4-1〉語頭における音素分布

[illegible]

〈音素表5.4-1'〉 語頭における音素分布

[illegible]



〈音素表5.4-2〉 語末における音素分布

[illegible]

〈音素表5.4-2'〉 語末における音素分布

[illegible]

## 168

〈音素表5.4-3'〉 語全体における音素分布

[illegible]

資料 『天草版平家物語』  
〈音素表5.5-1〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	半母+ 子計⑤	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦
R																													
X	111	115	51	8	93						23		401						39	7	6	172	14			5	19		401
x													375	23	26	71			1	1	6	9	16				16		191
k	70	76	50	6	169						1	3	122									9	1				1		400
g		10	3	5	104								289		9	5				2	8	2	9	1				1	132
s	69	75	29	22	84						2	8	18							3	8	3	27						316
z	6	5		3	3							1	18							3		4	7						25
t	77	7	42	20	64						1	3	214	3						2	3	1	9						223
d	10			6	3							2	21							1			1						22
n	86	6	4		15							5	116									2							118
h	41	76	20	22	20						8	2	189									4	4						193
b	5	4	6	4								1	20																20
p																													
m	68	57	26	23	59						1	44	278																278
r			4	9							1	10	24	1							2	1	4						28
N																													
Q																													
T																													
合計①	543	431	231	123	623						37	79	2067	27	35	84			50	21	27	244	31			5	36		2347
合計②	543	431	231	123	660	79								27	85	105	27						31	5					
合計③	601	431	316	123	765	111																							

〈音素表5.5-1'〉語頭における音素分布

〈音素表5.5-1'〉語頭における音素分布													半母+ 子計⑤				合計⑤		NQT⑥	合計⑦									
	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦	
R																													
X	4.7	4.9	2.2	0.3	4.0						1.0		17.1						1.7	0.3	0.3	7.3	0.6		0.2	0.8		17.1	
x														1.0	1.1	3.0			0.0	0.0	0.3	0.4				0.7		8.1	
k	3.0	3.2	2.1	0.3	7.2						0.0	0.1	16.0			0.0			0.0	0.0	0.3	0.4	0.7			0.7		17.0	
g		0.4	0.1	0.2	4.4								5.2			0.3					0.1	0.4	0.0			0.0		5.6	
s	2.9	3.2	1.2	0.9	3.6						0.1	0.3	12.3		0.4	0.2			0.1	0.3	0.1	1.2						13.5	
z	0.3	0.2		0.1	0.1							0.0	0.8								0.2	0.3						1.1	
t	3.3	0.3	1.8	0.9	2.7						0.0	0.1	9.1	0.1						0.1	0.1	0.4						9.5	
d	0.4			0.3	0.1							0.1	0.9									0.0						0.9	
n	3.7	0.3	0.2		0.6							0.2	4.9							0.1		0.1						5.0	
h	1.7	3.2	0.9	0.9	0.9						0.3	0.1	8.1								0.2							8.2	
b	0.2	0.2	0.3	0.2								0.0	0.9															0.9	
p																													
m	2.9	2.4	1.1	1.0	2.5						0.0	1.9	11.8															11.8	
r				0.2	0.4						0.0	0.4	1.0	0.0						0.1	0.0	0.2						1.2	
N																													
Q																													
T																													
合計①	23.1	18.4	9.8	5.2	26.5						1.6	3.4	88.1	1.2	1.5	3.6			2.1	0.9	1.2	10.4	1.3			0.2	1.5		100.0
合計②	23.1	18.4	9.8	5.2	28.1	3.4								1.2	3.6	4.5	1.2						1.3	0.2					
合計③	25.6	18.4	13.5	5.2	32.6	4.7																							

〈音素表5.5-2〉 語末における音素分布

[illegible]

〈音素表5.5-2'〉 語末における音素分布

[illegible]

〈音素表5. 5-3〉 語全体における音素分布

【音素表5.5-3】語全体における音素分布													半母+ 子計⑤		『天草版平家物語』														
	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦	
R								1	1		73	137	212						67	56	88	211			26	26		449	
X	134	417	64	113	322						26		1076															1076	
x														48	27	155			40	9	28	307	222		23	245		552	
k	232	167	154	69	258						9	13	902			1			1	4	17	23	21		3	24		949	
g	106	29	13	34	140							1	323			7				3	6	16	6			6		345	
s	170	244	64	108	117				1		2	19	725	1	17	10			4	17	7	56						781	
z	88	46	47	21	31			1				1	235			3			10	1	13	30						265	
t	438	107	91	322	431						1	7	1397	3		3				4	3	3	13					1410	
d	91	9	24	107	101						8	8	348	21						4	3	2	30					378	
n	245	332	28	19	424							8	1056							4			4					1060	
h	53	84	22	29	48						11	4	251								4	4						255	
b	125	32	25	6	13						3	1	205	4							1	3	8					213	
p		1	2		1							2	7															7	
m	186	83	42	84	341							5	793								4	4						797	
r	212	210	173	289	72						7	21	984	2		1					15	1	19					1003	
N																											243		
Q																											206		
T																											15		
合計①	2080	1761	749	1201	2299			1		1	73	137	8302	79	47	177				67	56	88	514	249		26	275	464	10004
合計②	2081	1761	750	1201	2372	137								79	114	233	88						249	26					
合計③	2409	1761	864	1201	2605	251																							

〈音素表5. 5-3'〉 語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	ɔ	a:	i:	u:	e:	o:	ɔ:	子音計④	ja	ju	jo	jɔ	ja:	ju:	jo:	jɔ:	半母+ 子計⑤	wa	wɔ	wa:	wɔ:	合計⑤	NQT⑥	合計⑦	
R							0.0		0.0		0.7	1.4	2.1							0.7	0.6	0.9	2.1			0.3	0.3			4.5
X	1.3	4.2	0.6	1.1	3.2								10.8																	10.8
x														0.5	0.3	1.5				0.4	0.1	0.3	3.1	2.2		0.2	2.4			5.5
k	2.3	1.7	1.5	0.7	2.6							0.1	0.1			0.0				0.0	0.0	0.2	0.2	0.2		0.0	0.2			9.5
g	1.1	0.3	0.1	0.3	1.4								3.2			0.1					0.0	0.1	0.2	0.1			0.1			3.4
s	1.7	2.4	0.6	1.1	1.2				0.0		0.0	0.2	7.2	0.0	0.2	0.1				0.0	0.2	0.1	0.6							7.8
z	0.9	0.5	0.5	0.2	0.3		0.0						2.3		0.0	0.0					0.1	0.0	0.1	0.3						2.6
t	4.4	1.1	0.9	3.2	4.3							0.0	0.1	14.0	0.0					0.0	0.0	0.0	0.1							14.1
d	0.9	0.1	0.2	1.1	1.0						0.1	0.1	3.5	0.2						0.0	0.0	0.0	0.3							3.8
n	2.4	3.3	0.3	0.2	4.2							0.1	10.6								0.0		0.0							10.6
h	0.5	0.8	0.2	0.3	0.5						0.1	0.0	2.5									0.0								2.5
b	1.2	0.3	0.2	0.1	0.1						0.0	0.0	2.0	0.0							0.0	0.0	0.1							2.1
p		0.0	0.0		0.0						0.0	0.0	0.1																	0.1
m	1.9	0.8	0.4	0.8	3.4						0.0	0.5	7.9									0.0								8.0
r	2.1	2.1	1.7	2.9	0.7						0.1	0.2	9.8	0.0		0.0					0.1	0.0	0.2							10.0
N																												2.4		2.4
Q																												2.1		2.1
T																												0.1		0.1
合計①	20.8	17.6	7.5	12.0	23.0		0.0		0.0		0.7	1.4	83.0	0.8	0.5	1.8				0.7	0.6	0.9	5.1	2.5		0.3	2.7	4.6		100.0
合計②	20.8	17.6	7.5	12.0	23.7	1.4								0.8	1.1	2.3	0.9						2.5	0.3						
合計③	24.1	17.6	8.6	12.0	26.0	2.5																								

資料 『新潮現代国語辞典』の和語名詞  
〈音素表6. 2-1〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R																							
X	749	530	530	74	646		36			144	2709												2709
x												343	181	262		36	1	823	209		209		1032
k	925	266	406	72	411	1	1			12	2094	1				1	3	5					2099
g	29	6	11	4	19			3			72			1		1		2					74
s	307	486	286	64	161		4		4	1	1313	13		2		1	1	17					1330
z	14	6	13	1	2		3				39	3						3					42
t	390	107	391	185	326			1		30	1430	7		8		1	2	18					1448
d	35			76	64					2	177												177
n	385	132	96	154	150	1	4		2		924												924
h	615	563	295	47	141		6	1		18	1686			1				1					1687
b	34	9	27	31	16	3					120												120
p	3	2		2	10	2			1		20												20
m	424	424	152	128	210		2		2	4	1346						2	2					1348
r			2	1	2						5												5
N																							
Q																							
合計①	3910	2531	2209	839	2158	7	56	5	9	211	11935	367	181	274		40	9	871	209		209		13015
合計②	3917	2587	2214	848	2369							367	221	283					209				
合計③	4493	2587	2435	848	2652																		

〈音素表6. 2-1'〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R																							
X	5.8	4.1	4.1	0.6	5.0		0.3			1.1	20.8												20.8
x												2.6	1.4	2.0		0.3	0.0	6.3	1.6		1.6		7.9
k	7.1	2.0	3.1	0.6	3.2	0.0	0.0			0.1	16.1	0.0				0.0	0.0	0.0					16.1
g	0.2	0.0	0.1	0.0	0.1			0.0			0.6			0.0		0.0		0.0					0.6
s	2.4	3.7	2.2	0.5	1.2		0.0		0.0	0.0	10.1	0.1		0.0		0.0	0.0	0.1					10.2
z	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0		0.0				0.3	0.0						0.0					0.3
t	3.0	0.8	3.0	1.4	2.5			0.0		0.2	11.0	0.1		0.1		0.0	0.0	0.1					11.1
d	0.3			0.6	0.5					0.0	1.4												1.4
n	3.0	1.0	0.7	1.2	1.2	0.0	0.0		0.0		7.1												7.1
h	4.7	4.3	2.3	0.4	1.1		0.0	0.0		0.1	13.0			0.0				0.0					13.0
b	0.3	0.1	0.2	0.2	0.1	0.0					0.9												0.9
p	0.0	0.0		0.0	0.1	0.0			0.0		0.2												0.2
m	3.3	3.3	1.2	1.0	1.6		0.0		0.0	0.0	10.3						0.0	0.0					10.4
r			0.0	0.0	0.0						0.0												0.0
N																							
Q																							
合計①	30.0	19.4	17.0	6.4	16.6	0.1	0.4	0.0	0.1	1.6	91.7	2.8	1.4	2.1		0.3	0.1	6.7	1.6		1.6		100.0
合計②	30.1	19.9	17.0	6.5	18.2							2.8	1.7	2.2					1.6				
合計③	34.5	19.9	18.7	6.5	20.4																		

資料 『新潮現代国語辞典』の和語名詞  
 〈音素表6.2-2〉 語末における音素分布

『新編現代国語辞典』の和語名詞																								
〈音素表6.2-2〉語末における音素分布																								
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦	
R						7	20	4	16	36	83						7	3	10					93
X		617	3	336	126						1,082								267	160	160			1,082
x												169	57	41										427
k	168	880	45	467	292						1,852													1,852
g	30	237	3	190	107						567													567
s	148	900	91	142	38						1,319	2		2				4						1,323
z	37	140	114	48	9						348	1						1						349
t	327	425	113	216	281						1,362	9		4				13						1,375
d	82			84	93						259													259
n	206	87	23	230	232						778													778
h	35	25	11	3	15						89													89
b	171	202	49	70	50						542													542
p	17		1	2	12						32													32
m	342	660	9	434	119						1,564													1,564
r	446	1,472	89	345	253						2,605	1						1						2,606
N																						77		77
Q																								
合計①	2,169	5,645	551	2,567	1,627	7	20	4	16	36	12,642	182	57	47			7	3	296	160			77	13,015
合計②																								
合計③	2,351	5,645	608	2,567	1,674																			

〈音素表6.2-2'〉 語末における音素分布

目次表0.2.2 / 語末における目次分布																								
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦	
R						0.1	0.2	0.0	0.1	0.3	0.6						0.1	0.0	0.1					0.7
X		4.7	0.0	2.6	1.0						8.3								2.1	1.2	1.2			8.3
x												1.3	0.4	0.3										3.3
k	1.3	6.8	0.3	3.6	2.2						14.2													14.2
g	0.2	1.8	0.0	1.5	0.8						4.4													4.4
s	1.1	6.9	0.7	1.1	0.3						10.1	0.0		0.0				0.0						10.2
z	0.3	1.1	0.9	0.4	0.1						2.7	0.0						0.0						2.7
t	2.5	3.3	0.9	1.7	2.2						10.5	0.1		0.0				0.1						10.6
d	0.6			0.6	0.7						2.0													2.0
n	1.6	0.7	0.2	1.8	1.8						6.0													6.0
h	0.3	0.2	0.1	0.0	0.1						0.7													0.7
b	1.3	1.6	0.4	0.5	0.4						4.2													4.2
p	0.1		0.0	0.0	0.1						0.2													0.2
m	2.6	5.1	0.1	3.3	0.9						12.0													12.0
r	3.4	11.3	0.7	2.7	1.9						20.0	0.0						0.0						20.0
N																						0.6		0.6
Q																								
合計①	16.7	43.4	4.2	19.7	12.5	0.1	0.2	0.0	0.1	0.3	97.1	1.4	0.4	0.4			0.1	0.0	2.3	1.2			0.6	100.0
合計②																								
合計③	18.1	43.4	4.7	19.7	12.9																			

資料 『新潮現代国語辞典』の和語名詞  
 〈音素表6. 2-3〉 語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R						16	73	7	23	310	429					53	12	65					494
X	1209	1736	803	610	1198		38			152	5746												5746
x				1							1	839	340	431		39	2	1651	920		920		2572
k	2126	1869	958	784	1153	6	2			24	6922	2				3	3	8					6930
g	922	456	335	292	438			3		3	2449			1		1		2					2451
s	895	2099	656	274	338		10		4	4	4280	25		8		3	1	37					4317
z	267	382	731	87	83		7		1		1558	9	1			2	1	13					1571
t	1446	943	1078	526	1185		1	1		45	5225	32		17		3	2	54					5279
d	521			234	416					18	1189												1189
n	1294	343	262	524	861	2	6		3	3	3298					1		1					3299
h	839	697	394	53	180	1	7	1		19	2191			1			1	2					2193
b	604	446	367	166	205	5		1	1	7	1802												1802
p	61	11	4	8	37	2			3	1	127												127
m	1590	1550	339	788	859		2		3	25	5156						2	2					5158
r	1127	2107	354	517	511			1	8	9	4634	2				1		3					4637
N																						287	287
Q																						272	272
合計①	12901	12639	6281	4863	7465	16	73	7	23	310	44578	909	341	458		53	12	1773	920		920		48324
合計②	12917	12712	6288	4886	7775							909	394	470					920				
合計③	14746	12712	6682	4886	8245																		

〈音素表6. 2-3'〉 語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R						0.0	0.2	0.0	0.0	0.6	0.9					0.1	0.0	0.1					1.0
X	2.5	3.6	1.7	1.3	2.5		0.1			0.3	11.9												11.9
x				0.0							0.0	1.7	0.7	0.9		0.1	0.0	3.4	1.9		1.9		5.3
k	4.4	3.9	2.0	1.6	2.4	0.0	0.0			0.0	14.3	0.0				0.0	0.0	0.0					14.3
g	1.9	0.9	0.7	0.6	0.9			0.0		0.0	5.1			0.0		0.0		0.0					5.1
s	1.9	4.3	1.4	0.6	0.7		0.0		0.0	0.0	8.9	0.1		0.0		0.0	0.0	0.1					8.9
z	0.6	0.8	1.5	0.2	0.2		0.0		0.0		3.2	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0					3.3
t	3.0	2.0	2.2	1.1	2.5		0.0	0.0		0.1	10.8	0.1		0.0		0.0	0.0	0.1					10.9
d	1.1			0.5	0.9					0.0	2.5												2.5
n	2.7	0.7	0.5	1.1	1.8	0.0	0.0		0.0	0.0	6.8					0.0		0.0					6.8
h	1.7	1.4	0.8	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0		0.0	4.5			0.0			0.0	0.0					4.5
b	1.2	0.9	0.8	0.3	0.4	0.0		0.0	0.0	0.0	3.7												3.7
p	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0			0.0	0.0	0.3												0.3
m	3.3	3.2	0.7	1.6	1.8		0.0		0.0	0.1	10.7						0.0	0.0					10.7
r	2.3	4.4	0.7	1.1	1.1			0.0	0.0	0.0	9.6	0.0				0.0		0.0					9.6
N																						0.6	0.6
Q																						0.6	0.6
合計①	26.7	26.2	13.0	10.1	15.4	0.0	0.2	0.0	0.0	0.6	92.2	1.9	0.7	0.9		0.1	0.0	3.7	1.9		1.9		100.0
合計②	26.7	26.3	13.0	10.1	16.1							1.9	0.8	1.0					1.9				
合計③	30.5	26.3	13.8	10.1	17.1																		



資料 『新潮現代国語辞典』の漢語  
〈音素表6.3-1〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計 ④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R																							
X	330	969	153	354	160				134	161	2261												2261
x												177	50	150		259	298	934	99		99		1033
k	1875	884	177	513	565			55	327	1062	5458	36	235	201		85	384	941					6399
g	487	205	158	474	285			19	28	125	1781	45	8	94		13	67	227					2008
s	849	1445	251	796	334		3	27	638	425	4768	210	676	328		84	571	1869					6637
z	234	624	61	292	114			1	26	103	1455	67	401	121		68	311	968					2423
t	778	323	60	403	263			93	206	415	2541	88	151	107		57	312	715					3256
d	436			102	174				9	253	974												974
n	235	206	2	131	3				6	130	713		79	15		26	11	131					844
h	789	408	743	197	305		1	109	174	367	3093	41					128	169					3262
b	311	173	344	126	172			1	19	176	1322	10	2				72	84					1406
p																							
m	196	152	234	74	161				173	81	1071	6					50	56					1127
r	274	315	79	178	148				189	182	1365	35	77	53		31	215	411					1776
N																							
Q																							
合計①	6794	5704	2262	3640	2684		4	305	1929	3480	26802	715	1679	1069		623	2419	6505	99		99		33406
合計②	6794	5708	2567	5569	6164							715	2302	3488					99				
合計③	7608	5708	4869	5569	9652																		

〈音素表6.3-1'〉語頭における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音合計 ④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	半母+ 子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R																							
X	1.0	2.9	0.5	1.1	0.5				0.4	0.5	6.8												6.8
x												0.5	0.1	0.4		0.8	0.9	2.8	0.3		0.3		3.1
k	5.6	2.6	0.5	1.5	1.7			0.2	1.0	3.2	16.3	0.1	0.7	0.6		0.3	1.1	2.8					19.2
g	1.5	0.6	0.5	1.4	0.9			0.1	0.1	0.4	5.3	0.1	0.0	0.3		0.0	0.2	0.7					6.0
s	2.5	4.3	0.8	2.4	1.0		0.0	0.1	1.9	1.3	14.3	0.6	2.0	1.0		0.3	1.7	5.6					19.9
z	0.7	1.9	0.2	0.9	0.3			0.0	0.1	0.3	4.4	0.2	1.2	0.4		0.2	0.9	2.9					7.3
t	2.3	1.0	0.2	1.2	0.8			0.3	0.6	1.2	7.6	0.3	0.5	0.3		0.2	0.9	2.1					9.7
d	1.3			0.3	0.5				0.0	0.8	2.9												2.9
n	0.7	0.6	0.0	0.4	0.0				0.0	0.4	2.1		0.2	0.0		0.1	0.0	0.4					2.5
h	2.4	1.2	2.2	0.6	0.9		0.0	0.3	0.5	1.1	9.3	0.1					0.4	0.5					9.8
b	0.9	0.5	1.0	0.4	0.5			0.0	0.1	0.5	4.0	0.0	0.0				0.2	0.3					4.2
p																							
m	0.6	0.5	0.7	0.2	0.5				0.5	0.2	3.2	0.0					0.1	0.2					3.4
r	0.8	0.9	0.2	0.5	0.4				0.6	0.5	4.1	0.1	0.2	0.2		0.1	0.6	1.2					5.3
N																							
Q																							
合計①	20.3	17.1	6.8	10.9	8.0		0.0	0.9	5.8	10.4	80.2	2.1	5.0	3.2		1.9	7.2	19.5	0.3		0.3		100.0
合計②	20.3	17.1	7.7	16.7	18.5							2.1	6.9	10.4					0.3				
合計③	22.8	17.1	14.6	16.7	28.9																		

資料 『新潮現代国語辞典』の漢語  
 〈音素表6.3-2〉 語末における音素分布

『新編現代国語研究』の成果											子音合計						半母+						
〈音素表6.3-2〉語末における音素分布											④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R											9648												9648
X	9	2,525	59	16	5						2,614						173	95		95			2,614
x												73	56	44									268
k	632	1,377	3,483	44	158						5,694			107			107						5,801
g	144	226	63	36	233						702	1		43			44						746
s	81	755	26	17	131						1,010	299	275	259			833						1,843
z	71	464	43	11	3						592	37	91	127			255						847
t	26	342	2,218		100						2,686	17		28			45						2,731
d	38				156						194												194
n	2	14	1	1							18			9			9						27
h	52	138	150		40						380												380
b	55	96	116		70						337												337
p	36	56	75		24						191												191
m	40	61	78	4	6						189												189
r	17	193	8		105						323			40			40						363
N																					7,227		7,227
Q																							
合計①	1,203	6,247	6,320	129	1,031			1,474	2,083	6,091	24,578	427	422	657			1,506	95		95	7,227		33,406
合計②																							
合計③	1,725	6,247	6,742	129	1,688																		

〈音素表6.3-2'〉 語末における音素分布

母音表0.0 2 / 結果における母音分布											子音合計 ④	半母+ 子計⑤						wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦		
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:							
R								4.4	6.2	18.2	28.9													28.9
X	0.0	7.6	0.2	0.0	0.0						7.8							0.5	0.3		0.3			7.8
x												0.2	0.2	0.1										0.8
k	1.9	4.1	10.4	0.1	0.5						17.0			0.3				0.3						17.4
g	0.4	0.7	0.2	0.1	0.7						2.1	0.0		0.1				0.1						2.2
s	0.2	2.3	0.1	0.1	0.4						3.0	0.9	0.8	0.8				2.5						5.5
z	0.2	1.4	0.1	0.0	0.0						1.8	0.1	0.3	0.4				0.8						2.5
t	0.1	1.0	6.6		0.3						8.0	0.1		0.1				0.1						8.2
d	0.1				0.5						0.6													0.6
n	0.0	0.0	0.0	0.0							0.1			0.0				0.0						0.1
h	0.2	0.4	0.4		0.1						1.1													1.1
b	0.2	0.3	0.3		0.2						1.0													1.0
p	0.1	0.2	0.2		0.1						0.6													0.6
m	0.1	0.2	0.2	0.0	0.0						0.6													0.6
r	0.1	0.6	0.0		0.3						1.0			0.1				0.1						1.1
N																						21.6		21.6
Q																								
合計①	3.6	18.7	18.9	0.4	3.1			4.4	6.2	18.2	73.6	1.3	1.3	2.0				4.5	0.3		0.3	21.6		100.0
合計②																								
合計③	5.2	18.7	20.2	0.4	5.1																			

資料 『新潮現代国語辞典』の漢語  
〈音素表6.3-3〉 語全体における音素分布

語全体における音素分布											子音合計					半母+							
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	子計⑤	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦
R							5	664	4,114	6,992	11,775					1,802	5,281	7,083					18,858
X	524	6,573	1,213	737	329				278	251	9,905												9,905
x												412	115	249		402	661	1,839	241		241		2,080
k	3,877	2,984	6,187	1,038	1,116			84	681	1,936	17,903	99	235	421		308	646	1,709					19,612
g	1,169	487	267	925	583			59	58	303	3,851	64	8	157		28	220	477					4,328
s	1,730	3,081	470	1,774	752		3	144	1,394	881	10,229	593	1,134	893		332	1,254	4,206					14,435
z	562	1,587	134	566	254			7	71	228	3,409	159	652	268		214	809	2,102					5,511
t	1,413	997	3,048	830	494			148	478	933	8,341	162	152	166		250	680	1,410					9,751
d	942			264	430					21	582												2,239
n	355	465	4	354	9					12	274	2	79	25		95	34	235					1,708
h	1,212	656	1,053	310	426		1	188	263	639	4,748	45					214	259					5,007
b	645	307	867	248	376		1	1	37	378	2,860	14	2			3	165	184					3,044
p	204	109	144	48	59			33	33	99	729	1					31	32					761
m	406	312	331	244	423				407	158	2,281	38					100	138					2,419
r	595	756	173	346	401				381	330	2,982	73	77	210		170	467	997					3,979
N																						15,335	
Q																						1,905	
合計①	13,634	18,314	13,891	7,684	5,652		5	664	4,114	6,992	70,950	1,662	2,454	2,389		1,802	5,281	13,588	241		241	17,240	120,877
合計②	13,634	18,319	14,555	11,798	12,644							1,662	4,256	7,670					241				
合計③	15,537	18,319	18,811	11,798	20,314																		

〈音素表6.3-3'〉 語全体における音素分布

母音表0.0 0.7 語全体に於ける母音分布											子音合計						半母+子計⑤			合計⑤				NQ計⑥		合計⑦	
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	④	ja	ju	jo	ja:	ju:	jo:	wa	wa:	合計⑤	NQ計⑥	合計⑦					
R							0.0	0.5	3.4	5.8	9.7					1.5	4.4	5.9					15.6				
X	0.4	5.4	1.0	0.6	0.3				0.2	0.2	8.2												8.2				
x												0.3	0.1	0.2		0.3	0.5	1.5	0.2		0.2		1.7				
k	3.2	2.5	5.1	0.9	0.9			0.1	0.6	1.6	14.8	0.1	0.2	0.3		0.3	0.5	1.4					16.2				
g	1.0	0.4	0.2	0.8	0.5			0.0	0.0	0.3	3.2	0.1	0.0	0.1		0.0	0.2	0.4					3.6				
s	1.4	2.5	0.4	1.5	0.6		0.0	0.1	1.2	0.7	8.5	0.5	0.9	0.7		0.3	1.0	3.5					11.9				
z	0.5	1.3	0.1	0.5	0.2			0.0	0.1	0.2	2.8	0.1	0.5	0.2		0.2	0.7	1.7					4.6				
t	1.2	0.8	2.5	0.7	0.4			0.1	0.4	0.8	6.9	0.1	0.1	0.1		0.2	0.6	1.2					8.1				
d	0.8			0.2	0.4				0.0	0.5	1.9												1.9				
n	0.3	0.4	0.0	0.3	0.0				0.0	0.2	1.2	0.0	0.1	0.0		0.1	0.0	0.2					1.4				
h	1.0	0.5	0.9	0.3	0.4		0.0	0.2	0.2	0.5	3.9	0.0					0.2	0.2					4.1				
b	0.5	0.3	0.7	0.2	0.3		0.0	0.0	0.0	0.3	2.4	0.0	0.0			0.0	0.1	0.2					2.5				
p	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0			0.0	0.0	0.1	0.6	0.0					0.0	0.0					0.6				
m	0.3	0.3	0.3	0.2	0.3				0.3	0.1	1.9	0.0					0.1	0.1					2.0				
r	0.5	0.6	0.1	0.3	0.3				0.3	0.3	2.5	0.1	0.1	0.2		0.1	0.4	0.8					3.3				
N																						12.7		12.7			
Q																						1.6		1.6			
合計①	11.3	15.2	11.5	6.4	4.7		0.0	0.5	3.4	5.8	58.7	1.4	2.0	2.0		1.5	4.4	11.2	0.2		0.2	14.3		100.0			
合計②	11.3	15.2	12.0	9.8	10.5							1.4	3.5	6.3					0.2								
合計③	12.9	15.2	15.6	9.8	16.8																						

資料 『中央公論』の外来語  
 〈音素表6.4-3〉語全体における音素分布

「平文書論」の外来語 〈音素表6.4-3〉語全体における音素分布											子音 計④																	半母+ 子計⑤	NQ⑥	合計⑦			
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:	wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:				
R						220	167	55	141	160	743							17	72	69	3	7				14	1	2	4		189		932
X	207	282	49	157	75	14	7	1	39	38	869																					869	
x												14		7		4	1			16		3	39	9	6	4	14	1	2	4	124		124
k	82	43	175	23	89	18	16	12	21	17	496	15		5						2						1					23	519	
g	20	8	87	14	15	6	6	1	6	7	170	3		1									1								5	175	
s	53		418	50	29	12		8	2	9	581	15	72	27	3	31	4	49	1	1	1										204	785	
z	14		66	17	2	3					102	20	50	8	11	11	10	19	2	2	2										135	237	
t	82	29	3	64	301	47	22	1	12	13	574																					574	
c	3	2	22	1	2	2		1		1	34	10	57	2	6	5	2	4	3												89	123	
d	62	27		40	148	11	12		2	2	304			4					1												5	309	
n	72	54	24	47	34	9	7	4	11	4	266	1		1					17												19	285	
h	39	16	88	18	20	9	4	4	1	15	214			1																	1	123	
f	19	11		7	3	4	3		1	5	53											1									1	146	
b	67	45	85	46	31	24	11	2	7	9	327			2					7												9	336	
p	55	24	93	23	32	18	25	1	4	8	283								1												1	284	
m	100	44	104	51	31	18	4	1	11	6	370	1		9					1												11	381	
r	208	199	333	97	109	25	50	19	24	26	1090			2		1			18												21	1111	
N																																630	630
Q																																217	217
合計①	1088	784	1547	655	921	220	167	55	141	160	5738	79	179	69	20	52	17	72	69	3	7	39	10	6	5	14	1	2	4		648		
合計②	1308	951	1602	796	1081							96	251	138	23	59																	
合計③	1457	1213	1740	827	1149																	53	11	8	9								

〈音素表6.4-3'〉 語全体における音素分布

〈音素表6.4-3'〉語全体における音素分布										子音計④	ja ji ju je jo ja: ji: ju: je: jo: wa wi we wo wa: wi: we: wo:																半母+子計⑤	NQ⑥	合計⑦																
R						2.7	2.0	0.7	1.7	2.0	9.1	0.2 0.9 0.8 0.0 0.1																0.2 0.0 0.0 0.0	2.3		11.4														
X	2.5	3.5	0.6	1.9	0.9	0.2	0.1	0.0	0.5	0.5	10.6																						10.6												
x												0.2		0.1		0.0	0.0		0.2		0.0	0.5	0.1	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	1.5		1.5													
k	1.0	0.5	2.1	0.3	1.1	0.2	0.2	0.1	0.3	0.2	6.1	0.2		0.1					0.0							0.0				0.3		6.4													
g	0.2	0.1	1.1	0.2	0.2	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	2.1	0.0		0.0									0.0							0.1		2.1													
s	0.6		5.1	0.6	0.4	0.1		0.1	0.0	0.1	7.1	0.2	0.9	0.3	0.0	0.4	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0									2.5		9.6													
z	0.2		0.8	0.2	0.0	0.0					1.2	0.2	0.6	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0									1.7		2.9													
t	1.0	0.4	0.0	0.8	3.7	0.6	0.3	0.0	0.1	0.2	7.0																						7.0												
c	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0.4	0.1	0.7	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0											1.1		1.5													
d	0.8	0.3		0.5	1.8	0.1	0.1		0.0	0.0	3.7																					0.1		3.8											
n	0.9	0.7	0.3	0.6	0.4	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	3.3	0.0		0.0				0.2												0.2		3.5													
h	0.5	0.2	1.1	0.2	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	2.6																					0.0		1.5											
f	0.2	0.1		0.1	0.0	0.0	0.0		0.0	0.1	0.6																					0.0		0.0											
b	0.8	0.6	1.0	0.6	0.4	0.3	0.1	0.0	0.1	0.1	4.0																					0.1		4.1											
p	0.7	0.3	1.1	0.3	0.4	0.2	0.3	0.0	0.0	0.1	3.5																					0.0		3.5											
m	1.2	0.5	1.3	0.6	0.4	0.2	0.0	0.0	0.1	0.1	4.5	0.0		0.1				0.0												0.1		4.7													
r	2.5	2.4	4.1	1.2	1.3	0.3	0.6	0.2	0.3	0.3	13.3																				0.2			0.3					13.6						
N																																				7.7									
Q																																				2.7									
合計①	13.3	9.6	18.9	8.0	11.3	2.7	2.0	0.7	1.7	2.0	70.3	1.0	2.2	0.8	0.2	0.6	0.2	0.9	0.8	0.0	0.1	0.5	0.1	0.1	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	7.9	10.4	100.0													
合計②	16.0	11.6	19.6	9.7	13.2							1.2	3.1	1.7	0.3	0.7																													
合計③	17.8	14.9	21.3	10.1	14.1																																								

## 179

〈音素表6.5-1'〉 語頭における音素分布

〈音素表6.5-1'〉語頭における音素分布											子音計 ④												半母+ 子計⑤									合計⑤	NQ⑥	合計⑦
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ji	ju	je	jō	ja:	ji:	ju:	je:	jō:		wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:				
R											19.4																							19.4
X	5.0	8.5	1.3	0.5	2.7	0.0	0.3		0.3	0.8										0.3	0.2	3.0	1.1		0.0		0.0				1.1		4.2	
x											15.7	0.9		0.3		1.4					0.3	0.6	1.1										16.8	
k	5.1	2.3	1.1	0.8	4.5	0.0	0.1	0.0	0.6	1.3	2.2	0.1				0.1				0.3	0.6	1.1			0.0							2.3		
g	0.6	0.2	0.1	0.6	0.5			0.0	0.0	0.1	2.2	0.1				0.0					0.0	1.1			0.0							6.4		
s	2.0		1.4	1.7	2.5	0.0		0.1	0.9	0.6	9.2	0.3	4.2	0.4		0.3	0.0	0.0	0.3		0.8	6.4										15.6		
z	0.3		0.1	0.3	0.0				0.0	0.1	0.7	0.0	1.7	0.2		0.2		0.1	0.5		0.5	3.1										3.8		
t	3.1		0.0	0.7	1.6		0.0		0.3	0.7	6.4																					6.4		
c			1.4					0.1			1.5	0.1	0.8	0.0	0.0	0.1		0.1	0.7	0.0	0.2	2.0										3.5		
d	1.0			0.8	0.5		0.0		0.0	0.6	2.9				0.0						0.0	0.0										2.9		
n	3.9	2.1	0.1	0.3	0.4		0.0	0.0	0.0	0.0	6.9					0.0			0.1		0.1	0.1										7.1		
h	2.1	2.2	1.2	0.3	0.8	0.0	0.0	0.1	0.2	0.4	7.2	0.1				0.0					0.2	0.3										7.6		
f	0.0	0.0							0.0	0.0	0.1																						0.1	
b	0.4	0.1	0.6	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	1.7										0.1	0.1										1.7		
p	0.1		0.1	0.1	0.1	0.0	0.0				0.3																					0.3		
m	1.3	1.6	0.7	0.5	2.1	0.0			0.1	0.2	6.5	0.0									0.0	0.0										6.5		
r	0.1	0.6	0.0	0.4	0.4	0.0		0.0	0.1	0.1	1.7				0.0				0.1		0.1	0.2										2.0		
N																																		
Q																																		
合計①	24.9	17.5	8.1	6.9	16.3	0.1	0.5	0.4	2.8	4.9	82.3	1.5	6.8	0.9	0.0	2.2	0.0	0.1	2.2	0.0	2.8	16.6	1.1		0.0	0.0	0.0			1.2		100.0		
合計②	25.1	17.9	8.5	9.7	21.1							1.5	6.9	3.1	0.0	5.0							1.1		0.0	0.0								
合計③	27.7	24.9	11.6	9.7	26.1																													

資料 『中央公論』  
〈音素表6.5-2〉語末における音素分布

音素表6. 5-2) 語末における音素分布											子音計 ④	半母+ 子計⑤											合計⑤				NQ⑥	合計⑦								
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:		wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:						
R							11	41	30	33	179	294																						294		
X	7	258	117	35	733						1150											102	747											1150		
x												90			2		10																	849		
k	110	36	186	17	13						362																							362		
g	655	9	4	4	17						689																							689		
s	10		118	9	8						145	14	103	5		6						128												273		
z	2		25	9	1						37	3	25	5		4						37												74		
t	455			670	586						1711																							1711		
c			55								55	1	37			3						41												96		
d	81			403	38						522																							522		
n	206	866	2	17	1298						2389	1										1												2390		
h	1	3			2						6																								6	
f																																				
b	77	11	14	3	2						107																								107	
p			1		1						2																								2	
m	19	14	17	23	306						379																								379	
r	152	97	614	30	21						914																								914	
N																																				182
Q																																				182
合計①	1775	1294	1153	1220	3026	11	41	30	33	179	8762	109	165	12		23						309	747									747	182	10000		
合計②																																				
合計③	2631	1459	1165	1220	3049																															

〈音素表6.5-2'〉語末における音素分布

目次表0.5-2 / 語末における目次分布											子音計 ④	半母+ 子計⑤						wa wi we wo wa: wi: we: wo:				合計⑤	NQ⑥	合計⑦											
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:														
R						0.1	0.4	0.3	0.3	1.8	2.9																						2.9		
X	0.1	2.6	1.2	0.4	7.3						11.5																						11.5		
x												0.9		0.0		0.1						1.0	7.5										8.5		
k	1.1	0.4	1.9	0.2	0.1						3.6																						3.6		
g	6.6	0.1	0.0	0.0	0.2						6.9																						6.9		
s	0.1		1.2	0.1	0.1						1.5	0.1	1.0	0.1		0.1						1.3											2.7		
z	0.0		0.3	0.1	0.0						0.4	0.0	0.3	0.1		0.0						0.4											0.7		
t	4.6			6.7	5.9						17.1																						17.1		
c			0.6								0.6	0.0	0.4			0.0						0.4											1.0		
d	0.8			4.0	0.4						5.2																						5.2		
n	2.1	8.7	0.0	0.2	13.0						23.9	0.0										0.0											23.9		
h	0.0	0.0			0.0						0.1																							0.1	
f																																			
b	0.8	0.1	0.1	0.0	0.0						1.1																							1.1	
p			0.0		0.0						0.0																							0.0	
m	0.2	0.1	0.2	0.2	3.1						3.8																							3.8	
r	1.5	1.0	6.1	0.3	0.2						9.1																							9.1	
N																																		1.8	
Q																																		1.8	
合計①	17.8	12.9	11.5	12.2	30.3	0.1	0.4	0.3	0.3	1.8	87.6	1.1	1.7	0.1		0.2						3.1	7.5									7.5	1.8	100.0	
合計②																																			
合計③	26.3	14.6	11.7	12.2	30.5																														

資料 『中央公論』  
〈音素表6.5-3〉語全体における音素分布

資料 音素表6. 5-3) 語全体における音素分布											子音計												半母+ 子音計⑤									合計⑤	NQ⑥	合計⑦
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	④	ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:		wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:				
R						76	109	112	809	1223	2329						6	77	613	6	958	1660					5	1	1		7		3996	
X	677	2729	308	397	1061	7	36	1	62	119	5397											187	884	1094		2		5	1	1		1103		5397
x												309		57		253				78	187												1987	
k	1860	888	1423	408	775	7	7	14	139	284	5805	14		3		46				98	155	316				1						1	6122	
g	1079	140	87	163	239		4	8	13	31	1764	7		1		2					46	56											1820	
s	701		649	449	317	3		30	298	131	2578	160	1381	133		107	3	57	71		194	2106											4684	
z	134		184	98	54	1			6	36	513	24	544	61	1	44			12	195	5	133	1019										1532	
t	1431	17	2	1072	1352	17	15		84	179	4169																						4169	
c			720					25			745	18	498	1	2	22	3	8	96	1	119	768											1513	
d	616	4		759	267	2	10	2	4	144	1808			1								1											1809	
n	1068	1393	32	227	1742	2	4	1	4	44	4517	1		1		1			29		1	33											4550	
h	376	276	189	39	124	2	2	15	36	96	1155	47				2					37	86											1241	
f	7	4		2			2		1	3	19																						19	
b	242	85	237	98	46	11	3	4	37	36	799	3							5		14	22											821	
p	58	9	50	8	117	13	14	1	13	26	309	16				1					4	21											330	
m	566	344	174	263	702	6			63	25	2143	5		5							6	16											2159	
r	645	527	1036	588	279	5	12	11	49	69	3221	9				56					62	168											3389	
N																																		3010
Q																																		1008
合計①	9460	6416	5091	4571	7075	76	109	112	809	1223	34942	613	2423	263	3	534	6	77	613	6	958	5496	1094		2	1	5	1	1		1104	4018	49556	
合計②	9536	6525	5203	5380	8298							619	2500	876	9	1492								1099	1	3	1							
合計③	11254	9026	6079	5392	9791																													

〈音素表6.5-3'〉 語全体における音素分布

母音表0.0 0.7 語全体に於ける母音分布											子音計										半母+	母音計								合計⑤		NQ⑥	合計⑦		
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	④	ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:	⑤	wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:	⑤	⑥	⑦		
R						0.2	0.2	0.2	1.6	2.5	4.7						0.0	0.2	1.2	0.0	1.9	3.3					0.0	0.0	0.0		0.0			8.1	
X	1.4	5.5	0.6	0.8	2.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.2	10.9																							10.9	
x												0.6		0.1		0.5				0.2		0.4	1.8	2.2		0.0		0.0	0.0	0.0		2.2		4.0	
k	3.8	1.8	2.9	0.8	1.6	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	11.7	0.0		0.0		0.1				0.2		0.3	0.6				0.0					0.0		12.4	
g	2.2	0.3	0.2	0.3	0.5		0.0	0.0	0.0	0.1	3.6	0.0		0.0		0.0					0.1	0.1				0.0								3.7	
s	1.4		1.3	0.9	0.6	0.0			0.1	0.6	5.2	0.3	2.8	0.3		0.2	0.0	0.1	0.1			0.4	4.2											9.5	
z	0.3		0.4	0.2	0.1	0.0			0.0	0.1	1.0	0.0	1.1	0.1	0.0	0.1		0.0	0.4	0.0	0.3	2.1												3.1	
t	2.9	0.0	0.0	2.2	2.7	0.0	0.0		0.2	0.4	8.4																							8.4	
c			1.5					0.1			1.5	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	1.5												3.1	
d	1.2	0.0		1.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	3.6			0.0								0.0												3.7	
n	2.2	2.8	0.1	0.5	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	9.1	0.0		0.0		0.0			0.1		0.0	0.1											9.2		
h	0.8	0.6	0.4	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	2.3	0.1			0.0						0.1	0.2												2.5	
f	0.0	0.0		0.0			0.0		0.0	0.0	0.0																							0.0	
b	0.5	0.2	0.5	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.6	0.0							0.0		0.0	0.0												1.7	
p	0.1	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6	0.0				0.0					0.0	0.0												0.7	
m	1.1	0.7	0.4	0.5	1.4	0.0			0.1	0.1	4.3	0.0		0.0							0.0	0.0												4.4	
r	1.3	1.1	2.1	1.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	6.5	0.0			0.1				0.1		0.1	0.3												6.8	
N																																	6.1		6.1
Q																																	2.0		2.0
合計①	19.1	12.9	10.3	9.2	14.3	0.2	0.2	0.2	1.6	2.5	70.5	1.2	4.9	0.5	0.0	1.1	0.0	0.2	1.2	0.0	1.9	11.1	2.2		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	8.1	100.0		
合計②	19.2	13.2	10.5	10.9	16.7							1.2	5.0	1.8	0.0	3.0								2.2	0.0	0.0	0.0								
合計③	22.7	18.2	12.3	10.9	19.8																														

資料 『中央公論』（もとの音韻体系に戻した音素表）  
 〈音素表6.5-4〉語全体における音素分布

〈音素表6.5-4〉語全体における音素分布											子音計 ④	半母+ 子計⑤										wa wi we wo wa: wi: we: wo:				合計⑤	NQ⑥	合計⑦						
	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:		ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:		wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:				
R						76	186	112	809	1223	2406						6		613	6	958	1583					5	1	1		7		3996	
X	677	2729	308	397	1061	7	36	1	62	119	5397																						5397	
x												309		57		253				78	187	884	1094		2		5	1	1		1103		1987	
k	1860	888	1423	408	775	7	7	14	139	284	5805	14		3		46				98	155	316				1					1		6122	
g	1079	140	87	163	239		4	8	13	31	1764	7		1		2					46	56											1820	
s	701	1438	649	449	317	3		30	298	131	4016	160		133		107	3		71		194	668											4684	
z	134	556	184	98	54	1			6	36	1069	24		61	1	44				195	5	133	463										1532	
t	1431	523	722	1072	1352	17	15	25	84	179	5420	18		1	2	22	3			96	1	119	262										5682	
d	616	4		759	267	2	10	2	4	144	1808			1								1											1809	
n	1068	1393	32	227	1742	2	4	1	4	44	4517	1		1		1			29		1	33											4550	
h	383	280	189	41	124	2	4	15	37	99	1174	47				2					37	86											1260	
b	242	85	237	98	46	11	3	4	37	36	799	3							5		14	22											821	
p	58	9	50	8	117	13	14	1	13	26	309	16				1					4	21											330	
m	566	344	174	263	702	6			63	25	2143	5		5							6	16											2159	
r	645	527	1036	588	279	5	12	11	49	69	3221	9				56				41	62	168											3389	
N																																3010		3010
Q																																1008		1008
合計①	9460	8916	5091	4571	7075	76	109	112	809	1223	37442	613		263	3	534	6		613	6	958	2996	1094		2	1	5	1	1		1104	4018	49556	
合計②	9536	9025	5203	5380	8298							619		876	9	1492							1099	1	3	1								
合計③	11254	9026	6079	5392	9791																													

〈音素表6.5-4'〉語全体における音素分布

	a	i	u	e	o	a:	i:	u:	e:	o:	子音計 ④	ja	ji	ju	je	jo	ja:	ji:	ju:	je:	jo:	半母十 子計⑤	wa	wi	we	wo	wa:	wi:	we:	wo:	合計⑤	NQ⑥	合計⑦		
R						0.2	0.4	0.2	1.6	2.5	4.9						0.0		1.2	0.0	1.9	3.2					0.0	0.0	0.0		0.0		8.1		
X	1.4	5.5	0.6	0.8	2.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.2	10.9																							10.9	
x												0.6		0.1		0.5				0.2	0.4	1.8	2.2		0.0		0.0	0.0	0.0		2.2			4.0	
k	3.8	1.8	2.9	0.8	1.6	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6	11.7	0.0		0.0		0.1				0.2	0.3	0.6				0.0								12.4	
g	2.2	0.3	0.2	0.3	0.5		0.0	0.0	0.0	0.1	3.6	0.0		0.0		0.0					0.1	0.1												3.7	
s	1.4	2.9	1.3	0.9	0.6	0.0			0.1	0.6	8.1	0.3		0.3		0.2	0.0			0.1	0.4	1.3												9.5	
z	0.3	1.1	0.4	0.2	0.1	0.0				0.0	2.2	0.0		0.1	0.0	0.1				0.4	0.0	0.3	0.9											3.1	
t	2.9	1.1	1.5	2.2	2.7	0.0	0.0	0.1	0.2	0.4	10.9	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0			0.2	0.0	0.2	0.5											11.5	
d	1.2	0.0		1.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	3.6				0.0							0.0												3.7	
n	2.2	2.8	0.1	0.5	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	9.1	0.0		0.0		0.0				0.1	0.0	0.1												9.2	
h	0.8	0.6	0.4	0.1	0.3	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	2.4	0.1				0.0					0.1	0.2												2.5	
b	0.5	0.2	0.5	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.6	0.0									0.0	0.0	0.0											1.7	
p	0.1	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6	0.0				0.0					0.0	0.0												0.7	
m	1.1	0.7	0.4	0.5	1.4	0.0				0.1	4.3	0.0		0.0							0.0	0.0												4.4	
r	1.3	1.1	2.1	1.2	0.6	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	6.5	0.0				0.1					0.1	0.3												6.8	
N																																	6.1		6.1
Q																																2.0		2.0	
合計①	19.1	18.0	10.3	9.2	14.3	0.2	0.2	0.2	1.6	2.5	75.6	1.2		0.5	0.0	1.1	0.0		1.2	0.0	1.9	6.0	2.2		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		2.2	8.1	100.0		
合計②	19.2	18.2	10.5	10.9	16.7							1.2		1.8	0.0	3.0							2.2	0.0	0.0	0.0									
合計③	22.7	18.2	12.3	10.9	19.8																														



## 資料〈音素配列表〉

以下、母音の音素配列表である。拍数に関わらず、出現する母音音素について1番目、2番目、3番目と考えて3回ずつ数える。音素配列では、母音／a i u e o／と、半母音を伴った／ja ju je jo wa wi we wo／を別に扱うこととする。言い換えるならば、1S+1Vで、一つの新たな母音とみなすということである。ただし、〈音素配列表〉から、母音／a i u e o／のみで集計することも可能である。

母音が0である撥音、促音、引き音節も母音配列の中に入れた。引き音節の場合は、／R／だと、どの母音の次の拍なのかがわからないため、母音ごとに個別に集計した。オ段の引き音節は、「:o」のように、母音の前に「:」をつけて、それを示している。ア段ならば、「:a」である。

なお、各時代で設定したように、／N M G T Q／、／i I e E o O っ／など、音素が異なる場合は、すべて別扱いとした。〈音素配列表〉は、すべて掲載すると、紙幅をとるので、テキスト類、すなわち、『万葉集』の和歌、『源氏物語』、『天草版平家物語』、『中央公論』における〈音素配列表〉は、すべて掲載することとし、その他は、上位の一部分のみの掲載とする。

語頭、語末であることがわかるように、語頭の音素の前に「{」を二つ、語末の音素の後に「}」を二つ補う。すると、1拍語なら3つの組み合わせ、2拍語なら4つの組み合わせ、3拍語なら5つの組み合わせができる。つまり、拍数+2の組み合わせができることになる。

以下に母音配列の例を示す。

(例) i 「矢」(1拍語の母音の場合)

{ { ja } }

①                      ②                      ③

ii 「雨覆い(あまおーい)」(5拍語の母音の場合)

{ { a a o :o i } }

①                      ②                      ③                      ④                      ⑤                      ⑥                      ⑦

i の組み合わせは、前から順に次の3つである。

① { { ja } }   ② { { ja } }   ③ { ja } }

ii の組み合わせは、前から順に次の7つである。

① { { a } }   ② { { a a } }   ③ { a a o }   ④ { a o :o }   ⑤ { o :o i }   ⑥ { :o i }   ⑦ { i } }

〈音素配列表3.1〉 『万葉集』和語名詞音素配列 1 / 1

1	{	{	_a	1186	71	_i	_a	_u	51	141	_o	_o	_i	22
2	_i	}	}	890	72	_u	_o	}	51	142	_i	_u	_u	21
3	_a	}	}	862	73	_i	_u	_i	50	143	_u	_a	_o	21
4	{	{	_i	678	74	_a	_u	}	49	144	_o	_I	}	21
5	{	_a	_a	481	75	_i	_i	_a	49	145	_a	_u	_o	20
6	{	{	_u	481	76	_a	_i	_o	48	146	_a	_o	_o	20
7	_e	}	}	354	77	_i	_e	}	47	147	_i	_a	ja	20
8	_a	_i	}	343	78	_u	_u	_i	47	148	_i	_o	_i	20
9	_o	_a	}	310	79	_a	_i	_o	46	149	_u	_a	_I	20
10	_o	}	}	308	80	{	_a	_e	44	150	_u	_a	_e	20
11	{	{	_o	306	81	{	ju	_u	44	151	_e	_a	_i	20
12	{	_a	_i	241	82	_o	_o	}	43	152	{	_a	ja	20
13	{	_i	_a	215	83	ja	}	}	43	153	{	_i	ja	20
14	_a	_a	_a	210	84	{	_u	_o	42	154	{	wo	_o	20
15	_u	_a	}	205	85	_a	_i	_i	40	155	_a	ja	}	19
16	_o	}	}	205	86	{	{	j0	40	156	_i	_u	_e	19
17	_a	_a	_i	200	87	_a	_a	_o	39	157	j0	}	}	19
18	{	_a	_u	190	88	_o	_o	_i	39	158	wo	_o	_o	19
19	{	_u	_a	176	89	_o	_e	}	39	159	{	ja	_o	19
20	_u	}	}	172	90	_o	_a	_a	38	160	{	j0	_o	19
21	{	{	_o	171	91	_i	_a	_o	37	161	_a	ju	_i	18
22	_u	_i	}	168	92	_o	_i	_u	37	162	_u	_a	ja	18
23	_E	}	}	157	93	ja	_a	_a	37	163	_e	_i	}	18
24	_I	}	}	155	94	{	_o	_o	37	164	_o	_i	_i	18
25	_a	_u	_a	151	95	_i	ja	_a	36	165	_o	_u	_a	18
26	_i	_a	_a	132	96	_o	_o	_o	36	166	_o	_u	_a	18
27	ja	_a	}	130	97	je	}	}	36	167	ju	_u	_a	18
28	_a	_e	}	126	98	wo	}	}	36	168	{	_a	}	18
29	_a	_i	_a	118	99	_u	_I	}	35	169	{	wo	_i	18
30	{	{	ja	117	100	{	_o	_a	35	170	{	{	_E	18
31	_u	_a	_a	114	101	{	wa	_a	35	171	_o	_u	_i	17
32	_i	_a	}	109	102	_a	_o	_i	34	172	_o	_o	_i	17
33	_a	_a	_u	105	103	_o	_a	}	32	173	{	_a	ju	17
34	{	_o	_o	105	104	_a	_u	_u	31	174	_a	_a	_I	16
35	{	_i	_u	104	105	{	_o	_i	31	175	_i	_o	_u	16
36	{	_i	_i	103	106	{	_o	_o	31	176	_u	_a	_E	16
37	{	_u	_u	91	107	_u	_E	}	30	177	_u	ja	_a	16
38	_o	_i	}	89	108	_o	_o	_o	30	178	_o	_o	_o	16
39	{	_u	_i	89	109	ju	_i	}	30	179	wi	}	}	16
40	_i	_i	}	88	110	{	_i	_e	30	180	{	_a	_I	16
41	_o	_i	}	86	111	_a	_o	_i	29	181	_a	_o	_o	15
42	_i	_a	_i	85	112	{	_a	_E	29	182	_i	_i	_u	15
43	_a	_u	_i	84	113	_i	_a	_e	28	183	_i	_i	_o	15
44	{	{	wo	84	114	_i	_i	_i	28	184	_u	_a	_o	15
45	_i	_u	_a	80	115	_i	_o	_a	28	185	_u	_i	_o	15
46	_u	_a	_i	79	116	_i	_o	_i	28	186	_u	_i	ja	15
47	{	_i	_o	79	117	_u	_a	_u	27	187	_u	_e	_a	15
48	_a	_E	}	78	118	_o	_i	_a	27	188	_u	_o	_a	15
49	_a	_o	}	78	119	_o	_e	}	27	189	_o	_o	_u	15
50	_u	_e	}	78	120	_u	_u	}	26	190	_o	_i	_u	15
51	_o	_o	}	72	121	jo	}	}	26	191	_o	_o	_a	15
52	{	_a	_o	72	122	{	_i	_E	26	192	ja	_a	_i	15
53	{	_o	_o	70	123	{	_u	_e	26	193	wa	_a	_a	15
54	_i	_o	}	68	124	_a	_a	ja	25	194	wo	_o	_e	15
55	{	_o	_i	68	125	_a	_o	_a	25	195	_a	_i	_e	14
56	_i	_o	}	66	126	_u	_i	_u	25	196	_I	_i	}	14
57	{	{	ju	63	127	_o	_o	_a	25	197	_u	_i	_e	14
58	{	_i	_o	62	128	_o	_a	_a	25	198	_u	_o	_i	14
59	{	ja	_a	62	129	{	_o	_u	25	199	_o	_a	}	14
60	_a	_a	_o	61	130	{	{	jo	24	200	{	_a	_o	14
61	_a	_I	}	61	131	_a	_a	_E	23	201	{	_i	}	14
62	_o	_o	}	61	132	_a	_u	_e	23	202	{	{	_I	14
63	_a	_a	_e	60	133	_o	_a	_i	23	203	_a	_e	_u	13
64	_a	_i	_u	59	134	{	_a	wo	23	204	_a	_o	_a	13
65	_u	_i	_a	57	135	{	wo	_a	23	205	_i	_a	_E	13
66	_i	_u	}	56	136	_a	_i	ja	22	206	_i	_u	_o	13
67	{	{	_e	56	137	_i	_E	}	22	207	_e	_a	_a	13
68	_a	ja	_a	55	138	_i	_o	_o	22	208	_o	_o	}	13
69	{	{	wa	55	139	_i	_o	_o	22	209	_o	_a	_i	13
70	_u	_u	_a	54	140	_o	ja	_a	22	210	{	_u	_I	13

〈音素配列表3.2〉 『万葉集』和歌音素配列 1 / 4

1	{		908	81	_a	_i	_u	39	161	_i	_I	_O	16
2	_i	}	658	82	_o	_O	}	39	162	_i	_u	_O	16
3	{	{	578	83	_i	_i	_i	38	163	_i	_E	_i	16
4	_O	}	518	84	_O	_O	_O	38	164	_u	_e	_i	16
5	_u	}	483	85	_a	_i	_o	37	165	ju	}	}	16
6	_a	}	444	86	_i	_u	_i	37	166	_a	_a	_e	15
7	{	{	333	87	_i	wo	}	36	167	_a	_a	wo	15
8	{	_a	312	88	_O	_o	}	36	168	_a	_i	wo	15
9	{	{	255	89	_a	_e	_i	35	169	_i	_a	_O	15
10	{	{	229	90	_i	_a	_o	35	170	_i	_u	_e	15
11	{	_a	225	91	_a	_i	_e	34	171	_i	_e	_O	15
12	_o	}	207	92	_a	_u	_O	34	172	_u	_u	_a	15
13	_a	_i	193	93	_i	_i	_e	33	173	_e	_a	_i	15
14	_e	}	177	94	{	_a	_o	33	174	_e	_e	}	15
15	_a	_u	167	95	{	{	jO	33	175	_E	_u	}	15
16	{	_i	163	96	_a	_e	_a	32	176	_o	_o	_u	15
17	{	_a	162	97	_a	_o	_O	32	177	_O	_i	_O	15
18	_a	_a	145	98	_I	_O	}	32	178	_O	_O	_o	15
19	_a	_a	133	99	_u	_a	_u	32	179	{	_i	_ja	15
20	_a	_a	129	100	_u	_i	_a	32	180	{	_e	_o	15
21	_i	_O	126	101	{	_a	_E	32	181	{	wa	_e	15
22	_i	_i	117	102	_E	_i	}	31	182	_a	_e	_O	14
23	{	_i	111	103	_i	_e	_a	30	183	_i	_i	_I	14
24	{	_O	100	104	_o	_i	_i	30	184	_i	_i	wo	14
25	_a	_a	99	105	{	ju	_i	30	185	_i	_o	_O	14
26	wo	}	99	106	_a	_e	_u	28	186	_i	_ja	_a	14
27	_i	_a	92	107	_i	_u	_a	28	187	_I	_i	}	14
28	_a	_u	91	108	{	_o	_I	28	188	_u	_a	_O	14
29	_a	_i	89	109	_u	_e	_O	27	189	_ja	_a	_a	14
30	_i	_a	88	110	_o	_a	}	27	190	{	_a	_O	14
31	{	_u	87	111	_a	_e	}	26	191	{	_o	_a	14
32	_a	_i	86	112	_i	_a	_e	26	192	_e	wo	}	13
33	_a	_O	86	113	_u	_i	_u	26	193	_ja	_a	_i	13
34	{	_i	83	114	_u	_i	_O	26	194	jO	_i	}	13
35	_i	_u	81	115	wa	_a	}	26	195	{	jO	_O	13
36	_u	_u	79	116	_E	}	}	25	196	_a	_i	_ja	12
37	{	_o	79	117	_o	_u	}	25	197	_a	_o	_i	12
38	_i	_a	76	118	_O	_o	_i	25	198	_u	_a	_e	12
39	_O	_O	76	119	_ja	}	}	25	199	_e	_o	}	12
40	{	_u	73	120	{	_O	_o	25	200	_o	_a	_i	12
41	{	_e	72	121	_I	}	}	24	201	_o	_I	_i	12
42	{	_a	70	122	_u	_u	_i	24	202	_o	_O	_o	12
43	_i	_e	69	123	_u	_e	}	24	203	_O	_u	}	12
44	_u	_O	68	124	{	_u	_I	24	204	wo	_i	_a	12
45	_e	_a	68	125	_a	_a	_o	23	205	{	_a	_ja	12
46	_u	_i	66	126	_i	_o	_a	23	206	{	_u	_o	12
47	{	{	66	127	jO	_i	}	23	207	{	jO	_i	12
48	_e	_i	65	128	_i	_e	_i	22	208	{	{	_jo	12
49	{	{	64	129	_i	_O	_O	22	209	_a	_u	_u	11
50	_a	_a	63	130	_u	_o	}	22	210	_a	_E	_u	11
51	{	_O	62	131	_O	_i	_a	22	211	_a	_O	_i	11
52	_a	_o	61	132	_a	wo	}	21	212	_i	wa	_a	11
53	_e	_u	61	133	_u	_a	_o	21	213	_u	_E	_u	11
54	_u	_a	59	134	_O	_O	_a	21	214	_e	_a	_a	11
55	_O	_O	58	135	_u	_i	_e	20	215	_e	_O	_o	11
56	{	{	58	136	_a	_E	_i	19	216	_o	wo	}	11
57	_a	_u	57	137	_i	_i	_O	19	217	_ja	_a	}	11
58	_u	_a	57	138	_i	_e	_u	19	218	wa	_a	_e	11
59	_i	_o	54	139	_i	_O	_i	19	219	{	_a	_ju	11
60	_O	_i	54	140	_u	_i	_i	19	220	{	_i	_jo	11
61	{	_u	54	141	{	_o	_u	19	221	{	wo	_u	11
62	_a	_i	53	142	{	_O	_u	19	222	_a	_u	_e	10
63	{	_o	53	143	{	{	_E	19	223	_a	_E	_a	10
64	{	_i	52	144	_i	_o	_i	18	224	_i	_O	_o	10
65	_i	_i	51	145	_u	_e	_a	18	225	_i	_jo	_i	10
66	{	_i	50	146	_E	_O	}	18	226	_u	_a	wo	10
67	{	_i	49	147	_O	_i	_e	18	227	_u	_i	_o	10
68	{	{	49	148	_O	_a	}	18	228	_u	_I	}	10
69	_o	_O	48	149	{	_i	_E	18	229	_u	_o	_i	10
70	{	_u	48	150	_a	_u	_o	17	230	_E	_a	}	10
71	_i	_a	47	151	_i	_a	_E	17	231	_E	_e	}	10
72	_e	_O	47	152	_o	_i	_u	17	232	_o	_i	_O	10
73	_o	_i	44	153	_o	_o	_o	17	233	_o	_e	_u	10
74	{	_ja	44	154	ju	_u	}	17	234	_O	_a	_a	10
75	_i	_u	43	155	{	_u	_E	17	235	_O	_a	_u	10
76	{	_o	41	156	{	_e	_i	17	236	_O	_i	_o	10
77	{	wa	41	157	{	_e	_u	17	237	{	_a	wo	10
78	_u	_a	40	158	{	ju	_u	17	238	_a	_E	_e	9
79	_o	_o	40	159	{	wo	_i	17	239	_a	_E	_O	9
80	_O	_i	40	160	_i	_i	_u	16	240	_a	_o	_a	9

〈音素配列表3.2〉 『万葉集』和歌音素配列 2 / 4

241	_i	j0	_i	9	321	_o	_I	_0	6	401	_I	_a	_a	4
242	_u	_e	_u	9	322	_o	_u	_u	6	402	_I	_i	_e	4
243	_E	_a	_u	9	323	_0	_u	_a	6	403	_I	_i	_0	4
244	_o	_o	ju	9	324	_0	_u	_0	6	404	_I	_e	}	4
245	_0	_a	_i	9	325	_0	_o	_e	6	405	_u	_i	ju	4
246	_0	_i	_i	9	326	ja	_u	}	6	406	_u	_I	_a	4
247	_0	_0	_u	9	327	je	_u	}	6	407	_u	_I	_0	4
248	ja	_a	_u	9	328	j0	_u	_u	6	408	_u	_0	_i	4
249	ju	_a	_u	9	329	wo	_u	}	6	409	_u	_0	_I	4
250	ju	_i	}	9	330	wo	_0	_e	6	410	_u	_0	_o	4
251	wa	_a	_u	9	331	{	_E	_i	6	411	_u	j0	_i	4
252	{	_i	ju	9	332	{	_0	we	6	412	_u	wo	}	4
253	{	ja	_u	9	333	{	ja	_o	6	413	_e	_i	_o	4
254	_a	jo	_i	8	334	{	j0	_u	6	414	_e	_u	_u	4
255	_a	wo	_i	8	335	{	wo	_e	6	415	_e	_u	_o	4
256	_i	_e	_e	8	336	_a	_a	ja	5	416	_E	_i	_e	4
257	_i	_0	_u	8	337	_a	_I	_a	5	417	_E	_u	_a	4
258	_u	_u	_0	8	338	_a	_I	_i	5	418	_o	_i	ja	4
259	_e	_o	_0	8	339	_a	_I	}	5	419	_o	_I	wo	4
260	_e	_i	_i	8	340	_a	_0	_o	5	420	_o	_u	_i	4
261	_e	_u	_a	8	341	_a	ja	_a	5	421	_o	_o	_e	4
262	_E	_u	_i	8	342	_i	_i	_o	5	422	_o	_o	}	4
263	_o	_i	_a	8	343	_i	_u	_E	5	423	_o	_0	_i	4
264	_o	_0	_a	8	344	_i	_o	_I	5	424	_o	ju	_u	4
265	ja	_i	}	8	345	_i	_0	_a	5	425	_o	je	_e	4
266	ju	_i	_0	8	346	_i	_0	_E	5	426	_0	_i	wo	4
267	ju	_u	_a	8	347	_i	ja	_o	5	427	_0	_I	_o	4
268	wa	_a	_i	8	348	_i	ju	_i	5	428	_0	_u	_i	4
269	wo	_0	}	8	349	_I	_E	ja	5	429	_0	_e	_a	4
270	{	_a	}	8	350	_I	_o	}	5	430	_0	_o	_a	4
271	{	_e	_0	8	351	_I	wo	}	5	431	_0	_0	_I	4
272	{	_e	}	8	352	_u	_i	_E	5	432	_0	_0	wo	4
273	{	_E	_u	8	353	_u	_e	_e	5	433	ja	_a	_I	4
274	{	_o	je	8	354	_u	_0	_a	5	434	ja	_a	_o	4
275	{	_0	_a	8	355	_u	jo	_i	5	435	ja	_0	}	4
276	{	ju	_a	8	356	_e	_a	_u	5	436	ju	_a	_a	4
277	{	wo	_a	8	357	_E	_a	_i	5	437	ju	_i	_o	4
278	{	_I	}	8	358	_E	_i	_u	5	438	je	_i	}	4
279	_a	_i	wa	7	359	_E	ja	_o	5	439	je	}	}	4
280	_a	_I	_0	7	360	_o	_a	_u	5	440	jo	}	}	4
281	_a	_e	_e	7	361	_o	_a	_e	5	441	j0	_i	_a	4
282	_a	_E	}	7	362	_o	_I	_u	5	442	j0	_0	}	4
283	_a	wo	_0	7	363	_o	_I	}	5	443	j0	}	}	4
284	_i	_a	jo	7	364	_o	_u	_e	5	444	wa	_u	_e	4
285	_i	_e	wo	7	365	_o	_o	_E	5	445	wo	_i	_e	4
286	_i	_o	_u	7	366	_o	_0	wo	5	446	wo	_e	_a	4
287	_i	_o	_e	7	367	_o	ju	}	5	447	{	_a	jo	4
288	_I	_a	}	7	368	_o	je	_u	5	448	{	_i	je	4
289	_u	_a	_E	7	369	_0	_i	_e	5	449	{	_i	wo	4
290	_u	_E	_i	7	370	_0	_u	_e	5	450	{	ja	_i	4
291	_u	_E	_0	7	371	_0	_u	_o	5	451	{	_o	je	4
292	_e	_i	_a	7	372	_0	_u	j0	5	452	_a	_a	_I	3
293	_e	_i	_0	7	373	_0	_o	_u	5	453	_a	_a	jo	3
294	_e	_u	_0	7	374	_0	_o	_0	5	454	_a	_u	_I	3
295	_e	_e	_a	7	375	ju	_i	_u	5	455	_a	_o	_u	3
296	_e	_o	_a	7	376	ju	_i	_e	5	456	_a	_o	wo	3
297	_e	_0	_0	7	377	jo	_i	_a	5	457	_a	_0	_I	3
298	_o	_a	_o	7	378	j0	_i	_o	5	458	_a	ju	}	3
299	_o	_u	_a	7	379	j0	_0	_u	5	459	_a	je	_u	3
300	_o	_e	}	7	380	wa	_e	_a	5	460	_a	jo	_a	3
301	_0	wo	}	7	381	wa	_e	wo	5	461	_a	wa	_i	3
302	ja	_a	_0	7	382	wo	_i	j0	5	462	_i	_u	_o	3
303	ja	_o	}	7	383	wo	_i	}	5	463	_i	_e	_o	3
304	ju	_i	_a	7	384	{	_a	_I	5	464	_i	_e	ja	3
305	{	_i	}	7	385	{	_a	je	5	465	_i	_e	ju	3
306	{	_u	_0	7	386	{	_a	wa	5	466	_i	_o	_o	3
307	{	_o	_e	7	387	{	_u	we	5	467	_i	_0	j0	3
308	{	wo	_0	7	388	{	_e	_a	5	468	_i	ja	_0	3
309	_a	_a	_E	6	389	{	wa	_u	5	469	_i	ju	_a	3
310	_a	_u	_E	6	390	_a	_u	wo	4	470	_i	ju	}	3
311	_a	_o	_I	6	391	_a	_E	ja	4	471	_i	wo	_i	3
312	_a	_0	_0	6	392	_a	ja	_i	4	472	_I	_i	_i	3
313	_a	ju	_i	6	393	_a	ja	_u	4	473	_I	ja	}	3
314	_i	_E	}	6	394	_a	ja	}	4	474	_u	_I	_e	3
315	_i	ja	}	6	395	_a	ju	_u	4	475	_u	_u	_e	3
316	_u	_a	_I	6	396	_i	_i	j0	4	476	_u	_u	_o	3
317	_u	_I	_i	6	397	_i	_u	_I	4	477	_u	_o	_a	3
318	_E	ja	}	6	398	_i	_E	_u	4	478	_u	_o	_u	3
319	_o	_a	_E	6	399	_i	_o	wo	4	479	_e	_a	wi	3
320	_o	_i	_o	6	400	_i	ju	_u	4	480	_e	_i	_e	3

〈音素配列表3.2〉 『万葉集』 和歌音素配列 3 / 4

481	_e	_u	_i	3	561	_i	je	_i	2	641	{	_0	_e	2
482	_e	_e	_0	3	562	_i	je	_u	2	642	{	ju	_E	2
483	_e	_0	_i	3	563	_i	je	_e	2	643	{	jo	_i	2
484	_e	ju	}	3	564	_i	je	}	2	644	{	jo	_0	2
485	_e	jo	_i	3	565	_i	wi	_e	2	645	{	j0	_e	2
486	_e	wo	_i	3	566	_i	wo	_u	2	646	{	wi	_e	2
487	_E	_i	_a	3	567	_I	_i	_a	2	647	{	we	_a	2
488	_E	_i	_0	3	568	_I	_u	_a	2	648	{	{	we	2
489	_E	_u	_u	3	569	_I	wa	_a	2	649	_a	_a	j0	1
490	_E	_u	_e	3	570	_I	wo	_a	2	650	_a	_I	_e	1
491	_E	_o	}	3	571	_u	_a	je	2	651	_a	_I	wo	1
492	_E	_0	_0	3	572	_u	_i	wo	2	652	_a	_e	ja	1
493	_o	_a	_a	3	573	_u	_I	_E	2	653	_a	_e	jo	1
494	_o	_i	_I	3	574	_u	_u	jo	2	654	_a	_E	_E	1
495	_o	_i	je	3	575	_u	_E	_a	2	655	_a	_o	_E	1
496	_o	_I	_a	3	576	_u	_E	}	2	656	_a	_o	_o	1
497	_o	_I	_E	3	577	_u	_o	wi	2	657	_a	_o	je	1
498	_o	_u	_o	3	578	_u	ja	}	2	658	_a	_0	_E	1
499	_o	_u	_0	3	579	_u	j0	}	2	659	_a	_0	_E	1
500	_o	_e	wo	3	580	_u	we	_e	2	660	_a	_0	ja	1
501	_o	_E	}	3	581	_e	_a	_I	2	661	_a	ja	_e	1
502	_o	_o	_a	3	582	_e	_a	_e	2	662	_a	ju	_a	1
503	_o	_o	je	3	583	_e	_a	_o	2	663	_a	je	_a	1
504	_0	_a	_o	3	584	_e	_i	_u	2	664	_a	je	_E	1
505	_0	_I	_i	3	585	_e	_o	wo	2	665	_a	jo	}	1
506	_0	_I	ja	3	586	_e	ja	_i	2	666	_a	j0	_i	1
507	_0	_e	}	3	587	_e	ja	}	2	667	_a	wi	}	1
508	_0	_E	_e	3	588	_E	_i	_i	2	668	_a	wo	ja	1
509	_0	_E	}	3	589	_o	_i	wi	2	669	_i	_i	_E	1
510	_0	_0	_E	3	590	_o	_i	wo	2	670	_i	_I	wo	1
511	_0	j0	_E	3	591	_o	_I	wa	2	671	_i	_u	ja	1
512	ja	_i	_u	3	592	_o	_e	_a	2	672	_i	_u	ju	1
513	ju	_i	_i	3	593	_o	_E	_a	2	673	_i	_u	wo	1
514	ju	_E	_a	3	594	_o	_E	_0	2	674	_i	_e	_E	1
515	ju	_0	}	3	595	_o	_E	ja	2	675	_i	_e	j0	1
516	je	_e	}	3	596	_o	ja	_i	2	676	_i	_E	_a	1
517	jo	_a	_u	3	597	_o	je	_i	2	677	_i	_E	_e	1
518	jo	_a	}	3	598	_0	_a	_e	2	678	_i	_o	je	1
519	j0	_0	_a	3	599	_0	_i	_E	2	679	_i	_0	_I	1
520	j0	_0	_0	3	600	_0	_E	_a	2	680	_i	_0	je	1
521	wa	_i	_e	3	601	_0	j0	_0	2	681	_i	_0	jo	1
522	wa	_e	}	3	602	_0	we	_i	2	682	_i	ja	_u	1
523	wi	_e	}	3	603	_0	we	}	2	683	_i	ja	_e	1
524	we	_i	}	3	604	_0	wo	_i	2	684	_i	ju	_E	1
525	we	}	}	3	605	_0	ja	_a	2	685	_i	je	jo	1
526	wo	_a	_u	3	606	ja	_i	_0	2	686	_i	jo	_u	1
527	wo	_a	_E	3	607	ja	_u	_u	2	687	_i	wa	_E	1
528	wo	_i	_o	3	608	ja	_u	_e	2	688	_i	we	ja	1
529	wo	_i	_0	3	609	ja	_o	_a	2	689	_i	wo	_a	1
530	wo	_u	_0	3	610	ja	_o	_0	2	690	_i	wo	wo	1
531	{	_I	_i	3	611	ju	_i	_E	2	691	_I	_a	_i	1
532	{	_u	ju	3	612	ju	_u	_u	2	692	_I	_a	_e	1
533	{	_0	j0	3	613	je	_i	_a	2	693	_I	_a	_E	1
534	{	jo	_a	3	614	je	_u	_a	2	694	_I	_a	_o	1
535	{	jo	_u	3	615	je	_u	_u	2	695	_I	_i	_u	1
536	{	wa	_i	3	616	je	_0	}	2	696	_I	_i	wo	1
537	{	wi	}	3	617	jo	_u	_a	2	697	_I	_u	_u	1
538	_a	_a	ju	2	618	jo	_u	_0	2	698	_I	_u	_e	1
539	_a	_i	_E	2	619	jo	_u	}	2	699	_I	_u	}	1
540	_a	_i	ju	2	620	j0	_i	_u	2	700	_I	_e	_e	1
541	_a	_u	ja	2	621	j0	_e	_u	2	701	_I	_0	_a	1
542	_a	_u	jo	2	622	j0	_E	_a	2	702	_I	_0	j0	1
543	_a	_e	_o	2	623	wa	_i	}	2	703	_I	ju	_i	1
544	_a	_E	_o	2	624	wa	_u	}	2	704	_I	wo	_o	1
545	_a	ja	_E	2	625	wi	_0	}	2	705	_u	_a	ja	1
546	_a	ju	_0	2	626	wi	}	}	2	706	_u	_a	ju	1
547	_a	je	_0	2	627	we	_a	_a	2	707	_u	_i	ja	1
548	_a	jo	_u	2	628	we	_e	}	2	708	_u	_i	wa	1
549	_a	wa	_u	2	629	wo	_a	_I	2	709	_u	_I	_o	1
550	_a	wi	_0	2	630	wo	_a	}	2	710	_u	_I	ju	1
551	_i	_a	_I	2	631	wo	_i	_i	2	711	_u	_I	wo	1
552	_i	_a	ja	2	632	wo	_u	_e	2	712	_u	_u	_u	1
553	_i	_a	ju	2	633	wo	_e	_o	2	713	_u	_u	_E	1
554	_i	_i	je	2	634	wo	_0	_u	2	714	_u	_u	je	1
555	_i	_u	jo	2	635	{	_i	wa	2	715	_u	_e	ju	1
556	_i	_u	j0	2	636	{	_I	_a	2	716	_u	_E	_e	1
557	_i	_e	jo	2	637	{	_I	}	2	717	_u	_E	ja	1
558	_i	_E	_0	2	638	{	_e	_e	2	718	_u	_o	_I	1
559	_i	_o	_E	2	639	{	_E	_a	2	719	_u	_0	_u	1
560	_i	ja	_i	2	640	{	_o	ja	2	720	_u	_0	_0	1

〈音素配列表3.2〉 『万葉集』 和歌音素配列 4 / 4

721	_u	ja	_i	1	801	_o	j0	_o	1	881	{	_u	je	1
722	_u	ja	_0	1	802	_o	we	_a	1	882	{	_u	}	1
723	_u	ju	_a	1	803	_o	we	_0	1	883	{	_E	_0	1
724	_u	ju	_i	1	804	_o	we	wo	1	884	{	_E	wo	1
725	_u	ju	_0	1	805	_o	wo	_0	1	885	{	_E	}	1
726	_u	ju	}	1	806	ja	_a	_e	1	886	{	_o	_E	1
727	_u	je	_i	1	807	ja	_i	_a	1	887	{	_o	j0	1
728	_u	je	_0	1	808	ja	_i	_i	1	888	{	_o	wo	1
729	_u	j0	}	1	809	ja	_i	_o	1	889	{	_o	}	1
730	_u	j0	_a	1	810	ja	_u	_i	1	890	{	_0	_E	1
731	_u	j0	_0	1	811	ja	_u	_E	1	891	{	_0	ju	1
732	_u	we	_a	1	812	ja	_u	_o	1	892	{	_0	jo	1
733	_u	we	_i	1	813	ja	_u	j0	1	893	{	_0	wo	1
734	_u	we	_u	1	814	ja	_e	_i	1	894	{	ja	_E	1
735	_u	we	}	1	815	ja	_e	_u	1	895	{	ju	ju	1
736	_u	wo	_0	1	816	ja	_E	_a	1	896	{	je	_a	1
737	_e	_a	_0	1	817	ja	_E	_i	1	897	{	je	_i	1
738	_e	_u	_I	1	818	ja	_E	_u	1	898	{	je	_o	1
739	_e	_e	_o	1	819	ja	_o	_i	1	899	{	je	}	1
740	_e	_E	}	1	820	ja	_o	_e	1	900	{	jo	wa	1
741	_e	_o	_i	1	821	ja	_o	_o	1	901	{	jo	}	1
742	_e	_o	_u	1	822	ja	_o	jo	1	902	{	wa	_I	1
743	_e	_o	_e	1	823	ja	_o	wo	1	903	{	wa	_0	1
744	_e	_o	_0	1	824	ja	_0	_0	1	904	{	wi	_a	1
745	_e	_0	_I	1	825	ju	_i	wo	1					
746	_e	ju	_E	1	826	ju	_u	_i	1					
747	_e	j0	}	1	827	ju	_u	_E	1					
748	_E	_a	_a	1	828	ju	_E	_0	1					
749	_E	_i	_o	1	829	ju	ju	_i	1					
750	_E	_i	wa	1	830	je	_a	_i	1					
751	_E	_u	_o	1	831	je	_a	_u	1					
752	_E	_u	_0	1	832	je	_a	}	1					
753	_E	_u	we	1	833	je	_u	_e	1					
754	_E	_e	_a	1	834	je	_e	_a	1					
755	_E	_e	_i	1	835	je	_e	_i	1					
756	_E	_e	_u	1	836	je	_e	_e	1					
757	_E	_e	_e	1	837	je	_E	ja	1					
758	_E	_E	}	1	838	je	_o	}	1					
759	_E	_0	_o	1	839	je	_0	_i	1					
760	_E	ja	_a	1	840	je	jo	_i	1					
761	_E	ja	_0	1	841	jo	_i	_i	1					
762	_E	j0	}	1	842	jo	_i	_0	1					
763	_E	wo	}	1	843	jo	_0	_a	1					
764	_o	_i	wa	1	844	jo	_0	we	1					
765	_o	_I	_e	1	845	jo	_0	}	1					
766	_o	_e	_i	1	846	jo	wa	_a	1					
767	_o	_e	_e	1	847	j0	_a	_e	1					
768	_o	_e	_o	1	848	j0	_i	_i	1					
769	_o	_e	_0	1	849	j0	_i	_0	1					
770	_o	_o	_I	1	850	j0	_i	we	1					
771	_o	_o	_0	1	851	j0	_u	_e	1					
772	_o	_0	_E	1	852	j0	_u	}	1					
773	_o	ja	}	1	853	j0	_E	j0	1					
774	_o	je	_a	1	854	j0	_o	_0	1					
775	_o	je	}	1	855	j0	_0	_e	1					
776	_o	jo	_i	1	856	wa	_a	_a	1					
777	_o	j0	_u	1	857	wa	_i	_a	1					
778	_o	wi	_a	1	858	wa	_I	}	1					
779	_o	wi	}	1	859	wa	_u	_a	1					
780	_0	_i	ju	1	860	wa	_e	_i	1					
781	_0	_I	_a	1	861	wa	_e	_u	1					
782	_0	_I	wo	1	862	wa	_E	}	1					
783	_0	_I	}	1	863	wa	_0	}	1					
784	_0	_u	_u	1	864	wi	_a	_u	1					
785	_0	_e	_i	1	865	wi	_a	}	1					
786	_0	_e	_0	1	866	wi	_e	_o	1					
787	_0	_e	wo	1	867	we	_a	_i	1					
788	_0	_E	_i	1	868	we	_a	}	1					
789	_0	_E	_u	1	869	we	_u	}	1					
790	_0	_E	_o	1	870	we	_0	}	1					
791	_0	_o	_o	1	871	we	ja	_i	1					
792	_0	_o	ja	1	872	we	wo	}	1					
793	_0	_0	j0	1	873	wo	_a	_i	1					
794	_0	ja	_a	1	874	wo	_u	_a	1					
795	_0	ju	}	1	875	wo	_u	_u	1					
796	_0	je	_u	1	876	wo	_o	}	1					
797	_0	jo	_0	1	877	wo	ja	}	1					
798	_0	jo	}	1	878	wo	wo	_i	1					
799	_0	j0	_i	1	879	{	_I	_0	1					
800	_0	j0	_u	1	880	{	_u	ja	1					

〈音素配列表4.1〉 『源氏物語』和語名詞音素配列 1 / 1

1	_i	}	}	1257	71	{	{	ju	63	141	_u	_u	}	22
2	{	{	_a	1101	72	{	{	wa	63	142	jo	}	}	22
3	_a	}	}	874	73	_u	_i	_o	62	143	wa	_a	}	22
4	{	{	_i	739	74	_i	_o	_u	58	144	{	_i	ja	22
5	{	{	_o	644	75	_a	_i	_u	56	145	{	_o	_e	22
6	_o	}	}	603	76	_u	_u	_a	56	146	{	_e	_u	21
7	{	{	_u	601	77	_i	_i	_o	55	147	{	wo	_i	21
8	_e	}	}	509	78	_i	_i	_a	54	148	_i	_u	_o	20
9	_a	_i	}	469	79	{	ja	_a	54	149	_i	ja	}	20
10	{	_a	_a	430	80	_a	_e	_i	53	150	_o	_e	_a	20
11	{	_o	_o	390	81	_a	_o	}	53	151	ja	_a	_i	20
12	_a	_a	}	368	82	_i	_i	_i	51	152	ju	_i	}	20
13	_o	_o	}	335	83	_o	_a	}	51	153	_a	_u	_u	19
14	_o	_o	_o	332	84	_i	_a	_e	50	154	_i	_i	_u	19
15	_a	_a	_i	263	85	_i	_o	_a	50	155	_i	_e	_a	19
16	_u	_i	}	263	86	_u	_i	_u	50	156	_e	_i	_a	19
17	_o	_i	}	236	87	_u	_o	_o	50	157	_o	_i	_e	19
18	_a	_a	_a	230	88	{	_i	_e	50	158	_o	_u	_u	19
19	{	_a	_i	229	89	_o	_o	_u	49	159	{	_a	ja	19
20	{	_i	_o	223	90	_e	_o	_o	48	160	_u	_o	_e	18
21	_a	_e	}	219	91	_e	_a	_a	47	161	wo	M	_a	18
22	{	_i	_a	197	92	_e	_i	}	47	162	{	wo	_o	18
23	_o	_o	_i	188	93	ja	}	}	47	163	_i	_i	_e	17
24	{	_u	_a	184	94	{	_u	_o	46	164	_u	_i	_e	17
25	{	_u	_i	174	95	_o	_i	_i	43	165	_e	_u	_i	17
26	_a	_i	_a	172	96	{	_u	_e	43	166	jo	_i	}	17
27	_i	_o	_o	171	97	_i	_u	}	42	167	_i	ja	_a	16
28	_i	_a	}	168	98	{	wa	_a	42	168	_e	_a	_e	16
29	_u	_a	}	162	99	_u	_a	_e	41	169	ju	}	}	16
30	{	_a	_u	157	100	_u	_o	}	41	170	_a	_o	_e	15
31	_i	_a	_a	156	101	_o	_o	_e	41	171	_a	ja	_a	15
32	_a	_u	_a	149	102	_a	_u	_e	40	172	_i	wa	_a	15
33	_i	_i	}	146	103	_i	_a	_u	39	173	_u	_u	_e	15
34	_i	_o	}	145	104	_u	_a	_u	39	174	_o	_a	_o	15
35	_i	_a	_i	140	105	_o	_u	_i	39	175	_o	we	}	15
36	_u	_a	_i	133	106	_a	_e	_a	38	176	ja	_a	_o	15
37	_u	_a	_a	132	107	_i	_a	_o	36	177	ja	_i	}	15
38	_u	}	}	130	108	_u	_a	_o	36	178	{	_a	wo	15
39	{	_u	_u	130	109	_u	_i	_i	36	179	{	_o	_u	15
40	_o	_o	_a	118	110	_a	_o	_a	35	180	{	wo	_a	15
41	{	_i	_i	115	111	_o	_a	_e	35	181	_a	_a	ja	14
42	_a	_u	_i	112	112	_e	_a	}	34	182	_a	ja	}	14
43	{	_a	_e	104	113	_o	_u	_a	34	183	_o	_o	ja	14
44	{	_o	_i	101	114	wi	}	}	32	184	wo	_i	}	14
45	{	_i	_u	98	115	{	ju	_u	32	185	wo	_o	_o	14
46	_a	_i	_o	97	116	_a	_u	}	31	186	{	_a	M	14
47	_u	_e	}	97	117	_i	_u	_u	31	187	{	jo	_a	14
48	{	{	_e	97	118	je	}	}	31	188	{	jo	_i	14
49	_o	_a	_a	95	119	_i	_o	_e	29	189	{	wo	M	14
50	_a	_a	_e	94	120	_o	_i	_u	29	190	_e	_i	_i	13
51	_a	_a	_u	91	121	ja	_a	}	29	191	_o	_u	}	13
52	{	{	ja	90	122	we	}	}	29	192	_o	_e	_u	13
53	_a	_o	_o	88	123	_a	_i	_e	28	193	ja	_u	_a	13
54	_i	_o	_i	86	124	_a	_e	_o	28	194	ju	_u	_a	13
55	{	_a	_o	85	125	_u	_u	_u	28	195	{	jo	_u	13
56	_a	_a	_o	83	126	_e	_i	_o	28	196	_a	_e	_u	12
57	_u	_u	_i	83	127	_o	_a	_u	28	197	_u	_o	_a	12
58	_o	_e	}	80	128	_u	_u	_o	27	198	_u	_o	_i	12
59	_a	_i	_i	79	129	{	_e	_a	27	199	_o	_u	_e	12
60	_a	_o	_i	79	130	wa	_a	_a	26	200	_o	_e	_i	12
61	{	{	wo	77	131	ja	_a	_a	25	201	ja	_i	_o	12
62	_i	_u	_a	75	132	wa	_a	_i	25	202	jo	_o	_i	12
63	{	_o	_a	75	133	{	jo	_o	25	203	wo	}	}	12
64	{	{	jo	74	134	_a	_u	_o	24	204	{	_a	}	12
65	_i	_e	}	70	135	_i	_u	_e	24	205	{	ju	_i	12
66	_u	_i	_a	70	136	_i	_e	_i	24	206	_a	_i	ja	11
67	_o	_i	_a	69	137	_u	_e	_a	24	207	_a	ja	_i	11
68	_i	_u	_i	67	138	_e	_a	_i	24	208	_e	_e	}	11
69	_o	_i	_o	67	139	_e	_u	_a	24	209	ja	_a	_u	11
70	_o	_a	_i	64	140	{	_e	_i	23	210	M	_a	_i	11

〈音素配列表4.2〉 『源氏物語』 「桐壺」 音素配列 1 / 3

1	_o	}	}	652	82	_o	_o	_u	40	163	_o	_u	_i	15
2	{	{	_a	628	83	_a	_e	_o	39	164	{	_i	_e	15
3	{	{	_o	582	84	_i	_i	_i	38	165	{	_e	_a	15
4	_i	}	}	468	85	_u	_e	_i	38	166	_i	_a	M	14
5	{	{	_i	429	86	{	_a	_o	37	167	_u	_e	_u	14
6	{	_o	_o	414	87	_u	_a	_u	36	168	ja	_o	}	14
7	_u	}	}	385	88	_u	_e	_a	36	169	{	_u	_o	14
8	{	{	_u	220	89	{	{	ja	36	170	_u	_u	_u	13
9	_a	}	}	217	90	_i	_i	_a	35	171	_u	_e	_e	13
10	{	_a	_a	210	91	_i	_u	_u	35	172	_u	_e	}	13
11	_i	_o	}	209	92	_u	_i	_o	35	173	_u	_o	_o	13
12	_e	}	}	209	93	{	_u	_u	35	174	_e	_i	_i	13
13	_a	_u	}	202	94	_u	_o	}	33	175	_o	_e	}	13
14	_a	_a	_i	198	95	_o	_a	_a	33	176	_a	_a	M	12
15	{	_i	_o	187	96	M	}	}	33	177	_a	_o	_a	12
16	_o	_o	}	179	97	_i	_e	_i	32	178	_u	_a	M	12
17	{	_a	_i	170	98	_a	_e	}	31	179	_e	_u	_a	12
18	_a	_e	_a	167	99	_a	_u	_u	30	180	_o	_a	_o	12
19	_o	_o	_i	154	100	_i	_e	_u	30	181	_o	_o	_e	12
20	_a	_i	}	152	101	_o	M	_a	30	182	_o	M	_u	12
21	_o	_o	_o	151	102	_a	_a	_o	29	183	jo	_o	}	12
22	_a	_a	_a	143	103	_i	_e	_a	29	184	{	_a	wi	12
23	_a	_a	_u	139	104	_u	wo	}	29	185	_a	_i	wo	11
24	_i	_a	_a	139	105	_e	_a	_i	29	186	_a	_u	wo	11
25	_a	_i	_a	136	106	_i	_a	_o	28	187	_a	wo	}	11
26	{	_a	_u	113	107	_u	_a	_e	28	188	_i	ja	_u	11
27	_a	_a	_e	107	108	_o	_a	_e	28	189	_i	ja	G	11
28	_a	_i	_e	105	109	_a	M	}	27	190	_u	_a	_o	11
29	_i	_i	}	101	110	_u	_i	_i	27	191	_u	_a	}	11
30	{	_i	_a	101	111	_o	_u	_a	27	192	je	_a	_a	11
31	_i	_e	}	100	112	M	_o	_o	27	193	wa	_a	_i	11
32	wo	}	}	98	113	{	_i	_u	27	194	{	_a	G	11
33	_e	_a	_a	89	114	{	wa	_a	27	195	{	jo	_i	11
34	_a	_i	_i	88	115	_i	_u	_i	26	196	_a	wi	_i	10
35	_i	_o	_o	85	116	_i	_o	_a	26	197	_i	ja	_o	10
36	_e	_o	}	85	117	_a	_o	_o	25	198	_e	_i	_u	10
37	_o	_o	M	84	118	_i	wo	}	25	199	_o	_e	_i	10
38	_i	_a	_i	82	119	_u	_i	_e	25	200	wo	_o	}	10
39	{	{	_e	78	120	_e	_i	_o	25	201	{	ja	G	10
40	_o	_o	_a	77	121	_e	_e	}	25	202	_i	_o	_e	9
41	_i	_a	_e	75	122	_o	M	_o	25	203	_i	jo	_i	9
42	_i	_o	_i	75	123	_a	_e	_e	24	204	_u	_o	_e	9
43	_a	_o	}	74	124	_a	_o	_i	23	205	_e	_a	_o	9
44	_a	_i	_o	71	125	_o	_a	_u	22	206	_e	_u	_u	9
45	_e	_i	}	69	126	{	{	ju	22	207	_o	M	_i	9
46	_o	_i	_a	67	127	{	_i	ja	21	208	ja	G	_i	9
47	_a	_a	}	66	128	{	_o	_e	21	209	ja	}	}	9
48	_a	_u	_a	65	129	_i	_o	je	20	210	_a	G	_i	8
49	_o	_i	}	65	130	_u	_e	_o	20	211	_i	_e	_o	8
50	{	_o	_a	63	131	_o	_a	}	20	212	_i	_o	_u	8
51	{	_u	_i	59	132	jo	_i	}	20	213	_i	ja	_a	8
52	_e	_a	}	58	133	M	_a	_a	20	214	_u	_u	_e	8
53	_a	_i	_u	56	134	{	_i	jo	20	215	_e	_u	wo	8
54	_o	_a	_i	56	135	{	jo	_o	20	216	_e	_o	_o	8
55	_e	_a	_u	55	136	_a	M	_o	19	217	_e	wo	}	8
56	_e	_u	}	55	137	_u	_i	_u	19	218	_o	_i	ja	8
57	{	_a	_e	55	138	_e	_e	_a	19	219	_o	_u	_e	8
58	_u	_a	_i	54	139	_o	_i	_u	19	220	_o	_e	_o	8
59	_i	_i	_o	53	140	_o	_u	}	19	221	M	_a	_i	8
60	_o	_i	_i	53	141	_o	_o	wo	19	222	G	_o	}	8
61	{	_u	_e	53	142	_o	wo	}	19	223	G	}	}	8
62	_a	_e	_i	50	143	M	_o	}	19	224	{	ja	_a	8
63	{	_i	_i	49	144	{	_e	}	19	225	{	ju	_u	8
64	_o	_i	_o	48	145	{	{	wo	19	226	{	wo	_a	8
65	{	{	jo	48	146	_i	_i	_u	18	227	_a	_i	ja	7
66	_a	_u	_i	47	147	_i	_u	_e	18	228	_i	_o	ju	7
67	_i	_u	}	47	148	_e	_e	_o	18	229	_i	jo	_a	7
68	_u	_u	}	47	149	_a	_u	_o	17	230	_i	jo	_o	7
69	_i	_a	}	46	150	_i	_i	_e	17	231	_i	wo	_o	7
70	_u	_a	_a	46	151	_u	_u	_a	17	232	_e	_a	M	7
71	{	_u	_a	46	152	_o	_e	_a	17	233	_e	_u	_i	7
72	_u	_i	}	45	153	_o	je	_a	17	234	_o	_u	_u	7
73	{	_o	_i	45	154	{	_o	_u	17	235	_o	_o	je	7
74	_u	_i	_a	44	155	_i	_u	_a	16	236	_o	M	_e	7
75	_e	_a	_e	43	156	_e	_i	_a	16	237	ja	_a	_i	7
76	_a	_u	_e	42	157	{	_e	_i	16	238	ja	_u	_a	7
77	_a	_e	_u	42	158	_i	_i	wo	15	239	ju	}	}	7
78	_o	_i	_e	41	159	_i	_u	_o	15	240	jo	_i	_o	7
79	{	{	wa	41	160	_i	_e	_e	15	241	jo	_o	_o	7
80	_i	_a	_u	40	161	_e	_i	_e	15	242	jo	}	}	7
81	_u	_u	_i	40	162	_o	_a	M	15	243	wa	_a	_a	7



〈音素配列表4.2〉 『源氏物語』 「桐壺」 音素配列 2 / 3

244	wi	_i	_a	7	325	ju	_u	_a	4	406	{	ju	we	3
245	M	_i	_a	7	326	ju	_u	_i	4	407	{	jo	_a	3
246	{	_a	ja	7	327	ju	_e	_a	4	408	{	wa	_u	3
247	{	_i	je	7	328	ju	_e	_i	4	409	{	wo	M	3
248	{	_e	_u	7	329	je	_a	_i	4	410	{	{	wi	3
249	_a	_a	wo	6	330	je	}	}	4	411	_a	_e	M	2
250	_a	ja	_i	6	331	jo	_a	_a	4	412	_a	ju	_i	2
251	_u	_u	_o	6	332	jo	_i	_a	4	413	_a	ju	_e	2
252	_u	_u	wo	6	333	jo	_o	_i	4	414	_a	jo	_a	2
253	_u	_o	_i	6	334	wa	_a	_u	4	415	_a	wo	_o	2
254	_e	_u	_o	6	335	wa	_a	}	4	416	_a	M	_e	2
255	_e	N	_a	6	336	wi	_a	_e	4	417	_a	M	wo	2
256	_e	M	}	6	337	wo	_a	_e	4	418	_a	G	_a	2
257	_o	_o	ja	6	338	wo	_a	}	4	419	_i	_u	wo	2
258	ja	G	_u	6	339	wo	M	_a	4	420	_i	_e	jo	2
259	wa	_i	_a	6	340	M	_u	_a	4	421	_i	_o	jo	2
260	wo	_a	_i	6	341	M	_o	_e	4	422	_i	_o	N	2
261	N	_i	}	6	342	G	_i	}	4	423	_i	jo	G	2
262	N	_o	}	6	343	{	ja	_i	4	424	_i	jo	}	2
263	N	}	}	6	344	{	ja	M	4	425	_i	wa	_e	2
264	{	_u	ju	6	345	{	jo	_u	4	426	_u	_i	ja	2
265	_e	N	}	6	346	_a	_i	ju	3	427	_u	_i	wa	2
266	{	_o	jo	6	347	_a	_u	ja	3	428	_u	_u	jo	2
267	{	_o	G	6	348	_a	_o	N	3	429	_u	_e	ju	2
268	wo	_i	}	6	349	_a	ju	_u	3	430	_u	_o	N	2
269	_a	_e	wo	5	350	_a	jo	_i	3	431	_u	ja	_u	2
270	_a	M	_a	5	351	_a	N	_e	3	432	_u	ju	_e	2
271	_a	M	_i	5	352	_i	_a	wi	3	433	_u	wi	_i	2
272	_a	M	_u	5	353	_i	_e	N	3	434	_u	we	N	2
273	_a	G	}	5	354	_i	ju	_u	3	435	_u	G	_o	2
274	_i	_i	ja	5	355	_i	je	_i	3	436	_e	_a	N	2
275	_i	_e	M	5	356	_i	jo	_u	3	437	_e	_i	wa	2
276	_i	ja	}	5	357	_i	wo	_a	3	438	_e	N	_o	2
277	_u	_i	wo	5	358	_i	wo	_i	3	439	_o	_a	ja	2
278	_e	_o	_a	5	359	_i	N	}	3	440	_o	_e	wo	2
279	_e	jo	_i	5	360	_u	_a	wi	3	441	_o	_o	wa	2
280	_e	N	_i	5	361	_u	wi	_e	3	442	_o	_o	wi	2
281	_o	jo	_i	5	362	_e	_o	_e	3	443	_o	ja	}	2
282	_o	G	_u	5	363	_o	_i	wa	3	444	_o	je	_i	2
283	ja	_i	_u	5	364	_o	_i	wo	3	445	_o	jo	_u	2
284	ja	_i	_o	5	365	_o	_u	_o	3	446	_o	wi	_a	2
285	je	_a	_e	5	366	_o	_e	_u	3	447	_o	we	_o	2
286	jo	_a	G	5	367	_o	_e	_e	3	448	_o	we	}	2
287	jo	_o	_u	5	368	_o	ja	_o	3	449	_o	wo	_a	2
288	wa	_u	_a	5	369	_o	ju	_e	3	450	_o	N	_i	2
289	wa	_e	_a	5	370	_o	ju	}	3	451	_o	N	_o	2
290	we	}	}	5	371	_o	wo	_o	3	452	_o	N	}	2
291	M	_a	_e	5	372	_o	N	_a	3	453	ja	_a	_a	2
292	M	_u	_i	5	373	ja	_a	_e	3	454	ja	_u	_u	2
293	G	_i	_o	5	374	ja	_a	_o	3	455	ja	_u	ja	2
294	G	_u	wi	5	375	ja	_a	}	3	456	ju	_i	_a	2
295	{	_a	M	5	376	ja	_u	}	3	457	ju	_i	_i	2
296	{	_e	_e	5	377	ja	_e	_o	3	458	ju	_i	_u	2
297	{	ja	_u	5	378	ju	_u	_u	3	459	ju	_i	_o	2
298	{	ju	_i	5	379	ju	_u	}	3	460	ju	_i	}	2
299	{	jo	}	5	380	ju	ju	_i	3	461	ju	_u	_o	2
300	{	wa	_i	5	381	jo	_i	jo	3	462	ju	_e	_o	2
301	{	wa	_e	5	382	jo	_u	}	3	463	je	_a	_o	2
302	_a	_a	ju	4	383	jo	_o	_a	3	464	je	_i	_o	2
303	_a	_o	_u	4	384	jo	wa	_u	3	465	je	_e	}	2
304	_a	ja	_a	4	385	wa	_a	_e	3	466	jo	_u	_e	2
305	_a	wi	_a	4	386	wi	_e	N	3	467	jo	_u	_o	2
306	_i	_o	wo	4	387	wo	_i	_i	3	468	jo	_e	}	2
307	_i	ja	_i	4	388	wo	_o	_i	3	469	jo	G	_o	2
308	_i	je	_a	4	389	N	_a	_i	3	470	jo	G	}	2
309	_i	wa	_a	4	390	N	_a	_o	3	471	wa	_a	_o	2
310	_u	_o	_a	4	391	N	_a	}	3	472	wa	_i	_i	2
311	_u	ju	}	4	392	M	_a	_o	3	473	wa	_u	}	2
312	_u	M	_o	4	393	M	_u	_u	3	474	wa	_e	}	2
313	_e	_i	ja	4	394	M	_e	_i	3	475	wa	G	_o	2
314	_e	_u	_e	4	395	M	_o	_i	3	476	wi	_a	_a	2
315	_e	M	_o	4	396	M	_o	_u	3	477	wi	_i	_o	2
316	_o	_i	jo	4	397	G	_i	_e	3	478	we	N	_i	2
317	_o	ja	_e	4	398	G	_i	N	3	479	wo	_i	_a	2
318	_o	je	}	4	399	{	_a	je	3	480	wo	_i	wo	2
319	_o	wa	_i	4	400	{	_a	jo	3	481	wo	_o	_o	2
320	ja	_a	_u	4	401	{	_u	we	3	482	N	_i	_a	2
321	ja	_i	_i	4	402	{	_e	wo	3	483	N	_e	_i	2
322	ja	_u	M	4	403	{	_e	M	3	484	M	_a	}	2
323	ja	M	_o	4	404	{	_o	we	3	485	M	_i	_o	2
324	ja	G	_o	4	405	{	ju	ju	3	486	M	_u	_e	2

〈音素配列表4.2〉 『源氏物語』 「桐壺」 音素配列 3 / 3

487	M	_u	_o	2	568	_u	jo	G	1	649	wa	_u	_u	1
488	M	_e	_a	2	569	_u	wa	N	1	650	wa	_e	_i	1
489	M	_e	_u	2	570	_u	we	}	1	651	wa	_o	_u	1
490	M	wo	}	2	571	_e	_a	ja	1	652	wa	N	_i	1
491	G	_a	_o	2	572	_e	_a	wo	1	653	wi	_a	_u	1
492	G	_i	_a	2	573	_e	_i	jo	1	654	wi	_a	_o	1
493	G	_u	G	2	574	_e	_i	wo	1	655	wi	_i	_u	1
494	G	_o	_u	2	575	_e	ja	_a	1	656	wi	_i	_e	1
495	{	_a	ju	2	576	_e	ja	_u	1	657	wi	_i	}	1
496	{	_i	wa	2	577	_e	ju	_a	1	658	wi	_u	}	1
497	{	_e	_o	2	578	_e	ju	_u	1	659	wi	_e	_u	1
498	{	_o	ja	2	579	_e	wa	_a	1	660	wi	_e	}	1
499	{	_o	wa	2	580	_e	wa	_u	1	661	wi	_o	}	1
500	{	_o	N	2	581	_e	wo	_a	1	662	wi	wo	_a	1
501	{	ja	_e	2	582	_e	wo	_o	1	663	wi	wo	}	1
502	{	ja	_o	2	583	_e	N	}	1	664	wi	N	_o	1
503	{	ju	_e	2	584	_e	M	_e	1	665	wi	}	}	1
504	{	jo	_e	2	585	_e	G	_i	1	666	we	_a	_e	1
505	{	jo	wa	2	586	_o	_a	wo	1	667	we	_i	_e	1
506	{	we	_i	2	587	_o	_a	N	1	668	we	_i	_o	1
507	{	wo	_o	2	588	_o	_a	G	1	669	we	_i	}	1
508	{	{	we	2	589	_o	_i	wi	1	670	we	_o	_o	1
509	_a	_a	ja	1	590	_o	_i	N	1	671	we	_o	we	1
510	_a	_a	jo	1	591	_o	_u	wa	1	672	we	_o	}	1
511	_a	_i	jo	1	592	_o	_u	wo	1	673	wo	_a	M	1
512	_a	_e	ja	1	593	_o	_e	jo	1	674	wo	_i	_u	1
513	_a	_e	wa	1	594	_o	_e	wa	1	675	wo	_i	}	1
514	_a	_o	wo	1	595	_o	_e	N	1	676	N	_a	wo	1
515	_a	ja	_u	1	596	_o	_o	jo	1	677	N	_i	_i	1
516	_a	je	_a	1	597	_o	ju	_u	1	678	N	_i	_o	1
517	_a	je	_u	1	598	_o	je	_u	1	679	N	_i	ja	1
518	_a	je	_e	1	599	_o	je	_e	1	680	N	_u	_u	1
519	_a	jo	_o	1	600	_o	je	ja	1	681	N	_e	_u	1
520	_a	jo	wa	1	601	_o	je	M	1	682	N	wa	G	1
521	_a	wa	_e	1	602	_o	jo	_a	1	683	N	wo	}	1
522	_a	wi	_u	1	603	_o	jo	_o	1	684	M	_a	_u	1
523	_a	wi	_e	1	604	_o	wi	wo	1	685	M	_i	_i	1
524	_a	wi	wo	1	605	_o	wo	M	1	686	M	_i	_e	1
525	_a	wi	}	1	606	_o	N	wo	1	687	M	_i	ja	1
526	_a	N	_i	1	607	_o	M	jo	1	688	M	_i	ju	1
527	_a	N	_u	1	608	_o	M	we	1	689	M	_i	N	1
528	_a	M	ja	1	609	_o	G	_o	1	690	M	_u	}	1
529	_a	M	jo	1	610	ja	_a	M	1	691	M	_e	_e	1
530	_a	M	wi	1	611	ja	_u	_i	1	692	M	_e	_o	1
531	_a	G	_o	1	612	ja	_u	_o	1	693	M	_e	}	1
532	_a	G	wo	1	613	ja	_e	_u	1	694	M	_o	_a	1
533	_i	_a	jo	1	614	ja	_e	_e	1	695	M	ja	}	1
534	_i	_a	wa	1	615	ja	_e	jo	1	696	M	jo	_i	1
535	_i	_a	wo	1	616	ja	_o	_e	1	697	M	jo	_o	1
536	_i	_a	N	1	617	ja	_o	_o	1	698	M	wi	_o	1
537	_i	_i	N	1	618	ja	ja	}	1	699	M	we	}	1
538	_i	ja	wo	1	619	ja	wo	}	1	700	G	_a	_u	1
539	_i	ju	_i	1	620	ja	G	_a	1	701	G	_i	ju	1
540	_i	ju	_e	1	621	ja	G	_e	1	702	G	_u	_a	1
541	_i	wa	_i	1	622	ja	G	}	1	703	G	_u	_i	1
542	_i	wa	_u	1	623	ju	_a	_i	1	704	G	_u	_o	1
543	_i	wa	G	1	624	ju	_a	M	1	705	G	_u	}	1
544	_i	wi	_a	1	625	ju	_i	ja	1	706	G	_e	N	1
545	_i	we	_a	1	626	ju	we	_i	1	707	G	_o	ja	1
546	_i	N	_a	1	627	ju	we	_o	1	708	G	_o	N	1
547	_i	N	_o	1	628	ju	we	}	1	709	G	wo	}	1
548	_i	N	wa	1	629	je	_a	wo	1	710	{	_u	je	1
549	_u	_a	ju	1	630	je	_i	_i	1	711	{	_u	jo	1
550	_u	_a	jo	1	631	je	_i	_u	1	712	{	_u	wo	1
551	_u	_a	wo	1	632	je	_i	wo	1	713	{	_u	}	1
552	_u	_a	N	1	633	je	_u	_u	1	714	{	_e	ja	1
553	_u	_i	jo	1	634	je	_u	_e	1	715	{	_e	G	1
554	_u	_i	we	1	635	je	_u	_o	1	716	{	_o	wo	1
555	_u	_u	je	1	636	je	_o	}	1	717	{	ja	ja	1
556	_u	_e	jo	1	637	je	ja	_a	1	718	{	ju	_a	1
557	_u	_e	M	1	638	je	M	_o	1	719	{	je	_a	1
558	_u	_o	_u	1	639	jo	_a	_i	1	720	{	jo	G	1
559	_u	_o	wi	1	640	jo	_a	_u	1	721	{	wa	_o	1
560	_u	_o	M	1	641	jo	_a	_e	1	722	{	wi	_a	1
561	_u	ja	_a	1	642	jo	_a	jo	1	723	{	wi	_e	1
562	_u	ja	_o	1	643	jo	_i	_i	1	724	{	wi	N	1
563	_u	ja	G	1	644	jo	_u	_a	1	725	{	{	je	1
564	_u	je	_u	1	645	jo	_u	_i	1					
565	_u	je	_o	1	646	wa	_a	wo	1					
566	_u	jo	_i	1	647	wa	_i	_o	1					
567	_u	jo	_o	1	648	wa	_i	}	1					

〈音素配列表5.3〉 『日葡辞書』和語名詞音素配列 1 / 1

1	_i	}	}	3610	71	_i	_i	_i	150	141	_e	_a	_e	57
2	_i	{	{	2818	72	_a	_o	_i	145	142	_o	_u	_a	57
3	{	{	_i	1729	73	_e	_i	}	143	143	_o	_o	_e	57
4	_a	}	}	1621	74	{	_u	_o	143	144	wa	_a	}	57
5	{	{	_u	1568	75	{	{	wa	141	145	_u	_e	_a	54
6	_e	}	}	1559	76	_o	_i	_o	139	146	_e	_u	_a	53
7	{	{	_o	1497	77	ja	}	}	136	147	ja	_a	_a	53
8	_o	}	}	1254	78	{	_e	_i	134	148	_i	_u	_o	52
9	_a	_i	}	1247	79	_a	_o	_o	133	149	wa	_a	_i	52
10	{	_a	_a	1112	80	wa	}	}	133	150	{	ja	_i	52
11	_u	_i	}	834	81	_i	_u	}	131	151	_i	_a	wa	51
12	_o	_i	}	702	82	_i	_i	_a	129	152	{	_i	wa	51
13	_a	_e	}	655	83	_i	_u	_a	122	153	_o	_u	_e	50
14	{	_a	_i	637	84	_u	_i	_o	121	154	_u	_e	_o	49
15	_a	_a	}	618	85	{	_i	_e	115	155	_e	_i	_o	49
16	_a	_a	_i	595	86	_a	_i	_u	113	156	{	_a	ja	49
17	{	{	_e	520	87	{	{	ju	113	157	_o	_a	_u	48
18	_o	_o	}	506	88	{	_o	_e	112	158	_u	_u	_e	47
19	_a	_a	_a	496	89	_a	_u	}	109	159	_e	_i	_i	47
20	{	_u	_i	462	90	{	_a	wa	109	160	ja	_i	}	47
21	{	_i	_o	461	91	_o	_o	_a	108	161	_a	_o	_e	46
22	{	_i	_a	438	92	_i	_i	_o	106	162	_a	wa	_a	46
23	{	_o	_o	432	93	_o	_u	_i	106	163	_o	_u	_u	45
24	{	_o	_i	423	94	_i	_a	_u	105	164	_u	_o	_a	43
25	_i	_i	}	421	95	_e	_u	_i	104	165	_e	_o	}	43
26	{	_u	_a	393	96	_o	_a	}	104	166	_i	ja	}	42
27	_u	}	}	389	97	_o	_i	_i	104	167	_u	_u	_u	42
28	{	_i	_i	354	98	_e	_o	_o	103	168	_o	_i	_e	41
29	_u	_a	}	351	99	{	_o	:o	99	169	jo	_i	}	40
30	_a	_i	_a	348	100	_e	_a	_i	98	170	wa	_e	}	40
31	_i	_a	}	343	101	_o	_a	_e	96	171	_a	_a	wa	39
32	_i	_a	_i	340	102	_a	_e	_i	95	172	_u	_i	_e	39
33	{	_a	_e	325	103	_a	_e	_a	90	173	_o	_e	_a	39
34	_u	_e	}	315	104	_i	_i	_u	89	174	{	jo	_o	39
35	_i	_o	}	296	105	wa	_i	}	89	175	_i	wa	}	38
36	{	_a	_u	291	106	_u	_i	_u	88	176	_e	_i	_a	38
37	{	_u	_u	282	107	_i	_o	_u	86	177	{	wa	_i	38
38	_i	_a	_a	275	108	{	_o	_u	86	178	_i	_i	_e	37
39	_o	_o	_o	271	109	_u	_u	_a	85	179	_o	ja	}	37
40	_o	_o	_i	261	110	{	_e	_u	84	180	{	jo	_i	37
41	_i	_o	_o	258	111	_i	_u	_e	83	181	_a	ja	}	36
42	{	_o	_a	247	112	_u	_u	}	82	182	_e	_i	_u	36
43	_a	_a	_e	234	113	{	ja	_a	82	183	_o	_a	_o	36
44	_a	_u	_i	230	114	_a	_e	_o	81	184	_i	_e	_i	34
45	_i	_o	_i	226	115	_e	_a	_a	81	185	_e	_u	_u	34
46	_o	_e	}	226	116	_u	_i	_i	79	186	ju	_i	}	34
47	_u	_a	_i	224	117	_o	_i	_u	79	187	_e	_e	}	33
48	{	{	ja	220	118	_a	wa	}	78	188	{	ja	_u	33
49	_u	_u	_i	218	119	_i	_u	_u	78	189	_a	wa	_e	32
50	_a	_a	_o	214	120	_u	_a	_e	78	190	{	ju	:u	32
51	_a	_i	_o	214	121	_a	_u	_e	76	191	{	jo	_a	32
52	{	_i	_u	211	122	_a	_o	_a	76	192	_a	_a	ja	31
53	_i	_e	}	210	123	{	_e	_o	75	193	_i	wa	_a	31
54	_a	_u	_a	209	124	_i	_o	_e	74	194	ja	_a	_i	31
55	_a	_a	_u	199	125	_u	_u	_o	74	195	{	_o	:o	31
56	{	_a	_o	190	126	_a	_e	_u	73	196	{	ju	_i	31
57	_o	_a	_i	189	127	_a	wa	_i	73	197	{	{	_o	31
58	_o	_a	_a	187	128	_e	_o	_i	72	198	_u	_e	_i	29
59	_i	_u	_i	184	129	_a	_u	_o	69	199	_a	_o	_u	28
60	_i	_o	_a	180	130	_e	_a	}	69	200	_u	_e	_u	28
61	{	_u	_e	173	131	{	wa	_a	67	201	_o	_e	_u	28
62	_u	_i	_a	171	132	_i	_a	_o	66	202	wa	_a	_a	28
63	_a	_i	_i	170	133	_u	_o	_i	66	203	wa	_i	_a	28
64	_u	_a	_a	166	134	_u	_o	_o	66	204	{	_i	ja	28
65	_u	_o	}	165	135	{	_u	wa	61	205	_e	_u	_e	27
66	_a	_o	}	164	136	_u	_a	_u	60	206	_o	_e	_i	27
67	{	{	jo	164	137	_o	_o	_u	60	207	{	_a	N	27
68	_i	_a	_e	160	138	_a	_i	_e	59	208	_u	_o	_u	26
69	_o	_i	_a	160	139	_a	_u	_u	58	209	_o	_e	_o	26
70	{	_e	_a	152	140	_u	_a	_o	58	210	_o	:o	_i	26

〈音素配列表5.4〉 『日葡辞書』 漢語音素配列 1 / 1

1	N	}	}	2797	71	_u	N	}	154	141	_o	:o	_a	86
2	_i	}	}	2730	72	{	_i	_o	152	142	{	_o	_i	85
3	{	{	_a	2267	73	wa	}	}	151	143	_o	:o	_e	84
4	{	{	_i	2249	74	N	_a	_i	150	144	{	_u	_e	84
5	{	{	_e	1808	75	{	jo	_u	147	145	_i	jo	:o	82
6	_u	}	}	1652	76	_i	_a	N	145	146	_i	ju	:u	81
7	{	{	_o	1642	77	N	_i	N	145	147	:o	jo	:o	81
8	:o	}	}	1566	78	_i	_a	_i	144	148	N	_o	_u	80
9	{	{	_u	1128	79	_a	N	_a	141	149	{	_u	_a	80
10	{	{	jo	854	80	{	_i	_a	141	150	:o	_a	_i	79
11	_e	N	}	831	81	_i	_e	_i	140	151	:o	_a	N	78
12	{	_a	N	825	82	_e	N	_i	139	152	N	jo	:o	78
13	:o	}	}	822	83	N	_a	N	138	153	{	_u	:u	77
14	T	}	}	796	84	:o	_i	}	138	154	{	_u	_u	77
15	{	_e	N	788	85	_a	N	_e	132	155	_e	_i	_o	77
16	_o	:o	}	748	86	jo	:o	_i	130	156	jo	:o	_e	77
17	{	_a	_i	730	87	_e	N	_a	129	157	N	_a	_u	76
18	jo	:o	}	729	88	_i	_u	}	128	158	_u	_a	_i	76
19	{	{	ju	716	89	_e	N	_e	127	159	:o	:o	:o	75
20	_i	N	}	691	90	_a	_i	_a	127	160	N	_a	}	75
21	{	_i	N	668	91	{	_e	Q	121	161	_o	N	_i	75
22	_a	_i	}	646	92	jo	:o	_a	121	162	jo	:o	_i	75
23	_e	_i	}	640	93	_a	_i	_i	120	163	jo	:o	_o	74
24	{	_e	_i	640	94	_a	N	_i	120	164	{	_o	Q	72
25	_a	N	}	631	95	{	_i	_e	119	165	jo	:o	_a	72
26	{	_o	:o	621	96	{	_e	T	117	166	{	wa	_i	71
27	{	{	_o	621	97	_i	N	_i	117	167	{	_o	_e	71
28	{	{	jo	616	98	_o	:o	_e	113	168	{	_u	_o	70
29	{	jo	:o	616	99	_o	:o	_a	113	169	_u	_e	_i	70
30	:u	}	}	523	100	_a	N	_o	112	170	_i	_o	}	69
31	{	_o	:o	488	101	_u	_e	N	111	171	_i	_a	_u	69
32	_o	:o	}	428	102	N	_o	:o	111	172	:o	_i	N	68
33	_o	_u	}	414	103	_a	T	}	111	173	N	_e	T	68
34	ju	:u	}	414	104	{	_a	Q	110	174	{	_i	jo	67
35	{	jo	:o	412	105	{	{	wɔ	109	175	{	_i	jo	64
36	{	ju	:u	396	106	{	wɔ	:o	109	176	_u	ju	:u	63
37	jo	:o	}	394	107	_u	:u	}	109	177	_i	_e	T	63
38	{	_i	_i	380	108	_o	T	}	109	178	jo	:o	_e	63
39	{	_o	N	377	109	_i	N	_e	108	179	{	_o	_a	63
40	_o	}	}	372	110	_i	_o	_u	107	180	_e	N	jo	62
41	_i	_i	}	355	111	_a	_i	_e	107	181	_o	:o	_o	62
42	_o	N	}	353	112	_e	_i	_i	106	182	{	_a	_e	61
43	{	{	ja	351	113	_e	_i	_e	106	183	ju	:u	_a	61
44	_a	_u	}	342	114	_i	_o	:o	105	184	{	ju	N	60
45	_a	}	}	337	115	wa	N	}	104	185	wa	_i	}	60
46	{	{	wa	318	116	_e	_i	_a	103	186	N	ja	}	60
47	_e	T	}	317	117	_o	:o	_i	101	187	N	ja	_u	60
48	{	_a	_u	310	118	_u	_i	N	100	188	_i	_a	}	59
49	jo	}	}	307	119	_e	N	_o	100	189	_a	_i	_u	59
50	{	_i	Q	306	120	_i	N	_a	99	190	_o	_u	_i	59
51	{	_o	_u	277	121	N	ju	:u	98	191	_u	_a	N	58
52	_u	_i	}	273	122	{	_i	_u	98	192	_a	N	_u	58
53	{	_u	_i	265	123	_o	:o	_o	98	193	ju	:u	_e	58
54	N	_i	}	256	124	{	wa	N	97	194	:o	jo	:o	57
55	ja	_u	}	254	125	_u	jo	:o	96	195	Q	_o	:o	57
56	_e	}	}	221	126	:o	_i	}	96	196	N	ju	}	57
57	ja	}	}	207	127	_a	_i	_o	96	197	_o	N	_a	57
58	N	_o	:o	199	128	:o	_e	N	92	198	:o	_e	N	55
59	ju	}	}	197	129	_i	_i	_i	92	199	_e	N	_o	55
60	N	_e	N	189	130	N	_o	}	91	200	_a	_u	_i	55
61	{	_u	N	187	131	_i	N	_o	91	201	_u	_i	_i	55
62	{	ja	_u	187	132	_o	:o	_i	91	202	_a	N	jo	54
63	_i	jo	:o	180	133	_u	_o	:o	89	203	:o	_a	N	54
64	_i	_e	N	179	134	wɔ	:o	}	89	204	{	_i	T	54
65	_i	T	}	167	135	_i	_o	N	88	205	Q	_i	}	54
66	N	jo	:o	166	136	N	_u	}	88	206	_o	N	_e	54
67	jo	_u	}	160	137	N	_o	N	87	207	_i	Q	_a	54
68	_i	_i	N	159	138	_u	_u	}	87	208	{	_i	ju	53
69	_i	_o	:o	157	139	ju	:u	_i	87	209	_a	_i	jo	53
70	N	_e	_i	156	140	N	jo	}	86	210	_u	jo	:o	53

〈音素配列表5.5〉 『天草版平家物語』 音素配列 1 / 4

1	_o	}	822	81	_u	_o	}	37	161	jo	:o	_u	18
2	_o	}	660	82	_o	_a	Q	37	162	Q	_a	_i	18
3	_o	_o	543	83	{	_a	_o	37	163	_a	_a	Q	17
4	{	_i	431	84	{	_o	:o	37	164	_a	jo	:o	17
5	_i	}	405	85	_a	_i	_e	36	165	_i	_e	_i	17
6	_e	}	393	86	_o	_o	_e	36	166	_e	N	_i	17
7	_a	}	344	87	_u	_o	_o	34	167	_o	:o	_i	17
8	{	_o	290	88	_o	wa	}	34	168	ju	:u	_e	17
9	_o	_o	275	89	{	_i	jo	34	169	jo	:o	_i	17
10	_o	_o	231	90	jo	_o	_i	33	170	Q	_a	_e	17
11	_i	_o	189	91	{	_a	N	33	171	{	_o	N	17
12	_o	_a	165	92	_a	_a	_u	32	172	_a	N	_a	16
13	_o	_o	162	93	_i	_o	_i	32	173	_i	_u	_a	16
14	_a	_e	147	94	_o	_e	}	32	174	_i	Q	_e	16
15	wa	}	141	95	jo	Q	_e	32	175	_e	_a	_u	16
16	_u	}	138	96	{	jo	Q	32	176	_o	_i	wa	16
17	{	_a	126	97	_a	_o	_i	31	177	_o	_u	_a	16
18	{	_e	123	98	_i	_i	_i	31	178	jo	:o	_a	16
19	{	_o	107	99	_i	jo	_o	31	179	:o	_u	_u	16
20	_a	_i	106	100	_e	_o	_o	31	180	N	}	}	16
21	_o	_i	105	101	_o	_e	_o	31	181	{	_i	_u	16
22	{	jo	105	102	_o	_o	wa	31	182	{	ju	_i	16
23	_i	_e	102	103	:o	}	}	31	183	{	wa	N	16
24	_e	_a	100	104	{	_a	Q	31	184	_a	_u	_i	15
25	{	_i	96	105	{	wa	}	31	185	_a	_u	_e	15
26	_a	_i	94	106	_i	_a	_e	30	186	_a	_o	:o	15
27	{	_i	94	107	_e	_a	_a	30	187	_a	wa	}	15
28	_e	_a	90	108	_o	_a	_a	30	188	_i	_a	_o	15
29	_e	_o	89	109	_o	:o	_u	30	189	_o	_e	_i	15
30	_a	_o	87	110	_a	_u	_a	29	190	jo	_o	}	15
31	{	ju	85	111	_a	_u	_o	29	191	:o	_o	}	15
32	_i	_o	84	112	_u	_e	_a	29	192	{	_i	N	15
33	_a	_o	83	113	jo	:o	_o	29	193	_a	jo	:o	14
34	{	:o	79	114	_u	_i	_o	28	194	_i	_u	_i	14
35	{	:o	79	115	_e	_i	_e	28	195	_i	_o	_e	14
36	{	_i	77	116	_e	wa	}	28	196	:u	_e	}	14
37	_a	Q	74	117	{	_u	_u	27	197	:o	}	}	14
38	Q	_e	74	118	{	_e	N	27	198	:o	_i	}	14
39	_o	_o	72	119	{	jo	:o	27	199	{	_i	wa	14
40	_e	_e	70	120	{	{	ja	27	200	_a	_a	jo	13
41	_a	_a	69	121	{	{	jo	27	201	_a	N	_o	13
42	{	_o	69	122	_u	_u	_o	26	202	_a	Q	_e	13
43	{	_o	69	123	_i	_i	_e	25	203	_i	wa	_e	13
44	_o	_i	68	124	_o	_i	_e	25	204	_u	_i	_a	13
45	_a	_a	63	125	_a	_u	_u	24	205	_u	_i	_e	13
46	{	_i	62	126	_a	_e	_i	24	206	_o	_e	wa	13
47	{	_e	60	127	_e	_a	_i	24	207	ja	}	}	13
48	_a	_u	59	128	_o	_a	_u	24	208	:o	_u	_u	13
49	{	_a	59	129	_o	_a	_e	24	209	N	_a	_u	13
50	_a	_e	57	130	_o	:o	_i	24	210	{	_e	_a	13
51	_i	_i	56	131	{	_o	_u	24	211	{	_o	Q	13
52	{	_u	56	132	_i	_o	_a	23	212	{	jo	_o	13
53	_a	_u	55	133	_u	_a	_e	23	213	_i	N	_o	12
54	_i	_a	55	134	_o	_e	_a	23	214	_u	_a	}	12
55	_a	_a	54	135	_i	_a	_u	22	215	_u	jo	:o	12
56	_a	_i	53	136	_u	_i	}	22	216	_o	_a	_i	12
57	_i	_a	53	137	_e	N	_o	22	217	_o	_u	_o	12
58	_i	_a	52	138	_o	N	_o	22	218	_o	_o	_u	12
59	N	_o	51	139	_o	:o	_a	22	219	_o	:o	_o	12
60	_a	_i	50	140	wa	_e	_a	22	220	_o	N	_i	12
61	{	_u	50	141	{	_u	_o	22	221	ju	_i	_u	12
62	{	ju	50	142	_e	_i	_i	21	222	jo	:o	_o	12
63	{	_u	49	143	:u	}	}	21	223	wa	N	_a	12
64	_a	_a	48	144	{	jo	:o	21	224	N	jo	:o	12
65	Q	_a	48	145	_u	_i	_i	20	225	{	ja	_u	12
66	_a	_e	46	146	_u	_e	_o	20	226	_a	wa	_e	11
67	_i	_e	45	147	_e	_o	_i	20	227	_i	_a	wa	11
68	_o	_a	45	148	_o	_i	_a	20	228	_i	_i	N	11
69	_o	_o	45	149	ju	:u	}	20	229	_i	_e	_e	11
70	_u	_u	44	150	jo	_i	}	20	230	_i	_o	N	11
71	_e	_i	42	151	N	_i	}	20	231	_i	wo	:o	11
72	_u	_a	41	152	{	jo	_i	20	232	_u	_u	_a	11
73	:o	_o	41	153	_o	:o	_o	19	233	:o	_e	_a	11
74	_i	_i	40	154	{	_o	jo	19	234	:o	_a	_e	11
75	_a	_e	39	155	_e	_a	_o	18	235	:o	_i	_a	11
76	_i	_i	38	156	_e	_i	_o	18	236	:o	_u	}	11
77	_i	wa	38	157	_o	_i	_i	18	237	{	_i	Q	11
78	_a	_o	37	158	_o	:o	_e	18	238	_a	_a	wa	10
79	_i	_e	37	159	_o	:o	_e	18	239	_a	_i	wa	10
80	_u	_a	37	160	_o	:o	}	18	240	_a	_i	Q	10

〈音素配列表5.5〉 『天草版平家物語』 音素配列 2 / 4

241	_i	_a	jɔ	10	321	_o	_u	}	6	401	_e	_o	_a	4
242	_u	_e	}	10	322	_o	_o	jɔ	6	402	_e	jɔ	_o	4
243	_u	_o	N	10	323	_o	:o	_a	6	403	_e	N	_u	4
244	_u	Q	_a	10	324	_o	N	_e	6	404	_o	_a	N	4
245	_o	Q	_e	10	325	ju	:u	_a	6	405	_o	_i	Q	4
246	ju	:u	_i	10	326	jɔ	_a	_u	6	406	_o	_u	_e	4
247	jɔ	_i	_o	10	327	jɔ	:o	_i	6	407	_o	_o	:o	4
248	wɔ	:o	_o	10	328	jɔ	:o	}	6	408	_o	ja	_o	4
249	:o	_a	ja	10	329	jɔ	:o	_e	6	409	_o	ju	:u	4
250	{	_a	ja	10	330	wa	_i	}	6	410	_o	jɔ	_o	4
251	{	ja	_a	10	331	N	_a	_i	6	411	_o	Q	_o	4
252	_i	_o	:o	9	332	N	_a	}	6	412	ja	_a	_o	4
253	_i	_o	:o	9	333	N	_i	_o	6	413	jɔ	_u	_o	4
254	_u	_e	_i	9	334	N	_e	}	6	414	wa	_a	_u	4
255	_e	_i	_a	9	335	{	_u	N	6	415	wa	_i	_e	4
256	_o	_e	N	9	336	{	ju	_u	6	416	wa	_e	}	4
257	_o	_o	ja	9	337	_a	_i	jɔ	5	417	wa	N	_i	4
258	_o	jɔ	:o	9	338	_a	_u	jɔ	5	418	:o	_a	}	4
259	:o	_e	}	9	339	_a	_u	Q	5	419	:o	_i	_o	4
260	:o	_o	:o	9	340	_a	wa	_u	5	420	:o	_o	_o	4
261	{	_a	_o	9	341	_i	_i	_u	5	421	:o	_a	_a	4
262	{	wa	_a	9	342	_i	_i	wa	5	422	:o	_a	_o	4
263	_a	_i	_u	8	343	_i	_e	N	5	423	:o	_e	_a	4
264	_a	ja	_a	8	344	_i	ja	_o	5	424	N	_a	N	4
265	_a	N	_i	8	345	_i	ja	}	5	425	N	_i	_i	4
266	_i	_a	N	8	346	_i	jɔ	_e	5	426	N	_i	_e	4
267	_i	jɔ	:o	8	347	_i	N	_i	5	427	N	_u	_u	4
268	_i	Q	_a	8	348	_u	_i	wa	5	428	N	_e	_i	4
269	_u	_a	_o	8	349	_e	N	_e	5	429	N	_o	N	4
270	_u	_e	_e	8	350	_e	N	jɔ	5	430	{	_u	_o	4
271	_u	_o	:o	8	351	_o	_i	_u	5	431	{	_e	_e	4
272	_u	wa	}	8	352	_o	_i	jɔ	5	432	{	_o	wa	4
273	_e	_i	wɔ	8	353	_o	_o	:o	5	433	{	ju	_e	4
274	_e	N	_a	8	354	_o	ja	}	5	434	_a	_a	ja	3
275	_o	_o	jɔ	8	355	_o	jɔ	_a	5	435	_a	_i	_o	3
276	_o	:o	}	8	356	_o	jɔ	:o	5	436	_a	_i	ja	3
277	ja	_a	_e	8	357	_o	:o	_o	5	437	_a	_i	wɔ	3
278	ja	_o	}	8	358	ja	_u	_i	5	438	_a	_u	wa	3
279	ju	:u	_o	8	359	jɔ	_e	}	5	439	_a	_e	wa	3
280	jɔ	_i	_a	8	360	jɔ	ju	T	5	440	_a	_o	_a	3
281	jɔ	:o	_e	8	361	jɔ	:o	}	5	441	_a	wa	Q	3
282	wɔ	:o	}	8	362	wa	_u	}	5	442	_a	N	_o	3
283	:o	_a	_i	8	363	wa	_o	_o	5	443	_a	N	ju	3
284	:o	_i	_o	8	364	:o	_i	_i	5	444	_a	N	jɔ	3
285	:o	wa	}	8	365	:o	_i	}	5	445	_a	N	}	3
286	Q	_a	_o	8	366	:o	_u	}	5	446	_i	_a	jɔ	3
287	{	jɔ	_a	8	367	:o	_o	:o	5	447	_i	_e	_u	3
288	_a	_e	_u	7	368	N	_a	_a	5	448	_i	_o	Q	3
289	_i	_u	_e	7	369	N	_i	_a	5	449	_i	ju	:u	3
290	_u	_a	wa	7	370	N	_o	:o	5	450	_i	jɔ	_i	3
291	_u	_o	_i	7	371	N	wa	}	5	451	_i	jɔ	_u	3
292	_o	_a	_o	7	372	Q	_e	_o	5	452	_i	jɔ	:o	3
293	_o	_u	_i	7	373	Q	_o	}	5	453	_i	wa	_i	3
294	_o	_e	_e	7	374	{	_u	Q	5	454	_i	N	_e	3
295	_o	jɔ	_i	7	375	{	_e	_o	5	455	_i	Q	_o	3
296	_o	:o	wɔ	7	376	{	_e	Q	5	456	_u	_a	_u	3
297	ja	_a	_i	7	377	{	_o	ju	5	457	_u	_u	wa	3
298	jɔ	}	}	7	378	{	jɔ	ju	5	458	_u	_u	Q	3
299	jɔ	:o	wa	7	379	{	wɔ	:o	5	459	_u	wa	_a	3
300	wa	_a	_e	7	380	{	{	wɔ	5	460	_e	_a	Q	3
301	:o	_e	}	7	381	_a	_e	Q	4	461	_e	_i	wa	3
302	:o	wɔ	:o	7	382	_a	_o	:o	4	462	_e	_e	_o	3
303	:o	_i	_e	7	383	_a	jɔ	_i	4	463	_e	_o	_e	3
304	:o	_e	N	7	384	_a	N	ja	4	464	_e	jɔ	_i	3
305	N	_a	_o	7	385	_i	_u	_o	4	465	_e	Q	_i	3
306	N	_e	N	7	386	_i	_u	wa	4	466	_e	Q	_e	3
307	{	_a	wa	7	387	_i	_o	_u	4	467	_o	_a	wa	3
308	{	_i	ja	7	388	_i	_o	wa	4	468	_o	jɔ	_e	3
309	{	_u	wa	7	389	_i	N	_a	4	469	_o	wa	_u	3
310	_a	_i	jɔ	6	390	_u	_u	_u	4	470	_o	wa	_e	3
311	_a	wa	_i	6	391	_u	_e	N	4	471	_o	N	}	3
312	_a	N	_e	6	392	_u	_o	_u	4	472	_o	Q	_a	3
313	_i	_u	_u	6	393	_u	_o	:o	4	473	ja	_i	_u	3
314	_i	_e	wa	6	394	_u	jɔ	_i	4	474	ja	_i	}	3
315	_i	N	}	6	395	_u	N	jɔ	4	475	ja	_u	_a	3
316	_u	_u	_i	6	396	_u	Q	_e	4	476	ja	_u	ja	3
317	_u	wa	_o	6	397	_e	_a	N	4	477	ja	_u	jɔ	3
318	_e	_a	jɔ	6	398	_e	_i	_u	4	478	ja	_o	_o	3
319	_e	_a	wa	6	399	_e	_u	_a	4	479	ju	_u	_a	3
320	_e	_u	}	6	400	_e	_e	_a	4	480	ju	:u	_o	3

〈音素配列表5.5〉 『天草版平家物語』 音素配列 3 / 4

481	ju	N	wa	3	561	_e	jo	}	2	641	_a	_a	N	1
482	ju	Q	_e	3	562	_e	N	}	2	642	_a	_i	N	1
483	jo	_e	_e	3	563	_e	T	_e	2	643	_a	_u	_o	1
484	jo	:o	_a	3	564	_o	_a	_o	2	644	_a	_u	N	1
485	jo	:o	_u	3	565	_o	_u	_u	2	645	_a	_e	_o	1
486	jo	:o	ju	3	566	_o	_u	jo	2	646	_a	_e	ja	1
487	wa	_a	}	3	567	_o	_u	jo	2	647	_a	_e	jo	1
488	wa	_i	_a	3	568	_o	_o	_o	2	648	_a	_o	N	1
489	wa	_u	_u	3	569	_o	ja	_i	2	649	_a	ja	_u	1
490	wa	_o	}	3	570	_o	ju	Q	2	650	_a	ja	wa	1
491	wa	Q	_e	3	571	_o	jo	}	2	651	_a	ja	}	1
492	:u	_i	}	3	572	_o	:o	_u	2	652	_a	jo	_a	1
493	:u	_o	}	3	573	_o	N	_a	2	653	_a	jo	_u	1
494	:u	_o	:o	3	574	_o	N	wa	2	654	_a	jo	_e	1
495	:o	_i	_a	3	575	_o	T	_o	2	655	_a	jo	}	1
496	:o	_i	N	3	576	ja	_o	:o	2	656	_a	:a	_u	1
497	:o	_e	_i	3	577	ja	Q	_i	2	657	_a	Q	_o	1
498	:o	_u	_a	3	578	ju	_a	_i	2	658	_a	Q	ju	1
499	:o	_e	_i	3	579	ju	_i	_o	2	659	_a	T	_a	1
500	:o	_o	_o	3	580	ju	_u	_u	2	660	_i	_i	_o	1
501	N	_a	_e	3	581	ju	_e	_i	2	661	_i	_i	ja	1
502	N	_e	_a	3	582	ju	jo	_o	2	662	_i	_i	jo	1
503	N	_o	_o	3	583	ju	jo	:o	2	663	_i	_u	_o	1
504	N	_o	:o	3	584	ju	T	_a	2	664	_i	_u	ja	1
505	N	ju	:u	3	585	jo	_a	_e	2	665	_i	_e	_o	1
506	N	jo	:o	3	586	jo	_a	N	2	666	_i	_o	ja	1
507	N	wa	N	3	587	jo	_u	_e	2	667	_i	_o	jo	1
508	Q	_a	_a	3	588	jo	_o	_a	2	668	_i	ja	_i	1
509	Q	_i	_e	3	589	jo	_o	_o	2	669	_i	jo	_a	1
510	Q	_o	:o	3	590	jo	:o	wa	2	670	_i	wa	_u	1
511	T	_o	}	3	591	wa	_a	_i	2	671	_i	wa	_o	1
512	{	_a	jo	3	592	wa	_e	_e	2	672	_i	N	ja	1
513	{	_e	_u	3	593	wa	jo	:o	2	673	_i	Q	_i	1
514	{	_e	}	3	594	wa	N	}	2	674	_i	Q	_u	1
515	{	_o	_o	3	595	wo	:o	_a	2	675	_i	Q	_o	1
516	{	ja	_i	3	596	wo	:o	_u	2	676	_i	T	_e	1
517	{	ju	N	3	597	wo	:o	_e	2	677	_u	_a	wo	1
518	{	wa	_i	3	598	:u	_a	N	2	678	_u	_a	Q	1
519	_a	_u	jo	2	599	:u	_i	_i	2	679	_u	_i	_u	1
520	_a	_e	jo	2	600	:u	_i	_e	2	680	_u	_i	ja	1
521	_a	_o	_u	2	601	:u	_o	_u	2	681	_u	_i	jo	1
522	_a	_o	_e	2	602	:o	_a	_a	2	682	_u	_u	_e	1
523	_a	ja	_i	2	603	:o	_a	_o	2	683	_u	_u	ju	1
524	_a	jo	_o	2	604	:o	_i	_e	2	684	_u	_u	jo	1
525	_a	wa	_a	2	605	:o	_u	_a	2	685	_u	_e	_u	1
526	_a	wa	jo	2	606	:o	_e	N	2	686	_u	_o	_e	1
527	_a	wo	:o	2	607	:o	_o	_e	2	687	_u	_o	ju	1
528	_a	N	wa	2	608	:o	_o	N	2	688	_u	_o	jo	1
529	_a	Q	_u	2	609	:o	wa	}	2	689	_u	_o	T	1
530	_a	Q	_o	2	610	:o	_a	_u	2	690	_u	ja	_u	1
531	_i	_a	_o	2	611	:o	_u	_o	2	691	_u	ja	_o	1
532	_i	_a	Q	2	612	:o	_e	_o	2	692	_u	ju	_o	1
533	_i	_i	Q	2	613	:o	_o	_e	2	693	_u	ju	:u	1
534	_i	_u	}	2	614	:o	ju	:u	2	694	_u	jo	_o	1
535	_i	ja	_a	2	615	N	_i	wa	2	695	_u	jo	ju	1
536	_i	jo	}	2	616	N	_i	N	2	696	_u	wa	_i	1
537	_i	wa	_a	2	617	N	_i	Q	2	697	_u	wa	_e	1
538	_i	N	ju	2	618	N	_o	_a	2	698	_u	wa	Q	1
539	_i	N	jo	2	619	N	_o	_u	2	699	_u	:u	}	1
540	_i	N	wa	2	620	N	ja	_u	2	700	_u	N	_u	1
541	_i	T	}	2	621	N	ja	Q	2	701	_e	_i	N	1
542	_u	_a	jo	2	622	N	ju	_o	2	702	_e	_i	Q	1
543	_u	_a	N	2	623	Q	_a	_u	2	703	_e	_u	_o	1
544	_u	_i	_o	2	624	Q	_i	_a	2	704	_e	_u	ja	1
545	_u	_i	N	2	625	Q	_e	N	2	705	_e	_e	_u	1
546	_u	_u	_o	2	626	Q	_o	_o	2	706	_e	_e	jo	1
547	_u	_e	jo	2	627	Q	_o	:o	2	707	_e	_e	wa	1
548	_u	_e	wa	2	628	T	_e	_a	2	708	_e	_o	wa	1
549	_u	_o	_a	2	629	T	}	}	2	709	_e	_o	:o	1
550	_u	ja	_o	2	630	{	_i	_o	2	710	_e	_o	N	1
551	_u	ja	}	2	631	{	_u	jo	2	711	_e	ja	_u	1
552	_u	jo	:o	2	632	{	_e	jo	2	712	_e	ju	:u	1
553	_u	N	_a	2	633	{	_o	ja	2	713	_e	jo	:o	1
554	_e	_i	ju	2	634	{	ju	_a	2	714	_e	jo	:o	1
555	_e	_i	jo	2	635	{	ju	jo	2	715	_e	wa	_o	1
556	_e	_u	_e	2	636	{	jo	_u	2	716	_e	N	_o	1
557	_e	_u	wa	2	637	{	jo	wa	2	717	_e	N	jo	1
558	_e	_e	_i	2	638	{	wa	_u	2	718	_e	N	wo	1
559	_e	_o	Q	2	639	_a	_a	_o	1	719	_e	Q	_a	1
560	_e	_o	:o	2	640	_a	_a	jo	1	720	_e	Q	_o	1

〈音素配列表5.5〉 『天草版平家物語』 音素配列 4 / 4

721	_e	Q	ja	1	801	wa	_e	wa	1	881	{	_a	wo	1
722	_e	T	_o	1	802	wa	N	_u	1	882	{	_a	T	1
723	_o	_a	jo	1	803	wa	N	_e	1	883	{	_a	}	1
724	_o	_a	:a	1	804	wa	Q	_a	1	884	{	_i	ju	1
725	_o	_i	:o	1	805	wo	:o	_i	1	885	{	_i	jo	1
726	_o	_i	ja	1	806	wo	:o	wa	1	886	{	_i	}	1
727	_o	_u	wa	1	807	:a	_u	}	1	887	{	_u	ja	1
728	_o	_e	_u	1	808	:u	_a	_a	1	888	{	_u	ju	1
729	_o	_e	jo	1	809	:u	_a	_i	1	889	{	_u	jo	1
730	_o	_o	N	1	810	:u	_a	_o	1	890	{	_e	T	1
731	_o	_o	Q	1	811	:u	_a	}	1	891	{	_o	T	1
732	_o	ja	_u	1	812	:u	_i	_a	1	892	{	ja	_o	1
733	_o	jo	_u	1	813	:u	_i	_o	1	893	{	ja	wa	1
734	_o	wa	_a	1	814	:u	_i	T	1	894	{	ju	Q	1
735	_o	wa	_i	1	815	:u	_u	_u	1	895	{	ju	T	1
736	_o	:o	ja	1	816	:u	_e	_a	1	896	{	jo	_e	1
737	_o	:o	jo	1	817	:u	_e	_o	1	897	{	jo	:o	1
738	_o	:o	wa	1	818	:u	_e	N	1	898	{	wa	_e	1
739	_o	N	_u	1	819	:u	_o	_i	1					
740	_o	N	:o	1	820	:u	_o	_o	1					
741	_o	Q	_u	1	821	:u	_o	N	1					
742	_o	Q	:o	1	822	:u	jo	:o	1					
743	:o	:o	ju	1	823	:u	wa	}	1					
744	ja	_a	Q	1	824	:o	_a	_i	1					
745	ja	_a	}	1	825	:o	_i	wa	1					
746	ja	_i	_a	1	826	:o	_e	_e	1					
747	ja	_i	_e	1	827	:o	_e	jo	1					
748	ja	_u	_o	1	828	:o	_e	T	1					
749	ja	_u	:u	1	829	:o	_o	_i	1					
750	ja	_u	Q	1	830	:o	ja	_o	1					
751	ja	_u	}	1	831	:o	jo	:o	1					
752	ja	_o	_a	1	832	:o	jo	:o	1					
753	ja	_o	_e	1	833	:o	wa	N	1					
754	ja	wa	_a	1	834	:o	_a	Q	1					
755	ja	wa	}	1	835	:o	_i	_i	1					
756	ju	_a	_a	1	836	:o	_i	T	1					
757	ju	_i	wa	1	837	:o	_u	_i	1					
758	ju	_i	N	1	838	:o	_u	_e	1					
759	ju	_i	}	1	839	:o	_u	jo	1					
760	ju	_u	_i	1	840	:o	_e	wa	1					
761	ju	_e	_o	1	841	:o	_o	_a	1					
762	ju	_e	N	1	842	:o	_o	_i	1					
763	ju	_o	}	1	843	:o	_o	_u	1					
764	ju	:u	_u	1	844	:o	ju	_a	1					
765	ju	:u	jo	1	845	:o	ju	_i	1					
766	ju	:u	wa	1	846	:o	jo	:o	1					
767	ju	T	_i	1	847	:o	jo	:o	1					
768	ju	T	_o	1	848	N	_i	T	1					
769	ju	T	ju	1	849	N	_u	_a	1					
770	ju	T	jo	1	850	N	_u	_i	1					
771	jo	_a	_a	1	851	N	_u	_e	1					
772	jo	_a	_i	1	852	N	_e	wa	1					
773	jo	_a	_o	1	853	N	_o	_i	1					
774	jo	_a	jo	1	854	N	_o	_e	1					
775	jo	_a	}	1	855	N	_o	jo	1					
776	jo	_i	_i	1	856	N	_o	wa	1					
777	jo	_i	jo	1	857	N	ja	_o	1					
778	jo	_i	wa	1	858	N	wa	_i	1					
779	jo	_i	N	1	859	N	wo	:o	1					
780	jo	_u	}	1	860	Q	_a	N	1					
781	jo	_e	jo	1	861	Q	_i	_o	1					
782	jo	_e	wa	1	862	Q	_u	_i	1					
783	jo	_o	_u	1	863	Q	_u	_e	1					
784	jo	_o	_e	1	864	Q	_u	_o	1					
785	jo	_o	wa	1	865	Q	_u	}	1					
786	jo	:o	:o	1	866	Q	_e	_a	1					
787	jo	ju	:u	1	867	Q	_e	ju	1					
788	jo	wa	_i	1	868	Q	_e	T	1					
789	jo	wa	}	1	869	Q	_o	N	1					
790	jo	:o	jo	1	870	Q	ja	_a	1					
791	jo	:o	jo	1	871	Q	ju	:u	1					
792	jo	:o	jo	1	872	T	_a	_i	1					
793	wa	_a	_a	1	873	T	_a	_u	1					
794	wa	_a	_o	1	874	T	_a	:o	1					
795	wa	_i	_i	1	875	T	_i	}	1					
796	wa	_i	_u	1	876	T	_e	N	1					
797	wa	_i	_o	1	877	T	_o	_o	1					
798	wa	_u	_i	1	878	T	ju	:u	1					
799	wa	_u	_e	1	879	T	jo	_i	1					
800	wa	_u	jo	1	880	{	_a	jo	1					



〈音素配列表6.2〉 『新潮現代国語辞典』和語名詞音素配列 1 / 1

1	_i	}	}	5645	71	_u	_a	_a	216	141	_e	_a	}	91
2	{	{	_a	3917	72	_a	_a	_o	215	142	{	jo	_o	89
3	{	{	_i	2587	73	_a	_i	_i	213	143	_u	_u	_e	88
4	_e	}	}	2567	74	{	_o	:o	211	144	_i	_u	_o	87
5	{	{	_o	2369	75	{	{	wa	209	145	_i	_i	_e	86
6	{	{	_u	2214	76	_i	_u	_a	205	146	{	ja	_i	86
7	_a	_i	}	2018	77	{	_i	_e	201	147	_u	_o	_o	85
8	_a	}	}	2009	78	{	_o	_e	200	148	_u	_a	_u	84
9	_o	}	}	1627	79	_u	_o	}	199	149	_o	_u	_a	83
10	{	_a	_a	1332	80	{	_e	_i	199	150	_o	_e	_a	83
11	_u	_i	}	1282	81	_e	_a	_i	192	151	{	jo	_i	83
12	_o	_i	}	1043	82	_i	_i	_i	185	152	_e	_u	_a	80
13	_a	_e	}	1031	83	_o	_i	_o	182	153	wa	_a	_i	78
14	{	_a	_i	959	84	ja	}	}	182	154	_o	:o	_i	77
15	{	{	_e	848	85	_a	_u	}	177	155	N	}	}	77
16	_a	_a	}	818	86	_a	_e	_a	177	156	{	_a	ja	77
17	_a	_a	_i	796	87	_u	_i	_o	177	157	_i	_a	wa	75
18	{	_u	_i	795	88	wa	_i	}	174	158	jo	_i	}	75
19	{	_o	_i	695	89	{	_u	_o	173	159	_o	_u	_e	74
20	_o	_o	}	631	90	_i	_i	_o	171	160	_u	_e	_a	72
21	{	_i	_o	613	91	_e	_u	_i	167	161	_e	_i	_i	70
22	{	_i	_a	608	92	_o	_a	_e	164	162	_o	_a	_u	69
23	{	_a	_e	587	93	_a	_e	_i	162	163	_u	_i	_e	67
24	_i	_a	_i	568	94	wa	}	}	160	164	_u	_u	_o	66
25	_a	_a	_a	566	95	_a	_o	_o	159	165	_o	_i	_e	66
26	{	_i	_i	557	96	_a	_i	_u	156	166	{	_o	ja	65
27	_i	_i	}	556	97	_e	_o	_o	156	167	_o	_o	_u	64
28	_u	}	}	551	98	_o	_o	_a	156	168	_o	:o	_a	64
29	{	_o	_o	531	99	_e	_a	_a	153	169	_i	_e	_a	63
30	_u	_e	}	497	100	{	_o	_u	153	170	wa	_a	}	63
31	{	_u	_a	484	101	_o	_i	_i	149	171	ju	_i	}	61
32	_i	_a	_a	470	102	_o	_u	_i	148	172	_e	_o	}	59
33	_u	_a	}	457	103	_u	_i	_u	146	173	{	_i	wa	59
34	{	_a	_u	419	104	{	_e	_o	146	174	_a	_o	_e	58
35	_a	_i	_a	417	105	_o	_a	}	143	175	_u	_e	_i	57
36	_o	_e	}	370	106	_i	_u	}	142	176	_e	_a	_u	57
37	{	_o	_a	369	107	_i	_a	_u	140	177	ja	_a	}	57
38	{	{	ja	367	108	{	ja	_a	140	178	ju	}	}	57
39	{	_i	_u	364	109	_u	_i	_i	138	179	{	_u	wa	57
40	_i	_e	}	352	110	_a	_e	_o	135	180	ja	_a	_a	56
41	_i	_o	_o	348	111	_i	_i	_u	135	181	:o	_i	}	56
42	_i	_o	_i	347	112	{	_e	_u	132	182	{	_i	:i	56
43	_i	_o	}	338	113	_i	_a	_o	129	183	_a	_a	wa	55
44	{	_u	_u	327	114	_i	_o	_e	128	184	_e	_i	_o	55
45	_i	_u	_i	326	115	_i	_u	_u	123	185	_o	_a	_o	55
46	_a	_u	_i	317	116	_a	_u	_o	122	186	_o	_u	_u	55
47	_o	_o	_i	316	117	{	_a	wa	122	187	{	wa	_i	55
48	_u	_a	_i	303	118	_i	_u	_e	120	188	_i	_e	_i	53
49	_i	_a	_e	296	119	_u	_a	_e	119	189	_a	wa	_e	52
50	_a	_a	_e	295	120	_u	_u	}	119	190	_u	_o	_a	52
51	_a	_a	_u	291	121	_a	_u	_e	116	191	_u	_u	_u	51
52	_i	_a	}	290	122	_a	wa	_i	116	192	_u	_e	_o	51
53	{	_a	_o	290	123	_e	_a	_e	115	193	{	ja	_u	51
54	{	{	jo	283	124	_u	_u	_a	113	194	_u	_e	_u	49
55	_a	_i	_o	277	125	_a	_e	_u	112	195	_e	_e	}	48
56	_a	_u	_a	277	126	_o	_i	_u	109	196	Q	_o	}	48
57	_o	_i	_a	274	127	_e	_o	_i	106	197	_a	wa	_a	47
58	_u	_i	_a	273	128	_a	_o	_a	100	198	_i	wa	}	47
59	_u	_u	_i	273	129	_i	_o	_u	100	199	ja	_a	_i	47
60	{	_u	_e	268	130	_o	_o	_e	100	200	jo	}	}	47
61	_o	_o	_o	260	131	_u	_o	_i	97	201	_i	wa	_a	46
62	_o	_a	_i	253	132	_e	_i	_a	97	202	_o	ja	}	46
63	{	_e	_a	250	133	wa	_e	}	95	203	{	_a	N	46
64	_e	_i	}	244	134	{	wa	_a	95	204	ja	_e	}	44
65	_a	_o	}	243	135	_a	_u	_u	94	205	_a	_o	_u	43
66	_i	_o	_a	224	136	{	ju	_i	94	206	_e	_a	_o	42
67	_i	_i	_a	222	137	_a	_i	_e	93	207	_e	_u	_e	42
68	_a	_o	_i	221	138	ja	_i	}	93	208	{	_o	Q	42
69	{	{	ju	221	139	_u	_a	_o	92	209	_a	ja	}	41
70	_o	_a	_a	218	140	_a	wa	}	91	210	_i	ja	}	41

〈音素配列表6.3〉 『新潮現代国語辞典』 漢語音素配列 1 / 1

1	N	}	}	7227	71	{	_i	_u	495	141	:o	_a	}	235
2	{	{	_a	6794	72	_u	jo	:o	486	142	_u	_a	_u	234
3	_u	}	}	6320	73	_i	_e	N	483	143	_i	ju	:u	232
4	_i	}	}	6247	74	jo	:o	_a	483	144	ju	_u	_e	232
5	{	{	_o	6164	75	_u	_o	:o	475	145	_e	:e	jo	231
6	:o	}	}	6091	76	{	_i	_e	475	146	ju	_u	}	230
7	{	{	_i	5708	77	{	_u	N	470	147	N	_o	}	227
8	{	{	_e	5569	78	_u	N	}	459	148	{	_u	_e	217
9	{	{	jo	3488	79	_u	_e	N	457	149	_i	_o	_u	211
10	{	_o	:o	3480	80	_o	:o	jo	451	150	{	_a	_o	210
11	_o	:o	}	3325	81	_e	N	_e	448	151	_i	N	jo	209
12	jo	:o	}	2766	82	_e	N	_o	446	152	ju	_u	_a	207
13	{	{	_u	2567	83	N	_a	N	445	153	ju	_u	_o	204
14	{	jo	:o	2419	84	_a	_i	_o	440	154	_o	:o	ju	203
15	{	_e	N	2402	85	:o	_e	N	440	155	{	_a	_e	203
16	{	_a	_i	2382	86	jo	:o	_o	439	156	{	_o	Q	202
17	_e	N	}	2379	87	jo	:o	_e	437	157	:e	_i	}	200
18	{	{	ju	2302	88	_a	N	_o	430	158	ju	:u	_i	194
19	{	_a	N	2249	89	_a	_i	_a	429	159	{	_a	_a	194
20	_e	:e	}	2083	90	_e	N	_i	427	160	:e	_o	:o	192
21	:e	}	}	2083	91	ja	}	}	427	161	{	_u	_a	191
22	_a	_i	}	1995	92	_a	_i	_e	425	162	_i	_a	}	190
23	{	_e	:e	1929	93	{	_e	Q	425	163	{	_o	_a	190
24	_a	N	}	1900	94	_i	_a	N	423	164	{	_o	_o	190
25	{	_i	N	1668	95	ju	}	}	422	165	:o	ju	:u	187
26	_i	N	}	1663	96	_a	_i	_i	409	166	:u	_i	}	186
27	:u	}	}	1474	97	_e	:e	_a	404	167	{	_u	_o	186
28	_a	_u	}	1460	98	{	_e	_i	403	168	{	ju	N	184
29	_a	}	}	1203	99	_u	_u	}	397	169	_u	_o	_u	183
30	ju	:u	}	1130	100	_i	_e	:e	395	170	N	_u	}	183
31	_o	_u	}	1105	101	N	_i	N	387	171	_i	_o	}	182
32	{	ju	_u	1071	102	_a	N	_e	378	172	:o	_o	_u	182
33	_o	}	}	1031	103	_e	:e	_o	376	173	:o	_o	}	182
34	{	_a	_u	923	104	{	_i	jo	375	174	N	_e	_u	182
35	N	_o	:o	814	105	:o	_e	:e	373	175	{	_o	_i	180
36	{	_o	_u	805	106	_a	N	_i	372	176	_a	_i	_u	179
37	_i	_u	}	794	107	_e	:e	_i	371	177	N	jo	}	179
38	{	_i	_i	755	108	_i	_a	_i	367	178	_a	_u	_e	177
39	_i	_i	}	750	109	:o	_a	_i	364	179	_a	N	_u	174
40	_o	:o	_a	732	110	{	_a	Q	361	180	_u	ju	:u	174
41	_e	_u	}	731	111	{	ja	_u	359	181	{	_o	_e	169
42	_o	{	ja	715	112	:o	_a	N	350	182	_a	_u	_a	168
43	_o	N	}	710	113	_i	_i	N	347	183	N	_o	N	167
44	{	_o	N	707	114	_u	:u	}	344	184	_o	_u	_e	164
45	N	_i	}	702	115	_e	:e	_e	341	185	{	_i	ju	164
46	_o	:o	_o	682	116	{	jo	_u	340	186	_a	_u	_i	160
47	_i	_o	:o	672	117	_i	N	_o	335	187	_e	N	_u	160
48	jo	}	}	657	118	_u	_e	:e	332	188	jo	:o	_u	160
49	_u	_i	}	652	119	_i	N	_e	326	189	N	_i	_u	160
50	_e	_i	}	640	120	_u	_i	N	321	190	_i	_o	N	155
51	N	jo	:o	638	121	N	_a	_u	320	191	_u	_i	_u	153
52	_o	:o	_e	632	122	_u	_a	_i	311	192	Q	_i	}	153
53	{	ju	:u	623	123	_i	N	_i	310	193	_e	N	ju	151
54	jo	_u	}	620	124	N	_a	}	308	194	_o	_u	_i	151
55	:o	_i	}	612	125	{	_u	:u	305	195	{	_u	jo	151
56	_o	:o	_i	601	126	_i	N	_a	301	196	:e	jo	:o	147
57	:o	_o	:o	598	127	_e	N	jo	299	197	:o	_u	}	146
58	_i	jo	:o	573	128	:o	_i	N	299	198	_i	_i	_u	144
59	{	_u	_i	573	129	_a	_i	jo	298	199	_o	N	_a	144
60	{	_i	_o	548	130	{	_e	_u	274	200	:e	_e	N	144
61	{	_i	_a	545	131	jo	:o	jo	272	201	N	jo	_u	142
62	N	_e	N	529	132	_a	N	jo	271	202	_u	_o	}	140
63	_a	N	_a	525	133	_u	_a	N	271	203	:o	_o	N	140
64	N	_e	:e	525	134	N	ju	:u	270	204	{	_a	jo	140
65	_e	N	_a	523	135	Q	_o	:o	269	205	ju	_u	jo	139
66	{	_i	Q	519	136	{	_u	_u	263	206	_a	_o	:o	138
67	ja	_u	}	515	137	_i	_a	_u	252	207	_o	_u	_o	138
68	N	_a	_i	514	138	:o	_a	_u	246	208	_o	N	_o	136
69	:o	jo	:o	509	139	_o	:o	_u	243	209	{	jo	_o	136
70	jo	:o	_i	503	140	N	_o	_u	242	210	_i	_e	_i	135

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 1 / 7

1	_o	}	2880	81	_i	wa	}	155	161	_i	_i	_o	85
2	_a	}	2505	82	{	_i	N	155	162	_e	_i	}	85
3	_i	_a	2396	83	N	}	}	154	163	N	_e	N	85
4	}	_i	2114	84	{	{	ja	154	164	_i	_e	_a	84
5	_a	}	1724	85	_a	_u	_o	152	165	_u	_i	_o	84
6	_i	}	1380	86	_i	_i	_i	152	166	{	_u	_o	84
7	_e	}	1203	87	_o	_i	}	151	167	_i	_o	_o	83
8	_u	}	1137	88	_o	_a	}	150	168	_i	_i	_a	79
9	}	_e	970	89	{	_o	N	150	169	_a	_e	_i	78
10	}	_u	847	90	{	_u	_i	148	170	_a	_o	:o	78
11	wa	}	713	91	_a	_u	_i	147	171	_o	_e	_a	78
12	}	_o	672	92	_e	wa	}	146	172	N	jo	:o	78
13	_a	_i	639	93	Q	_a	}	145	173	_i	_e	:e	77
14	_i	_a	518	94	_o	_o	_i	144	174	_u	_a	_a	77
15	_i	_o	513	95	{	_o	_u	143	175	_i	_i	N	76
16	}	jo	499	96	_o	:o	_e	140	176	{	_o	Q	76
17	_o	:o	488	97	_u	_a	_i	134	177	_i	N	_i	75
18	_a	_a	466	98	:o	_a	}	133	178	_u	_e	_i	74
19	_i	_u	460	99	_a	_e	_e	132	179	_o	_u	_a	74
20	_a	_u	449	100	_i	_u	_o	132	180	_o	_u	}	74
21	_o	_i	438	101	_o	wa	}	131	181	_u	_i	_e	73
22	_o	_o	416	102	_a	_e	_u	130	182	_e	:e	_e	73
23	_u	_o	414	103	_a	N	_o	130	183	_o	_a	_a	73
24	_i	_a	410	104	_i	_a	_o	130	184	_i	_i	_i	72
25	_a	_i	409	105	{	_a	_o	130	185	_i	_e	_o	72
26	_i	_e	378	106	_a	N	_a	129	186	_i	Q	_a	72
27	_a	_i	369	107	N	_a	}	128	187	_o	_o	_e	72
28	N	_o	359	108	_a	_e	}	127	188	_o	:o	_u	72
29	_a	_u	354	109	_e	:e	_i	126	189	:o	_e	:e	72
30	_a	_o	335	110	_i	_e	N	125	190	_i	_i	_e	71
31	}	_i	333	111	_u	_i	}	124	191	_e	_u	_o	71
32	_e	_e	311	112	_i	N	_o	122	192	{	wa	_a	71
33	}	ju	308	113	_o	:o	}	121	193	ju	:u	_a	70
34	_i	_a	306	114	:o	_i	}	120	194	_u	_u	_o	69
35	_a	_a	302	115	_i	Q	_o	119	195	N	wa	}	69
36	_e	_o	289	116	_e	N	_i	119	196	_u	wa	}	68
37	_a	N	289	117	_u	_i	_a	118	197	{	jo	_u	68
38	}	jo	282	118	_e	_i	_a	118	198	_a	_e	_o	66
39	_e	:e	279	119	_e	_a	_i	117	199	:o	_e	N	66
40	_i	_u	269	120	_o	N	_a	117	200	_u	_a	_u	65
41	{	_i	256	121	_a	Q	_e	116	201	_u	_e	N	65
42	_a	_a	241	122	_i	jo	:o	115	202	_e	_i	_i	65
43	_a	_a	238	123	_i	_a	_e	114	203	N	_e	}	65
44	{	_a	236	124	_a	N	_i	113	204	_e	_a	_e	64
45	{	_i	221	125	{	{	wa	113	205	_o	_a	_i	64
46	{	ju	220	126	_a	_a	_o	112	206	{	_e	Q	64
47	_e	N	217	127	_a	_u	_e	112	207	_i	_o	_u	62
48	:o	_o	216	128	:o	_o	:o	112	208	_i	ju	:u	62
49	_o	:o	213	129	N	_i	}	112	209	_u	_a	_o	62
50	_o	:o	210	130	_a	N	_e	111	210	_u	_u	_i	62
51	_a	_i	209	131	{	_o	_a	111	211	_u	_e	}	61
52	_a	_i	208	132	_o	_i	_a	108	212	_o	_e	_o	60
53	_i	_a	206	133	ju	:u	_o	107	213	:o	jo	:o	60
54	_o	:o	203	134	_a	_a	_e	105	214	_i	_e	_i	59
55	_e	_a	200	135	_i	_o	:o	105	215	_i	Q	_e	59
56	jo	:o	199	136	{	_u	_e	103	216	_u	_o	:o	59
57	_e	_e	196	137	jo	:o	_e	102	217	_o	_i	_e	59
58	_i	_i	195	138	N	_o	:o	102	218	_o	_u	_i	59
59	{	_o	195	139	_o	_e	}	101	219	{	_i	jo	59
60	jo	:o	188	140	_o	_u	_o	100	220	N	_a	N	58
61	Q	_e	186	141	ju	:u	_i	100	221	_i	_u	_i	57
62	{	_o	182	142	_i	N	_a	99	222	_o	jo	:o	57
63	_e	:e	180	143	{	_e	_i	99	223	_o	_i	_o	56
64	_e	N	180	144	ja	}	}	98	224	_o	:o	jo	56
65	_u	_u	178	145	{	_e	_a	98	225	_a	_i	wa	55
66	{	_a	175	146	_a	_i	_u	97	226	N	_i	N	55
67	_e	_u	174	147	_o	N	_o	97	227	{	_i	:i	55
68	N	_a	172	148	:e	_o	}	97	228	{	_u	N	55
69	:o	}	171	149	_i	_u	_u	96	229	_u	_i	N	53
70	{	_u	171	150	_i	_u	_a	94	230	ji	_o	}	53
71	_a	_e	169	151	Q	_o	N	93	231	N	ju	:u	53
72	jo	:o	169	152	_e	N	_e	91	232	Q	_a	_o	53
73	_a	_u	167	153	N	_e	:e	90	233	_a	_o	_a	52
74	_o	_o	167	154	{	{	ji	90	234	_a	_o	_o	52
75	_o	_o	165	155	_u	jo	:o	88	235	_i	_e	_u	52
76	{	_u	165	156	_u	_a	_e	86	236	_i	_o	_i	52
77	_e	:e	164	157	:o	_a	_i	86	237	_u	_e	_a	52
78	_i	_a	160	158	{	_i	ji	86	238	{	_e	_u	52
79	_u	_a	158	159	_a	_a	_u	85	239	{	ja	_a	52
80	_a	Q	155	160	_i	_a	N	85	240	{	ja	_u	52

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 2 / 7

241	ja	_a	_i	51	321	N	_u	_u	35	401	_u	_i	_u	24
242	Q	_o	:o	51	322	{	ji	_a	35	402	_e	N	wa	24
243	_i	_o	_a	50	323	_a	wa	_e	34	403	_o	_e	_e	24
244	_e	_a	_a	50	324	_u	_u	_e	34	404	ja	_u	_o	24
245	_o	N	_e	50	325	_e	_i	_e	34	405	ji	_i	}	24
246	jo	:o	}	50	326	_o	Q	_e	34	406	ju	jo	:o	24
247	_a	_i	jo	49	327	jo	:o	wa	34	407	jo	_u	_e	24
248	_a	_o	_e	49	328	:u	jo	:o	34	408	:u	_a	_i	24
249	_a	N	}	49	329	:o	_a	_a	34	409	:e	_i	_a	24
250	_i	_u	_e	49	330	:o	_e	}	34	410	N	_e	_u	24
251	_u	_u	_a	49	331	:o	wa	}	34	411	_i	ji	_e	23
252	_o	N	_i	49	332	{	jo	_i	34	412	_u	_a	wa	23
253	N	_i	_a	49	333	_u	N	_o	33	413	_e	_e	_a	23
254	_a	_a	Q	48	334	jo	:o	_u	33	414	_e	Q	_o	23
255	_u	_e	_u	48	335	:u	_o	_u	33	415	_o	_i	wa	23
256	_u	_o	_a	48	336	_a	N	jo	32	416	_o	Q	_o	23
257	_e	_a	_o	48	337	_a	Q	_o	32	417	wa	_e	_e	23
258	_a	wa	}	47	338	_i	_o	N	32	418	N	_e	_o	23
259	_e	_a	N	47	339	_i	ji	_o	32	419	Q	_e	N	23
260	_e	N	jo	47	340	:o	_i	_o	32	420	{	_e	_e	23
261	_o	_e	_u	47	341	_a	_i	:i	31	421	_a	_a	N	22
262	_o	_o	wa	47	342	_u	N	_a	31	422	_a	wa	_a	22
263	ju	:u	_e	47	343	_e	:e	}	31	423	_i	_e	_e	22
264	:o	_i	_a	47	344	ji	_a	_i	31	424	_i	ja	_a	22
265	N	_a	_a	47	345	:e	_i	}	31	425	_e	Q	_a	22
266	_e	_u	_a	46	346	:e	}	}	31	426	:u	_i	}	22
267	_o	_a	_o	46	347	:o	_u	_u	31	427	:e	_i	N	22
268	ja	_o	}	46	348	N	_e	_i	31	428	:e	jo	:o	22
269	:u	_o	}	46	349	Q	_a	_i	31	429	Q	_a	_a	22
270	_u	_e	:e	45	350	{	_a	wa	31	430	Q	_e	:e	22
271	jo	_u	}	45	351	{	_e	_o	31	431	{	_a	ja	22
272	_u	_i	_i	44	352	_i	N	}	30	432	{	ji	_i	22
273	_u	_o	_i	44	353	_e	:e	jo	30	433	_a	_e	N	21
274	wa	_a	_u	44	354	:e	_a	}	30	434	_i	_u	N	21
275	_u	_u	_u	43	355	:o	_a	N	30	435	_u	jo	_u	21
276	_e	_i	_o	43	356	_i	_a	wa	29	436	_e	:e	wa	21
277	_e	N	ju	43	357	_u	_i	wa	29	437	_o	_u	_u	21
278	_i	_i	_u	42	358	_o	_i	_i	29	438	jo	_o	}	21
279	_u	_o	_o	42	359	ji	}	}	29	439	:u	_o	:o	21
280	_e	N	}	42	360	N	_a	_o	29	440	:e	_a	N	21
281	_o	_e	wa	42	361	N	_i	_u	29	441	:o	_a	_u	21
282	:o	_a	_o	42	362	_a	_a	wa	28	442	{	_u	ji	21
283	:o	_i	_e	42	363	_a	_u	jo	28	443	{	jo	_e	21
284	N	_a	_u	42	364	_i	N	ju	28	444	_a	_u	wa	20
285	_u	_e	_e	41	365	_i	N	jo	28	445	_a	N	wa	20
286	_e	_u	_i	41	366	_u	_o	_u	28	446	_i	ji	_a	20
287	_o	_e	N	41	367	_e	N	_u	28	447	_e	_a	_u	20
288	ju	:u	jo	41	368	_o	_a	_u	28	448	ji	_i	_i	20
289	_i	:i	}	40	369	_o	_o	_u	28	449	ju	:u	}	20
290	_u	_o	_e	40	370	_o	:o	ja	28	450	jo	_u	_a	20
291	_e	:e	_u	40	371	:o	_a	_e	28	451	jo	_u	_i	20
292	_o	_a	_e	40	372	:o	_e	_i	28	452	jo	}	}	20
293	_o	Q	_a	40	373	N	_o	_o	28	453	:u	_a	N	20
294	jo	_u	_o	40	374	{	_i	ja	28	454	Q	_o	}	20
295	:i	}	}	40	375	{	_o	jo	28	455	{	jo	_a	20
296	:o	_i	N	40	376	_i	ji	_i	27	456	{	jo	N	20
297	{	_u	:u	40	377	_i	:i	_o	27	457	{	wa	_e	20
298	_i	N	_e	39	378	_u	_o	wa	27	458	_a	Q	_i	19
299	:o	_i	_u	39	379	_u	ju	:u	27	459	_i	_a	jo	19
300	N	_i	_e	39	380	jo	_i	}	27	460	_e	_e	_o	19
301	_i	_u	jo	38	381	:u	}	}	27	461	_o	_u	jo	19
302	_o	_i	_u	38	382	:e	_o	_u	27	462	:u	_e	:e	19
303	_o	_u	_e	38	383	:e	_o	:o	27	463	:e	_e	N	19
304	jo	:o	jo	38	384	Q	_a	N	27	464	:e	wa	}	19
305	{	_a	ji	38	385	_a	_i	ja	26	465	:o	_i	_i	19
306	_a	_u	_u	37	386	_a	_i	ju	26	466	:o	jo	_u	19
307	N	_o	_u	37	387	_a	_o	_u	26	467	N	_i	_i	19
308	{	_i	ju	37	388	_a	_o	wa	26	468	N	_i	_o	19
309	_a	N	_u	36	389	_i	:i	_a	26	469	{	ju	jo	19
310	_i	_a	Q	36	390	:u	_e	N	26	470	_a	ji	_i	18
311	_u	_e	_o	36	391	:e	_e	:e	26	471	_i	wa	_e	18
312	_e	_u	_e	36	392	_a	ji	_o	25	472	_u	_u	:u	18
313	N	_a	_e	36	393	:u	_i	N	25	473	_u	:u	_i	18
314	_a	_o	_i	35	394	N	_o	N	25	474	ja	_u	_a	18
315	_a	jo	:o	35	395	{	_i	wa	25	475	jo	:o	ja	18
316	_i	_o	_e	35	396	{	jo	Q	25	476	:o	_a	Q	18
317	_u	N	_e	35	397	_a	ji	_a	24	477	:o	_u	:u	18
318	_e	_i	_u	35	398	_i	_e	wa	24	478	:o	_o	_u	18
319	:e	_a	_i	35	399	_i	N	_u	24	479	{	_u	jo	18
320	:e	_a	_u	35	400	_i	N	ja	24	480	_a	wa	_i	17

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 3 / 7

481	_i	ja	_u	17	561	_a	_i	Q	13	641	_a	ja	_u	10
482	_i	ji	}	17	562	_u	_e	wa	13	642	_i	_u	wa	10
483	_u	_i	ju	17	563	_u	jo	_i	13	643	_i	:i	_u	10
484	_u	:u	_a	17	564	_u	:u	_e	13	644	_u	ja	}	10
485	_o	_e	_i	17	565	_e	_a	N	13	645	_e	_a	Q	10
486	_o	_e	:e	17	566	_e	_e	wa	13	646	_o	:o	ji	10
487	_o	_o	N	17	567	_o	_i	N	13	647	ja	Q	_e	10
488	ja	_u	_i	17	568	_o	_u	ju	13	648	ji	wa	}	10
489	jo	Q	_e	17	569	_o	_o	jo	13	649	ju	_u	_o	10
490	:i	_o	}	17	570	_o	_o	:o	13	650	ju	_u	}	10
491	:u	_a	_u	17	571	_o	ja	}	13	651	wa	_i	_o	10
492	:e	_i	_o	17	572	_o	N	jo	13	652	:a	}	}	10
493	:o	ju	:u	17	573	ja	_a	_u	13	653	:u	_i	_e	10
494	N	_o	_i	17	574	ji	_a	}	13	654	:u	_i	_o	10
495	N	ja	}	17	575	ju	_i	}	13	655	:e	_a	_e	10
496	{	_o	ji	17	576	ju	:u	_u	13	656	:e	_a	_o	10
497	{	jo	_o	17	577	ju	:u	ju	13	657	:e	_i	_e	10
498	_a	_i	N	16	578	wa	_e	}	13	658	:o	_u	_o	10
499	_a	_e	:e	16	579	wa	_o	}	13	659	N	_u	_i	10
500	_i	jo	_u	16	580	:o	_o	N	13	660	N	_o	wa	10
501	_i	N	wa	16	581	N	_i	ji	13	661	_a	_a	:a	9
502	_u	_o	N	16	582	N	_u	_o	13	662	_a	_o	jo	9
503	_u	:u	_o	16	583	N	ja	_o	13	663	_a	:a	}	9
504	_e	_u	_u	16	584	{	_o	ju	13	664	_i	_a	ji	9
505	_e	Q	jo	16	585	{	ju	_a	13	665	_i	ji	_u	9
506	_o	_a	Q	16	586	_a	ja	}	12	666	_u	ja	_o	9
507	_o	:o	ju	16	587	_a	ju	:u	12	667	_u	:u	jo	9
508	_o	:o	wa	16	588	_a	:a	_e	12	668	_e	_i	wa	9
509	_o	N	_u	16	589	_a	:a	_o	12	669	_e	_e	_u	9
510	ji	_a	_a	16	590	_i	_o	jo	12	670	_o	_o	ja	9
511	ji	jo	:o	16	591	_i	Q	jo	12	671	_o	jo	_u	9
512	jo	_e	:e	16	592	_u	_i	:i	12	672	ja	_a	_a	9
513	wa	_a	_i	16	593	_e	_o	_e	12	673	ja	_e	_u	9
514	N	_i	wa	16	594	_o	_u	wa	12	674	ji	_e	}	9
515	Q	jo	:o	16	595	_o	_o	Q	12	675	ji	ju	:u	9
516	{	_u	Q	16	596	_o	ji	_o	12	676	ju	_u	_a	9
517	{	_o	ja	16	597	_o	ju	:u	12	677	jo	_i	N	9
518	{	ja	Q	16	598	_o	N	wa	12	678	wa	_a	_o	9
519	_a	N	ja	15	599	ja	_a	_e	12	679	wa	_u	_a	9
520	_i	:i	_i	15	600	ja	_i	_a	12	680	wa	_e	wa	9
521	_u	_a	Q	15	601	ja	wa	}	12	681	:a	_o	}	9
522	_u	:u	_u	15	602	ji	_a	_u	12	682	:i	_i	:i	9
523	_e	jo	:o	15	603	ji	_a	N	12	683	:e	_e	_i	9
524	_e	:e	ja	15	604	ji	_o	:o	12	684	:o	_e	wa	9
525	_o	_a	ji	15	605	ju	:u	ja	12	685	:o	ja	_a	9
526	_o	_a	wa	15	606	wa	_a	_a	12	686	N	_u	_e	9
527	ja	_i	}	15	607	:u	_a	}	12	687	Q	_i	_o	9
528	ja	_u	_e	15	608	:u	ju	:u	12	688	{	_o	}	9
529	ja	_u	}	15	609	:o	ja	}	12	689	{	ja	_e	9
530	jo	_i	_o	15	610	N	_u	_a	12	690	{	ju	N	9
531	jo	:o	ju	15	611	N	_o	_a	12	691	_a	_a	ji	8
532	:o	_o	_o	15	612	N	ja	_u	12	692	_a	_i	ji	8
533	N	_e	wa	15	613	Q	_i	_i	12	693	_a	_o	ja	8
534	Q	_a	_u	15	614	Q	jo	_u	12	694	_a	ju	_i	8
535	_a	_u	ja	14	615	{	_a	jo	12	695	_a	wa	_o	8
536	_a	_u	ju	14	616	{	_a	:a	12	696	_a	wa	Q	8
537	_a	_e	wa	14	617	{	ju	_u	12	697	_i	_i	jo	8
538	_i	_i	wa	14	618	{	wa	_u	12	698	_i	_o	Q	8
539	_i	_o	wa	14	619	_a	_o	N	11	699	_i	ja	_o	8
540	_i	ja	}	14	620	_i	_i	ji	11	700	_i	ji	jo	8
541	_i	ju	_u	14	621	_i	Q	_i	11	701	_i	jo	_i	8
542	_i	:i	_e	14	622	_i	Q	_u	11	702	_u	wa	_i	8
543	_u	_u	N	14	623	_u	ji	_a	11	703	_u	Q	_a	8
544	_u	N	_i	14	624	_e	:e	ju	11	704	_e	_i	N	8
545	_u	N	}	14	625	_o	_i	:i	11	705	_e	Q	_e	8
546	_e	_u	jo	14	626	ja	_u	_u	11	706	_o	_u	ja	8
547	_e	_o	_o	14	627	ji	_e	N	11	707	_o	jo	_i	8
548	_e	N	ja	14	628	ju	_o	:o	11	708	ja	_u	ju	8
549	_o	_a	N	14	629	wa	_a	}	11	709	ju	_a	_i	8
550	_o	N	}	14	630	:u	_i	_a	11	710	ju	_i	_i	8
551	ja	_a	}	14	631	:o	_u	_i	11	711	jo	_a	_i	8
552	wa	_e	_a	14	632	:o	ja	_u	11	712	jo	_a	}	8
553	wa	_e	_u	14	633	{	_i	}	11	713	jo	_i	_a	8
554	:u	_i	_i	14	634	{	_u	wa	11	714	jo	N	ju	8
555	:o	_e	_u	14	635	{	ja	_i	11	715	wa	Q	_a	8
556	N	_u	N	14	636	{	ju	_e	11	716	:u	_i	_u	8
557	N	jo	_u	14	637	{	ju	_o	11	717	:e	_u	_u	8
558	Q	_e	_o	14	638	_a	_a	jo	10	718	:e	_e	}	8
559	Q	_o	_o	14	639	_a	ja	_a	10	719	:o	_a	wa	8
560	{	_o	wa	14	640	_a	ja	_i	10	720	N	_a	ji	8

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 4 / 7

721	N	_a	:a	8	801	ji	_u	_e	6	881	ja	_u	wa	5
722	N	_o	_e	8	802	ji	_o	_u	6	882	ja	_e	_o	5
723	N	jo	_o	8	803	ji	:i	_a	6	883	ja	_o	:o	5
724	Q	_i	_e	8	804	ju	_i	_o	6	884	ji	_a	_e	5
725	Q	_u	_i	8	805	ju	_u	_i	6	885	ji	_i	_o	5
726	Q	_o	_a	8	806	ju	:u	wa	6	886	ji	_o	_i	5
727	{	_u	ju	8	807	jo	_a	N	6	887	ju	_i	_a	5
728	{	ju	_i	8	808	jo	_o	_u	6	888	ju	_u	_e	5
729	_a	ji	ju	7	809	jo	N	_e	6	889	ju	wa	}	5
730	_a	ji	wa	7	810	wa	_i	}	6	890	jo	_i	_e	5
731	_a	ji	}	7	811	wa	_u	_o	6	891	jo	_u	ja	5
732	_i	_i	ju	7	812	wa	_e	_i	6	892	jo	_e	}	5
733	_i	_u	:u	7	813	wa	_e	_o	6	893	jo	_o	_i	5
734	_i	_e	jo	7	814	wa	Q	_e	6	894	jo	N	_a	5
735	_i	ja	_e	7	815	:i	_a	_a	6	895	jo	Q	_o	5
736	_u	_u	jo	7	816	:i	_e	}	6	896	wa	_a	Q	5
737	_u	ja	_i	7	817	:u	_u	_o	6	897	wa	_i	_i	5
738	_u	ja	_u	7	818	:u	_u	:u	6	898	wa	_u	_e	5
739	_u	ji	_o	7	819	:u	_o	N	6	899	wa	wa	}	5
740	_u	ju	_i	7	820	:u	ja	}	6	900	:u	_u	N	5
741	_u	jo	_e	7	821	:u	jo	_u	6	901	:e	_i	_u	5
742	_u	:u	}	7	822	:u	wa	}	6	902	:e	_i	jo	5
743	_e	_a	wa	7	823	:e	_a	_a	6	903	:e	_o	_e	5
744	_e	_u	wa	7	824	:e	_i	_i	6	904	:e	ja	_o	5
745	_o	_a	ja	7	825	:e	_e	_u	6	905	N	_a	ju	5
746	_o	_a	:a	7	826	:e	_o	_a	6	906	N	_a	Q	5
747	_o	ji	_a	7	827	:o	_i	jo	6	907	N	_o	jo	5
748	ja	_i	_e	7	828	:o	_i	wa	6	908	N	jo	_a	5
749	ja	_e	}	7	829	:o	_i	:i	6	909	Q	_o	_i	5
750	ja	ja	}	7	830	:o	_u	N	6	910	Q	ja	_u	5
751	ji	_i	_a	7	831	:o	_e	_a	6	911	{	ja	N	5
752	ji	_i	ji	7	832	:o	_e	_o	6	912	{	ji	_u	5
753	ji	_o	N	7	833	:o	ja	_o	6	913	{	ji	_o	5
754	ju	_e	N	7	834	N	_i	Q	6	914	_a	_a	ja	4
755	ju	_o	}	7	835	N	_u	}	6	915	_a	_e	jo	4
756	ju	N	_o	7	836	N	ja	_a	6	916	_a	wa	wa	4
757	jo	_i	_i	7	837	Q	_u	_u	6	917	_a	:a	_a	4
758	jo	_u	wa	7	838	Q	_u	_o	6	918	_a	Q	_u	4
759	jo	_e	N	7	839	Q	_e	_a	6	919	_i	_i	Q	4
760	wa	_a	_e	7	840	Q	_e	wa	6	920	_i	_e	ja	4
761	wa	_i	_a	7	841	{	_u	ja	6	921	_i	_o	ju	4
762	:a	_e	Q	7	842	{	ji	jo	6	922	_i	ju	N	4
763	:i	_a	_u	7	843	{	ji	:i	6	923	_i	jo	_o	4
764	:i	_a	}	7	844	{	wa	_i	6	924	_i	N	ji	4
765	:u	_i	ji	7	845	_a	_u	:u	5	925	_u	_a	:a	4
766	:e	_u	_a	7	846	_a	ji	_u	5	926	_u	_i	ji	4
767	:e	_u	_o	7	847	_a	jo	_a	5	927	_u	ju	_o	4
768	:e	_o	_o	7	848	_a	jo	_u	5	928	_u	jo	_o	4
769	:o	_u	_a	7	849	_a	wa	_u	5	929	_u	jo	}	4
770	:o	_u	_e	7	850	_a	:a	_u	5	930	_u	:u	ja	4
771	:o	_o	jo	7	851	_i	_a	ja	5	931	_e	_i	ji	4
772	N	_i	jo	7	852	_i	_i	ja	5	932	_e	_i	ju	4
773	N	ju	_u	7	853	_i	_o	ja	5	933	_e	_i	:i	4
774	Q	_a	_e	7	854	_i	_o	ji	5	934	_e	_e	:e	4
775	Q	_i	_a	7	855	_i	ja	_i	5	935	_e	_o	_i	4
776	Q	_o	_u	7	856	_i	ji	ja	5	936	_e	_o	wa	4
777	_a	_a	ju	6	857	_i	ju	jo	5	937	_e	_o	:o	4
778	_a	_u	N	6	858	_i	wa	_i	5	938	_e	ju	:u	4
779	_a	N	ju	6	859	_i	Q	ja	5	939	_e	Q	_u	4
780	_a	Q	ja	6	860	_u	ja	_a	5	940	_o	ju	_i	4
781	_i	_i	:i	6	861	_u	N	ja	5	941	_o	N	ju	4
782	_i	ji	ju	6	862	_u	Q	_i	5	942	ja	_a	_o	4
783	_i	ju	_i	6	863	_u	Q	_o	5	943	ja	N	_a	4
784	_i	wa	_a	6	864	_e	_i	jo	5	944	ja	Q	_a	4
785	_i	Q	ju	6	865	_e	_e	_i	5	945	ji	_a	_o	4
786	_u	_a	ji	6	866	_e	wa	_e	5	946	ji	_i	N	4
787	_u	_i	jo	6	867	_o	_i	ji	5	947	ji	_e	:e	4
788	_u	_u	Q	6	868	_o	_i	Q	5	948	ju	_a	_a	4
789	_u	_e	Q	6	869	_o	ja	_a	5	949	ju	_a	_u	4
790	_u	_o	jo	6	870	_o	ja	_o	5	950	ju	_a	N	4
791	_u	_o	Q	6	871	_o	ja	wa	5	951	ju	_e	_i	4
792	_u	ji	_i	6	872	_o	jo	_o	5	952	ju	_e	:e	4
793	_u	Q	_e	6	873	_o	wa	_a	5	953	ju	N	_i	4
794	_e	_o	_a	6	874	_o	wa	_u	5	954	jo	_a	_e	4
795	_e	Q	_i	6	875	_o	wa	_e	5	955	jo	_u	_u	4
796	_o	_i	ja	6	876	_o	wa	Q	5	956	jo	_u	jo	4
797	_o	ja	_i	6	877	_o	Q	_u	5	957	jo	_o	_a	4
798	_o	ja	_u	6	878	ja	_i	_o	5	958	jo	_o	_o	4
799	ja	jo	:o	6	879	ja	_i	N	5	959	jo	N	_o	4
800	ji	_u	_i	6	880	ja	_u	jo	5	960	jo	N	}	4

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 5 / 7

961	jo	Q	_a	4	1041	ji	_i	_e	3	1121	_i	:i	ju	2
962	wa	_i	wa	4	1042	ji	_u	jo	3	1122	_i	:i	N	2
963	wa	_u	_u	4	1043	ji	ji	_o	3	1123	_u	_a	ja	2
964	:i	_i	}	4	1044	ju	_i	_e	3	1124	_u	_u	wa	2
965	:u	_a	_e	4	1045	ju	ju	_i	3	1125	_u	_o	ju	2
966	:u	_u	}	4	1046	ju	N	_a	3	1126	_u	ja	ja	2
967	:u	_e	_i	4	1047	ju	Q	_e	3	1127	_u	ji	_e	2
968	:u	_e	}	4	1048	ju	}	}	3	1128	_u	ju	_u	2
969	:u	jo	N	4	1049	jo	_a	_u	3	1129	_u	ju	N	2
970	:e	_a	wa	4	1050	jo	_i	_u	3	1130	_u	jo	_a	2
971	:e	_i	wa	4	1051	jo	_i	jo	3	1131	_u	wa	_u	2
972	:e	_u	_e	4	1052	jo	_i	wa	3	1132	_u	wa	_e	2
973	:e	_u	N	4	1053	jo	_e	_a	3	1133	_u	:u	wa	2
974	:e	_u	}	4	1054	jo	_o	:o	3	1134	_u	N	ju	2
975	:e	_o	_i	4	1055	jo	N	_u	3	1135	_u	Q	ju	2
976	:o	_o	_a	4	1056	wa	_i	_u	3	1136	_u	Q	jo	2
977	:o	_o	_i	4	1057	wa	_i	_e	3	1137	_e	_a	jo	2
978	:o	_o	wa	4	1058	wa	_i	jo	3	1138	_e	_u	ju	2
979	:o	wa	_i	4	1059	wa	_e	N	3	1139	_e	_o	_u	2
980	N	_u	:u	4	1060	wa	ji	}	3	1140	_e	_o	jo	2
981	N	_e	_a	4	1061	wa	ju	_u	3	1141	_e	ja	_u	2
982	N	ju	_o	4	1062	wa	ju	:u	3	1142	_e	jo	_i	2
983	Q	_a	jo	4	1063	:a	_u	_o	3	1143	_e	jo	}	2
984	Q	_i	N	4	1064	:a	_e	N	3	1144	_e	Q	ja	2
985	Q	_u	_a	4	1065	:a	wa	}	3	1145	_e	Q	ji	2
986	Q	_u	N	4	1066	:i	_a	_e	3	1146	_o	_u	ji	2
987	Q	_o	_e	4	1067	:i	_a	:a	3	1147	_o	_e	jo	2
988	Q	ju	:u	4	1068	:i	_u	_i	3	1148	_o	ja	_e	2
989	{	_a	ju	4	1069	:i	_e	:e	3	1149	_o	ja	jo	2
990	{	ja	_o	4	1070	:i	_o	:o	3	1150	_o	ji	:i	2
991	{	ji	_e	4	1071	:u	_u	_e	3	1151	_o	ju	_e	2
992	{	ji	ji	4	1072	:u	_o	_i	3	1152	_o	jo	}	2
993	{	jo	ju	4	1073	:u	_o	_e	3	1153	_o	Q	_i	2
994	{	jo	jo	4	1074	:u	ja	_i	3	1154	_o	Q	ji	2
995	_a	_u	ji	3	1075	:e	_a	ji	3	1155	ja	_a	ji	2
996	_a	_o	Q	3	1076	:e	_a	Q	3	1156	ja	_a	wa	2
997	_a	jo	_i	3	1077	:e	_u	_i	3	1157	ja	_a	N	2
998	_a	wa	ji	3	1078	:e	ja	_i	3	1158	ja	_a	Q	2
999	_a	wa	:a	3	1079	:e	ja	_u	3	1159	ja	_i	ja	2
1000	_a	:a	_i	3	1080	:e	ju	:u	3	1160	ja	_e	_a	2
1001	_a	:a	wa	3	1081	:o	_i	ji	3	1161	ja	_e	_e	2
1002	_a	:a	N	3	1082	:o	_i	ju	3	1162	ja	_o	_u	2
1003	_a	Q	jo	3	1083	:o	_i	Q	3	1163	ji	_a	ji	2
1004	_i	_a	ju	3	1084	:o	_o	_e	3	1164	ji	_a	Q	2
1005	_i	_a	:a	3	1085	:o	ja	_i	3	1165	ji	_i	:i	2
1006	_i	_u	Q	3	1086	:o	ji	_o	3	1166	ji	_i	Q	2
1007	_i	jo	N	3	1087	:o	ju	_a	3	1167	ji	_u	_a	2
1008	_i	jo	}	3	1088	:o	jo	_o	3	1168	ji	_u	_u	2
1009	_i	wa	_u	3	1089	:o	wa	_o	3	1169	ji	_u	_o	2
1010	_i	wa	ju	3	1090	:o	wa	ju	3	1170	ji	_u	N	2
1011	_i	:i	wa	3	1091	N	_a	jo	3	1171	ji	_e	_i	2
1012	_u	_a	ju	3	1092	N	_i	ju	3	1172	ji	_o	_a	2
1013	_u	_a	jo	3	1093	N	_u	jo	3	1173	ji	_o	_o	2
1014	_u	_i	ja	3	1094	N	ja	_e	3	1174	ji	_o	ja	2
1015	_u	_i	Q	3	1095	N	ju	_i	3	1175	ji	_o	wa	2
1016	_u	_u	ja	3	1096	N	ju	_e	3	1176	ji	N	_i	2
1017	_u	_e	jo	3	1097	N	ju	wa	3	1177	ju	_i	N	2
1018	_u	ja	wa	3	1098	N	jo	_i	3	1178	ju	_e	_u	2
1019	_u	ji	_u	3	1099	N	jo	_e	3	1179	ju	_o	_u	2
1020	_u	jo	N	3	1100	N	jo	}	3	1180	ju	ju	:u	2
1021	_u	N	_u	3	1101	N	wa	_i	3	1181	ju	:u	ji	2
1022	_u	N	wa	3	1102	Q	ja	_o	3	1182	ju	N	_u	2
1023	_e	_a	ji	3	1103	Q	ji	_e	3	1183	ju	N	_e	2
1024	_e	_a	:a	3	1104	Q	jo	_i	3	1184	ju	Q	_a	2
1025	_e	_i	ja	3	1105	{	_e	ja	3	1185	jo	_a	_a	2
1026	_e	_u	N	3	1106	{	_e	ju	3	1186	jo	_a	_o	2
1027	_e	_e	N	3	1107	{	_e	wa	3	1187	jo	_e	_u	2
1028	_e	_o	N	3	1108	{	ja	:a	3	1188	jo	_e	_e	2
1029	_e	ja	}	3	1109	{	ji	N	3	1189	jo	_o	N	2
1030	_o	_u	N	3	1110	{	ju	Q	3	1190	jo	ju	_u	2
1031	_o	_u	Q	3	1111	{	jo	wa	3	1191	jo	ju	:u	2
1032	_o	wa	_i	3	1112	_a	_e	Q	2	1192	jo	jo	_i	2
1033	_o	:o	Q	3	1113	_a	ji	_e	2	1193	jo	wa	_i	2
1034	_o	Q	jo	3	1114	_a	ju	_u	2	1194	jo	wa	}	2
1035	ja	_i	_i	3	1115	_a	jo	_o	2	1195	jo	N	_i	2
1036	ja	_u	ja	3	1116	_a	wa	ja	2	1196	jo	N	ja	2
1037	ja	:a	_i	3	1117	_i	_u	ja	2	1197	jo	N	jo	2
1038	ja	N	_u	3	1118	_i	_u	ji	2	1198	wa	_a	ja	2
1039	ja	Q	_u	3	1119	_i	ja	jo	2	1199	wa	_i	ju	2
1040	ji	_a	wa	3	1120	_i	ju	_a	2	1200	wa	_i	:i	2

〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 6 / 7

1201	wa	_i	N	2	1281	_a	ja	ju	1	1361	ja	_a	ju	1
1202	wa	_u	}	2	1282	_a	ja	N	1	1362	ja	_i	_u	1
1203	wa	_o	_i	2	1283	_a	ji	jo	1	1363	ja	_u	ji	1
1204	wa	_o	_e	2	1284	_a	ju	_a	1	1364	ja	_u	:u	1
1205	wa	ja	_a	2	1285	_a	ju	_e	1	1365	ja	_u	N	1
1206	wa	:a	_u	2	1286	_a	ju	N	1	1366	ja	_e	:e	1
1207	wa	:a	_o	2	1287	_a	jo	_e	1	1367	ja	_e	N	1
1208	:a	_a	_a	2	1288	_a	jo	Q	1	1368	ja	_o	_a	1
1209	:a	_i	_u	2	1289	_a	jo	}	1	1369	ja	_o	_e	1
1210	:a	_i	N	2	1290	_a	wa	ju	1	1370	ja	_o	_o	1
1211	:a	_u	_e	2	1291	_a	:a	ja	1	1371	ja	_o	wa	1
1212	:a	_o	_a	2	1292	_a	:a	ji	1	1372	ja	_o	Q	1
1213	:a	_o	_o	2	1293	_a	N	ji	1	1373	ja	ja	_o	1
1214	:a	N	wa	2	1294	_a	Q	ji	1	1374	ja	ji	_e	1
1215	:i	_a	_i	2	1295	_i	_u	ju	1	1375	ja	ju	_i	1
1216	:i	_u	_a	2	1296	_i	_e	ju	1	1376	ja	wa	_a	1
1217	:i	_e	_u	2	1297	_i	_e	Q	1	1377	ja	:a	_u	1
1218	:i	_o	_o	2	1298	_i	ja	ja	1	1378	ja	N	_e	1
1219	:u	_a	_o	2	1299	_i	ja	N	1	1379	ja	Q	_i	1
1220	:u	_a	ji	2	1300	_i	ji	wa	1	1380	ja	Q	_o	1
1221	:u	_a	:a	2	1301	_i	ju	_e	1	1381	ji	_u	ji	1
1222	:u	_i	ja	2	1302	_i	ju	wa	1	1382	ji	_u	:u	1
1223	:u	_i	Q	2	1303	_i	ju	Q	1	1383	ji	_e	wa	1
1224	:u	_u	_a	2	1304	_i	jo	_a	1	1384	ji	_e	Q	1
1225	:u	_e	_u	2	1305	_i	jo	_e	1	1385	ji	_o	Q	1
1226	:u	_o	ja	2	1306	_i	jo	Q	1	1386	ji	ja	_u	1
1227	:u	ja	_a	2	1307	_i	wa	_o	1	1387	ji	ji	_u	1
1228	:u	ja	_o	2	1308	_i	wa	wa	1	1388	ji	jo	}	1
1229	:u	ji	_o	2	1309	_i	:i	ja	1	1389	ji	:i	_u	1
1230	:e	_u	wa	2	1310	_i	:i	jo	1	1390	ji	:i	_e	1
1231	:e	_o	wa	2	1311	_u	_o	we	1	1391	ji	N	_o	1
1232	:e	ja	}	2	1312	_u	ja	_e	1	1392	ju	_a	_e	1
1233	:e	ju	_u	2	1313	_u	ja	ji	1	1393	ju	_a	_o	1
1234	:e	jo	_u	2	1314	_u	ji	wa	1	1394	ju	_a	Q	1
1235	:e	jo	_e	2	1315	_u	ji	}	1	1395	ju	_a	}	1
1236	:e	jo	N	2	1316	_u	ju	_a	1	1396	ju	_i	_u	1
1237	:o	_i	ja	2	1317	_u	ju	wa	1	1397	ju	_i	ja	1
1238	:o	_u	jo	2	1318	_u	ju	}	1	1398	ju	_i	wa	1
1239	:o	_u	wa	2	1319	_u	je	N	1	1399	ju	_i	:i	1
1240	:o	_u	}	2	1320	_u	wa	_a	1	1400	ju	_u	_u	1
1241	:o	_e	_e	2	1321	_u	wa	ja	1	1401	ju	_u	ja	1
1242	:o	ja	_e	2	1322	_u	wa	Q	1	1402	ju	_u	ju	1
1243	:o	ji	_a	2	1323	_u	we	:e	1	1403	ju	_u	jo	1
1244	:o	ji	_i	2	1324	_u	:u	ju	1	1404	ju	_u	wa	1
1245	:o	ji	_u	2	1325	_u	Q	_u	1	1405	ju	_e	_e	1
1246	:o	ju	_o	2	1326	_e	_a	ja	1	1406	ju	_e	_o	1
1247	:o	ju	N	2	1327	_e	_i	Q	1	1407	ju	_o	_a	1
1248	:o	jo	_i	2	1328	_e	_u	ja	1	1408	ju	_o	_e	1
1249	:o	wa	_e	2	1329	_e	_u	ji	1	1409	ju	_o	_o	1
1250	N	_a	wa	2	1330	_e	_o	Q	1	1410	ju	wa	_u	1
1251	N	_u	ju	2	1331	_e	ja	_e	1	1411	ju	N	ju	1
1252	N	_u	wa	2	1332	_e	ja	_o	1	1412	ju	N	}	1
1253	N	_o	ja	2	1333	_e	ja	ja	1	1413	ju	Q	_i	1
1254	N	_o	Q	2	1334	_e	ja	jo	1	1414	je	_u	_e	1
1255	N	ja	_i	2	1335	_e	ja	Q	1	1415	je	:e	N	1
1256	N	ji	jo	2	1336	_e	ji	_o	1	1416	je	N	_i	1
1257	N	ju	ju	2	1337	_e	ju	_i	1	1417	jo	_a	Q	1
1258	N	jo	N	2	1338	_e	ju	_e	1	1418	jo	_u	:u	1
1259	N	wa	_e	2	1339	_e	:e	ji	1	1419	jo	_u	N	1
1260	Q	_a	wa	2	1340	_o	_a	jo	1	1420	jo	_e	_o	1
1261	Q	_a	:a	2	1341	_o	_u	:u	1	1421	jo	ji	_a	1
1262	Q	_i	}	2	1342	_o	_e	ja	1	1422	jo	ju	_a	1
1263	Q	_e	_i	2	1343	_o	_e	ju	1	1423	jo	jo	_o	1
1264	Q	_o	wa	2	1344	_o	_o	ju	1	1424	jo	jo	}	1
1265	Q	ja	wa	2	1345	_o	ja	ja	1	1425	jo	wa	_o	1
1266	Q	ji	_o	2	1346	_o	ji	_i	1	1426	jo	:o	ji	1
1267	Q	jo	N	2	1347	_o	ji	}	1	1427	jo	Q	_u	1
1268	{	_a	}	2	1348	_o	ju	_a	1	1428	wa	_a	ju	1
1269	{	_e	jo	2	1349	_o	ju	_u	1	1429	wa	_a	wa	1
1270	{	_e	}	2	1350	_o	ju	ju	1	1430	wa	_u	jo	1
1271	{	ju	ju	2	1351	_o	jo	_a	1	1431	wa	_u	wa	1
1272	{	wa	:a	2	1352	_o	jo	wa	1	1432	wa	_u	:u	1
1273	{	{	je	2	1353	_o	jo	N	1	1433	wa	_e	ja	1
1274	_a	_u	Q	1	1354	_o	wa	_o	1	1434	wa	_e	:e	1
1275	_a	_e	ja	1	1355	_o	we	_a	1	1435	wa	_o	wa	1
1276	_a	_e	ji	1	1356	_o	:o	N	1	1436	wa	ja	_i	1
1277	_a	_e	ju	1	1357	_o	N	ja	1	1437	wa	ju	N	1
1278	_a	_o	ji	1	1358	_o	N	N	1	1438	wa	jo	_i	1
1279	_a	_o	ju	1	1359	_o	Q	ja	1	1439	wa	:a	}	1
1280	_a	ja	_o	1	1360	ja	_a	ja	1	1440	wa	N	_e	1



〈音素配列表6.5〉 『中央公論』 音素配列 7 / 7

1441	we	_a	_o	1	1521	:o	ju	_u	1
1442	we	_u	_i	1	1522	:o	ju	Q	1
1443	we	:e	_e	1	1523	:o	ju	}	1
1444	wo	N	_e	1	1524	:o	jo	_e	1
1445	:a	_a	_i	1	1525	:o	jo	}	1
1446	:a	_a	_o	1	1526	:o	wa	_a	1
1447	:a	_i	jo	1	1527	:o	wa	jo	1
1448	:a	_i	wa	1	1528	:o	N	_o	1
1449	:a	_u	_a	1	1529	:o	Q	_a	1
1450	:a	_e	:e	1	1530	:o	Q	_e	1
1451	:a	_e	}	1	1531	:o	Q	_o	1
1452	:a	_o	_u	1	1532	N	_a	ja	1
1453	:a	ja	}	1	1533	N	_i	:i	1
1454	:i	_a	ju	1	1534	N	_u	ja	1
1455	:i	_a	jo	1	1535	N	_e	_e	1
1456	:i	_a	N	1	1536	N	_e	Q	1
1457	:i	_i	_e	1	1537	N	ja	wa	1
1458	:i	_u	_u	1	1538	N	ja	:a	1
1459	:i	_u	_o	1	1539	N	ja	N	1
1460	:i	_u	je	1	1540	N	ja	Q	1
1461	:i	_u	:u	1	1541	N	ji	_a	1
1462	:i	_u	N	1	1542	N	ji	_i	1
1463	:i	_e	_i	1	1543	N	ji	_o	1
1464	:i	_e	_o	1	1544	N	ju	_a	1
1465	:i	_e	wa	1	1545	N	ju	Q	1
1466	:i	_o	_a	1	1546	N	jo	wa	1
1467	:i	_o	_e	1	1547	N	wa	_a	1
1468	:i	_o	ja	1	1548	N	wa	_u	1
1469	:i	_o	jo	1	1549	N	wa	_o	1
1470	:i	_o	wa	1	1550	N	N	_e	1
1471	:i	ja	}	1	1551	Q	_a	ju	1
1472	:i	ju	:u	1	1552	Q	_i	_u	1
1473	:i	jo	:o	1	1553	Q	_i	wa	1
1474	:i	wa	_a	1	1554	Q	_u	_e	1
1475	:i	wa	_e	1	1555	Q	_e	_u	1
1476	:i	wa	}	1	1556	Q	_o	ja	1
1477	:i	N	_a	1	1557	Q	_o	jo	1
1478	:i	N	_e	1	1558	Q	ja	_a	1
1479	:u	_a	_a	1	1559	Q	ja	_i	1
1480	:u	_i	jo	1	1560	Q	ja	Q	1
1481	:u	_i	wa	1	1561	Q	ju	_e	1
1482	:u	_i	:i	1	1562	Q	ju	_o	1
1483	:u	_u	_u	1	1563	Q	ju	N	1
1484	:u	_u	wa	1	1564	Q	jo	}	1
1485	:u	_e	wa	1	1565	{	_u	we	1
1486	:u	_o	_a	1	1566	{	ja	ja	1
1487	:u	_o	_o	1	1567	{	ja	wa	1
1488	:u	ja	_u	1	1568	{	je	_u	1
1489	:u	ja	_e	1	1569	{	je	:e	1
1490	:u	jo	_i	1	1570	{	jo	ji	1
1491	:u	jo	_o	1	1571	{	wa	_o	1
1492	:u	jo	ju	1	1572	{	wa	N	1
1493	:u	jo	}	1	1573	{	we	_u	1
1494	:u	wa	_e	1	1574	{	wo	N	1
1495	:u	wa	_o	1	1575	{	{	we	1
1496	:e	_a	:a	1	1576	{	{	wo	1
1497	:e	_i	ji	1					
1498	:e	_i	:i	1					
1499	:e	_e	_o	1					
1500	:e	ja	_e	1					
1501	:e	ja	ja	1					
1502	:e	ji	_o	1					
1503	:e	ju	_a	1					
1504	:e	ju	_i	1					
1505	:e	ju	_o	1					
1506	:e	ju	wa	1					
1507	:e	ju	}	1					
1508	:e	wa	_o	1					
1509	:e	N	_e	1					
1510	:o	_a	jo	1					
1511	:o	_u	ja	1					
1512	:o	_e	jo	1					
1513	:o	_e	Q	1					
1514	:o	_o	ja	1					
1515	:o	_o	Q	1					
1516	:o	ja	ja	1					
1517	:o	ja	jo	1					
1518	:o	ja	wa	1					
1519	:o	ji	wa	1					
1520	:o	ju	_i	1					

〈付表A〉和語

頁数	出現形	見出し語
A 16 †	あいあい	あいあい
A 19	あいたがい	あいたがい
A 33	あさはなだ	あさはなだ
A 39	あわてぎ	あわてぎ
C 94 †	かけまくも	かけまく
C 101	からわに	からわ
C 103 †	かるくちな	かるくち
C 105	かすおな	かすお
C 116	かずかずの	かずかず
C 153	ことごと	ことごと
C 153	ことなる	こと
C 160	くちぐちに	くちぐち
C 160	くちまめな	くちまめ
C 161 †	くちうつしに	くちうつし
F 191	はばびろな	はばびろ
F 196	はだかな	はだか
F 196	はだれに	はだれ
F 203	はなつきに	はなつき
F 208 †	はらすちな	はらすち
F 227	ひびに	ひび
F 245	ひたさわぎに	ひたさわぎ
F 257	ほどほどに	ほどほど
F 265 †	ほそめに	ほそめ
I 338	いきがいもない	いきがい
I 344	いたみのもの	いたみ
M 376	まっかいさまに	まっかいさま
M 376	まっくろな	まっくろ
M 387	まっすぐな	まっすぐ
M 390	まっしろな	まっしろ
M 392	めばやな	めばや
M 406	みみどおな	みみどお
M 406	みみぢかな	みみぢか
M 421	ものごしに	ものごし
M 424	もろともに	もろとも
N 438	なかだかな	なかだか
N 445 †	なまぎこえな	なまぎこえ
N 445	なまなりな	なまなり
N 447	なんどきも	なんどき
N 449	なのめな	なのめ
N 456 †	ねだかに	ねだか
N 462	にあいの	にあい
Q 481 †	けぎりの	けぎり
S 546 †	さかしまな	さかしま
S 561 †	さとばなれな	さとばなれ
S 564 †	さしいりに	さしいり
S 571	そいのきの	そいのき
S 571	そいつめ	そいつ
S 571	そいよりの	そいより
T 595	たびごとに	たびごと
T 602	たが	た
T 604	たいげんの	たいげん
T 615	たるみがゆく	たるみ
T 616	たつに	たつ
T 630	つねな	つね
T 633 †	つきがわりに	つきがわり
V 687	うちつけな	うちつけ
V 714	おのが	おの
V 718 †	おりごとに	おりごと
V 731 †	うらが	うら
V 732 :	うららが	うらら
X 743 :	しゃつばらが	しゃつばら
X 759	しびれがきる	しびれ
X 781 †	しためにかくる	しため
X 786	しづこころない	しづこころ
X 787 †*	しづのこころなう	しづのこころ
Y 808	やまどりを	やまどり
Y 810	やけどにわう	やけど
Y 824	よこしまな	よこしま

〈付表B〉漢語

頁数	出現形	見出し語
A 16 †	あいあいと	あいあい
B 52	べんべんとして	べんべん
B 53 †	ベッベツに	ベッベツ
B 59	ばうばうと	ばうばう
B 63	ぶこツな	ぶこツ
B 66	ぶきりやうな	ぶきりやう
B 66	ぶきような	ぶきよう
B 69 †	ぶしんがうな	ぶしんがう
C 117	ちゃくじに	ちゃくじ
C 122 †	ちんちんとして	ちんちん
C 125	ちやうちやうど	ちやうちやう
C 152 †	こていな	こてい
C 152	こッぜんとして	こッぜん
D 178 †	だいぐちなもの	だいぐち
F 220	へいへいと	へいへい
F 268	ふべん	ふべん
F 272 †	ふがんぢやうな	ふがんぢやう
F 276	ふもんじな	ふもんじ
G 291	ががたる	がが
G 301	ぎような	ぎよう
G 317	ぢきに	ぢき
I 343	いっさんに	いっさん
I 354	じゃくじゃくと	じゃくじゃく
I 357	ぜんぜん	ぜんぜん
I 360	ぢちなもの	ぢち
I 364	じんとうな	じんとう
I 369	じやうに	じやう
I 372	じゅんに	じゅん
M 395 †	めいめいと	めいめい
M 396	めんだうな	めんだう
M 409 †	みような	みよう
M 431	むがな	むが
M 431	むげな	むげ
M 432 †	むもじな	むもじ
Q 485	けんぢやうな	けんぢやう
Q 492	きやもじな	きやもじ
Q 497 †	きなる	き
Q 509 †	きつそくな	きつそく
Q 511	きゆうな	きゆう
Q 512	きゆうきゆうな	きゆうきゆう
Q 517	くわいな	くわい
Q 519	くわんくわんと	くわんくわん
R 523	らくらくと	らくらく
R 530 †	れうれうと	りようりよう
R 539	ろくな	ろく
R 542	ろうろうとして	ろうろう
S 555	さんみやうをさがす	さんみやう
S 580	そうぞうな	そうぞう
T 600	たくさんな	たくさん
T 612	たんたん	たんたん
T 612	たんと	たん
T 661	とんな	とん
T 661 †	とんきような	とんきよう
V 698	わうぢやくな	わうぢやく
V 715 †	おんたうな	おんたう
V 723	わうわくな	わうわく
X 768	しんぼうな	しんぼう
X 770	しにちりばむる	し
X 774 †	しんせいとして	しんせい
X 774	しんしんとして	しんしん
X 782	しつなもの	しつ
X 797 †	しょうしよくなひと	しょうしよく
X 803	しゅツな	しゅツ
Y 806	やくたいもないこと	やくたい
Y 820 †	えんえんとして	えんえん
Y 836	ゆうな	ゆう
Y 838	ゆうゆうと	ゆうゆう

「ッ」は入声, 「っ」は促音, 「ム」は「ん」と同じ, 「を」と「お」の区別はない。  
†は補遺載録の語, :は仮見出しの語である。

〈付表C〉外来語の表記のゆれ

		1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1986	1996	2006
あみす	__アミス											1
	__AM I S											1
あめりか	__アメリカ			3		7	8	10	16	17	7	15
	__亜米利加	1	1	1								
あるこーる	__アルコール		1									
	__酒精		1									
いぎりす	__イギリス			2	2	2	5	3	2	1	1	2
	__英吉利の		1	1								
いたりあ	__イタリア					3			1			2
	__イタリー				6							
	__伊太利	1										
いにしあちぶ	__イニシアティーヴ						1					
	__イニシアチブ									1		
いみてーしょん	__イミテーション							1				
	__イミテーション									1		
いんど	__印度		1									
	__インド						1		1	1	1	1
いんどねしあ	__インドネシア					3	1	1	1		1	
	__インドネシヤ								1			
ういすきー	__ヴキスキイ			2								
	__ウイスキー							1		2		
うえーと	__ウエイト							1				
	__ウェイト									1		
えー	__A			2		2						
	__ ( a )				1							
えじふと	__エジプト						2	1			1	
	__埃及		1									
えとろふ	__エトロフ						2					
	__挾捉	1										
えねるぎー	__エネルギー							3		1	4	1
	__E (エネルギーとルビ)										1	
おすとりんすきー	__オストリンスキイ	1										
	__オストリンスキー	1										
おりんぴつく	__オリムピツク				1							
	__オリンピック										1	
かすてら	__かすてら				1							
	__春庭饅				1							
	__嘉寿亭羅				1							
かふえ	__カフェ				3							
	__カフェ											1
がらす	__硝子			1								
	__ガラス							1				
ぎりしゃ	__希臘	2	1									
	__ギリシャ					2						
	__ギリシア							1				
くーでたー	__クーデター								1			
	__クーデタ									3		
くらすめーと	__クラスメート					1						
	__クラスメイト										1	
けーす	__C a s e				1							
	__ケース									3	3	2
げーて	__ゲエテ		1									
	__ゲーテ											1
こーひー	__珈琲					1						1
	__コーヒー								1			
こみゆにけーしょん	__コミュニケーション								1			1
	__コンミュニケーション								1			
これら	__虎列刺	1										
	__コレラ										1	
じゃーなりずむ	__ジャアナリズム				1							
	__ジャアナリズム				1							
	__ジャーナリズム						3	1		1		

		1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1986	1996	2006
しゃんはい	__上海		1		1	1			2	1	2	2
	__シャンハイ								1			
すえーでん	__スエーデン							1				
	__スウェーデン								2			1
すけじゅーる	__スケジュール				1					1	1	
	__スケジュール											
すぺいん	__西班牙		1		2							
	__スペイン				3						2	
すぽーつ	__S P O R T S									1		
	__スポーツ										1	1
ずぼん	__ズボン					1						
	__ズボン							1				
すむーず	__スムース						1					
	__スムーズ						1		1		1	
そびえと	__ソヴェト				1		1			1		
	__ソヴェト						1					
	__ソビエト										1	
たくしー	__タキシー						1					
	__タクシー							1				1
たばこ	__煙草		1	2		2	1					
	__紙菫			1								
	__淡婆姑			1								
	__タバコ									1		
ちゃんねる	__チャンネル							2				
	__チャネル									2		
つぁーりずむ	__ツァーリズム			1								
	__ツァーリズム						1					
てーぶる	__テーブル				1							1
	__卓子				2							
てれび	__テレビ							6		3	3	3
	__T V										1	
でんまーく	__丁抹			1								
	__デンマーク									1		
どいつ	__独乙	2										
	__独逸	2	5		1							
	__ドイツ			1	3	1		1	1	1	4	5
とーん	__トオン					1						
	__トーン										1	1
どきゅめんと	__ドキュメント				1							
	__ドキュメント									1		1
どすとえふすきー	__ドスト・ヴキスイ			1								
	__ドスト・ヴキスキイ			1								
	__ドストエフスキー										1	
とらすと	__ツラスト	1										
	__トラスト	2										
にゅあんす	__ニュアンス					1						
	__ニュアンス										1	
にゅーじーらんど	__新西蘭		3									
	__ニュージーランド										1	
ぬーぼろまん	__ヌーヴォ・ロマン							3				
	__ヌーヴォー・ロマン										1	
ばいおりん	__バイオリン								1		1	
	__V								3			
ぱり	__巴里	1	1	1	1							
	__パリス		1									
	__パリ		1			2			2		3	
	__パリー						2					
はんがりー	__ハンガリア					2				1		
	__ハンガリー						3					
ぴあの	__ピアノ		1							1		
	__P								6			
ぴーる	__ビール	2	1			1			1	1		
	__麦酒	1										

		1906	1916	1926	1936	1946	1956	1966	1976	1986	1996	2006
ひろいん	__H i r o i n e									1		
	__ヒロイン									1		
ふあしずむ	__ファッシュズム				3							
	__ファシズム						2					
ふあつくす	__F A X										1	
	__ファックス										1	
ふいりぴん	__フィリッピン						2					
	__フィリピン								2	2	1	
ふいんらんど	__芬蘭土		1									
	__フィンランド											1
ふらんす	__仏蘭西	1		1								
	__フランス				3	4	5	1	1		3	4
ぶんと	__ブンド				1							
	__ブント							1				
ほーむペーじ	__H P											2
	__ホームページ											2
ぼーらんど	__波蘭土					1						
	__ポーランド										1	
ぼたん	__釐				1							
	__ボタン						1					
ほてる	__ほてる		1									
	__ホテル								2	1	2	
ぼるとがる	__葡萄牙		1									
	__ポルトガル				1				1			
ますめでいあ	__マス・メディア										1	
	__マスメディア									2	1	1
まだむ	__マダム			1								
	__ (ゝゝ)			1								
まっち	__マツチ			1			1					
	__マッチ											1
まりーあんとわねっと	__マリ・アントワネット							1				
	__マリー・アントワネット								1			
もすくわ	__モスコー			1								
	__モスクワ				1		1	1				
ゆーもあ	__ユーモアー			1								
	__ユーモア						1		2		1	
よーもとにつく	__YOHMOTONIC						1					
	__ヨウモトニック						1					
よーろっぱ	__欧羅巴				1	1						
	__ヨーロッパ				1	1	1		5		2	
らじお	__ラヂオ			1	2	1						
	__ラジオ							1				
りありてい	__リアリティー										1	
	__リアリティ											1
りーだーしっふ	__リーダーシップ								1		1	
	__リーダー・シップ								1			
るーまにあ	__羅馬尼亞			1								
	__ルーマニア					2						
ろーま	__羅馬	1	1									
	__ローマ							1		1		1
ろしあ	__露西亜		2	3								
	__ロシア			3	3		1				6	
	__ロシヤ				1							
ろまんす	__ローマンス		1									
	__ロマンス				1							1
ろんどん	__倫敦		1						1			
	__ロンドン					1		1		1		
わーずわーす	__ウオーズウオース	1										
	__ウオーズウオーズ	1										